

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成22年度 —

2012

和歌山市教育委員会

序 文

本書は、平成22年度に国庫補助金・県費補助金を得て、和歌山市教育委員会と財団法人和歌山市都市整備公社が実施した発掘調査の概要をまとめたものです。

太田・黒田遺跡では、弥生時代前期から明治時代初頭にかけて5面の遺構面が確認され、それぞれの遺構面で多数の遺構が確認されました。これらの遺構のうち弥生時代のものについては弥生時代前期から中期後半にかけての竪穴建物や土坑など居住域を示す遺構が高密度で確認され、調査地の周辺が弥生時代の集落の中心部に位置することが判明しました。

田屋遺跡では確認調査の結果、自然流路に沿って、弥生時代後期から古墳時代後期の集落が展開する状況が判明しました。

ここに報告する調査概要は、地域の歴史を語る上で重要な成果が含まれています。本書が、地域の歴史を広く理解するための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご指導・ご協力いただきました地権者の皆様及び関係者各位に深く感謝いたします。

平成24年3月15日

和歌山市教育委員会

教育長 大 江 嘉 幸

例 言

- 1 本書は、平成22年度国庫補助事業として和歌山市教育委員会が計画・実施するとともに財団法人和歌山市都市整備公社に事業の委託を行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査対象経費の総額は7,408,000円である。
- 3 本年度の機械掘削及び埋め戻し等委託事業は以下のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
津秦遺跡確認調査	和歌山市有家187-3	20100414	26.75㎡	大木 要
山口遺跡第7次確認調査	和歌山市谷33-1、38	20100421～0426	50.66㎡	大木 要
太田・黒田遺跡第62次確認調査	和歌山市黒田一丁目4番4・9	20100607～0611	20.00㎡	井馬好英
田屋遺跡第4次確認調査	和歌山市小豆島121、122	20100621～0623	36.36㎡	大木 要
太田城水攻め堤跡確認調査	和歌山市出水117	20100713	8.82㎡	大木 要
井辺遺跡第8次確認調査	和歌山市井辺206-1	20100715	18.40㎡	大木 要
太田・黒田遺跡第65次発掘調査	和歌山市太田二丁目9番2	20100722～0929	66.00㎡	藤藪勝則
岩橋遺跡確認調査	和歌山市岩橋1034-9他	20100728	12.38㎡	大木 要
大日山Ⅰ遺跡確認調査	和歌山市井辺392外	20100817～0819	57.22㎡	大木 要
有功遺跡第5次確認調査	和歌山市六十谷1091-1	20100907～0908	43.27㎡	大木 要
木ノ本Ⅱ遺跡確認調査	和歌山市木ノ本1222、1224、1225他	20101005～1007	72.24㎡	大木 要
山口遺跡第8次確認調査	和歌山市藤田116-5	20101025	9.43㎡	大木 要
井辺遺跡第9次確認調査	和歌山市井辺134-22	20101108	7.60㎡	大木 要
太田・黒田遺跡第66次確認調査	和歌山市太田二丁目2-8・9	20101112	16.76㎡	大木 要
和歌山城跡確認調査	和歌山市四番丁6	20101227	11.66㎡	大木 要
上三毛遺跡確認調査	和歌山市上三毛5-3	20110113	8.75㎡	大木 要
井辺遺跡第10次確認調査	和歌山市神前112-1	20110128	30.55㎡	大木 要
津秦遺跡第2次確認調査	和歌山市津秦89-7	20110301	16.00㎡	大木 要
有功遺跡第7次確認調査	和歌山市六十谷1117-1	20110322	42.8㎡	大木 要
磯脇遺跡確認調査	和歌山市本脇263-2	20110323	28.26㎡	大木 要
明王寺遺跡確認調査	和歌山市明王寺16-1	20110324・25	58.2㎡	大木 要

- 4 本年度の財団法人和歌山市都市整備公社委託事業は以下のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
太田・黒田遺跡第62次確認調査	和歌山市黒田一丁目4番4・9	20100607～0611	20.00㎡	井馬好英
太田・黒田遺跡第65次発掘調査	和歌山市太田二丁目9番2	20100722～0929	66.00㎡	藤藪勝則
田屋遺跡第5次確認調査	和歌山市田屋地内	20101018～1130	260.00㎡	井馬好英
出土遺物整理		20101208～1220		井馬好英

- 5 発掘調査に係る事務局は下記のとおりである。

埋蔵文化財発掘調査（平成22年度）

【和歌山市教育委員会 文化振興課】

文化財班長 額田雅裕

学芸員 益田雅司

学芸員 大木 要

【財団法人和歌山市都市整備公社 埋蔵文化財班】

埋蔵文化財班長 北野隆亮

学芸員 井馬好英

学芸員 奥村 薫

学芸員 藤藪勝則

報告書作成（平成23年度）

【和歌山市教育委員会 文化振興課】

文化財班長 前田敬彦

学芸員 大木 要

学芸員 清水梨代（7月～）

【財団法人和歌山市都市整備公社 埋蔵文化財班】

埋蔵文化財班長 北野隆亮

学芸員 井馬好英

学芸員 奥村 薫

学芸員 藤藪勝則

学芸員 櫻田小百合

学芸員 内田和典（8月～）

- 6 本書のうち1、2－（1）、（2）、（3）の執筆は大木要、2－（4）については文末に執筆担当者名を記載している。本書の編集は大木が行った。

- 7 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。

- 8 遺物整理事業については、太田・黒田遺跡第65次発掘調査、田屋遺跡第5次確認調査、市内遺跡立会・確認調査等を対象として実施した。

- 9 本書作成にあたり、関係諸機関の方々に様々なご協力を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1	位置と環境	1
2	埋蔵文化財発掘調査事業	
(1)	平成22年度の概要	5
(2)	平成22年度和歌山市調査一覧	5
(3)	市教育委員会実施確認・立会調査等概要	
①	津秦遺跡確認調査.....	9
②	西田井遺跡第4次確認調査.....	11
③	山口遺跡第7次確認調査.....	13
④	川辺遺跡.....	16
⑤	太田・黒田遺跡第63次確認調査.....	20
⑥	有功遺跡.....	21
⑦	六十谷遺跡.....	23
⑧	田屋遺跡第4次確認調査.....	24
⑨	関戸遺跡第2次確認調査.....	27
⑩	津秦Ⅱ遺跡第2次確認調査.....	29
⑪	太田城水攻め堤跡確認調査.....	30
⑫	井辺遺跡第8次確認調査.....	31
⑬	岩橋遺跡確認調査.....	33
⑭	大日山Ⅰ遺跡確認調査.....	35
⑮	有功遺跡第5次確認調査.....	38
⑯	宇田森遺跡.....	41
⑰	六十谷遺跡.....	43
⑱	和歌山城跡.....	45
⑲	木ノ本Ⅱ遺跡確認調査.....	46
⑳	山口遺跡第8次確認調査.....	49
㉑	井辺遺跡第9次確認調査.....	50
㉒	太田・黒田遺跡第66次確認調査.....	52
㉓	和歌山城跡第10次確認調査.....	55
㉔	上三毛遺跡確認調査.....	57
㉕	井辺遺跡第10次確認調査.....	58
㉖	津秦遺跡第2次確認調査.....	61
㉗	有功遺跡第7次確認調査.....	63
㉘	磯脇遺跡確認調査.....	67
㉙	明王寺遺跡確認調査.....	68
(4)	財団法人和歌山市都市整備公社実施の発掘調査概要	
①	太田・黒田遺跡第62次確認調査.....	72
②	太田・黒田遺跡第65次発掘調査.....	77
③	田屋遺跡第5次確認調査	103

図版目次

- 図版 1 太田・黒田遺跡第62次確認調査 調査前の状況、第1区全景、第1区全景、第1区東壁土層堆積状況、第2区全景、第2区北壁土層堆積状況、出土遺物
- 図版 2 太田・黒田遺跡第65次発掘調査 第2区第6層上面全景、第1区第6層上面全景、第2区第5層上面全景、第1区第5層上面全景、第2区第4b層上面全景、第1区第4b層上面全景、第2区第4a層上面全景、第1区第4a層上面全景
- 図版 3 太田・黒田遺跡第65次発掘調査 第1区SK-49、第1区SK-49土層堆積状況、第2区SX-4、第2区SX-4土層堆積状況、第1区SK-43、第2区SK-43土層堆積状況、第1区SK-37・38、第1区SK-37土層堆積状況
- 図版 4 太田・黒田遺跡第65次発掘調査 第2区SI-2・3、第1区SI-2・3、第2区SI-1、第1区SI-1、第2区SX-1、第2区SX-1、第1区SE-1、第1区SE-1土層堆積状況
- 図版 5 太田・黒田遺跡第65次発掘調査 第2区SK-54、第2区SK-54土層堆積状況、第2区SK-52、第2区SK-52土層堆積状況、第1区SK-2、第1区SK-2土層堆積状況、調査区北壁土層堆積状況、調査区西壁土層堆積状況
- 図版 6 太田・黒田遺跡第65次発掘調査 出土遺物
- 図版 7 太田・黒田遺跡第65次発掘調査 出土遺物
- 図版 8 太田・黒田遺跡第65次発掘調査 出土遺物
- 図版 9 太田・黒田遺跡第65次発掘調査 出土遺物
- 図版10 田屋遺跡第5次確認調査 調査前の状況、第1区全景、第1区東端部北壁土層堆積状況、第1区中央部北壁土層堆積状況
- 図版11 田屋遺跡第5次確認調査 第12区全景、第12区西半部北壁土層堆積状況、第13区全景、第13区中央部北壁土層堆積状況、第3区全景、第3区東半部北壁土層堆積状況、第17区全景、第17区東半部北壁土層堆積状況
- 図版12 田屋遺跡第5次確認調査 第4区全景、第4区東壁土層堆積状況、第18区全景、第18区東半部北壁土層堆積状況、第5区全景、第5区東半部北壁土層堆積状況、第6区全景、第6区東半部北壁土層堆積状況
- 図版13 田屋遺跡第5次確認調査 第19区全景、第19区東壁土層堆積状況、第7区全景、第7区西半部北壁土層堆積状況、第8区全景、第8区東壁土層堆積状況、第9区全景、第9区西半部北壁土層堆積状況
- 図版14 田屋遺跡第5次確認調査 第10区全景、第10区東半部北壁土層堆積状況、第20区全景、第20区西壁土層堆積状況、第11区全景、第11区西半部北壁土層堆積状況、第2区全景、第2区東壁土層堆積状況
- 図版15 田屋遺跡第5次確認調査 第21区全景、第21区中央部北壁土層堆積状況、第14区全景、第14区西半部北壁土層堆積状況、第15区全景、第15区西半部北壁土層堆積状況、第16区全景、第16区西半部北壁土層堆積状況
- 図版16 田屋遺跡第5次確認調査 出土遺物

1 位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市、東は和歌山県岩出市及び紀の川市、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良県と三重県との県境にある大台ヶ原を源流とする紀ノ川は、中央構造線の南側をほぼ真直ぐ西流し、紀伊水道に注いでいる。和歌山市の地形は、紀ノ川の北岸と南岸でその様相が異なる。北岸では、和泉山脈と紀ノ川の間に約3kmの幅で段丘及び扇状地が形成される。南岸では紀ノ川の堆積作用によって形成された沖積平野が広がり、平野の南端を竜門山系から派生した丘陵が断続的に取り囲んでいる。

旧石器時代の遺跡としてはナイフ形石器の出土地がある。紀ノ川北岸の西庄Ⅱ遺跡や園部遺跡、鳴滝遺跡など和泉山脈の山間部や山麓部で点々と出土するほか、市城南東部の山東地区の大池遺跡では50点に近いナイフ形石器に加え、各種の石器が多数採集されている。

縄文時代の遺跡には、鳴神貝塚、瀬宜貝塚、吉礼貝塚、川辺遺跡、岡崎縄文遺跡などがある。鳴神貝塚は明治28年（1895）にはじめて報告され、昭和6年（1931）に近畿地方で最初に発見された縄文時代の貝塚として国史跡に指定された。その後の発掘調査により、猿の撓骨製の耳飾をつけ、上顎の犬歯2本を抜歯した女性人骨（推定18歳）が発見された。近年実施した発掘調査でも晩期の縄文人骨が多数埋葬された状況が確認されている。晩期を中心とする川辺遺跡では、竪穴建物とともに多数の土器棺が発掘され、東北地方に起源をもつ亀ヶ岡系土器や遮光器土偶の腕の先端部分が出土している。また、土器棺に副葬された小形定角式磨製石斧は、北陸地方から搬入された可能性が指摘されている。瀬宜貝塚・吉礼貝塚では、遺構は不明確だが前期以降の土器・石器が多数出土している。

弥生時代の遺跡は、紀ノ川北岸では六十谷遺跡、府中Ⅳ遺跡、西田井遺跡、宇田森遺跡、川辺遺跡、橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡、山口遺跡、吉田遺跡、南岸では太田・黒田遺跡や神前遺跡、井辺遺跡、滝ヶ峰遺跡、奥山田遺跡などがある。太田・黒田遺跡は前期に環濠を伴う集落が形成され、中期には多数の竪穴建物や独立棟持柱建物からなる居住域、土器棺を中心とする墓域、水田域が形成される。また、石舌が内蔵された袈裟文銅鐸に加え、多量の土器・石器類が出土するなど、和歌山県を代表する大規模集落として著名である。市内の銅鐸出土地には太田・黒田遺跡のほか、橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡、宇田森遺跡、有本銅鐸出土地、砂山銅鐸（紀ノ川銅鐸）出土地、吉里銅鐸出土地などがあり、外縁付紐式・扁平紐式・突線紐式銅鐸が出土している。

古墳時代の遺跡は、紀ノ川北岸西部において国内唯一の金製勾玉が出土した前方後円墳の車駕之古址古墳、それに先行する帆立貝式と考えられる茶臼山古墳、現状で約40mの大形円墳である釜山古墳、馬冑や馬甲が出土した大谷古墳など渡来系遺物を有する中期の有力古墳や県内では数少ない巨石を用いた横穴式石室をもつ園部円山古墳などの後期古墳も形成される。南岸では和歌山平野南東部の岩橋丘陵に700基を超える岩橋千塚古墳群が形成され、前期末から後期にかけて多数の古墳が築造される。特に後期には玄門部を狭く造る岩橋型横穴式石室を構築し、周辺地域にも影響を与えている。これらは紀ノ川河口の平野部を支配した紀氏集団の奥津城と考えられている。近年調査された大日山35号墳の造り出しからは、翼を広げた鳥形埴輪、両面人物埴輪、胡籬形埴輪など全国的にも類をみない特徴的な形象埴輪が出土している。集落遺跡には西庄遺跡、田屋遺跡、西田井遺跡、鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡、音浦遺跡、大日山Ⅰ遺跡、秋月遺跡などがある。西庄遺跡は竪穴建物とともに多数の石敷製塩焔が検出され、中期から後期の大規模製塩遺跡として著名である。田屋遺跡では

5世紀中頃の初期カマドをもつ堅穴建物や陶質土器が出土し、集落内に渡来系の人々が存在したと考えられる。鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡、音浦遺跡では堅穴建物や掘立柱建物が検出され、岩橋千塚古墳群が存在する岩橋丘陵の西部に位置することから、紀氏集団の居住域の可能性が指摘されている。紀ノ川北岸の和泉山脈南麓の低位段丘上には、高井遺跡、鳥井遺跡、府中遺跡、上黒谷遺跡など広い面積をもつ遺物散布地が多数存在する。高井遺跡からは堅穴建物が2棟検出されているものの、その他の遺跡からは須恵器・土師器などが出土するのみで、実態は不明である。

飛鳥から奈良時代の古代寺院跡には山口廃寺跡、上野廃寺跡、薬勝寺廃寺跡がある。その他、古代瓦出土地に秋月遺跡、太田・黒田遺跡、関戸遺跡がある。上野廃寺跡は発掘調査が行われ、薬師寺式の伽藍配置をもつことが確認されている。上野廃寺跡出土の隅木蓋瓦はパルメット文様を施した類例の少ない優品である。山口廃寺跡は、緑色片岩製塔心礎が残されているが、伽藍配置などは不明である。律令期の遺構が確認された遺跡には、高井遺跡、川辺遺跡、山口遺跡、秋月遺跡、岩橋高柳遺跡、奥山田遺跡などがある。太田・黒田遺跡や鳴神遺跡群からは和同開珎・万年通宝などの古代銭貨や陶硯・土馬といった官衙や古代寺院を想定できる遺物が多く出土している。また、紀ノ川北岸の府中遺跡は、調査例は少ないが、8～9世紀の多量の須恵器とともに平・軒丸瓦、須恵器硯などが採集されており、文献史学の成果もあわせて紀伊国府の可能性が指摘されている。

中世の遺跡としては、紀ノ川北岸に鎌倉時代の館跡が検出された西庄Ⅱ遺跡、多数の石積み井戸が発見された木ノ本Ⅲ遺跡、平安時代から室町時代の集落が確認された西田井遺跡、南岸では鎌倉時代から室町時代の多数の遺構・遺物が確認された太田・黒田遺跡や秋月遺跡、鎌倉時代の建物遺構が検出された奥山田遺跡、多数の漁網用の土鍾類に加え、国産陶器・中国産陶磁器などが出土し、紀ノ川河口付近の外港的性格を併せもつ集落であった可能性も指摘される関戸遺跡などが挙げられる。当地域は中世末に織田信長・豊臣秀吉の侵攻を受ける。天正5年（1577）の信長の紀州攻めに関係する遺跡と考えられているのが城山遺跡・中野遺跡で、城山遺跡は陣城跡、中野遺跡は『信長公記』に記載のある中野城跡と推定されている。天正13年（1585）秀吉は根来を焼き討ちにし、雑賀を攻め、紀州を平定する。秀吉が水攻めした太田城は、太田・黒田遺跡内の南半部に存在した中世の環濠集落と推定され、出水に太田城水攻めに関係する堤の残存部分が存在する。

紀州を平定した秀吉は、岡山に和歌山城の築城を命じ、弟秀長を藩主としたとされる。慶長5年（1600）には関ヶ原の戦いで功のあった浅野幸長が藩主となり、近世の城下町として出発する。元和5年（1619）には徳川家康の十男頼宣が転封、55万5千石の御三家紀州藩が成立し、城・城下町の整備・拡張が行われた。国史跡である和歌山城跡では、修復工事や整備工事など様々な要因で発掘調査が実施され、徳川時代の二の丸、三の丸に相当する部分では建物、排水施設、坪庭にあった漆喰池、石垣構造などが確認されるなど当時の状況が解明されつつある。近年では、堀内で御橋廊下の基礎構造を解明し、文献史料、絵図資料と発掘調査成果の検討により、かつて二の丸と西の丸を繋いでいた御橋廊下の復元工事が実施された。また、鷺ノ森遺跡で城下町の発掘調査が行われ、武家屋敷地、町屋の様相が一部判明している。

幕末には紀淡海峡周辺に海防のための施設（台場）が多数築かれた。近年調査で石垣や土塁、V字状の石積遺構が確認された雑賀崎台場跡もその一つである。昭和20年（1945）7月9日には和歌山大空襲を受け、旧国宝の和歌山城天守閣を失い、市街地をはじめ中心部は焼野原となった。和歌山城跡や市街地中心部を発掘すると、戦災時の焦土層が厚さ数10cmも遺存しているのが確認され、その被害の大きさを物語っている。

和歌山市遺跡分布図

岬町

阪南市

岩出市

紀の川市

海南市

和歌山下津港

和歌浦湾



友ヶ島は別図



友ヶ島

遺 跡 名 一 覧

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1	報恩講寺遺跡	70	楠見遺跡	154	北野遺跡	245	伊太祈曾神社古墳群	314	鳴神Ⅱ遺跡	379	和歌山城跡
2	大川西方遺跡	71	鳴滝古墳群	154-2	北野Ⅱ遺跡	246	チショ古墳	315	鳴神Ⅲ遺跡	380	山口御殿跡
3	藻江遺跡	72	奥出古墳	155	若宮池遺跡	247~249	城ヶ森古墳群	316	鳴神Ⅳ遺跡	381	岩橋Ⅱ遺跡
4	しょうぶ谷遺跡	73	有功経塚	156	上三毛遺跡	250	城ヶ森遺跡	317	鳴神貝塚	382	本願寺跡
5	水谷遺跡	74	園部Ⅰ遺跡	157	下三毛遺跡	251	相坂古墳	318	鳴神Ⅴ遺跡	383	神前Ⅱ遺跡
6	男良の谷遺跡	75	園部古墳	158	小山古墳	252・253	千石山古墳群	319	音浦遺跡	384	高松焼窯跡
7	深山遺跡	76	園部Ⅱ遺跡	159	寺山古墳群	254	菖蒲谷遺跡	320	鳴神Ⅵ遺跡	385	奥山田古墳群
8	大谷川遺跡	77	有功遺跡	160	東国山古墳群	255	吉礼Ⅲ遺跡	321	岩橋遺跡	386	大池遺跡
9	加太遺跡	78	池田遺跡	161	宮山古墳群	256	千石山遺跡	322	栗栖Ⅰ遺跡	387	大旗山城跡
10	加太南遺跡	79	有功古墳	162	小倉古墳群	257~259	井戸古墳群	323	栗栖Ⅱ遺跡	388	西田井遺跡
11	平の谷遺跡	80	大同寺墳墓	163	小倉9号墳	260	馬場古墳	324	高橋神社遺跡	389	井ノ口遺跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡	81	大同寺古墳	164	明楽古墳群	261	馬場遺跡	325	紀の川銅鐸出土地	390	神波遺跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡	82	大同寺遺跡	165	小倉神社1号墳	262~265	東池古墳群	326	有本銅鐸出土地	391	永穂遺跡
14	船出遺跡	83	法然寺遺跡	166	小倉神社2号墳	266	吉里銅鐸出土地	327	太田・黒田遺跡	392	楠本遺跡
16	加太駅北方遺跡	84	六十谷遺跡	167	モント古墳群	267	小山古墳	328	吉田窯跡	393	吉田遺跡
17	藻崎北浜遺跡	85	和田遺跡	168	小倉神社境内遺跡	268	奥須佐窯跡	329	鷺ノ森遺跡	394	城山遺跡
18	藻崎南浜遺跡	86	西辻遺跡	169	金谷遺跡	269	円満寺古墳	330	鷺ノ森窯跡	395	岡村遺跡
19	藻崎西浜遺跡	87	川口遺跡	170	奥池遺跡	270	峯古墳	331	秋月遺跡	396	室山古墳群
20	神前東浜遺跡	88	六十谷古墳群	171	高積山遺跡	271	西光寺窯跡	332	津奈遺跡	397	木ノ本Ⅳ遺跡
21	神前西浜遺跡	89	直川遺跡	172	葉徳寺跡	272	吉里1号窯跡	333	岡の里古墳	398	府中Ⅳ遺跡
22	屋敷浜遺跡	90	直川廃寺跡(明光寺跡)	173	城ヶ峯城跡	273	吉里2号窯跡	334	関戸遺跡	399	平井遺跡
23	おそ越の鼻遺跡	91	高井遺跡	174	瀬宜Ⅰ遺跡	274	頭陀寺古墳	335	関戸古墳	400	深谷池北遺跡
24	一谷色遺跡	92	鳥井遺跡	175	瀬宜Ⅱ遺跡	275	頭陀寺遺跡	336	天神山古墳	401	名草池北遺跡
25	柏の浜遺跡	93	田屋遺跡	176	瀬宜貝塚	276	大將軍窯跡	337	秋葉山貝塚	402	湯谷池西遺跡
26	深蛇池遺跡	94	府中Ⅱ遺跡	177	河南中学校北方遺跡	277	有ノ木窯跡	338	アンドの鼻古墳	403	平野池南遺跡
27	垂水遺跡	95	府中Ⅲ遺跡	178	和佐中遺跡	278	宝光寺跡	339~342	三田古墳群	404	北野池北遺跡
28	神島遺跡	96	府中遺跡	179	和佐寺跡	279~280	松原古墳群	343	吉原古墳	405	山吹丁遺跡
29	沖の島北方海底遺跡	97	北山Ⅰ遺跡	180・181	瀬宜古墳群	281	滝ヶ峯古墳群	344	広原古墳	406	友田町遺跡
30	野奈浦遺跡	98	北山1号墳	182	和坂古墳	282	滝ヶ峯遺跡	345	内原古墳	407	津奈Ⅱ遺跡
31	ハイブの浦遺跡	99	北山2号墳	183	和佐古墳群	283	葉勝寺南山古墳群	346	内原遺跡	408	和田Ⅱ遺跡
32	浜遺跡	100	北山3号墳	184	花山古墳群	284	仁井辺遺跡	347	名草貝塚	409	岩橋Ⅲ遺跡
33~35	磯の浦古墳群	101	北山4号墳	185	岩橋千塚古墳群	285	葉勝寺跡	350	高津子山古墳	410	前山B226号墳
37	磯脇遺跡	102	北山5号墳	186	井辺前山古墳群	286	葉勝寺遺跡	352	金谷廃寺跡	411	前山B227号墳
38	西庄遺跡	103	北山Ⅱ遺跡	187	寺内古墳群	287	松原Ⅰ遺跡	353	興徳寺跡	412	城ノ前1号墳
39	平の下遺跡	104	北山6号墳	188	森小手穂遺跡	288	松原Ⅱ遺跡	356	太田城跡	413	境原遺跡
40	木ノ本Ⅰ遺跡	105~117	直川八幡山古墳群	189	寺内ナイフ形石器出土地	289	葉師谷遺跡	357	山崎山古墳群	414	葉勝寺Ⅱ遺跡
41	木ノ本Ⅱ遺跡	118	八王寺山古墳群	190	頭陀寺ナイフ形石器出土地	290	江南遺跡	358	山東中遺跡	415	本渡遺跡
42	木ノ本Ⅲ遺跡	119	橘谷Ⅰ遺跡	209	山東古墳群	291	曾垣田遺跡	359	加太Ⅱ遺跡	416	明王寺遺跡
43	木ノ本経塚	120	橘谷Ⅱ遺跡	210	山東16号墳	292	曾垣田Ⅱ遺跡	360	雨が谷遺跡	417	平尾遺跡
44-1	釜山古墳	121	橘谷Ⅲ遺跡	211	山東17号墳	293	曾垣田古墳	361	冬野遺跡	418	滝ヶ峯Ⅱ遺跡
44-2	車駕之古址古墳	122	橘谷銅鐸出土地	212	山東18号墳	294	城の前Ⅱ遺跡	362	鳴滝遺跡	420	太田城水攻め提跡
44-3	茶臼山古墳	123	弘西遺跡	213	山東19号墳	295	城の前Ⅰ遺跡	363	園部円山古墳	421	木広町遺跡
45	木本小学校Ⅰ遺跡	124	北田井遺跡	214	山東20号墳	296	大池遺跡	364	西庄Ⅱ遺跡	422	朝日蔵骨器出土地
46	木本小学校Ⅱ遺跡	125~127	別所古墳群	215	山東21号墳	297	赤津古墳群	365	永山遺跡	423	上黒谷Ⅱ遺跡
47	榎原遺跡	128	上野古墳群	218	若林古墳群	298	吉礼貝塚	366	永山古墳	424	東田中遺跡
48	中野遺跡	129~139	山口古墳群	219	吉礼砂羅谷窯跡	299	西吉礼遺跡	367	井辺Ⅲ遺跡	425	雑賀崎台場跡
49	城山古墳	140	山口廃寺跡	220~222	平尾古墳群	300	東吉礼遺跡	368	紀三井寺遺跡	426	小豆島西遺跡
50	権現山1号墳	141	中筋日延遺跡	226	楠古墳群	301	和田遺跡	369	奥山田遺跡	427	岩橋高柳遺跡
51	権現山2号墳	142	山口遺跡	227	足守神社古墳群	302	和田岩坪遺跡	370	朝日石槍出土地	428	和坂南垣内古墳群
52	高芝遺跡	143	谷遺跡	228	赤山古墳	303	和田古墳群	371	深山要塞跡	429	栄谷遺跡
53	高芝古墳群	144	里遺跡	229~233	塩谷古墳群	304	和田4号墳	371-1	深山第1砲台跡	430	西庄Ⅲ遺跡
54	栄谷貝塚	145	川辺遺跡	234	新出古墳	305	龜山神社古墳	371-2	深山第2砲台跡	431	砂山南土師器出土地
55	貴志古墳	146	藤田古墳	235	明王寺経塚	306	坂田地蔵山古墳	371-3	男良砲台跡	432	旧聖社境内和鏡出土地
56	川原崎遺跡	147	碓古墳	236	矢田古墳	307	神前遺跡	372	加太砲台跡	433	今福尖頭器出土地
57~59	川原崎古墳群	148	藤田遺跡	237	北池古墳	308	井辺遺跡	373-1・2	田倉崎砲台跡	434	有本土器出土地
60	国の本遺跡	149	宇田森遺跡	238~240	殿山古墳群	309	岡崎縄文遺跡	374	虎島砲台跡	435	坂田遺跡
61	大谷古墳	150	上野廃寺跡	241	土井山古墳	310	森小手穂埴輪窯跡	375	友ヶ島要塞跡	436	三葛遺跡
62・64・65	晒山古墳群	151	上野遺跡	242	丸山古墳	311	大日山Ⅰ遺跡	376	行者堂東遺跡		
63	慶円寺裏山古墳	152	上黒谷遺跡	243	高岡古墳	312	井辺Ⅰ遺跡	377	松江経塚		
66~69	雨が谷古墳群	153	北野窯跡	244	桜山古墳	313	井辺Ⅱ遺跡	378	狛口石岩陰遺跡		

2 埋蔵文化財発掘調査事業

(1) 平成22年度の概要

平成22年度の文化財保護法第93・94条に基づく発掘の届出件数は173件、通知件数は14件である。届出・通知が多いのは、紀ノ川北岸では木ノ本Ⅰ遺跡（16件）、高井遺跡（8件）、宇田森遺跡（5件）、川辺遺跡（18件）、南岸では井辺遺跡（17件）、太田・黒田遺跡（11件）、和歌山城跡（9件）などである。開発地は市街地縁辺部での宅地造成とその後の個人住宅建設や集合住宅建設が活発化している状況にある。市街地では、店舗や個人住宅の届出などがある。公共事業としては、公共下水管敷設事業が市内各地で行われており、市道建設も行われている。その傾向は、今後も継続することが予想される。

平成21年度に和歌山市教育委員会に関連して実施した確認調査・立会調査・発掘調査は、以下の（2）の項の一覧に示した通り102件である。これらのなかには、平成20年度に届出・通知のあった案件の対応も含まれている。なかでも調査が多かったのは、紀ノ川北岸では高井遺跡（11件）、川辺遺跡（10件）、南岸では井辺遺跡（10件）、太田・黒田遺跡（7件）などである。

これらのうち確認調査を中心に、立会調査で遺構・遺物を確認した調査等についての概要を（3）の項で記述する。また、財団法人和歌山市都市整備公社に委託して実施した3件の発掘調査事業（太田・黒田遺跡第62次確認調査、太田・黒田遺跡第65次発掘調査、田屋遺跡第5次確認調査）の概要については（4）の項に記載する。

なお、川辺遺跡、西田井遺跡、太田・黒田遺跡、有功遺跡、田屋遺跡については、事業者負担による本発掘調査（川辺遺跡第15次調査、西田井遺跡第3次調査、太田・黒田遺跡第64次調査、太田・黒田遺跡第67次調査、有功遺跡第6次調査、田屋遺跡第6次調査、田屋遺跡第7次調査）を実施した。

(2) 平成22年度和歌山市調査一覧

実施機関の欄の（財）和公社は財団法人和歌山市都市整備公社、和市委は和歌山市教育委員会を指す。また、和歌山市教育委員会関係の確認調査・立会調査記録は1件ごとに「発掘調査・立会調査カード」を作成し、和歌山市教育委員会生涯学習部文化振興課に備え、一覧表とともに和歌山県教育委員会にも同じものを提出している。

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指示文書番号	調査期間	実施機関	調査内容	備考
				内 容	調査面積(㎡)			
1	川 辺 遺 跡	川辺243-4	店舗建設	文第5号(285)	100402～0513	㈱和公社	溝・ビットなどを検出。(第15次調査)	年報掲載
				本発掘調査	212.90			
2	北 田 井 遺 跡	北284-64	ガス管撤去	文第5号(285)	100407	和市委	撤去工事のため既に掘削済み。遺構・遺物なし。	
				工事立会	0.75			
3	津 秦 遺 跡	有家187番3	宅地造成	文第5号(331)	100414	和市委	遺構なし。土師器小片出土。(第1次調査)	本書(3)に掲載
				確認調査	26.75			
4	西 田 井 遺 跡	西田井256-2、265-1、266-1	店舗建設	文第5号(268)	100419～0602	㈱和公社	弥生後期から江戸時代にかけての遺構を確認した。(第3次調査)	年報掲載
				本発掘調査	229.88			
5	西 田 井 遺 跡	北181-3	個人住宅	文第5号(338)	100420	和市委	中世と古墳時代の遺構面を確認。溝・ビットを検出。(第4次調査)	本書(3)に掲載
				確認調査	6.75			
6	鷺ノ森遺跡	鷺ノ森東ノ丁9	ガス管工事	文第5号(337)	100420	和市委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
				工事立会	2.25			
7	山 口 遺 跡	谷33番1、38番	宅地造成	文第5号(317)	100421～0426	和市委	杭状のビットを多数検出。(第7次調査)	本書(3)に掲載
				確認調査	50.66			
8	城の前Ⅱ遺跡	朝日878-5	個人住宅	文第5号(280)	100423	和市委	土取りによる削平を受け、遺構なし。土師器小片出土。	
				工事立会	8.55			

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指示文書番号 内 容	調査期間 調査面積(m ²)	実施機関	調査内容	備考
9	川 辺 遺 跡	藤田16	個人住宅	文第60の(3) 確認調査	100428 5.63	和市政教委	削平を受け、遺構・遺物なし。	
10	川 辺 遺 跡	川辺243番4、 193番外	店舗建設	文第5号(277) 工事立会	100430～0507 247.25	和市政教委	古墳時代初頭から飛鳥時代の遺構面を 確認。上坑・溝・ピットを検出。	本書(3) に掲載
11	太田・黒田遺跡	黒田88-3	専修学校	文第5号(305) 確認調査	100513 12.24	和市政教委	既存建物の基礎により遺構面破壊され ており、遺構・遺物なし。(第63次調査)	本書(3) に掲載
12	高 井 遺 跡	直川1233-18・ 20、1230-3	個人住宅	文第5号(320) 浄化槽立会	100514 4.32	和市政教委	削平を受け、遺構・遺物なし。	
13	高 井 遺 跡	直川1219-11	個人住宅	文第60の(38) 浄化槽立会	100514 3.38	和市政教委	時期不明のピット1基検出。土師器小 片1点出土。	
14	高 井 遺 跡	直川1230-1、1229 -3、1233-9	個人住宅	文第5号(247) 浄化槽立会	100521 3.84	和市政教委	削平を受け、遺構・遺物なし。	
15	高 井 遺 跡	直川1219-14	個人住宅	文第5号(298) 浄化槽立会	100525 3.75	和市政教委	遺構・遺物なし。	
16	有 功 遺 跡	六十谷1049-7・ 8・2・5・	集合住宅	文第60の(9) 本発掘調査	100525 12.88	和市政教委	弥生時代落ち込み1基、時期不明ピッ ト1基検出。(第4次調査)	本書(3) に掲載
17	晒 山 古 墳 群	大谷421-17	個人住宅	文第5号(269) 浄化槽立会	100526 3.38	和市政教委	削平を受け、遺構・遺物なし。	
18	六 十 谷 遺 跡	六十谷338番 6	個人住宅	文第5号(293) 浄化槽立会	100531 3.68	和市政教委	遺構なし。土師器小片出土。旧河道の 氾濫原の可能性有。	
19	太田・黒田遺跡	黒田二丁目1 -4～1-20	ガス管理設	文第60の(29) 工事立会	100601 12.88	和市政教委	遺構なし。弥生土器、古墳時代須恵 器、奈良時代須恵器出土。	
20	高 井 遺 跡	直川1219-12	個人住宅	文第5号(246) 浄化槽立会	100601 3.75	和市政教委	遺構・遺物なし。	
21	岩橋千塚古墳群	岩橋1464-7	個人住宅	文第5号(303) 浄化槽立会	100603 4.20	和市政教委	遺構・遺物なし。	
22	太田・黒田遺跡	黒田一丁目4 番9、11	学習塾	文第5号(329) 確認調査	100607～0611 20.00	師和公社	古墳時代の水田・水路を検出。(第62 次調査)	本書(4) に掲載
23	高 井 遺 跡	直川1218-6	個人住宅	文第60の(39) 浄化槽立会	100608 6.48	和市政教委	遺構なし。土師器、瓦器小片出土。	
24	磯 脇 遺 跡	本脇310番8	個人住宅	文第60の(80) 工事立会	100609 2.10	和市政教委	遺構なし。摩滅した土師器小片少量出 土。	
25	六 十 谷 遺 跡	六十谷338番 5	個人住宅	文第5号(328) 浄化槽立会	100616 3.36	和市政教委	遺構なし。古墳時代土師器出土。旧河 道の氾濫原の可能性有。	本書(3) に掲載
26	田 屋 遺 跡	小豆島121、 122番1	集合住宅	文第60の(33) 確認調査	100621～0623 36.36	和市政教委	遺構なし。中世土師器小片出土。対象 地周辺は湿地の可能性。(第4次調査)	本書(3) に掲載
27	川 辺 遺 跡	川辺33-12	個人住宅	文第5号(282) 確認調査	100621 3.75	和市政教委	遺構なし。土師器小片出土。	
28	川 辺 遺 跡	藤田16-22	個人住宅	文第60の(32) 浄化槽立会	100621 3.75	和市政教委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
29	川 辺 遺 跡	山口西1-16	ガス管理設	文第60の(44) 工事立会	100621 106.50	和市政教委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
30	関 戸 遺 跡	関戸3丁目 776-93	個人住宅	文第60の(57) 確認調査	100628 5.26	和市政教委	遺構なし。室町時代の遺物包含層を確 認。(第2次調査)	本書(3) に掲載
31	岩橋千塚古墳群	岩橋1464-4	個人住宅	文第5号(321) 浄化槽立会	100701 4.75	和市政教委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
32	井 辺 遺 跡	神前120-6	個人住宅	文第5号(334) 浄化槽立会	100705 5.76	和市政教委	遺構・遺物なし。旧河道内に含まれる 可能性有。	
33	井辺・神前遺跡	神前67-4	宅地造成	文第60の(49) 工事立会	100706 2.00	和市政教委	遺構・遺物なし。湿地状の堆積を確 認。	
34	津 秦 II 遺 跡	津秦3-26	診療所	文第60の(102) 確認調査	100707 20.14	和市政教委	遺構なし。中世土師器小片出土。(第 2次調査)	本書(3) に掲載
35	太田城水攻め堤跡	出水117	個人住宅	文第60の(61) 確認調査	100713 8.82	和市政教委	遺構・遺物なし。(第1次調査)	本書(3) に掲載
36	府 中 遺 跡	府中1172・ 1173	個人住宅	文第60の(55) 工事立会	100713 1.50	和市政教委	遺構なし。土師器小片出土。	
37	井 辺 遺 跡	井辺206-1	集合住宅	文第60の(68) 確認調査	100715 18.40	和市政教委	遺構なし。弥生時代後期末～古墳時代初 頭の遺物包含層を確認。(第8次調査)	本書(3) に掲載
38	木ノ本 I 遺 跡	西庄49-1～ 49-2	ガス管理設	文第60の(69) 工事立会	100716 13.50	和市政教委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
39	太田・黒田遺跡	黒田1丁目4 -9・11	学習塾	文第5号(329) 本発掘調査	100720～0922 143.44	師和公社	弥生時代中期、古墳時代、奈良時代の用水 路の可能性のある溝を確認(第64次調査)	年報掲載
40	太田・黒田遺跡	太田二丁目9 番2	個人住宅	文第60の(99) 本発掘調査	100722～0929 66.00	師和公社	弥生時代前期から明治時代にわたる5 面の遺構面を確認した(第65次調査)	本書(4) に掲載
41	岩 橋 遺 跡	岩橋1034-9、1035 -1、1036-1	個人住宅	文第60の(129) 確認調査	100728 12.38	和市政教委	遺構なし。土師器・中世土師器小片出 土。(第1次調査)	本書(3) に掲載
42	川 辺 遺 跡	山口西1-16 ～川辺40-10	ガス管理設	文第60の(44) 工事立会	100802 1.54	和市政教委	遺構・遺物なし。	
43	大日山 I 遺 跡	井辺392外	宅地造成	文第60の(58) 確認調査	100817～0819 57.22	和市政教委	遺構なし。奈良時代の遺物包含層を確認。 対象地周辺は谷状地形。(第1次調査)	本書(3) に掲載
44	有 功 遺 跡	六十谷1050- 1	個人住宅	文第60の(125) 浄化槽立会	100903 3.75	和市政教委	遺構・遺物なし。	

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指示文書番号 内 容	調査期間 調査面積(m ²)	実施機関	調査内容	備考
45	城ヶ森遺跡	吉礼627-33	個人住宅	文第60の(63) 浄化槽立会	100903 3.12	和市政教委	遺構・遺物なし。湿地状の地形の可能性有。	
46	関戸遺跡	関戸3丁目6 -6~8-43	ガス管理設	文第60の(91) 工事立会	100903 7.50	和市政教委	遺構なし。奈良時代の土師器甕の把手 2点出土。	
47	鷺ノ森遺跡	西釘貫丁1丁目7 ~鷺ノ森明神町22	ガス管理設	文第60の(92) 工事立会	100906 0.65	和市政教委	遺構・遺物なし。	
48	有功遺跡	六十谷1091-1	宅地造成	文第60の(67) 確認調査	100907・0908 43.27	和市政教委	古墳時代土坑1基、中世以前ピット・ 土坑を検出。(第5次調査)	本書(3) に掲載
49	宇田森遺跡	宇田森13-14	個人住宅	文第60の(137) 浄化槽立会	100910 3.08	和市政教委	平安時代末~鎌倉時代の遺物包含層を 確認。	本書(3) に掲載
50	六十谷遺跡	六十谷409-1・2	個人住宅	文第60の(2) 浄化槽立会	100916 4.00	和市政教委	弥生時代のピット5基、中期弥生土器 壺・甕等出土。	本書(3) に掲載
51	津秦Ⅱ遺跡	津秦3-27	個人住宅	文第60の(144) 浄化槽立会	100924 4.93	和市政教委	遺構なし。土師器小片出土。	
52	関戸遺跡	関戸3-776 -93	個人住宅	文第60の(57) 浄化槽立会	100924 5.60	和市政教委	遺構なし。土師器小片出土。	
53	有功遺跡	六十谷1091-1	宅地造成	文第60の(67) 本発掘調査	100927~1001 32.00	㈱和公社	平安~鎌倉時代の掘立柱建物1棟、溝 2条などを検出。(第6次調査)	年報掲載
54	府中遺跡	府中1172・ 1173	個人住宅	文第60の(55) 浄化槽立会	101001 5.98	和市政教委	遺構・遺物なし。	
55	和歌山城跡	十三番丁16~屋 形1丁目2-1	下水道管理設	文第80の(39) 工事立会	101004 4.50	和市政教委	遺構不明。堺焼播鉢、国産陶磁器、瓦 出土。	本書(3) に掲載
56	木ノ本Ⅱ遺跡	木ノ本1222、 1224、1225他	宅地造成	文第60の(146) 確認調査	101005~1007 72.24	和市政教委	時期不明杭穴検出。土師器、瓦器小片 出土。(第1次調査)	本書(3) に掲載
57	三田古墳群	三葛538-13	個人住宅	文第60の(217) 工事立会	101012 14.10	和市政教委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
58	三田古墳群	三葛528-1 ~1156	ガス管理設	文第60の(138) 工事立会	101018 6.00	和市政教委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
59	田屋遺跡	田屋102番他	店舗建設	文第60の(18) 確認調査	101018~1130 260.00	㈱和公社	ピット・土坑・溝などを検出。(第5 次調査)	本書(4) に掲載
60	山口遺跡	藤田116-5	個人住宅	文第60の(216) 確認調査	101025 9.43	和市政教委	遺構・遺物なし。(第8次調査)	本書(3) に掲載
61	井辺遺跡	津秦150-16	個人住宅	文第60の(163) 浄化槽立会	101027 4.00	和市政教委	遺構なし。土師器・瓦器小片出土。	
62	川辺遺跡	川辺33-5	個人住宅	文第60の(89) 浄化槽立会	101027 3.75	和市政教委	遺構なし。土師器小片出土。	
63	史跡和歌山城	和歌山市一番 丁	史跡整備	確認調査	101027~110127 250.00	㈱和公社	浅野期石垣、二の丸大奥部の遺構を確 認した。(第33次調査)	
64	鳴神Ⅴ遺跡	鳴神1013-1・ 10、1014-6	個人住宅	文第60の(215) 浄化槽立会	101104 2.80	和市政教委	遺構なし。土師器小片出土。	
65	田屋遺跡	直川1219-7	道路建設	文第39の(12) 本発掘調査	101104~0225 738.20	㈱和公社	古墳時代初頭から前期の堅穴建物8棟 を確認。(第6次調査)	報告書第5 集に掲載
66	高井遺跡	直川1219-7	個人住宅	文第60の(145) 浄化槽立会	101105 3.22	和市政教委	遺構・遺物なし。	
67	田屋遺跡	田屋111-3 ~128-2他	電線路埋設	文第60の(176) 工事立会	101108~1110 32.04	和市政教委	索掘小溝1条検出。土師器小片出土。	
68	井辺遺跡	井辺134-22	個人住宅	文第60の(229) 確認調査	101108 7.60	和市政教委	遺構なし。古墳時代初頭の遺物包含層 を確認。(第9次調査)	本書(3) に掲載
69	太田・黒田遺跡	太田二丁目2 -8・9	集合住宅建設	文第60の(237) 確認調査	101112 16.76	和市政教委	弥生時代を中心とする4面の遺構面を 確認。(第66次調査)	本書(3) に掲載
70	井辺遺跡	神前109-19	個人住宅	文第60の(126) 浄化槽立会	101118 15.00	和市政教委	遺構なし。古墳時代の土師器出土。	
71	府中Ⅳ遺跡	府中318-1	個人住宅	文第60の(251) 浄化槽立会	101119 2.20	和市政教委	遺構・遺物なし。	
72	三田古墳群	三葛1156~ 1156-1	ガス管理設	文第60の(230) 工事立会	101124 10.00	和市政教委	岩盤が露出しており、遺構・遺物な し。	
73	川辺遺跡	藤田16-17	個人住宅	文第60の(261) 浄化槽立会	101126 2.20	和市政教委	遺構・遺物なし。	
74	野奈浦遺跡	加太2673	ベンチ設置	文第57の(40) 工事立会	101201 4.68	和市政教委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
75	六十谷遺跡	六十谷388	個人住宅	文第60の(142) 浄化槽立会	101213 3.84	和市政教委	遺構なし。弥生時代中期土器出土。	
76	高井遺跡	直川1224-2・ 13、1218-8	個人住宅	文第60の(143) 浄化槽立会	101215 2.94	和市政教委	遺構なし。土師器・瓦器・陶磁器出 土。	
77	宇田森遺跡	宇田森13-11	個人住宅	文第60の(130) 浄化槽立会	101216 3.64	和市政教委	遺構なし。土師器小片出土。	
78	高井遺跡	直川1219-17	個人住宅	文第60の(207) 浄化槽立会	101221 3.36	和市政教委	遺構・遺物なし。	
79	津秦遺跡	有家201-19	個人住宅	文第60の(200) 浄化槽立会	101227 3.75	和市政教委	遺構・遺物なし。	
80	和歌山城跡	四番丁6	事務所建設	文第60の(287) 確認調査	101227 11.66	和市政教委	遺構なし。土師器・国産陶器・瓦など 出土。	本書(3) に掲載

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指示文書番号 内 容	調査期間 調査面積(m ²)	実施機関	調査内容	備考
81	田 屋 遺 跡	田屋102番他	店舗建設	文第60の(18) 本発掘調査	110105～0315 800.50	和和公社	弥生時代後期～古墳時代後期の堅穴建物10棟を確認（第7次調査）	報告書第7集に掲載
82	井 辺 遺 跡	井辺134-1	個人住宅	文第60の(113) 浄化槽立会	110112 3.25	和和教委	遺構なし。弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層を確認。	
83	井 辺 遺 跡	井辺95-9	集合住宅	文第60の(248) 浄化槽立会	110112 8.10	和和教委	遺構・遺物なし。	
84	上 三 毛 遺 跡	上三毛5-3	個人住宅	文第60の(279) 確認調査	110113 8.75	和和教委	遺構なし。土師器小片出土。	本書(3)に掲載
85	井 辺 遺 跡	井辺134-22	個人住宅	文第60の(229) 浄化槽立会	101108 3.00	和和教委	遺構なし。古墳時代初頭の遺物包含層を確認。	
86	神 前 遺 跡	神前285-46	個人住宅	文第60の(210) 浄化槽立会	110113 3.00	和和教委	遺構・遺物なし。	
87	津 秦 II 遺 跡	秋月481-1・2	個人住宅	文第60の(193) 浄化槽立会	110117 3.75	和和教委	遺構・遺物なし。	
88	宇 田 森 遺 跡	宇田森13-10	個人住宅	文第60の(212) 浄化槽立会	110117 3.50	和和教委	遺構なし。土師器、瓦器出土。	
89	高 井 遺 跡	直川1219-2	個人住宅	文第60の(178) 浄化槽立会	110120 3.84	和和教委	遺構・遺物なし。	
90	太田・黒田遺跡	太田二丁目2-8・9	集合住宅	文第60の(237) 本発掘調査	110121～0322 160.50	和和公社	4面の遺構面を確認。(第67次調査)	報告書第6集に掲載
91	井 辺 遺 跡	神前112-1	集合住宅	文第60の(303) 確認調査	110128 30.55	和和教委	古墳時代初頭の堅穴建物1基、溝1条を検出。(第10次調査)	本書(3)に掲載
92	川 辺 遺 跡	川辺33-13	個人住宅	文第60の(286) 浄化槽立会	110209 2.00	和和教委	遺構なし。土師器・須恵器出土。	
93	津 秦 遺 跡	津秦98-7	個人住宅	文第60の(328) 確認調査	110301 16.00	和和教委	古墳時代後期の溝1条検出。(第2次調査)	本書(3)に掲載
94	川 辺 遺 跡	川辺277-1	個人住宅	文第60の(250) 浄化槽立会	110308 3.75	和和教委	遺構・遺物なし。	
95	三 田 古 墳 群	三葛534-5	個人住宅	文第60の(316) 工事立会	110317 10.00	和和教委	遺構・遺物なし。	
96	河南中学校北方遺跡	和佐中155-3	電柱設置	文第60の(356) 工事立会	110318 4.00	和和教委	遺構・遺物なし。	
97	有 功 遺 跡	六十谷1117-1	宅地造成	文第60の(360) 確認調査	110322 42.80	和和教委	近世の小溝1条検出。土師器、須恵器、瓦器小片出土。	本書(3)に掲載
98	磯 脇 遺 跡	本脇263-2	集合住宅	文第60の(362) 確認調査	110323 28.26	和和教委	遺構なし。土師器、須恵器、瓦器小片出土。	本書(3)に掲載
99	明 王 寺 遺 跡	明王寺16-1	社会福祉施設	文第60の(354) 確認調査	110324・25 58.20	和和教委	中世の溝1条、自然流路1条検出。	本書(3)に掲載
100	鳴 神 V 遺 跡	秋月259-1	個人住宅	文第60の(364) 浄化槽立会	110328 21.00	和和教委	遺構なし。土師器・須恵器出土。	

(3) 市教育委員会実施確認・立会調査等概要

①津秦遺跡確認調査

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市有家字西ノ坪187番3

〔面積〕 26.75㎡（敷地面積984.00㎡）

〔概要〕 津秦遺跡（遺跡番号332）は、紀ノ川南岸の標高3.2m前後の沖積低地に位置する。遺跡は南北約450m、東西約300mの範囲をもつもので、弥生時代の遺物散布地として周知されている（第1図）。

今回の調査地は、遺跡の北西隅の位置において、宅地造成が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために確認調査を実施することになった（第2・3図）。

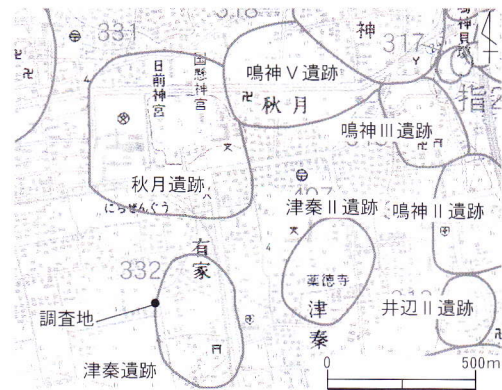
調査地の現況は水田で、地表面標高は標高約3.4m前後を測る。

現代の水田耕作土（第1層）が約20～25cm堆積しており、その床土と考えられるにぶい黄褐色シルト混細砂（第2層）が約5cm堆積する。その下に、茶褐色粒を含む約5～10cmの灰色細砂混シルト（第3層）、約15～20cmの灰黄褐色細砂混シルト（第4層）、約30～40cmの黄褐色細砂混シルト（第5層）、約25cm以上の黄褐色シルト（第6層）が堆積する（第4図）。

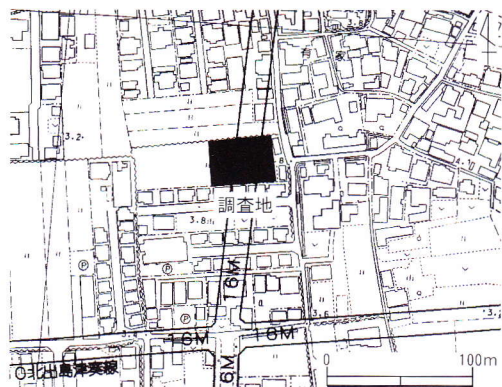
第3層は土師器・須恵器小片を含む希薄な遺物包含層である。第4層以下は遺物を含まず、自然堆積層であると考えられる。

確認調査の結果、遺構は確認できなかった（第5図）。また、遺物に関しても、第3層から少量出土したが、出土した遺物がいずれも小片で摩滅が著しいことから、周辺からの流入の可能性が想定された。第3層は土質や堆積状況から、水田耕作土の可能性はある。第4層以下は、自然堆積層で耕作土などに利用された状況も確認できなかった。

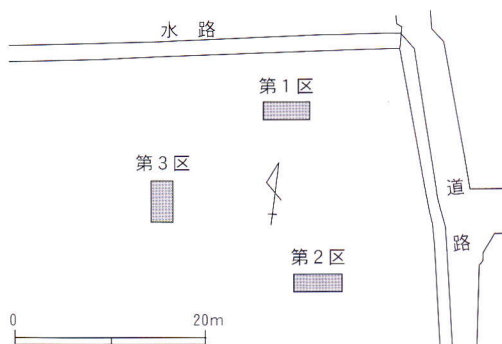
対象地は津秦遺跡の北西隅にあたり、東端の一部分が埋蔵文化財包蔵地の範囲にかかっている。今回の調査結果により対象地周辺に埋蔵文化財が展開している可能性は低く、現行の遺跡範囲より西側に遺構が展開しない状況が確認できた。



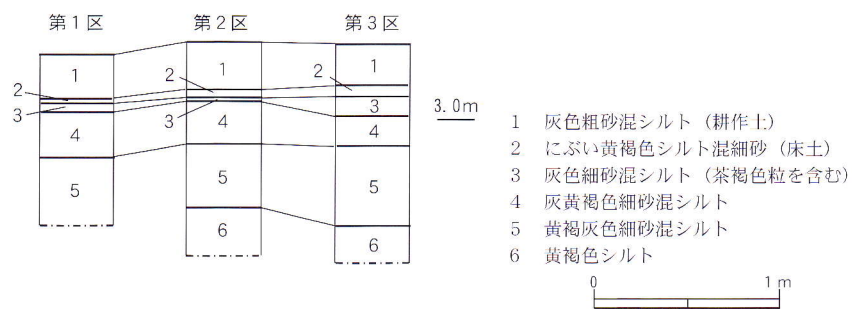
第1図 位置図



第2図 調査対象地

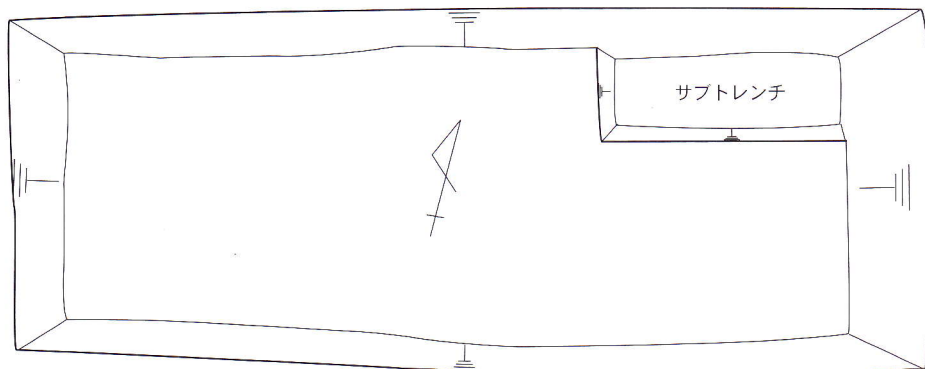


第3図 調査場所

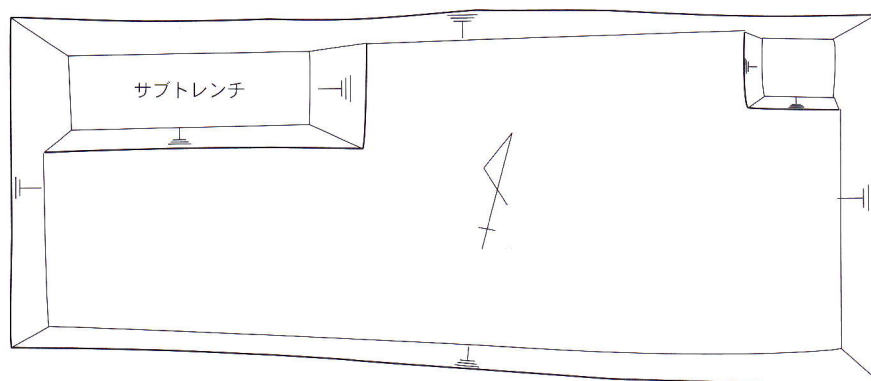


第4図 土層柱状模式図

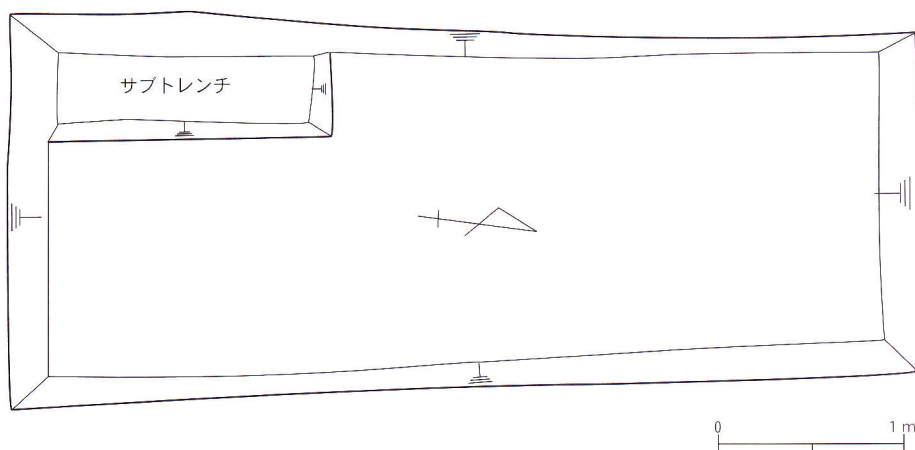
第1区



第2区



第3区



第5図 調査区平面図

②西田井遺跡第4次確認調査

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市北字馬場添181-3

〔面積〕 6.75㎡（敷地面積331.35㎡）

〔概要〕 西田井遺跡（遺跡番号388）は、紀ノ川北岸の標高7m前後の沖積低地に立地する。遺跡は東西約1.0km、南北約0.7kmの規模をもつ弥生時代から中世の集落遺跡である（第1図）。

今回の調査は遺跡中央北東寄りの位置で、個人住宅建設が計画されたため、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために確認調査を実施することになった（第2・3図）。

調査地の現況は宅地で、地表面標高は標高約7.0m前後を測る。

現況地盤の下、約50cmが造成土で、その下に、約20cmの暗灰色シルト混細砂（第1層）、約10～30cm暗灰黄褐色シルト混細砂（第2層）、約20cm以上の黄褐色シルト混細砂（第3層）が堆積する（第4図）。

第1～2層からは土師器・黒色土器・瓦器が出土した。そのうち、第1層から出土した黒色土器A類碗について、図化を行った（第5図）。第3層以下には、遺物は含まず、自然堆積層であると考えられる。

遺構は第2層及び第3層上面で遺構を検出した（第4図）。

〔第1遺構面〕 第1遺構面では、溝1条（SD-3）を検出した。

SD-3は調査区の断面で確認したもので、幅約0.4m、深さ約0.2mを測る。断面観察により遺構を認識したため、遺物などは確認できなかったものの、第1層は瓦器を含む遺物包含層であり、中世の耕作に関連する溝の可能性が考えられる。

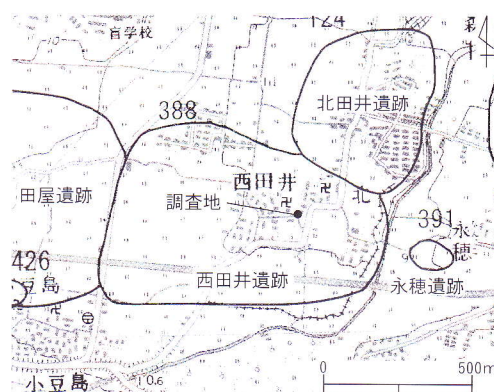
〔第2遺構面〕 第2遺構面では、溝2条（SD-1・2）、ピット1基（P-1）を検出した。

SD-1は南北方向の溝で、長さ3.0m以上、幅1.5m以上、深さ約0.4mを測る。

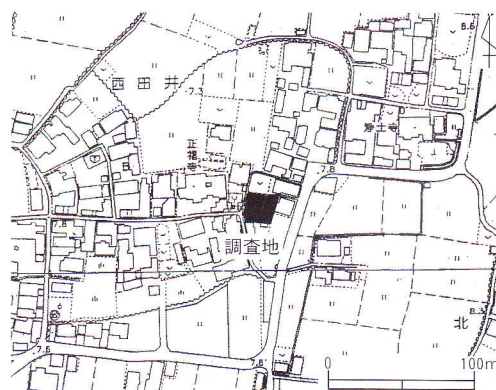
SD-2は東西方向の溝で、長さ1.2m以上、幅約0.6m、深さ約0.2mを測る。

P-1は、平面形が円形を呈し、直径約0.6m、深さ約0.5mを測る。

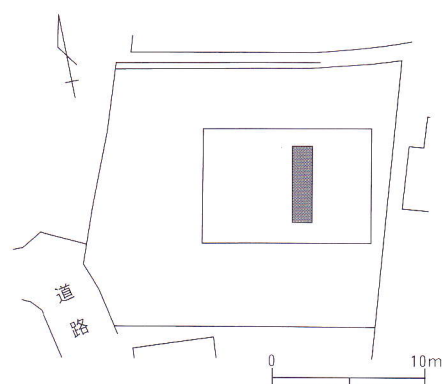
SD-1・2からは土師器、P-1からは土師器・須恵器が出土した。出土遺物から、古墳時代中期～後期の遺構の可能性が考えられる。



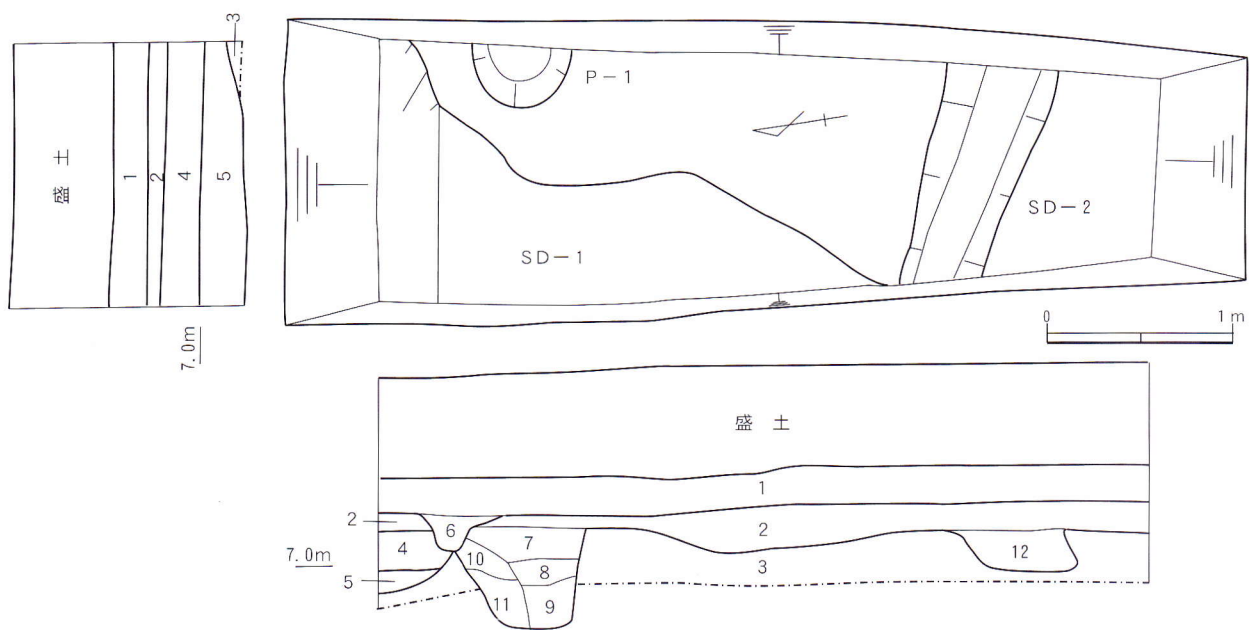
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



- | | |
|------------------------|-------------------------------------|
| 1 暗灰色シルト混細砂 | 7 茶褐色シルト混細砂 [P-1埋土] |
| 2 暗灰黄褐色シルト混細砂 | 8 茶褐色シルト混細砂 (3の土少量混じる) [P-1埋土] |
| 3 黄褐色シルト混細砂 | 9 茶褐色シルト混細砂 (3の土多く混じる) [P-1埋土] |
| 4 茶褐色シルト混細砂 | 10 茶褐色シルト混細砂 (7の土少量混じる) [P-1埋土] |
| 5 茶褐色シルト混細砂 (3の土少量混じる) | 11 茶褐色シルト混細砂 (灰色シルトブロック含む) [P-1埋土] |
| 6 灰白色シルト混細砂 [SD-3埋土] | 12 茶褐色シルト混細砂 (3の土混じる、炭混じる) [SD-2埋土] |

第4図 遺構平面図・土層断面図



第5図 遺物実測図

確認調査の結果、第2層上面で中世の遺構面、第3層上面で古墳時代中期～後期の遺構面を確認した。調査区は小規模であるが、遺構はかなり高密度で展開しており、周辺に当該期の遺構が展開している可能性が高いものと想定される。

③山口遺跡第7次確認調査

〔経緯〕宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕和歌山市谷字池尻33番1、38番

〔面積〕50.66m²（敷地面積1931.00m²）

〔概要〕山口遺跡（遺跡番号142）は、紀ノ川北岸の雄山川によって形成された標高18m前後の扇状地上に位置する。遺跡は南北約600m、東西約600mの範囲をもつ、弥生時代から平安時代の集落遺跡として周知されている（第1図）。

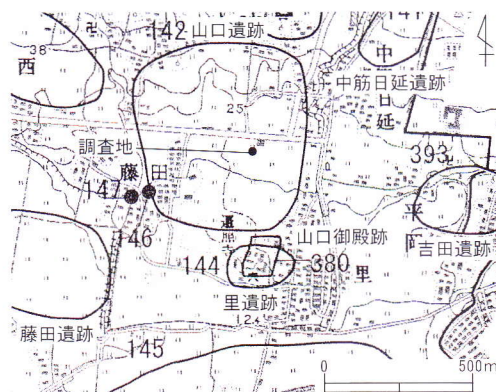
今回の調査は、遺跡の中央東寄りの位置において、宅地造成が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のための調査を実施した（第2・3図）。

現代の水田耕作土（第1層）が約20～30cm堆積しており、その床土と考えられる黄褐色シルト混細砂（第2層）が約5～10cm堆積する。その下に1・2区のみ約30cmの厚みで灰色砂礫（第3・5層）と灰黄色シルト混細砂（第4層）が堆積する。1・2区で確認した第3～5層は、近年耕作地として利用する際、耕作地の高さを調整するために入れられた土の可能性がある。第6層以下が、近年に改変を受けていない層にあたる。第6層は約10cmの灰黄色シルト混細砂でその下に、約20cmの黄褐色シルト混細砂（第7層）、約20cmの暗黄褐色シルト混細砂（第8層）、約20～30cmの暗茶褐色シルト混細砂（第9層）、礫を含む約20～40cmの黄灰色シルト混細砂（第10層）、約10cm以上の明黄褐色シルト混細砂（第11層）が堆積する。

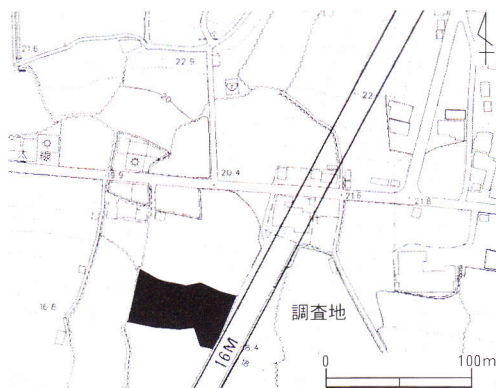
第6層は瓦器を含む鎌倉時代の希薄な包含層、第8～9層は土師器を含む希薄な包含層である。第10層以下は遺物を含まず、自然堆積層であると考えられる。対象地の東側で和歌山県文化財センターが県道と歌山貝塚線建設に伴い発掘調査を実施している。その調査成果と対応させる

と、第9層が飛鳥時代以降の遺物包含層となり第10層上面が飛鳥時代の遺構面となる。

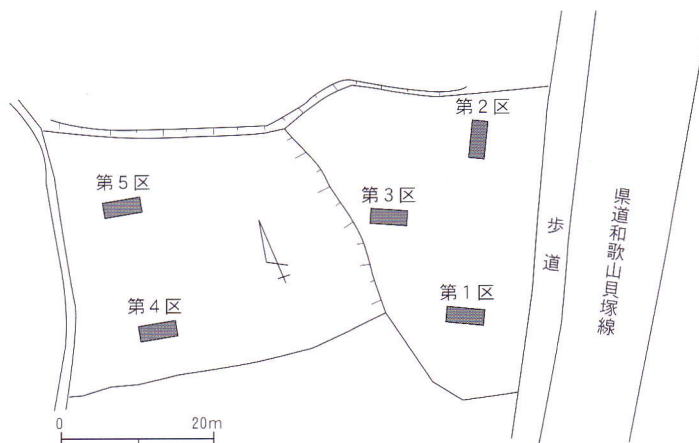
第10層上面において、直径10cm程度の小規模なピットや幅10cm程度の溝を検出した。遺構からは遺物は出土せず時期など詳細は不明である。ピットは、1基遺物採取のために掘削を行ったところ、掘方が観察できなかったため、杭の可能性が想定できた。ピットは第10層上面で検出されたが、



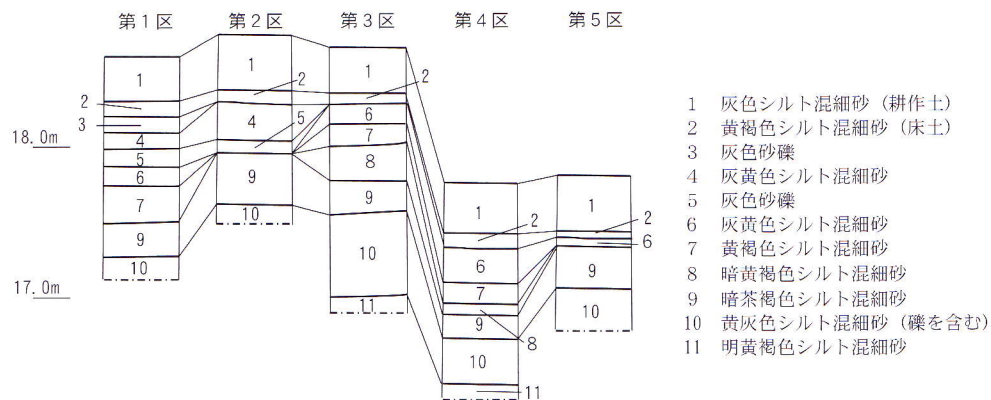
第1図 位置図



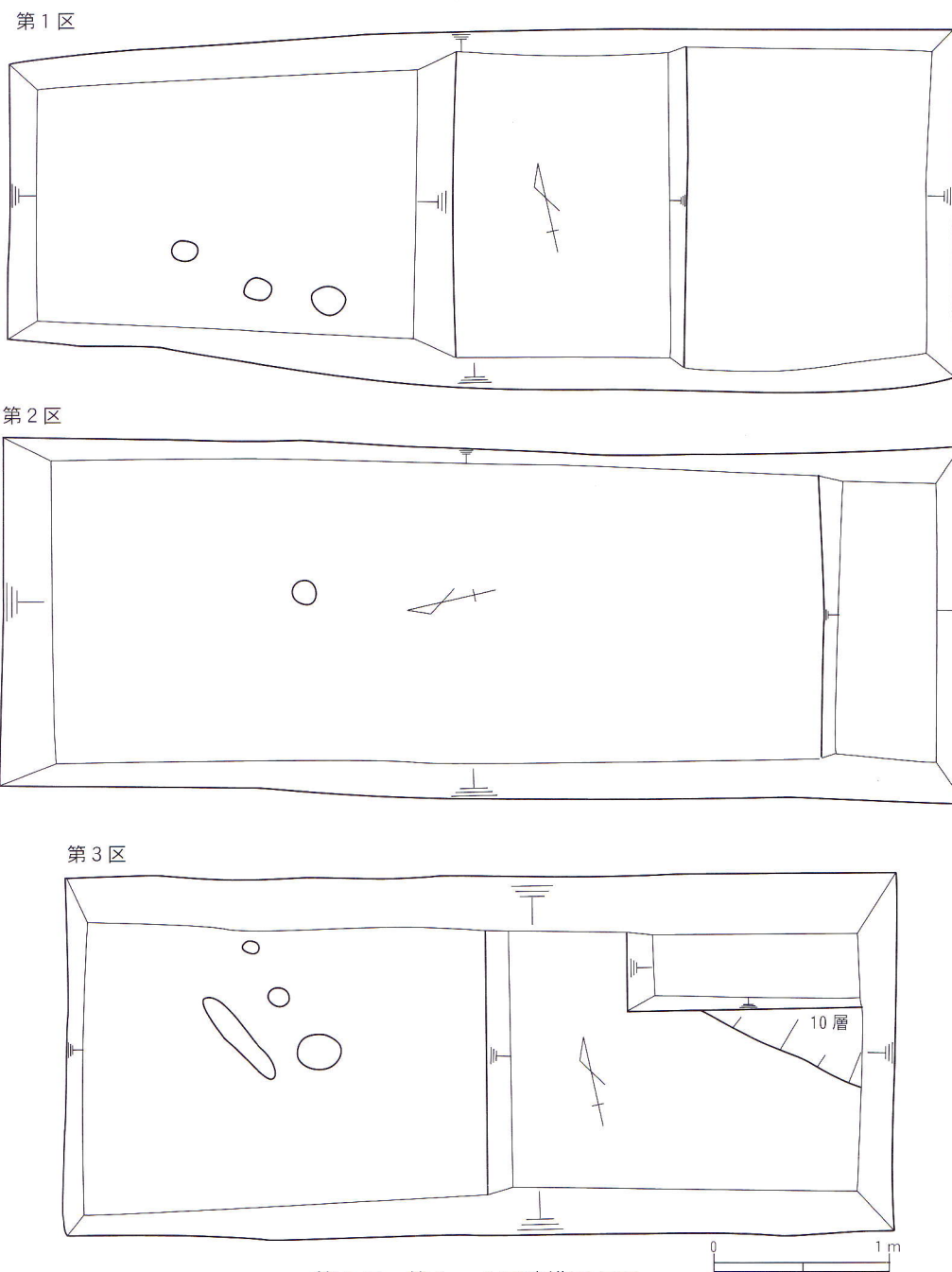
第2図 調査対象地



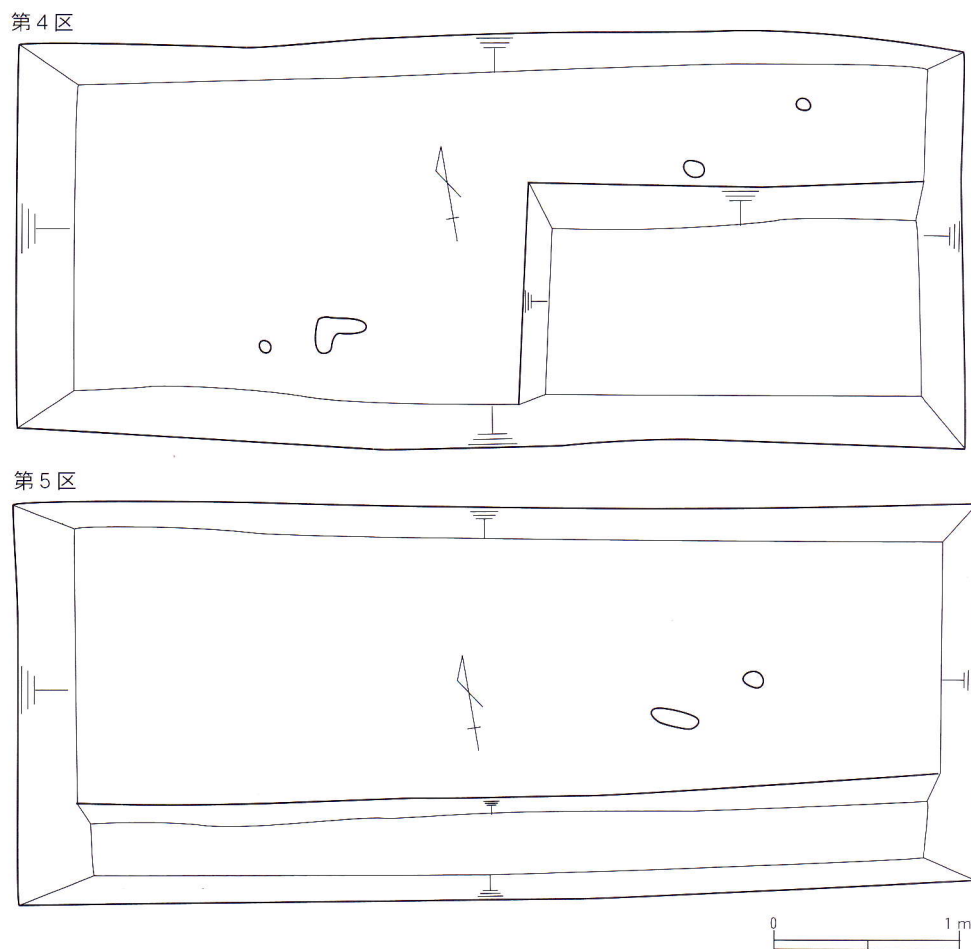
第3図 調査場所



第4図 土層柱状模式図



第5図 第1～3区遺構平面図



第6図 第4・5区遺構平面図

いずれも杭状の遺構であったため、どの層から打ち込まれたものか判断することは難しい。そのため、飛鳥時代の遺構に関しては、対象地に展開していた可能性は低いものと考えられる。また、遺物量は非常に少なく、いずれも摩滅しており、周辺より流入した遺物の可能性がある。対象地の東側の和歌山県文化財センターの調査では、自然流路の可能性のある大溝が調査区の中央で検出されており、掘立柱建物・土坑などの遺構は大溝の東側で検出され、西側には展開しない。地形も、道路から西側に向かって低くなっていくため、今回の調査成果も踏まえると集落域が西側に展開する可能性は低く、主に耕作地として利用されていた可能性が想定できる。

【参考文献】

財団法人和歌山県文化財センター 2005『山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書－県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良工事に伴う発掘調査－』

④川辺遺跡

〔経緯〕 店舗建設に伴う擁壁部分の立会調査

〔場所〕 和歌山市川辺243番4、193番他

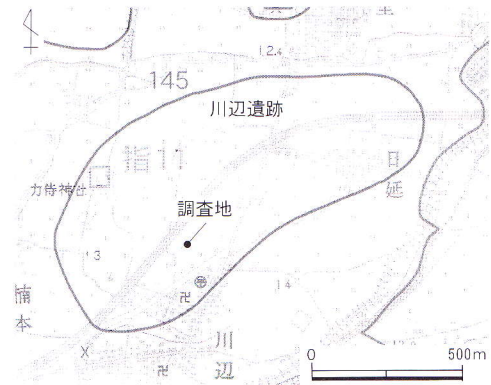
〔面積〕 247.25㎡（敷地面積8625.12㎡）

〔概要〕 川辺遺跡（遺跡番号145）は、紀ノ川北岸の標高11.50m前後の沖積低地に位置し、南北約650m、東西約1kmの範囲に広がる遺跡である（第1図）。同敷地内で財団法人和歌山市都市整備公社による発掘調査が実施されており、飛鳥時代から奈良時代の遺構・遺物が確認されている（第15次調査）。

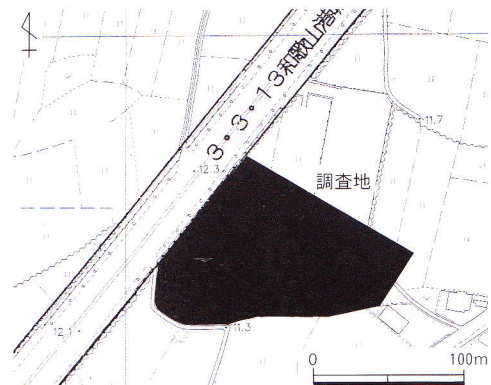
今回の調査は第15次調査地で記録保存が必要と判断された擁壁のうち、規模が狭小なものについて立会調査を実施した。（第2・3図）。

現地表面下、約16cmが現代耕作土（第1層）、約14cmの黄灰色（2.5Y 5/1）粗砂混粘土（第2層）、約24cmの黄褐色（2.5Y 5/3）細砂混シルト（第3層）、約22cmの黄褐色（2.5Y 5/4）細砂混シルト（第4層）、それ以下はにぶい黄褐色（10YR 4/3）細砂（第5層）が堆積する（第4図）。周辺の調査成果から、第2層は奈良時代から鎌倉時代の堆積層、第3・4層は縄文時代後期から弥生時代中期の堆積層であると考ええる。第5層以下は、遺物を含まない。

立会調査の結果、第3層上面において、古墳時代初頭から平安時代の遺構面を確認した。遺構は古墳時代初頭の土坑1基（SK-3）、古墳時代後期の溝1条（SD-5）、飛鳥時代の溝3条（SD-2・3・6）、平安時代の溝1条（SD-1）、時期不明の溝2条（SD-4・7）、ピット1基（P-1）、土坑2基（SK-1・2）を検出した（第5図）。



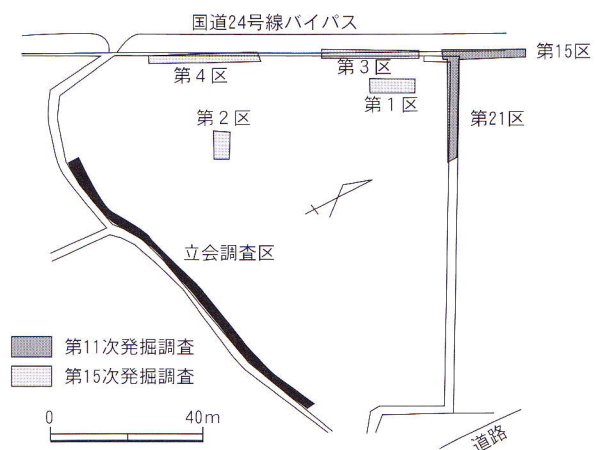
第1図 位置図



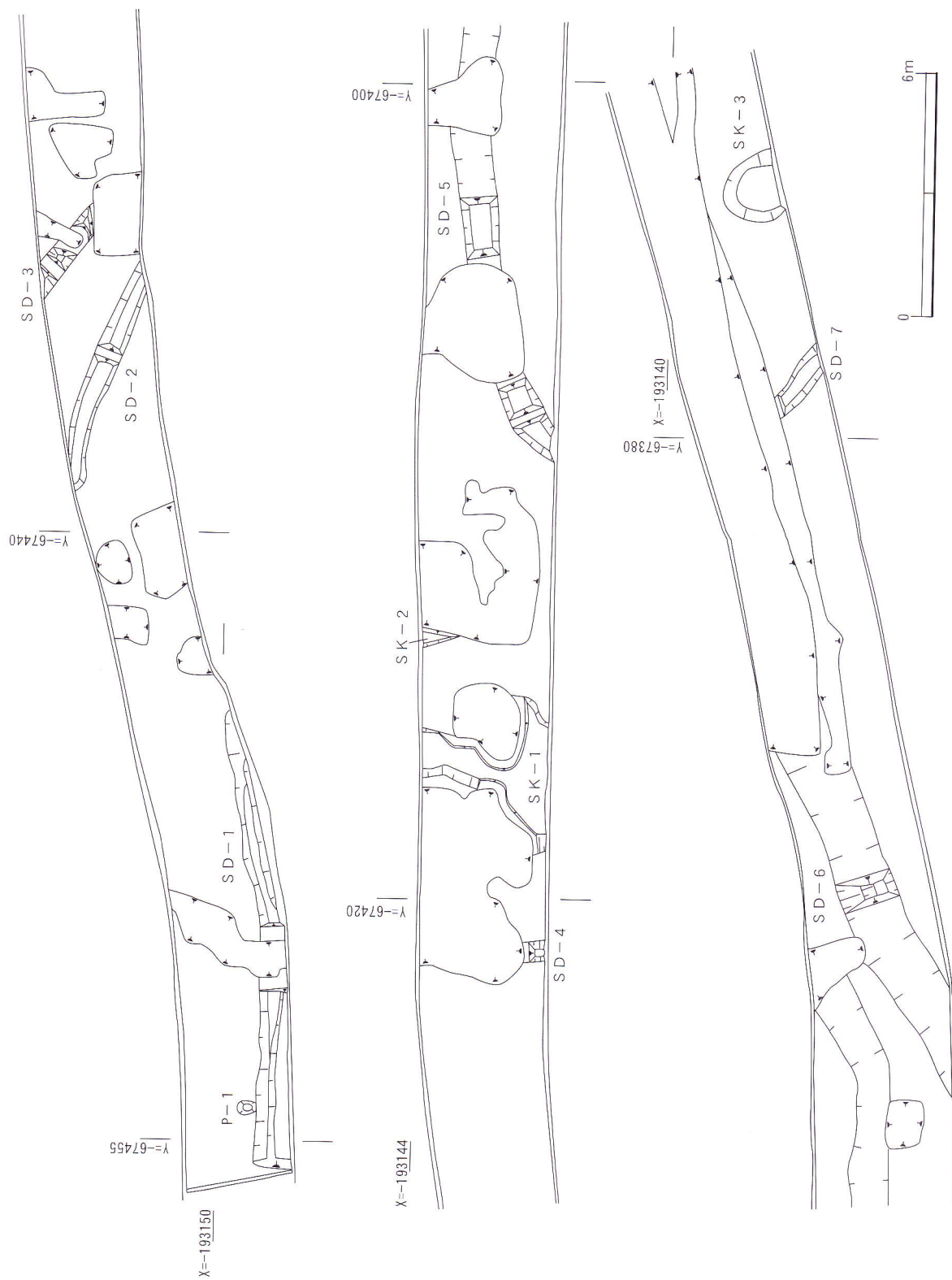
第2図 調査対象地



第4図 土層断面柱状模式図



第3図 調査場所



第5図 遺構平面図

S K - 1 は平面形が不整円形を呈し、東西4.0m以上、南北6.5m以上、深さ約0.1mを測る。埋土から須恵器・土師器が出土した。時期は不明である。

S K - 2 は攪乱のため一部のみ残存していた。深さ約0.25mを測る。埋土から土師器小片が出土した。時期は不明である。

S K - 3 は平面形が円形を呈し、東西約1.7m、南北約1.15m、深さ約0.2mを測る。埋土から土師器が出土した。

P - 1 は直径約0.4mを測る。埋土から土師器小片が出土した。時期は不明である。

S D - 1 は東西方向の溝である。幅1.0m以上、長さ11.5m以上、深さ約0.45mを測る（第6図）。埋土からは須恵器、土師器、瓦器などが出土した。

S D - 2 は北西－南東方向の溝である。幅約0.6m、長さ5.0m以上、深さ約0.15mを測る。埋土から土師器、須恵器が出土した。

S D - 3 は北西－南東方向の溝である。幅約0.6m、長さ2.0m以上、深さ約0.3mを測る。埋土から土師器、須恵器が出土した。

S D - 4 は南北方向の溝である。幅約0.5m、長さ0.7m以上、深さ約0.3mを測る。埋土から土師器小片が出土した。時期は不明である。

S D - 5 は南西－北東方向の溝である。幅0.8～1.0m、長さ17.5m以上、深さ約0.5mを測る。埋土から土師器、須恵器が出土した。

S D - 6 は南西－北東方向の溝である。幅1.3～1.4m、長さ10.0m以上、深さ約0.4mを測る。埋土から土師器が出土した。

S D - 7 は北西－南東方向の溝である。幅0.5～0.6m、長さ1.6m以上、深さ約0.08mを測る。埋土から土師器小片が出土した。時期は不明である。

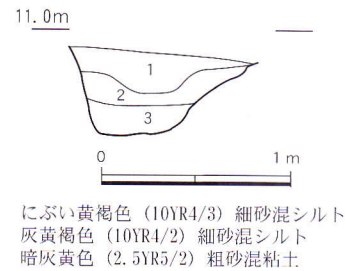
遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、近世陶磁器などコンテナ2箱が出土した。出土遺物のうち、遺構出土のもので図化可能なものについて実測を行った（第7図）。以下では、遺構ごとに概要を記述する。

〔S K - 3〕 1・2は土師器甕である。外面にはタタキが施され、1の内底面にはクモの巣状のハケメの痕跡が確認できる。古墳時代初頭に位置づけられる。

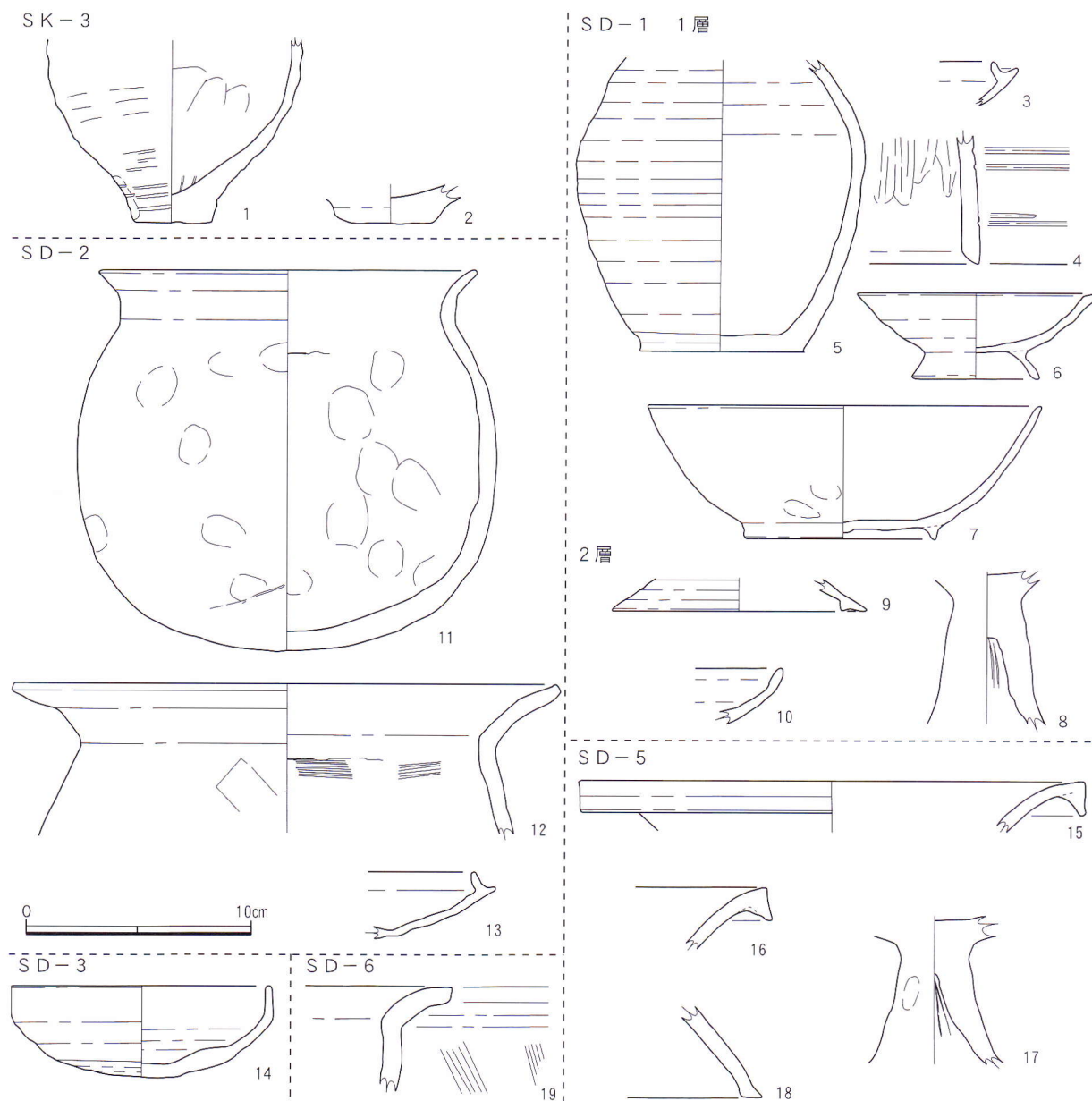
〔S D - 1〕 3は須恵器杯身である。4は須恵器の器台の脚部である。外面に4条の直線文が施される。内面にはヘラケズリが確認できる。5は須恵器壺である。底径約7.1cmを測る。底部に回転糸切の痕跡が確認できる。6は回転台成形の土師器皿で、径約5.7cmの高台をもつ。7は瓦器椀で口径約17.4cm、高台径約8.4cm、器高約5.9cmを測る。8は土師器高杯の脚部である。9は須恵器杯蓋である。口径約11.0cmを測る。10は土師器皿である。5・6・10は平安時代、3・4・9は飛鳥Ⅰ期、7は平安時代後期に位置づけられる。上層から須恵器壺、瓦器椀、回転台土師器、下層から土師器皿が出土していることから、S D - 1は平安時代の遺構と考えられる。

〔S D - 2〕 11・12は土師器甕である。11は口径約16.8cm、器高約16.8cmを測る。内外面にユビオサエの痕跡が確認できる。12は口径約24.1cmを測る。13は須恵器杯身である。11・12は飛鳥時代、13はT K 209に位置づけられる。11・12から飛鳥時代の遺構であると考えられる。

〔S D - 3〕 14は須恵器杯蓋である。口径約11.6cm、器高約4.0cmを測る。飛鳥Ⅰ期に位置づけら



第6図 SD-1 土層断面図



第7図 遺物実測図

れる。

〔SD-5〕 15・16は弥生土器の広口壺である。15は口径約22.2cmを測る。弥生時代後期中頃に位置づけられる。17は高杯の脚部である。18は須恵器壺の脚部の可能性がある。端部に面をもつ。遺構を全て掘削していないため、明確な時期は不明であるが、新しい遺物から判断すると古墳時代後期の遺構と考えられる。

〔SD-6〕 19は土師器甕である。外面にハケメが確認できる。飛鳥時代に位置づけられる。

立会調査の結果、古墳時代初頭から平安時代の遺構面を確認した。遺構面は西に向かって標高が高くなっており、東側に比べて遺構密度も高い。そのため、遺構が展開する中心は対象地の西側が想定される。そのため、今後周辺の開発には注意が必要であると考ええる。

⑤太田・黒田遺跡第63次確認調査

〔経緯〕 専修学校建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市黒田88-3

〔面積〕 12.24㎡（敷地面積165㎡）

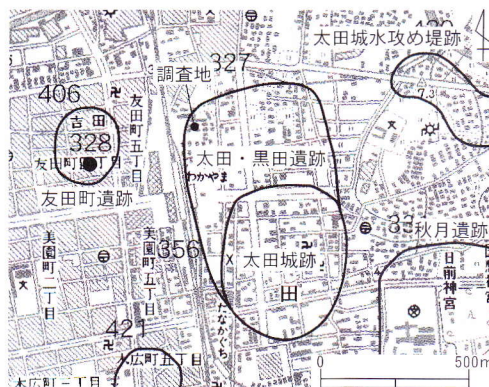
〔概要〕 太田・黒田遺跡（遺跡番号327）は、紀ノ川北岸の標高4m前後の沖積低地に立地する。遺跡は東西約500m、南北約850mの規模をもつ弥生時代から江戸時代の集落遺跡である（第1図）。今回の調査は遺跡北西隅の位置で、専修学校建設が計画されたため、確認調査を実施した

（第2・3図）。

現況地盤の下、約160cmが造成土で、その下に、約30cmの灰黄褐色細砂混シルト（第1層）、約10cm以上の灰色細砂（第2層）が堆積する（第4図）。

第1層上面において地震に伴う東西方向の墳砂の砂脈を確認したが、遺構・遺物はなかった。対象地周辺で実施された第48次の調査成果では、現地表面下約100～110cmで弥生時代中期及び奈良時代の遺

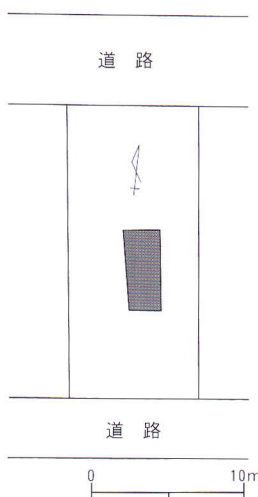
構面が確認されている。その調査成果によると、今回の対象地に関しては、既存の建物の基礎により現地表面から約160cmの深さまで破壊されているため、既に遺構面は破壊されているものと考えられる。



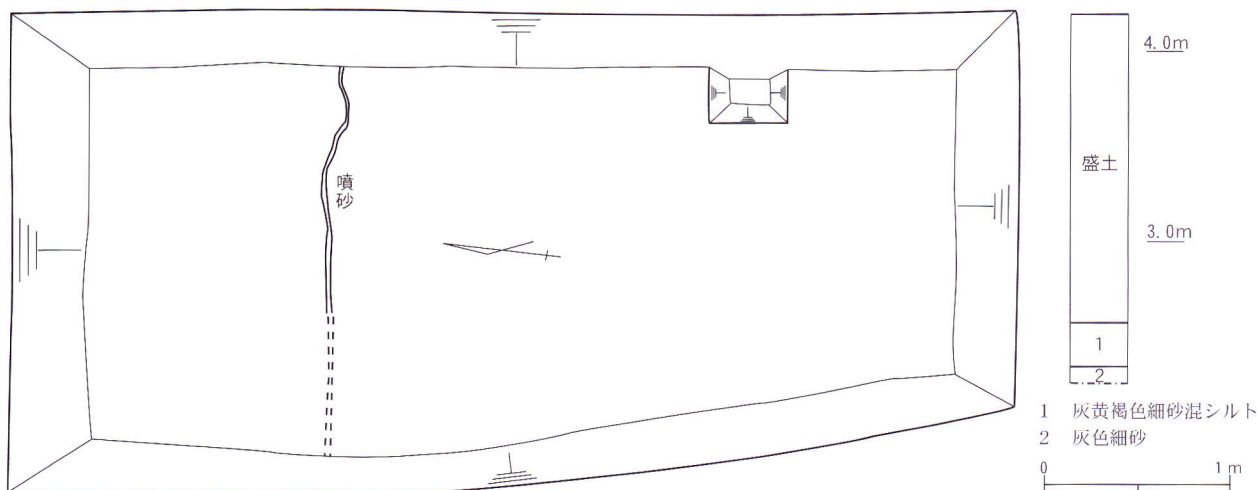
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 土層柱状模式図・遺構平面図

⑥有功遺跡

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う発掘調査

〔場所〕 和歌山市六十谷1049-2・5・8・7

〔面積〕 12.88㎡（敷地面積483.81㎡）

〔概要〕 有功遺跡（遺跡番号77）は、紀ノ川北岸の台地上に位置する。遺跡は南北約450m、東西約350mの範囲をもつもので、平安時代後期から鎌倉時代を中心とする集落遺跡として周知されている（第1図）。

有功遺跡では今年度までに6次の発掘調査が実施されている。遺跡南東隅で行われた第3・4次調査では、弥生時代前期の落ち込み、鎌倉時代のピット・土坑・溝などが検出され、鎌倉時代を中心とする集落域の存在が確認された。

今回の調査地は、第3・4次調査区のすぐ東隣の位置で、集合住宅建設工事が計画された。第3・4次調査成果から埋蔵文化財が展開している可能性が高いことが想定されたため、遺構面以下まで掘削の及ぶ浄化槽部分について記録保存を行った（第2・3図）。

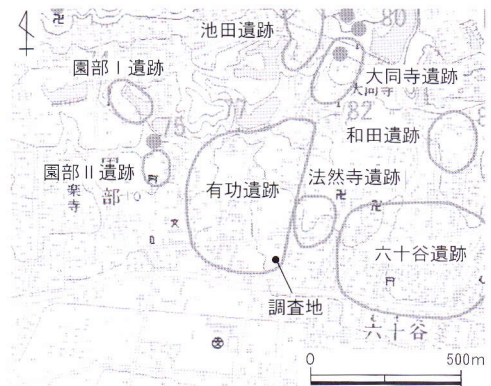
現地表面下、約80cmが造成土で、その下に約10cmの黄褐色シルト混中砂（第1層）、茶褐色砂粒及び灰色細砂混シルトブロックを含む約10cmの黄色シルト混細砂（第2層）、約10cmの灰色細砂混シルト（第3層）、黄色細砂混シルトブロックを含む約10cmの灰褐色細砂混シルト（第4層）、約40cm以上の黄色細砂混シルト（第5層）が堆積する（第4図）。

第5層以下は、遺物を含まないことから、自然堆積層であると考えられる。

遺構は、第5層上面において弥生時代の落ち込み1基（SX-1）、ピット2基（P-1・2）を検出した。

SX-1は幅0.7m以上、長さ1.4m以上、深さ約0.4mを測る。埋土から弥生土器壺が出土した。

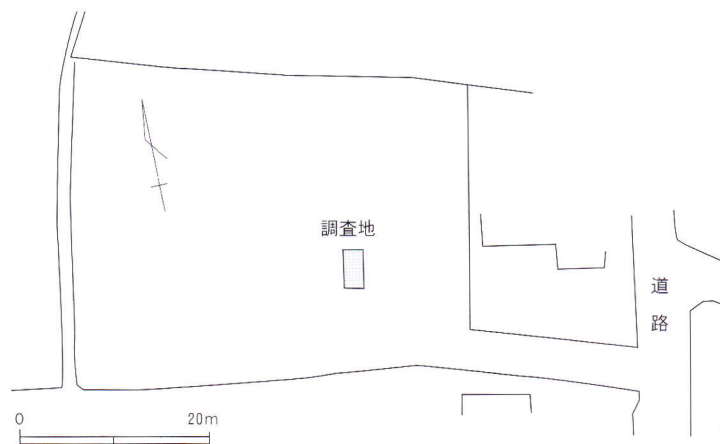
P-1は平面形が楕円形を呈し、南北約0.5m×東西約0.3mを測る。P-2は断面で確認を行った。直径約0.4m、深さ約0.15mを測る。ピットからは遺物は出土しなかった。SX-1と土色が異なることや第3・4次調査成果を踏まえると、中世の遺構の可能性がある。



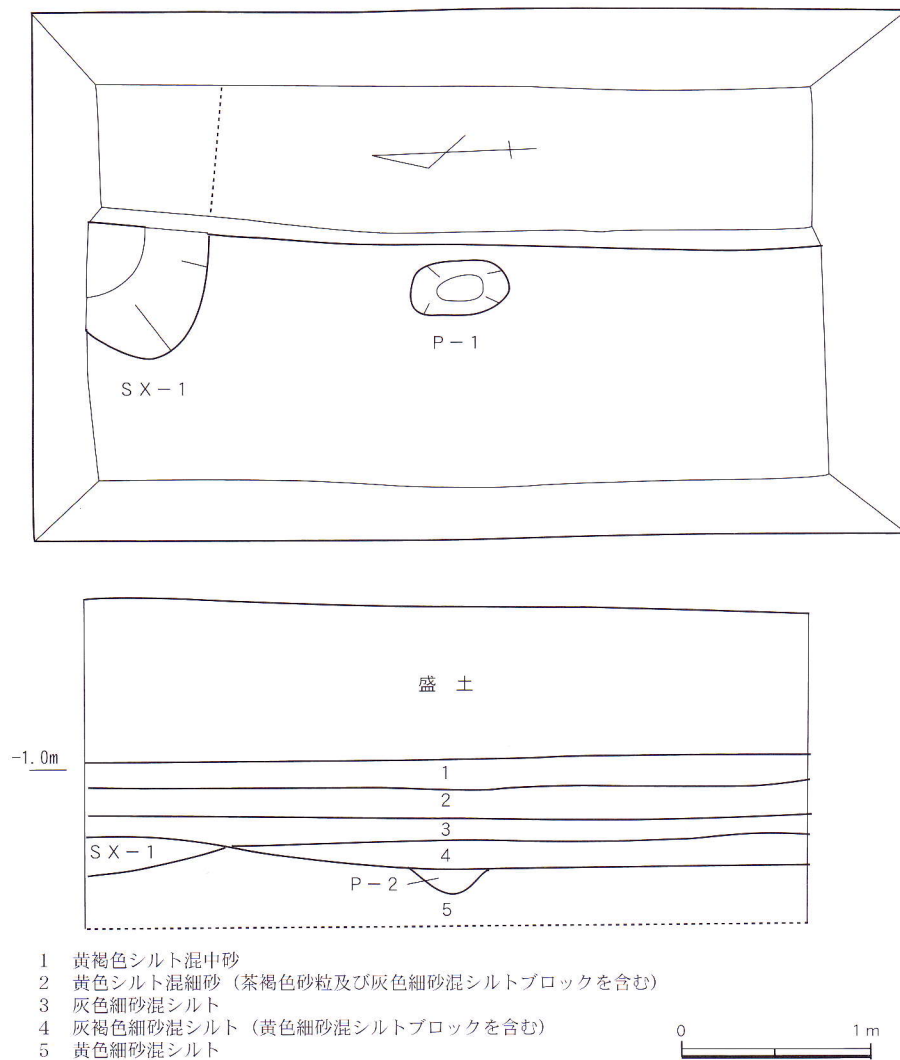
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 調査区平・断面図

確認調査の結果、弥生時代および中世の可能性のあるピットを検出した。隣接地で行った第3・4次調査では、弥生時代、中世の遺構・遺物が確認されており、今回の調査成果とも一致する。今回の調査地では、第3・4次調査と比較すると遺構密度が低いため、集落の縁辺部の可能性が想定される。

⑦六十谷遺跡

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う浄化槽部分の立会調査

〔場所〕 和歌山市六十谷字古宮338番 5

〔面積〕 3.36㎡（敷地面積165.29㎡）

〔概要〕 六十谷遺跡（遺跡番号84）は、和泉山脈から南流する千手川によって形成された西側扇状地の南端部に立地し、南北約360m、東西約550mの範囲に広がる遺跡である（第1図）。2009年度に実施された第1次調査では、弥生時代前期から江戸時代までの遺構・遺物を確認しており、六十谷遺跡が複合遺跡であると判明した。

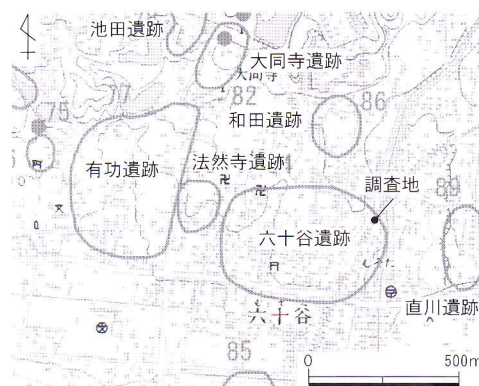
今回の調査は遺跡東端の位置で、個人住宅建設が計画されたため、浄化槽部分の立会調査を実施した（第2・3図）。

現地表面下、約42cmが造成土で、その下に約30cmの礫混じりの灰茶褐色シルト混細砂（第1層）、約36cmの礫混じりの青灰色シルト混細砂（第2層）、約44cmの礫混じりの茶褐色シルト混細砂（第3層）、約20cm以上の茶褐色シルト混細砂礫（第4層）が堆積する（第4図）。

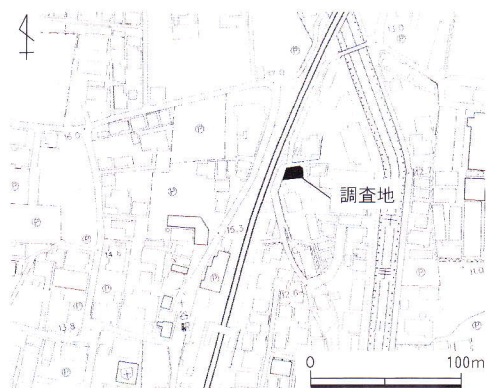
第3層から古墳時代の土師器の甕、高杯などが出土した（第5図）。遺物は摩滅しておらず、

周辺の居住域から流入した可能性が想定される。

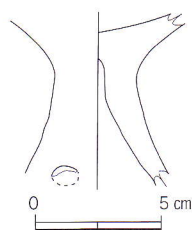
土層断面観察の結果、堆積土のなかには、いずれも礫を多く含んでおり、対象地東側を流れる千手川の氾濫原の可能性が想定される。



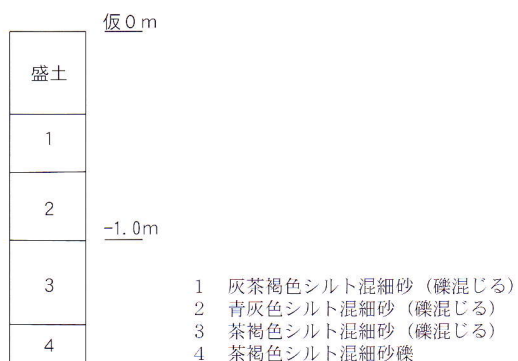
第1図 位置図



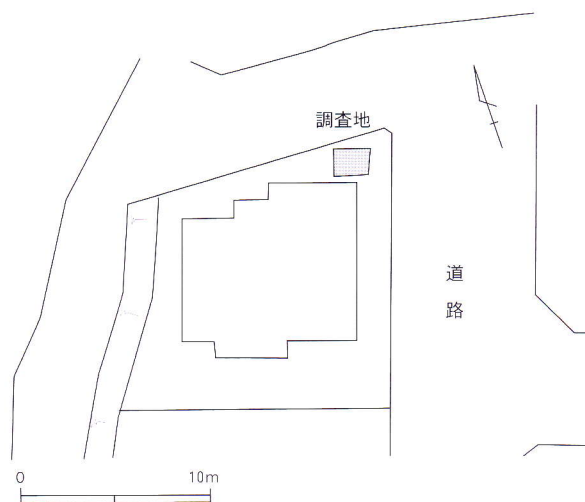
第2図 調査対象地



第5図 遺物実測図



第4図 調査区土層柱状模式図



第3図 調査区位置図

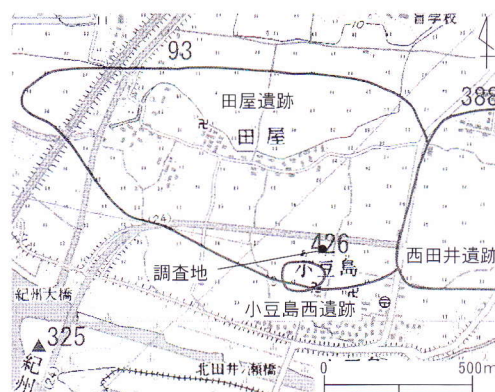
⑧田屋遺跡第4次確認調査

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市小豆島字椰ノ坪121番、122番1の一部

〔面積〕 36.36㎡（敷地面積4103.14㎡）

〔概要〕 田屋遺跡（遺跡番号93）は、紀ノ川南岸の標高6.0m前後の沖積低地に位置する。遺跡は南北約700m、東西約1300mの範囲をもつもので、弥生時代から古墳時代の集落跡として周知されている（第1図）。対象地の北側で和歌山県文化財センターが発掘調査を実施しており、弥生時代から古墳時代の竪穴建物を含む集落域が確認されている。今回の調査は和歌山県文化財センターの調査区南側で集合住宅建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した（第2・3図）。



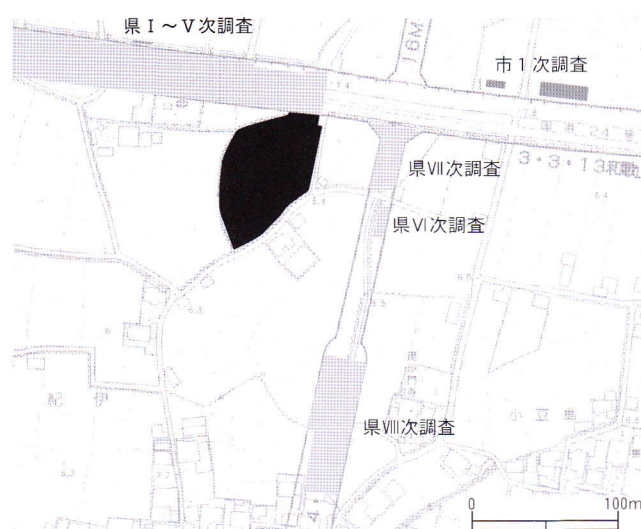
第1図 位置図

調査地の現況は水田で、標高6.0m前後を測る。

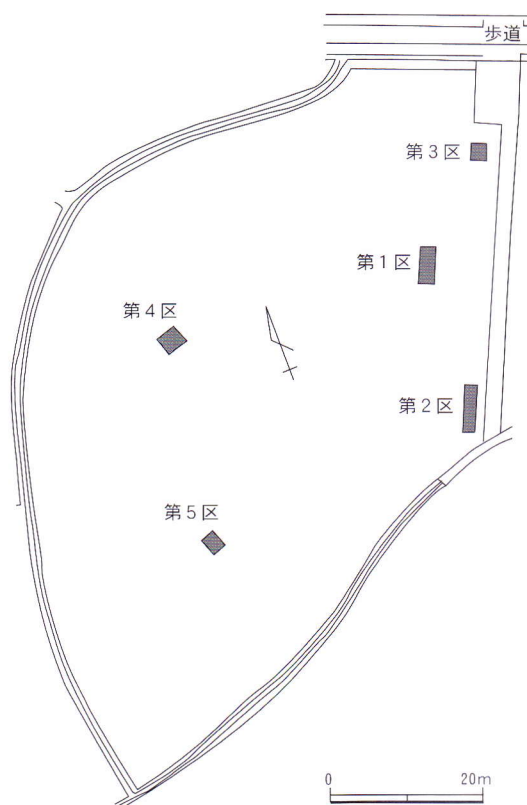
現地表面下、約20～30cmが現代耕作土（第1層）で、その床土と考えられる黄褐色シルト混細砂（第2層）が約5cm堆積する。その下に、約15～20cmの黄褐色シルト混細砂（第3層）、約30～50cmの灰黄褐色シルト混細砂（第4層）でさらに2層に細分できる。約20cmの黄褐色シルト混細砂（第5層）、約20～30cmの暗黄褐色シルト混細砂（第6層）、約10～20cmの黄褐色細砂混シルト（第7層）でグライ化の度合いで2層に細分できる。その下に、約10cm以上の青灰色シルト（第8層）が堆積する（第4図）。

第5・6層は中世土師器小片を含む希薄な包含層である。第7層以下は遺物を含まず、自然堆積層であるとする。

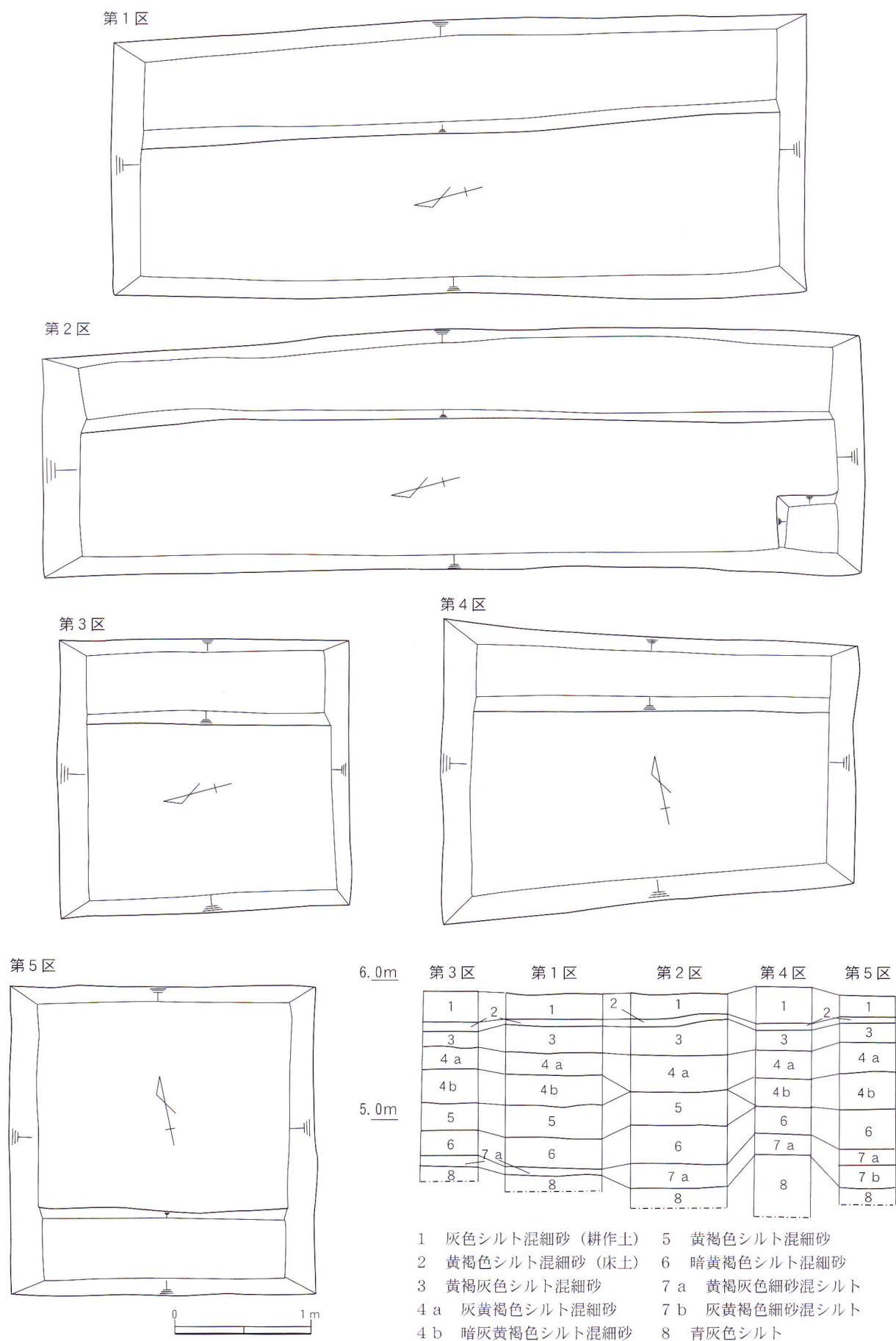
確認調査の結果、遺構はなく中世の希薄な包含層を



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 調査区平面図・土層断面図

確認した。対象地周辺は土層観察から湿地であった可能性が想定できた。対象地の北側で和歌山県文化財センターが調査をおこなっており、弥生時代から古墳時代の竪穴建物が多数検出されている。今回の対象地に関しても、弥生時代から古墳時代の遺構が展開しているものと想定されたが、対象地は湿地状態であり、弥生時代から古墳時代の集落は国道24号線バイパスより南側には展開しないようである。そのため、田屋遺跡における集落は国道24号バイパスの北側に展開する可能性が想定できる。

【参考文献】

財団法人和歌山県文化財センター 1990『田屋遺跡発掘調査報告書－一般国道24号（和歌山バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書－』

財団法人和歌山県文化財センター 2005『田屋・小豆島西遺跡発掘調査報告書－県道紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良工事に伴う発掘調査－』

⑨ 関戸遺跡第2次確認調査

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市関戸3丁目776-93

〔面積〕 5.26㎡（敷地面積231.22㎡）

〔概要〕 関戸遺跡（遺跡番号334）は東西約200m、南北約580mの規模をもつ遺跡で海岸砂丘上に立地する。

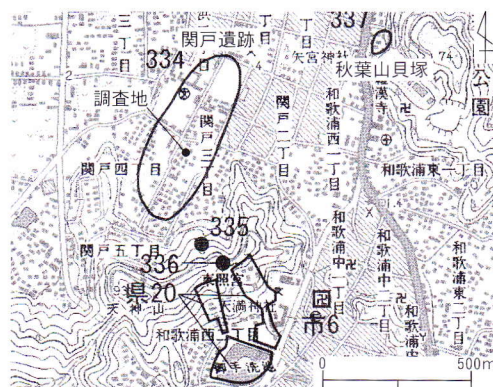
（第1・2図）。本格的な発掘調査歴はないものの、古墳時代、奈良時代、鎌倉～室町時代の遺物が比較的多く採集されている。特徴的な遺物としては、漁網用の土錘類も多く出土し、漁村集落遺跡としての性格が想定されている。しかし、律令期には和同開珎・神功開宝・唐草文軒丸瓦、中世では国産陶器・中国産陶磁器などが出土するなど、紀ノ川河口付近の外港的性格を併せもつ集落であった可能性も指摘されている。

また、2009年度に和歌山市教育委員会が実施した第1次調査において、奈良時代から室町時代のピット・土坑・溝などの生活域に関連する遺構が確認されている。

今回の調査地は第1次調査の東側において、個人住宅建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。

現地表面下、約20cmが宅地造成時の盛土で、その下に約20cmの暗茶色中砂（第1層）、約30cmの茶色中砂（第2層）、約10cmの灰茶褐色中砂（第3層）、約30cmの暗茶灰色中砂（第4層）、約30cm以上の灰色中砂（第5層）が堆積する。

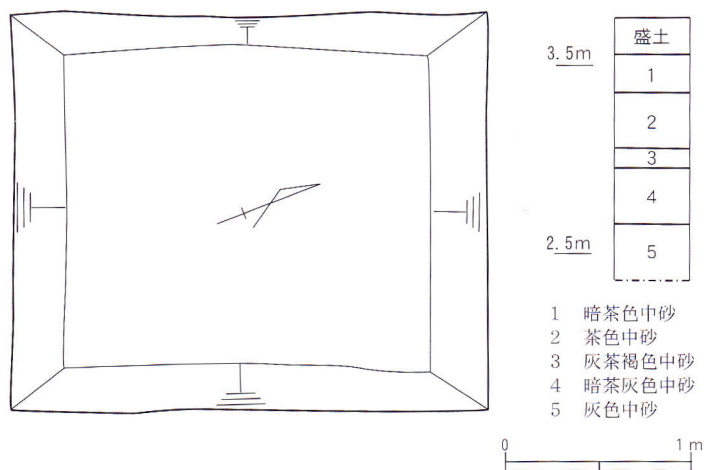
第4層から室町時代の瓦質羽釜・軒丸瓦などが出土した。第5



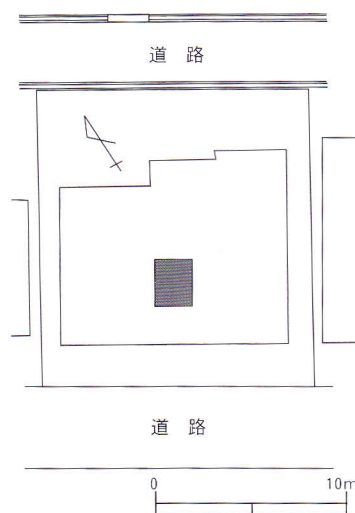
第1図 位置図



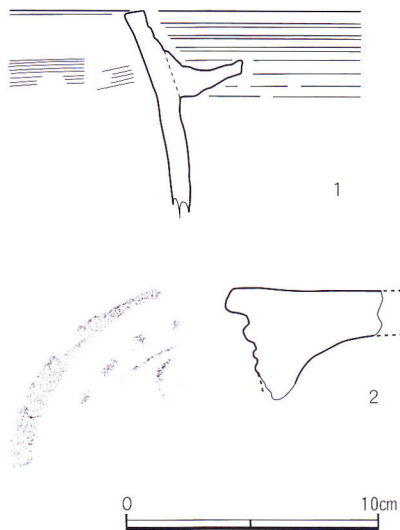
第2図 調査対象地



第4図 調査区平面図・土層断面図



第3図 調査場所



第5図 遺物実測図

層以下は遺物を含まず、自然堆積層であると考え。

第4層から出土した遺物のうち図化可能なものについて実測を行った（第5図）。

1は瓦質土器羽釜である。口縁部外面に3条の沈線を施す。体部外面に炭化物の付着が認められる。室町時代に位置づけられる。

2は蓮華文の軒丸瓦である。瓦当面には離れ砂、丸瓦部の凸面にケズリ、凹面にナデ調整が認められる。平安時代後期から鎌倉時代に位置づけられる。

確認調査の結果、遺構はなかった。湧水点が高かったことから、対象地に遺構が展開している可能性は低いものと考え。ただし、平安時代後期から室町時代の包含層から出土した遺物はいずれも摩滅が少なく破片も大きかったことから、

周辺に遺構が展開している可能性が想定される。対象地の北

西部に位置する第1次調査では、包含層から出土した遺物と同時期の遺構が確認されている。そのため、遺構が存在するとすれば、対象地の北西部が想定される。

【参考文献】

和歌山市教育委員会 2011「2（3）⑫関戸遺跡〔第1次調査〕」『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成21年度－』

⑩ 津秦Ⅱ遺跡第2次確認調査

〔経緯〕 診療所建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市津秦字奥ノ畑3番26

〔面積〕 20.14m²（敷地面積1010.36m²）

〔概要〕 津秦Ⅱ遺跡（遺跡番号407）は、紀ノ川南岸の標高3.2m前後の沖積低地に位置する。遺跡は南北約350m、東西約300mの範囲をもつもので、古墳時代から奈良時代の遺物散布地として周知されており、2002年度に和歌山市文化体育振興事業団が実施した発掘調査では、古墳時代の河道・溝、鎌倉時代の水田、室町時代の粘土採掘坑などが確認されている（第1図）。

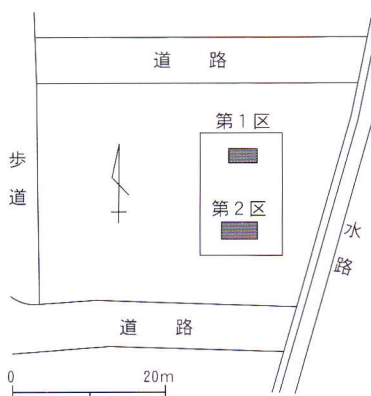
今回の調査地は、遺跡の南東隅の位置において、診療所建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のための確認調査を実施した（第2・3図）。

調査地の現況は宅地で、標高3.6m前後を測る。

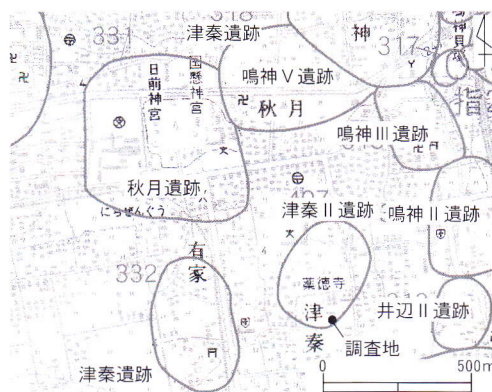
現地表面下、約100～110cmが造成土で、その下に、現代の水田耕作土（第1層）が約15～45cm堆積し、その下に約5～10cmの青灰黄色細砂混シルト（第2層）、約15～20cmの黄褐色細砂混シルト（第3層）、約15cmの暗黄灰色細砂混シルト（第4層）、約20cmの灰色シルト（第5層）、約10cmの灰色シルト混中砂（第6層）、約20cm以上の褐灰色シルト（第7層）が堆積する（第4図）。

第3層は中世土師器小片を含む希薄な包含層である。第4層以下は遺物を含まず、自然堆積層であると考える。

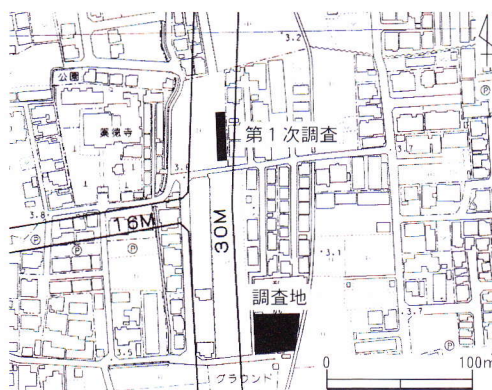
確認調査の結果、遺構はなく、中世の希薄な遺物包含層を確認した。出土した遺物も細片で



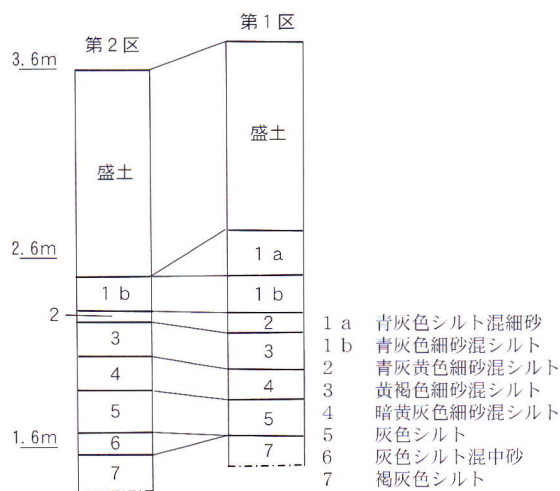
第3図 調査場所



第1図 位置図



第2図 調査対象地



第4図 調査区土層柱状模式図

出土量も非常に少なかったことから、対象地周辺に埋蔵文化財が展開している可能性は低い。土層断面観察によると第4層以下がグライ化しており、中世以前は湿地状地形が展開していたものと考えられる。

⑪太田城水攻め堤跡確認調査

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市出水117

〔面積〕 8.82m²（敷地面積231.54m²）

〔概要〕 太田城水攻め堤跡（遺跡番号420）は、紀ノ川南岸の標高2.8m前後の沖積低地に位置する。遺跡は南北約200m、東西約500mの範囲をもつもので、唯一出水に残る堤が、秀吉が行った太田城水攻めに関わる堤の残存部分として周知されている（第1図）。

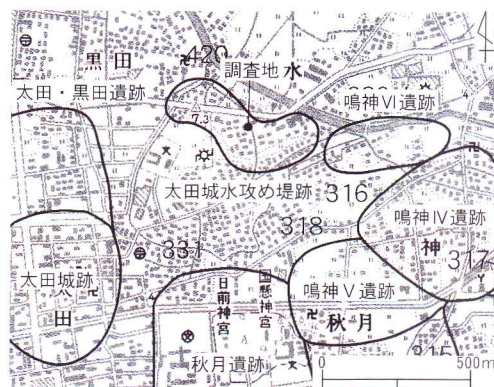
今回の調査地は、残存する堤のすぐ南東部において、個人住宅建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために確認調査を実施した（第2・3図）。

現地表面下、約54cmが造成土で、その下に約10cmの茶褐色シルト混中砂（第1層）、約10cmの灰褐色シルト混中砂（第2層）、約5～15cmの暗茶褐色シルト混中砂（第3層）、約40cmの茶褐色シルト混中砂（第4層）、約30cmの茶褐色中砂（第5層）、約15cmの茶褐色粗砂（第6層）、約5cm以上の茶褐色シルト混粗砂（第7層）が堆積する（第4図）。

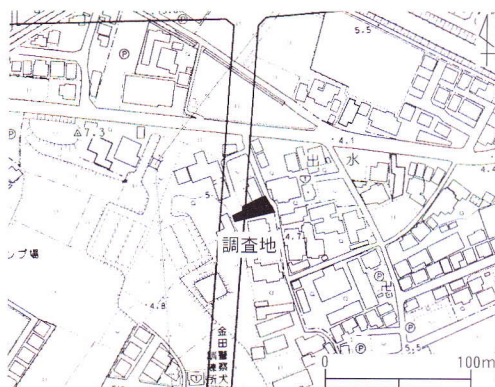
第4層は江戸時代の陶磁器・瓦片等を含む遺物包含層である。第5層以下は遺物を含まず、自然堆積層であると考えられる。

遺構はなく、遺物に関しても第4層で江戸時代の遺物が少量出土したが、中世以前にさかのぼる遺物は出土しなかった。第5層以下は中砂～粗砂が厚く堆積し、自然流路の可能性も想定される。

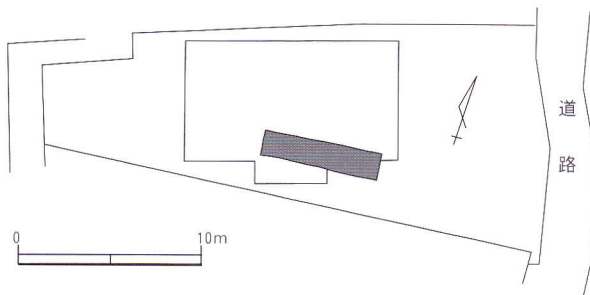
確認調査の結果、太田城水攻め堤に関わる遺構・遺物は確認できなかった。江戸時代の堆積の下位には中砂～粗砂が厚く堆積し、自然流路の可能性が想定される。そのため、堤跡が存在するとなれば、現在推定されているとおり、対象地の西側に存在する可能性が高いものと考えられる。



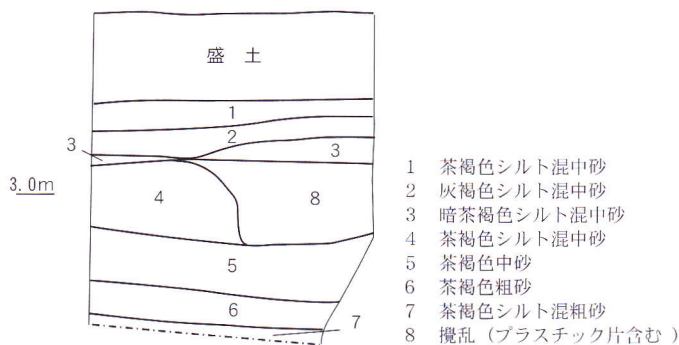
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 土層断面図・遺構平面図

⑫井辺遺跡第8次確認調査

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市井辺字野元206-1

〔面積〕 18.40㎡（敷地面積572.40㎡）

〔概要〕 井辺遺跡（遺跡番号308）は、紀ノ川南岸の標高3.0m前後の沖積低地に位置する。遺跡は東西約1.2km、南北約500mの規模をもつ弥生時代から古墳時代を中心とする遺物散布地として周知されている（第1図）。

対象地周辺では、2004・2005年度に和歌山市文化体育振興事業団が第6・7次調査を実施しており弥生時代後期末から古墳時代初頭の堅穴建物や土坑・溝などの遺構が密集して確認されており、井辺遺跡における中心的な当該期集落のひとつの可能性が想定されている。今回の対象地は想定されている集落中心部から北東にやや離れた場所に位置する（第2図）。

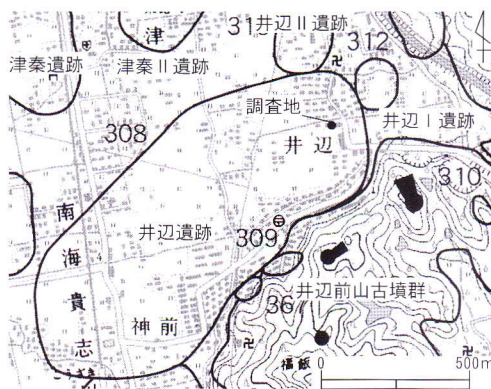
調査地は、遺跡の北東部に位置し、現況は畑地で標高3.7m前後を測る。今回の調査は遺跡の北東部において、集合住宅建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。

現地表面下、約75～85cmが造成土で、その下に、現代の水田耕作土（第1層）が約10～20cm堆積し、その床土と考えられる約5～10cmの灰黄色シルト混中砂（第2層）、約10cmの灰褐色シルト混細砂（第3a層）、約25cmの茶褐色シルト混細砂（第3b層）、約35cmの黄褐色細砂混シルト（第4層）、約15cm以上の黄褐色シルト（第5層）が堆積する（第4図）。

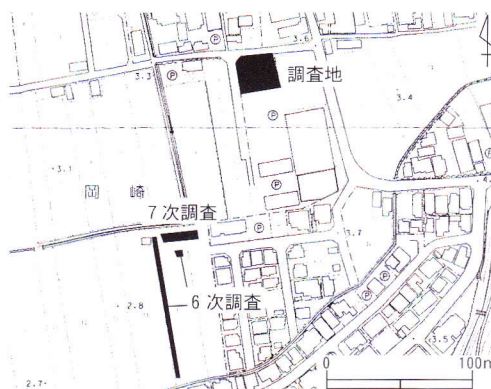
第3層は弥生時代後期末から古墳時代初頭の土師器小片を含む遺物包含層である。第4層以下は遺物を含まず、自然堆積層であるとする。

確認調査の結果、遺構はなく古墳時代初頭の遺物包含層を確認した。遺物包含層からは比較的多くの遺物が出土した。しかし、出土した遺物はいずれもやや摩滅しており、今回の対象地からはやや離れた位置から流入した遺物の可能性が高い。おそらく、第6・7次調査周辺の集落中心部から流入した遺物の可能性が想定できる。

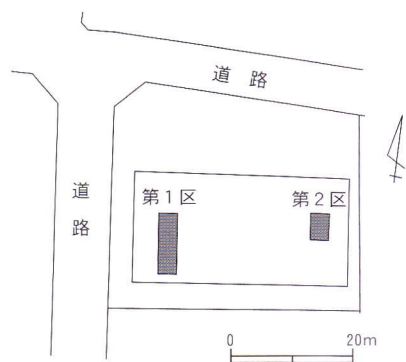
第6・7次調査地で確認している遺構面に対応すると考えられる第4層は、若干グライ化しているため、対象地周辺は低地部の様相を呈していたものと考えられる。こうした地形的な状況や包含層から比較的多くの遺物が出土したことから考えると、今回の対象地は、第6・7次調査で確認された弥生時代後期末から古墳時代初頭の集落の縁辺部にあたる可能性が高く、これより北側には集



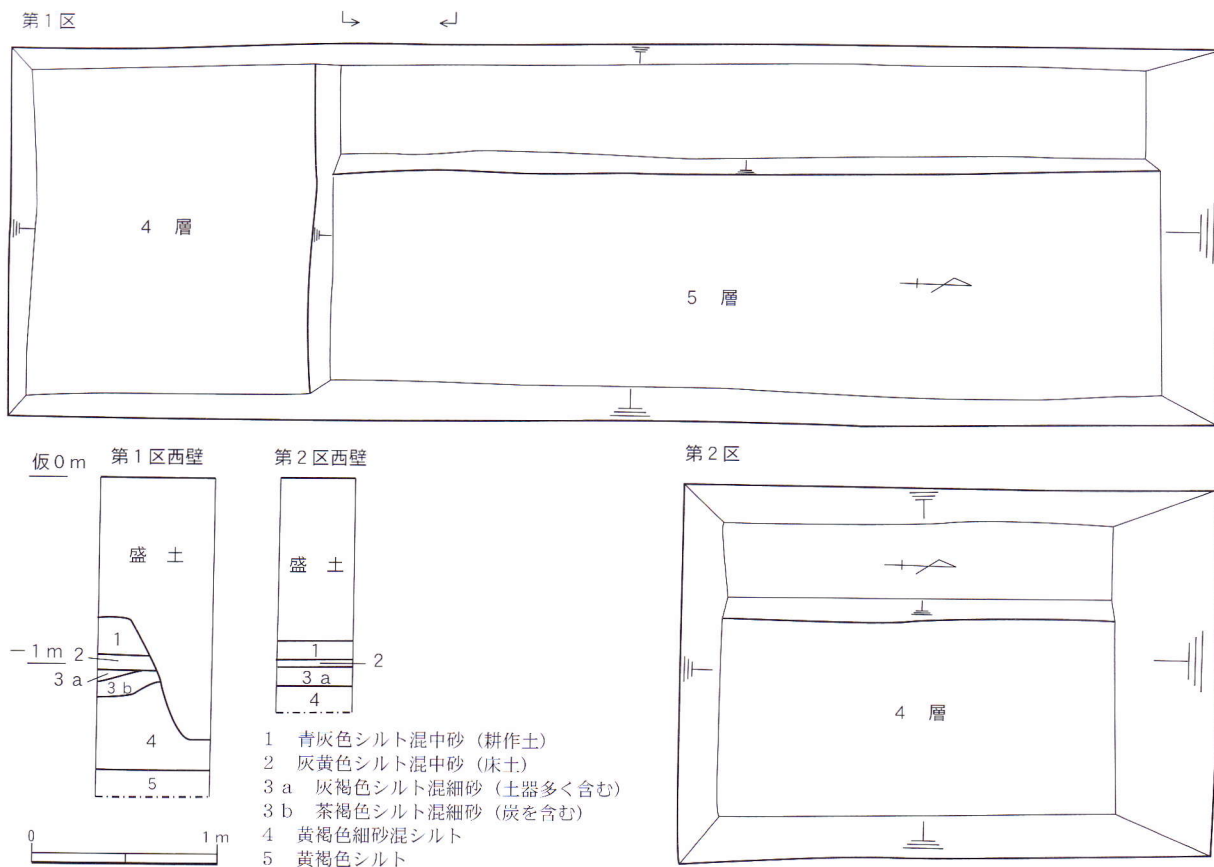
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 土層断面図・遺構平面図

落域は広がらないものと考えられる。

【参考文献】

財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2005『井辺遺跡第6次発掘調査概報』

財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2006『井辺遺跡第7次発掘調査概報』

⑬ 岩橋遺跡確認調査

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市岩橋字小路1034-9、1035-1、1036-1

〔面積〕 12.38㎡（敷地面積151.45㎡）

〔概要〕 岩橋遺跡（遺跡番号321）は東西約200m、南北約250mの規模をもつ遺跡である（第1図）。2009年度に和歌山市教育委員会が行った確認調査では、奈良時代から平安時代の遺物包含層、弥生時代後期末から古墳時代初頭の自然流路が確認されている。

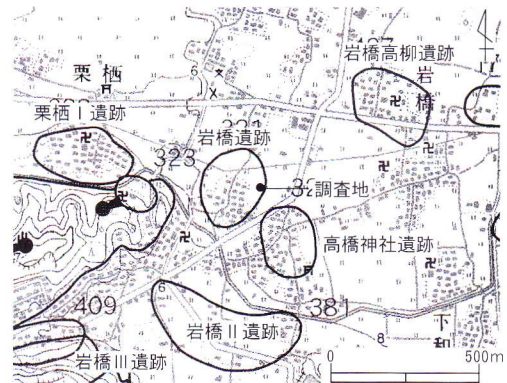
今回の調査地は、2009年度確認調査の第1区のすぐ東側にあたる場所で個人住宅建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した（第2・3図）。

現地表面下、約135cmが造成土で、その下に現代の水田耕作土（第1層）が約20cm堆積しており、その床土と考えられる茶褐色細砂混シルト（第2層）が約10～20cm堆積する。その下に、約10～20cmの灰黄褐色細砂混シルト（第3層）、約25cmの灰褐色細砂混シルト（第4層）、約15～20cm黄灰色細砂混シルト（第5層）、約40cmの茶灰色細砂混シルト（第6層）、約10cm以上の黄褐色シルト混細砂（第7層）が堆積する（第4図）。

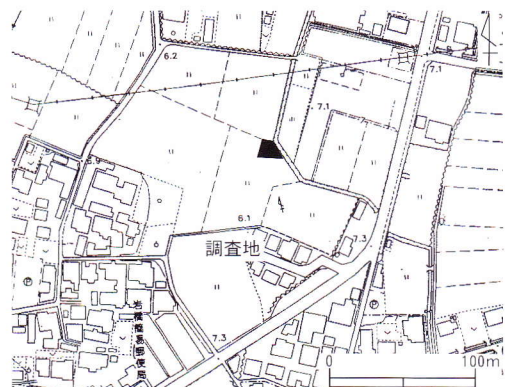
第3～6層は土師器・中世土師器小片を含む希薄な遺物包含層である。第7層以下は遺物を含まず、自然堆積層であると考えられる。

確認調査の結果、遺構はなく、希薄な包含層を確認した。対象地の隣接地で2009年度に確認調査を行っており、今回調査した第3・4層が中世、第5・6層が奈良・平安時代の遺物包含層で、第7層上面が弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構面であることが判明している。2009年度第1区で弥生時代後期末から古墳時代初頭の自然流路の東肩、第2・3区では自然流路の堆積を確認しており、特に第2区では、自然流路の埋土からほぼ完形の二重口縁壺・鉢のほか、甕・高杯などまとまった遺物が出土している。以上の調査結果から、自然流路の東あるいは西側の近接地に当該期の集落が存在する可能性を想定した。

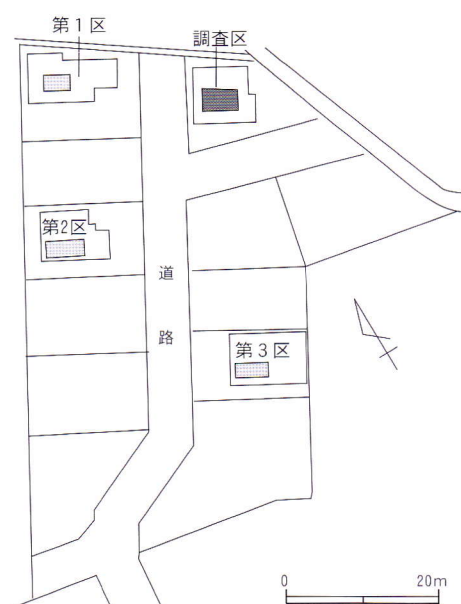
今回の対象地は2009年度の確認調査で検出した自然流路の東側にあたる。造成土が厚いこともあり、実際に調査できた部分の面積は小さいものの遺構はなかった。



第1図 位置図

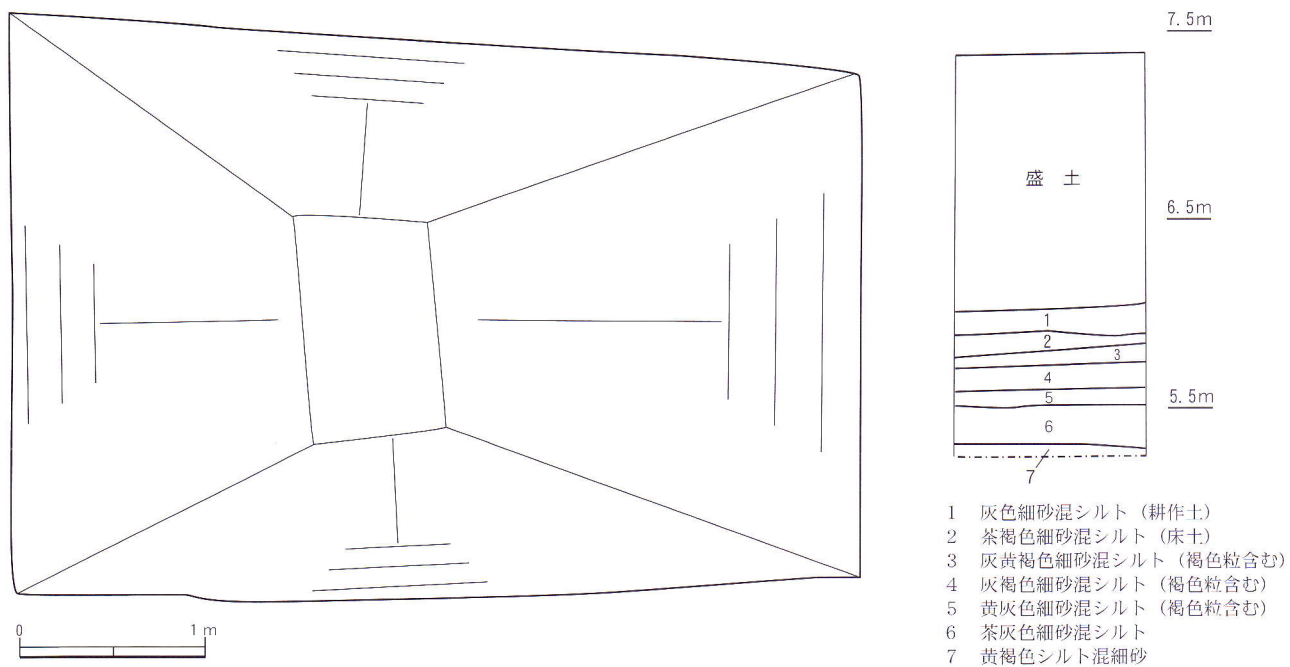


第2図 調査対象地



第1～3区は2009年度確認調査区

第3図 調査場所



第4図 土層断面図・遺構平面図

今後、さらに流路の東側についても注意する必要があるものの、流路の西側には現在の集落が存在し、比較的安定した地形を形成しているものと想定される。そのため、当該期の集落は流路の西側に展開している可能性が高いものとする。

【参考文献】

和歌山市教育委員会 2011「2（3）⑦岩橋遺跡」『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成21年度－』

⑭大日山Ⅰ遺跡確認調査

〔経緯〕宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕和歌山市井辺字大日392番外

〔面積〕57.22㎡（敷地面積5010.12㎡）

〔概要〕大日山Ⅰ遺跡（遺跡番号311）は、紀ノ川南岸の大日山の西麓、標高7.0m前後の丘陵裾に位置する。遺跡は南北約200m、東西約150mの範囲をもつもので、古墳時代から平安時代の集落跡として周知されている（第1図）。昭和44年から46年にかけて3次の調査が行われ、古墳時代前期の竪穴建物や古墳時代から平安時代の掘立柱建物などが検出され、遺物も滑石製模造品など祭祀遺物が数多く出土している。

今回の調査地は、遺跡の中央部において、宅地造成が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した（第2・3図）。

各調査区における基本層序は第4図に示した。大きく4層に大別できる。

Ⅰ層 近現代の堆積層。第1・2・9区をのぞき確認した。

Ⅱ層 灰褐色シルト混中砂。第1・8区で確認した。

Ⅲ層 暗灰～暗茶褐色のシルト混中砂～シルトで、第4区をのぞく各調査区で確認した。対象地の中央部の調査区である第1・3・5・8区で暗灰色土壌の堆積が厚くなる傾向がある。

Ⅲ層からは、奈良時代須恵器・土師器などが少量出土した。

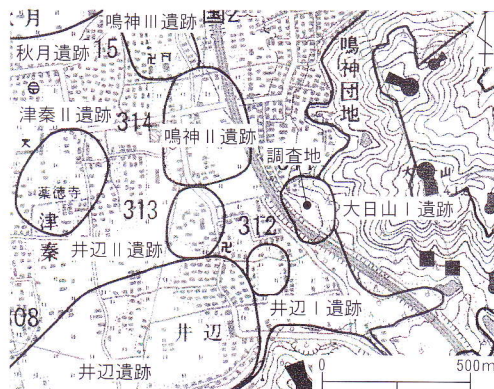
Ⅳ層 暗黄褐～黄褐色のシルト混中砂～砂礫層。第Ⅲ層の土を多く含んでおり、不安定な土壌であった可能性がある。Ⅳ層中には遺物を含まず、自然堆積層であると考えられる。

遺構は1区で落ち込み（SX-1）を1基検出した。SX-1は南に向かって落ち込んでおり、東西1.4m以上、南北4.4m以上を測る。対象地は第1・3・5・8区で暗灰色土壌の堆積が厚くなる傾向があり、中央部が谷状に落ち込んでいたものと考えられる。SX-1は谷状地形の北肩部の可能性が考えられる。

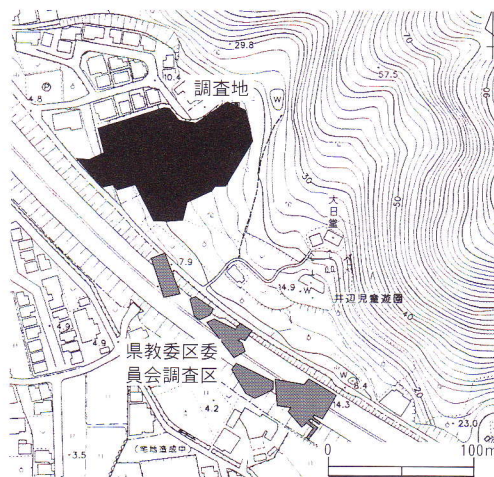
遺物は、第Ⅲ層で器形の判別できたものについて、図化を行った（第5図）。

1は土師器甕で内外面にユビオサエが施される。古墳時代初頭に位置づけられる。2は土師器高杯の脚柱部である。外面に推定で7面面取りが施される。3は須恵器杯で高台径約9.8cmを測る。2・3は飛鳥～奈良時代に位置づけられる。

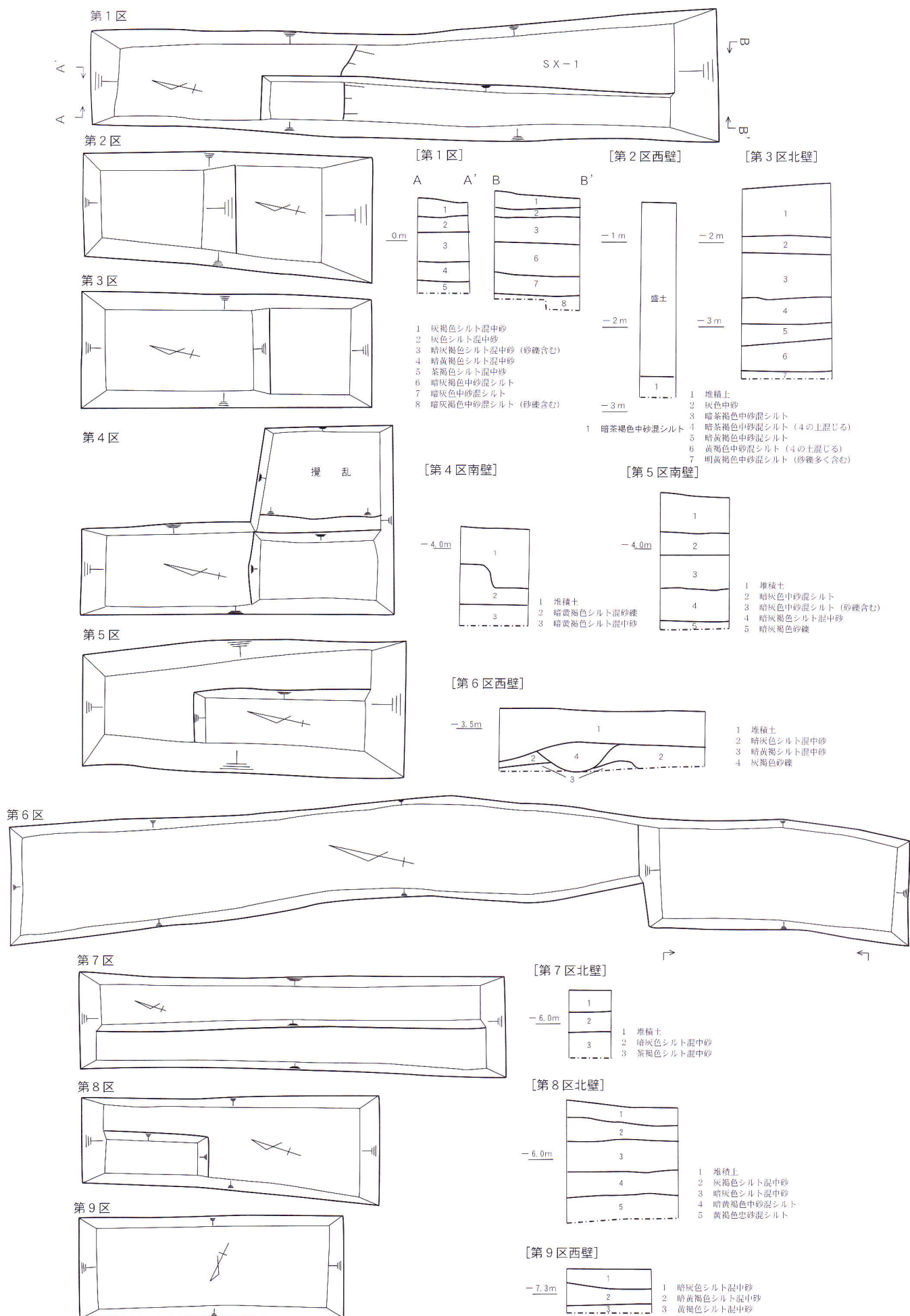
これらのように器形が判別できた遺物の出土地点は第6～8区で、対象地の北側の調査区に偏っている。その他の地点では、器形の判別できるものはなく、小破片のものがほとんどである。その



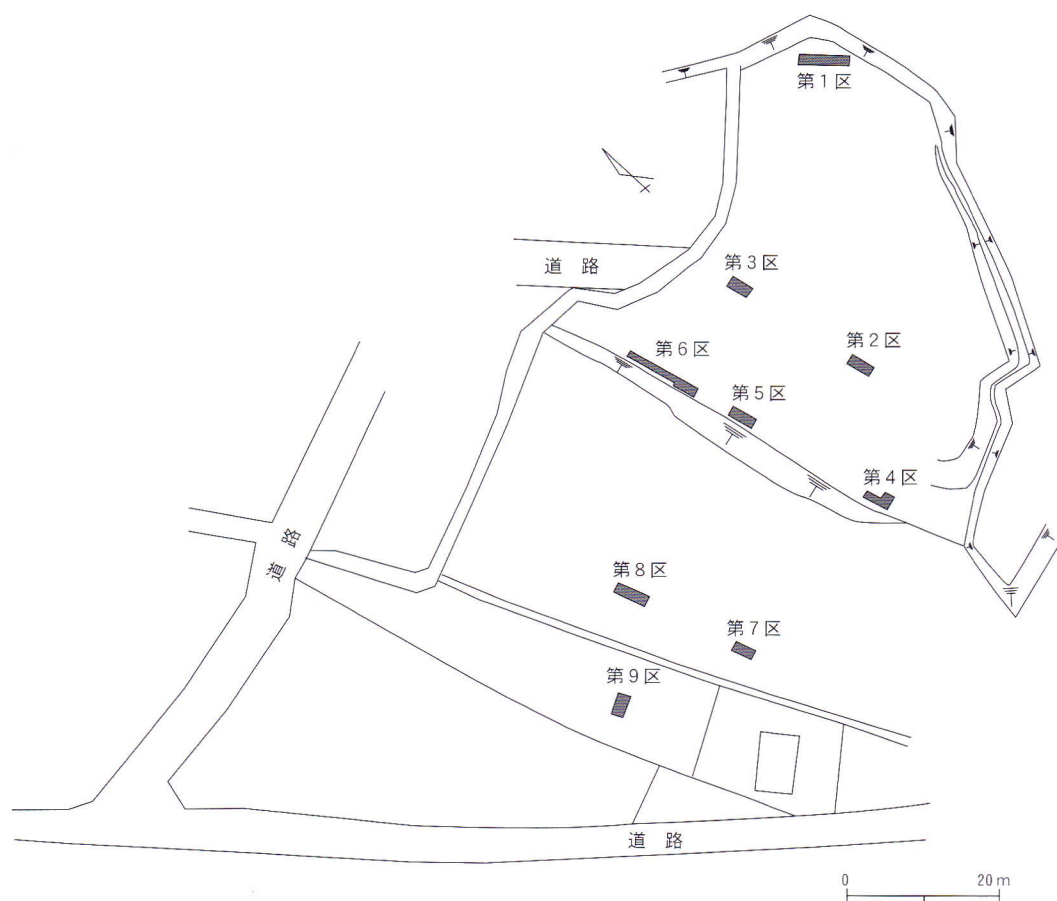
第1図 位置図



第2図 調査対象地



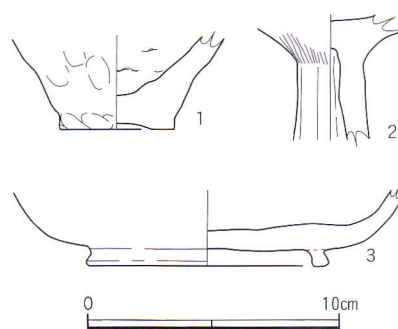
第4図 調査区平・断面図



第3図 調査場所

ため、対象地北側に位置する現在の宅地部分に当該期の集落域が存在する可能性が考えられる。

確認調査の結果、遺構はなく飛鳥時代から奈良時代の包含層を確認した。対象地は東側に存在する谷状地形の延長部分にあたる。調査の結果、対象地に関しても谷状地形が形成されていたことを確認した。遺物の出土状況から集落域は対象地北側の尾根筋の丘陵裾部に展開していた可能性が想定できる。昭和44年から46年の近畿道建設に伴う和歌山県教育委員会の発掘調査により対象地南側で古墳時代から平安時代の集落が確認されており、対象地周辺に形成された谷状地形を挟んで北と南に集落が形成されていた可能性が考えられる。



1：第7区第2層、2：第8区第3層、3：第6区第2層

第5図 遺物実測図

⑮有功遺跡第5次確認調査

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市六十谷字天神前1091番1外

〔面積〕 43.27m²（敷地面積778.75m²）

〔概要〕 有功遺跡（遺跡番号77）は、紀ノ川北岸の台地上に位置する。遺跡は南北約450m、東西約350mの範囲をもつもので、2009年度に実施した発掘調査により平安時代後期から鎌倉時代を中心とする集落遺跡であることが判明した（第1図）。

今回の調査地は、遺跡の北東隅の位置において、宅地造成が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した（第2・3図）。

現地表面下、現代畑耕作土（第1層）が約10～20cm堆積し、その床土と考えられる黄褐色中砂（第2層）が約10cm堆積する。その下に、約5～30cmの黄褐色の地山ブロックを含む灰色中砂（第3層）、約10cmの灰色中砂（第4層）、約15cmの灰褐色中砂（第5層）、約25cmの暗灰褐色中砂（第6層）、約20cm以上の黄褐色シルト混中砂（7a層）、黄褐色礫（7b層）が堆積する（第4図）。

第3層は地山のブロックを含むことから、耕作地として利用する際の造成土の可能性が想定できる。第3層から出土した遺物から造成は中世から近世に行われたと考えられる。第4～6層は第4・5区でのみ確認しており、斜面地における自然堆積層と考えられる。

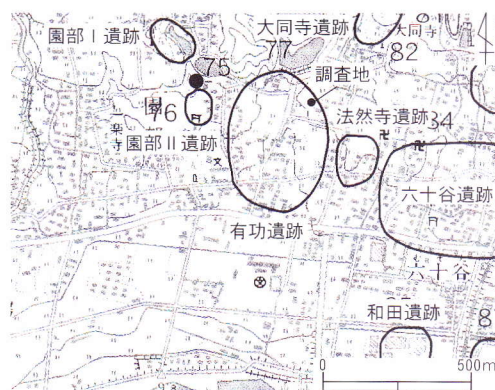
遺構は第2区第3層上面で近世の可能性のある南北方向の素掘り小溝1条、第7a層上面で土坑1基（SK-1）、ピット4基、第3区第7a層上面で土坑1基（SK-2）を確認した（第4図）。

SK-1は南北0.6m以上、東西約1.4mを測る。埋土から古墳時代の可能性のある須恵器小片が出土した。

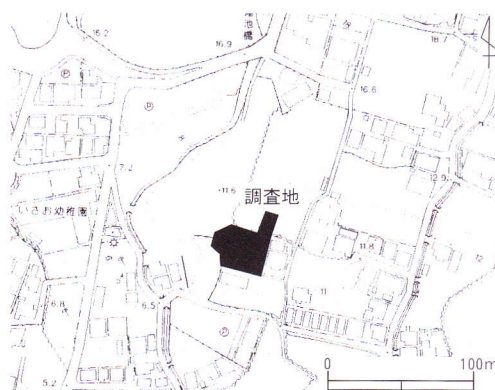
ピットは平面形が円形を呈し、直径0.2～0.4mを測る。埋土から中世土師器小片が出土した。

SK-2は南北約1.0m、東西0.5m以上を測る。土質や土色がSK-1と異なり、第2区で検出されたピットと類似することから中世の遺構の可能性が想定される。

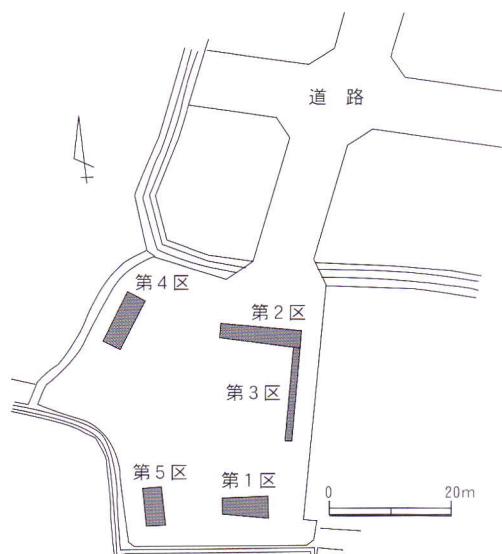
遺物は、各調査区の第3～6層において弥生土器、須恵器、中世から近世の土師器、瓦質土器小



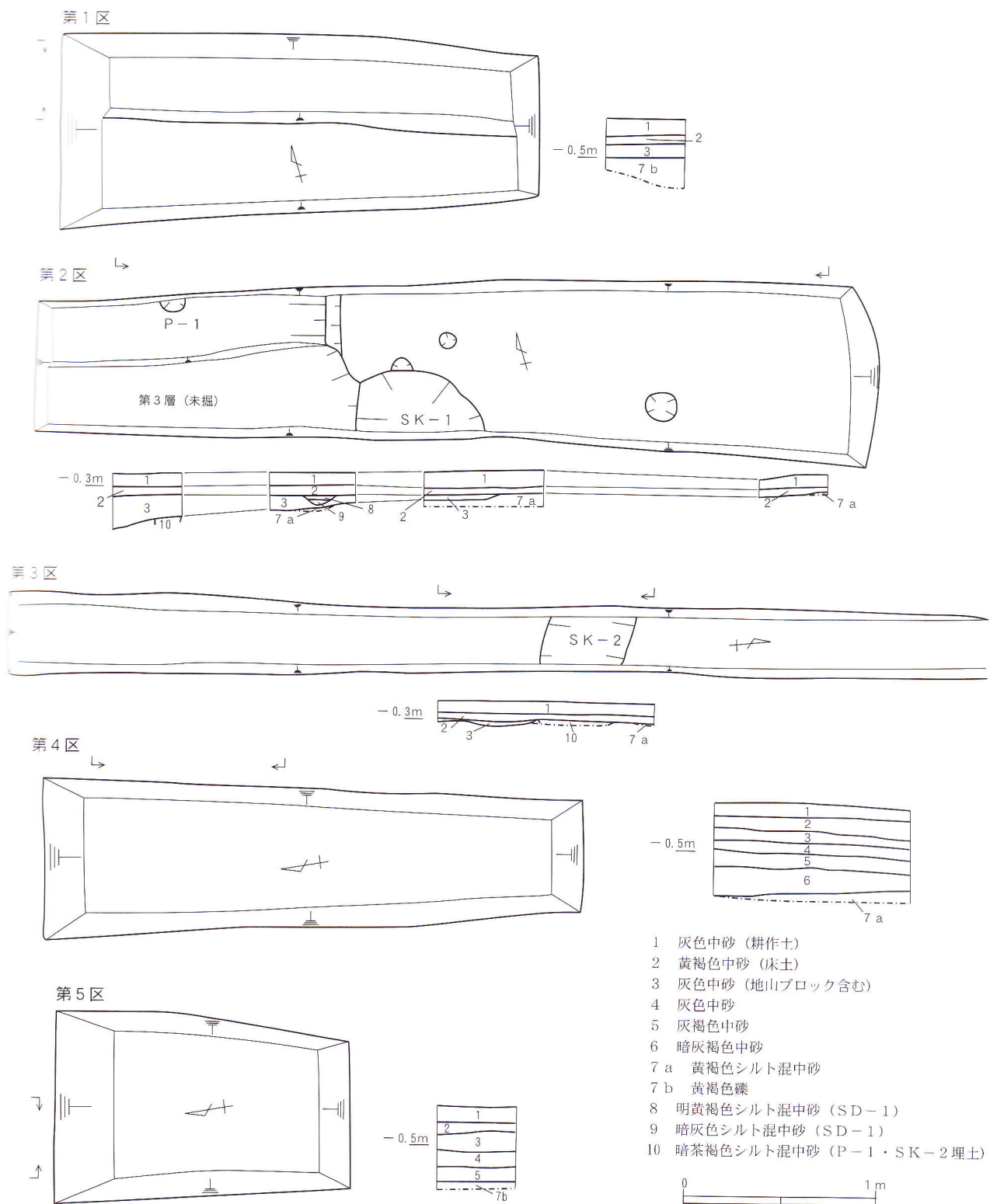
第1図 位置図



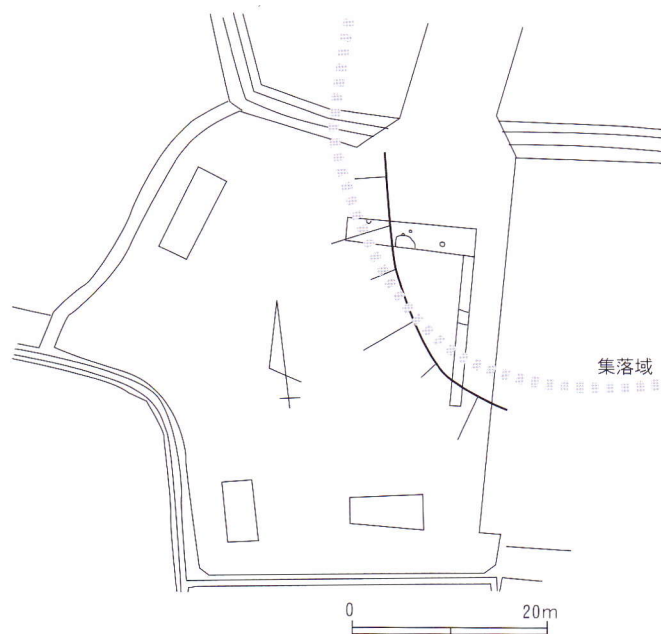
第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 調査区平・断面図



第5図 推定される集落域

片が出土した。

確認調査の結果、第2・3区の第7a層上面において、古墳時代の可能性のある土坑1基のほか、中世の可能性のある土坑1基、ピット4基を検出した。第4・5区は丘陵の傾斜地にあたり、遺構は確認できなかった。遺構検出面である第7層は西・南側に向かって緩やかに傾斜しており、遺構は第2・3区を中心とする丘陵平坦部を中心に分布していたものとする。したがって、埋蔵文化財が展開する範囲は第5図に示した範囲が想定される。第5図に示したように、地形的な条件から判断すると、今回の対象地は集落の縁辺部にあたり、集落中心域は西側に展開する可能性がある。

【参考文献】

和歌山市教育委員会 2010「2（3）⑧有功遺跡」『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成20年度－』

⑬ 宇田森遺跡

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う浄化槽部分の立会調査

〔場所〕 和歌山市宇田森13-14

〔面積〕 3.08㎡（敷地面積165.30㎡）

〔概要〕 宇田森遺跡（遺跡番号149）は、紀ノ川北岸の平野部に位置し、南北約660m、東西約500mの規模をもつ弥生時代の集落遺跡として周知されている（第1図）。今回の調査は遺跡中央南側の位置で、個人住宅建設が計画されたため、浄化槽部分の立会調査を実施した（第2・3図）。

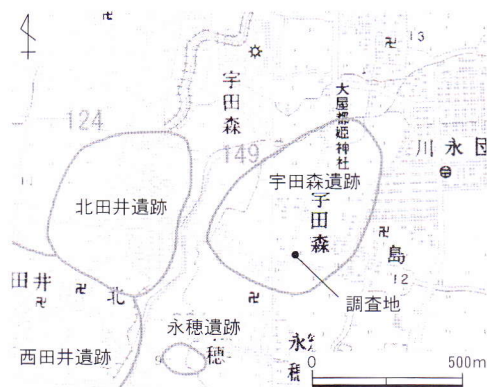
現地表面下、約70cmが造成土で、その下に約20cmの旧耕作土（第1層）、その床土と考えられる約4cmの灰色シルト混中砂（第2層）、約4cmの黄褐色中砂混シルト（第3層）、約4cmの褐色砂粒を含む明黄褐色細砂混シルト（第4層）、約15cmの明黄褐色細砂混シルト（第5層）、約15cmの茶褐色細砂混シルト（第6層）、西側に向かって厚くなる約25～40cmの明茶褐色細砂混シルト（第7層）、約10cm以上の黄褐色細砂混シルト（第8層）が堆積する（第4図）。

第6・7層は中世土師器・瓦器を含む遺物包含層である。第8層以下は遺物を含まない。

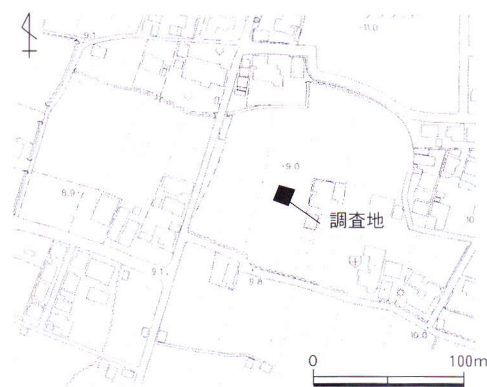
遺構は、第8層上面で西側に向かって低くなる落ち込み（SX-1）を検出した（第4図）。深さ約0.2mを測る。第7層も西側に向かって落ち込むため、SX-1は自然地形の落ち込みの可能性が考えられる。

遺物は第6・7層から瓦器碗・皿、土師器皿などが出土した。そのうち、図化可能なものについて実測を行った（第5図）。

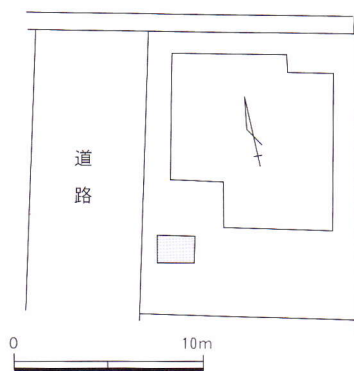
1～3は土師器皿である。口径8.2～8.8cmを測る。2は底部に回転糸切の痕跡が確認できる。4～6は瓦器碗である。4は口径16.0



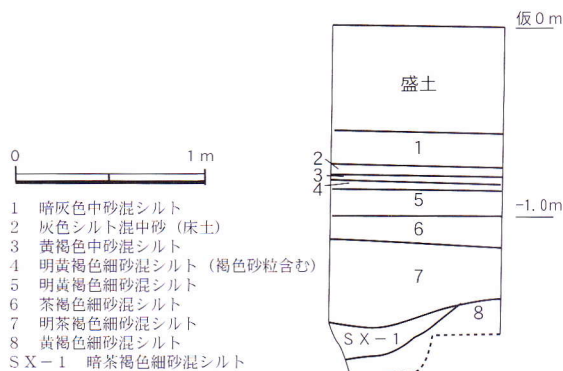
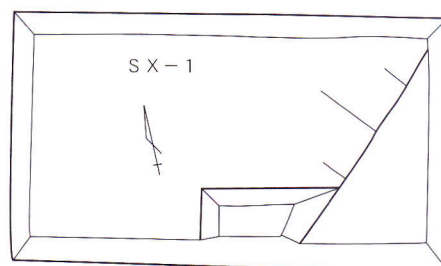
第1図 位置図



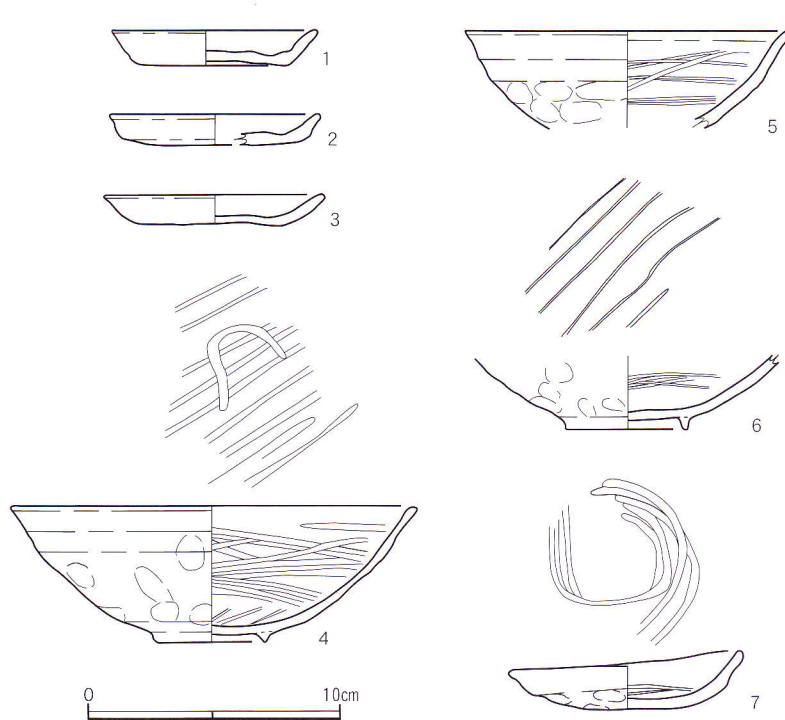
第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平・断面図



第5図 遺構平面図・土層断面図

cm、高台径4.2cm、器高5.4cmを測る。5は口径12.8cmを測る。4・5は外面上半部に2段のヨコナデ、下半部にユビオサエ、内面には暗文が施される。4の内底面には平行線状暗文が認められる。6は高台径4.8cmを測る。外面にユビオサエ、内面に暗文、内底面に平行線暗文が認められる。7は瓦器皿である。口径8.3cmを測る。内底面に渦巻状暗文が認められる。4～6の瓦器碗の特徴から第6・7層から出土した遺物は平安時代後期の可能性がある。

対象地は平成20年度に宅地

造成工事に伴い確認調査を行っており、その際も同時期の可能性のある自然地形の落ち込みが2基確認されている。以上の成果から、対象地周辺は起伏のある地形環境であったことが想定される。また、遺物が比較的多く含まれており、摩滅もなかったことから、当該期の集落が周辺に存在する可能性が想定できる。

【参考文献】

和歌山市教育委員会 2010「2（3）⑥宇田森遺跡」『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成20年度－』

⑰六十谷遺跡

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う浄化槽部分の立会調査

〔場所〕 和歌山市六十谷409-1・2

〔面積〕 4.00㎡（敷地面積308.49㎡）

〔概要〕 六十谷遺跡（遺跡番号84）は、和泉山脈から南流する千手川によって形成された西側扇状地の南端部に立地し、南北約360m、東西約550mの範囲に広がる遺跡である（第1図）。

2009年度に実施された第1次調査では、弥生時代前期から江戸時代までの遺構・遺物を確認しており、六十谷遺跡が弥生時代から江戸時代の複合遺跡であると判明した。今回の調査は遺跡中央部で、個人住宅建設が計画されたため、浄化槽部分の立会調査を実施した（第2・3図）。

現地表面下、約25cmが造成土で、その下に約10～15cmの灰色シルト混中砂（第1層）、約10cmの暗茶褐色シルト混中砂（第2層）、約20cmの明茶褐色シルト混中砂（第3層）、約20cmの茶褐色シルト混中砂（第4層）、約35cmの暗灰色シルト混中砂（第5層）、約70cm以上の黄色細砂混シルト（第6層）が堆積する（第4図）。

第4・5層からは弥生土器、土師器が出土した。第6層中には遺物は含まず、自然堆積層であると考えられる。

遺構は、第6層上面において平面では確認できず断面で確認したため、詳細は不明であるが、ピットの可能性のある遺構を5基検出した。それぞれ、直径約0.3m、深さ約0.55mを測る。遺物は出土しなかった。

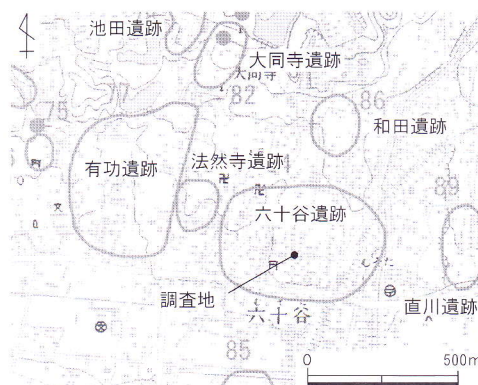
遺物は第4・5層から土師器、弥生土器が出土した。そのうち、器種の判別できるものについて実測を行った（第5図）。

1は土師器皿で口径約13.0cmを測る。底部が破損しているが、おそらく脚台部がついていたものと考えられる。和歌山市秋月遺跡で類例が確認されており、鎌倉時代に位置づけられる。

2は弥生土器甕で、外面のヘラケズリや底部が上げ底状を呈するなど紀伊形甕の特徴を示す。弥生時代中期前半に位置づけられる。

3は弥生土器壺で口縁部外面に凹線文を施す。中期後半に位置づけられる。

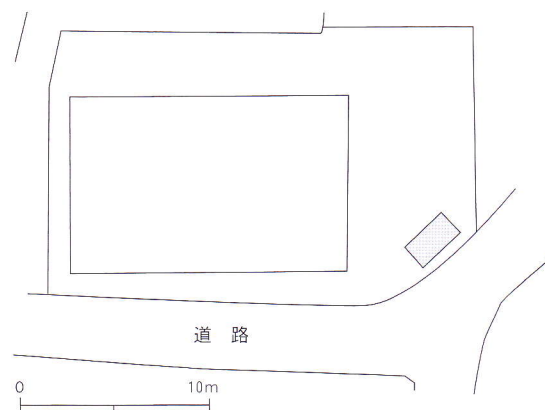
立会調査の結果、ピット5基、土師器、弥生土器を含む遺物包含層を確認した。包含層の遺物か



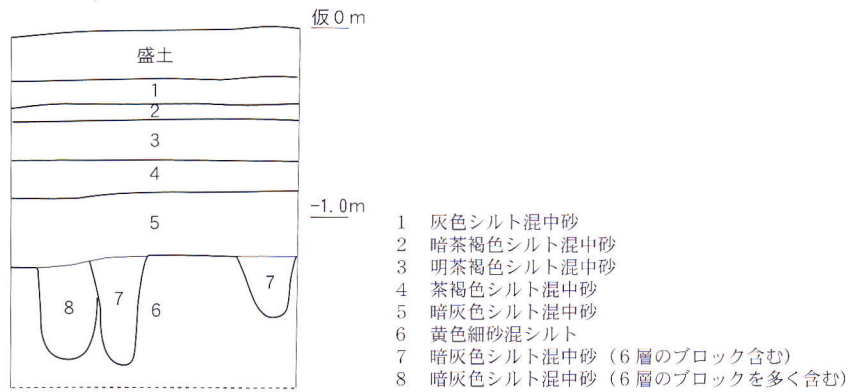
第1図 位置図



第2図 調査対象地



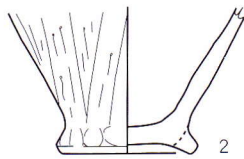
第3図 調査区位置図



第4図 調査区断面図

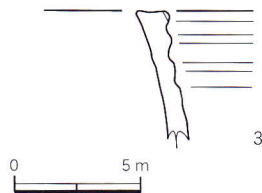


ら、検出した遺構は弥生時代あるいは鎌倉時代の遺構の可能性が高い。今後、対象地周辺で当該期の遺構が検出される可能性は高いと考える。



【参考文献】

財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2002『秋月遺跡第9次発掘調査概報』



第5図 遺物実測図

⑧ 和歌山城跡

〔経緯〕 下水管理設工事に伴う立会調査

〔場所〕 和歌山市13番丁16番～屋形1丁目2-1番

〔面積〕 4.50㎡（敷地面積1048.00㎡）

〔概要〕 対象地は和歌山城下町の三の丸を中心とする武家屋敷地跡に相当する（第1図）。安政2年和歌山城下町絵図と対応させるとおおむね朝倉三之丞、志賀九郎右衛門邸跡に相当すると考えられる（第2図）。上記の場所で、下水管理設工事が計画されたため、掘削部分について立会調査を実施した。

対象地は、水道・ガス管などでかなり攪乱を受けており、土層及び遺構面を確認することは困難であった。現地表面下、約150cmの位置から、堺焼播鉢や国産陶磁器、瓦など18世紀代を中心とする遺物がまとまって出土した。いずれも形をとどめているものが多く、遺物の出土状況も勘案すると遺構出土の遺物の可能性も想定できる。

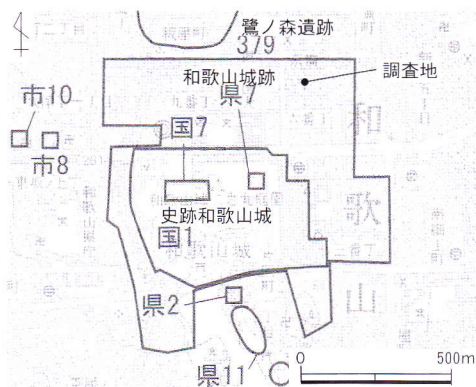
これらの出土遺物のうち、図化可能なものについて実測を行った（第3図）。

1～7は肥前系陶磁器である。1は京焼風の皿である。高台周辺をのぞき施釉が行われる。

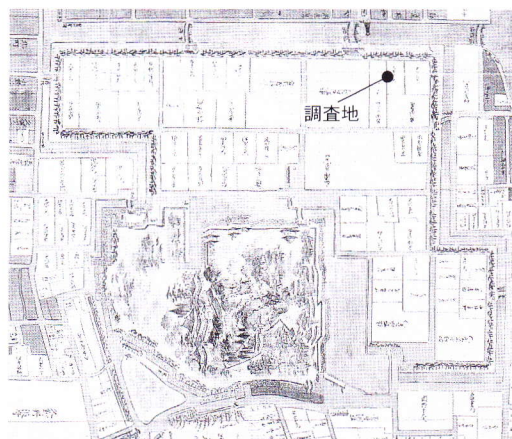
また、高台内部に墨書による「中大」の文字が確認できる。2・3は小碗である。4は小杯で外面にコンニャク印判による施文が確認できる。5は口縁部が直線的に開く碗である。外面に草花文が描かれる。6は筒形碗で口縁部内面に四方禪文を巡らせる。7は青磁染付の蓋で内面見込み部に二重の圈線が巡りその内面に、五弁花文を施す。また、上部つまみ内側には二重方形枠にいわゆる渦「福」銘が確認できる。

8は焼締陶器の堺焼播鉢である。口径29.0cm、底径14.6cm、器高12.6cmを測る。外面調整はヘラケズリ後、ナデ消しを行う。内面には9条／2.3cmの櫛描きによる摺り目が施される。内面見込み部には摺り目がクロスするように施される。

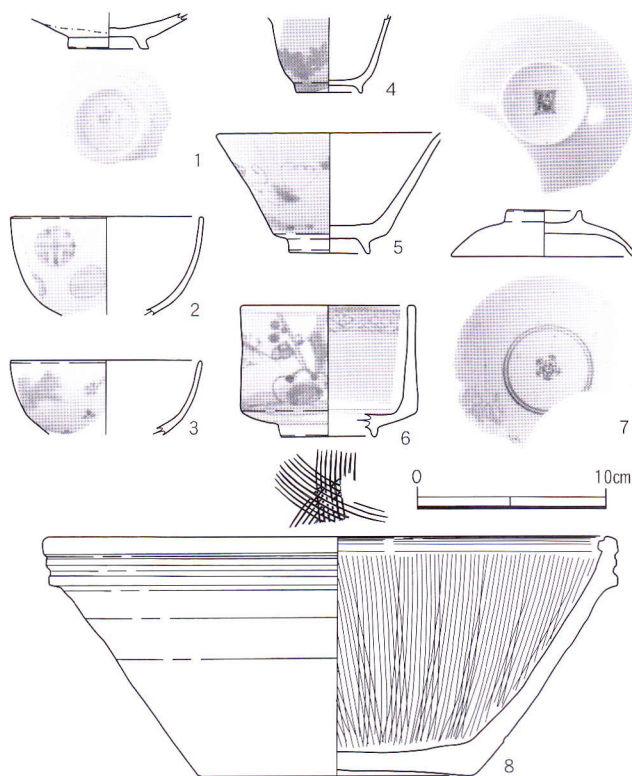
2～4は18世紀前半、5・6～8は18世紀後半に位置づけられる。



第1図 位置図



第2図 調査地位置図



第3図 遺物実測図

⑨木ノ本Ⅱ遺跡確認調査

〔経緯〕 宅地造成に伴う確認調査

〔場所〕 和歌山市木ノ本1222、1224、1225、1170-2

〔面積〕 72.24㎡（敷地面積3820.82㎡）

〔概要〕 木ノ本Ⅱ遺跡（遺跡番号41）は東西約950m、南北約300mの規模をもつ遺跡で、遺物散布地として周知されている（第1図）。近年、和歌山市教育委員会による確認調査等により鎌倉時代を中心とするピット・溝・土坑などの遺構が検出され、集落域の存在が確認されている。また、同調査地内で縄文時代中～後期の縄文土器が出土する状況も確認されている。

今回の調査は、遺跡の北西部で、宅地造成が計画されたため、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した（第2・3図）。

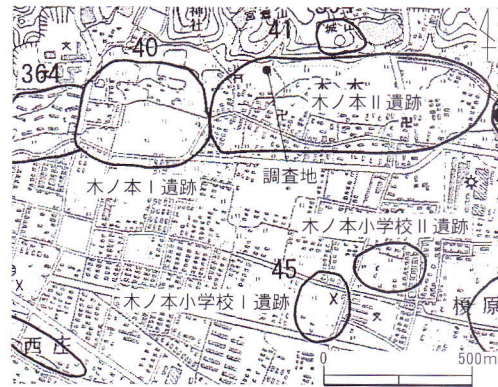
現地表面下、約50～60cmが造成土で、その下に、約20cmの現代耕作土（第1層）、その床土と考えられる約5～10cmの灰黄褐色シルト混細砂（第2層）、約10～20cmの灰白色シルト混細砂（第3層）、約5～10cmの灰茶褐色シルト混細砂（第4層）、約20cmの暗灰茶褐色シルト混細砂（第5層）、約5～20cmの灰黄褐色細砂混シルト（第6層）、7区でのみ確認された約10cmの灰色砂質シルト（第7層）、約20cm以上の暗黄灰色中砂（第8層）が堆積する（第4・5図）。

第3～6層において土師器・瓦器小片を含む希薄な包含層を確認した。第7層以下は遺物を含まないことから、自然堆積層であると考ええる。

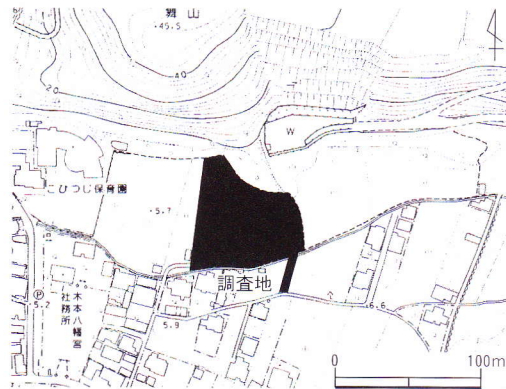
遺構は第6・7区第8層上面で時期不明の直径約5～10cmの円形のピットを検出した。いずれも杭状の形態を呈するピットである。そのほかの遺構はなかった。

遺物は、各調査区において第3～6層から中世土師器、瓦器小片が少量出土した。

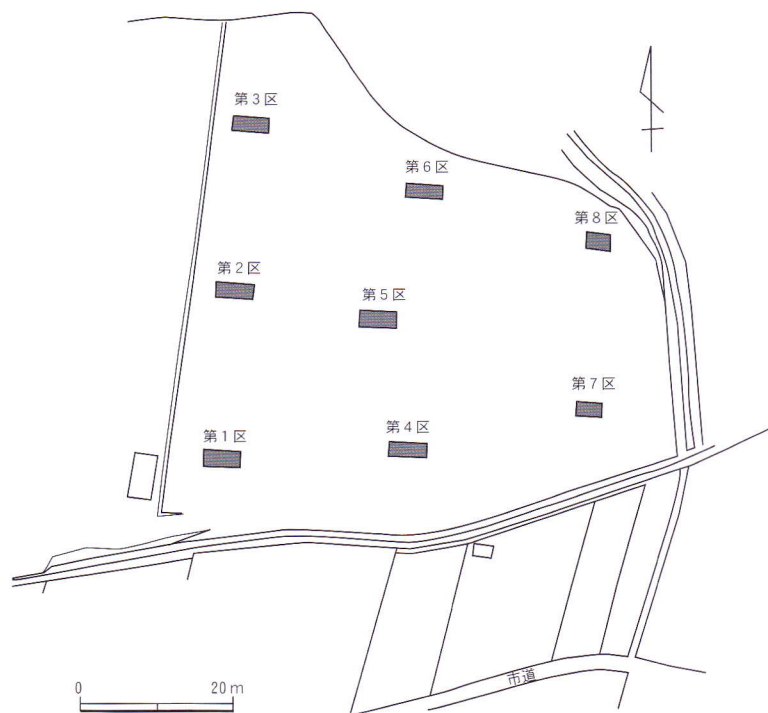
確認調査の結果、時期不明の小ピットを2ヶ所の調査区で数



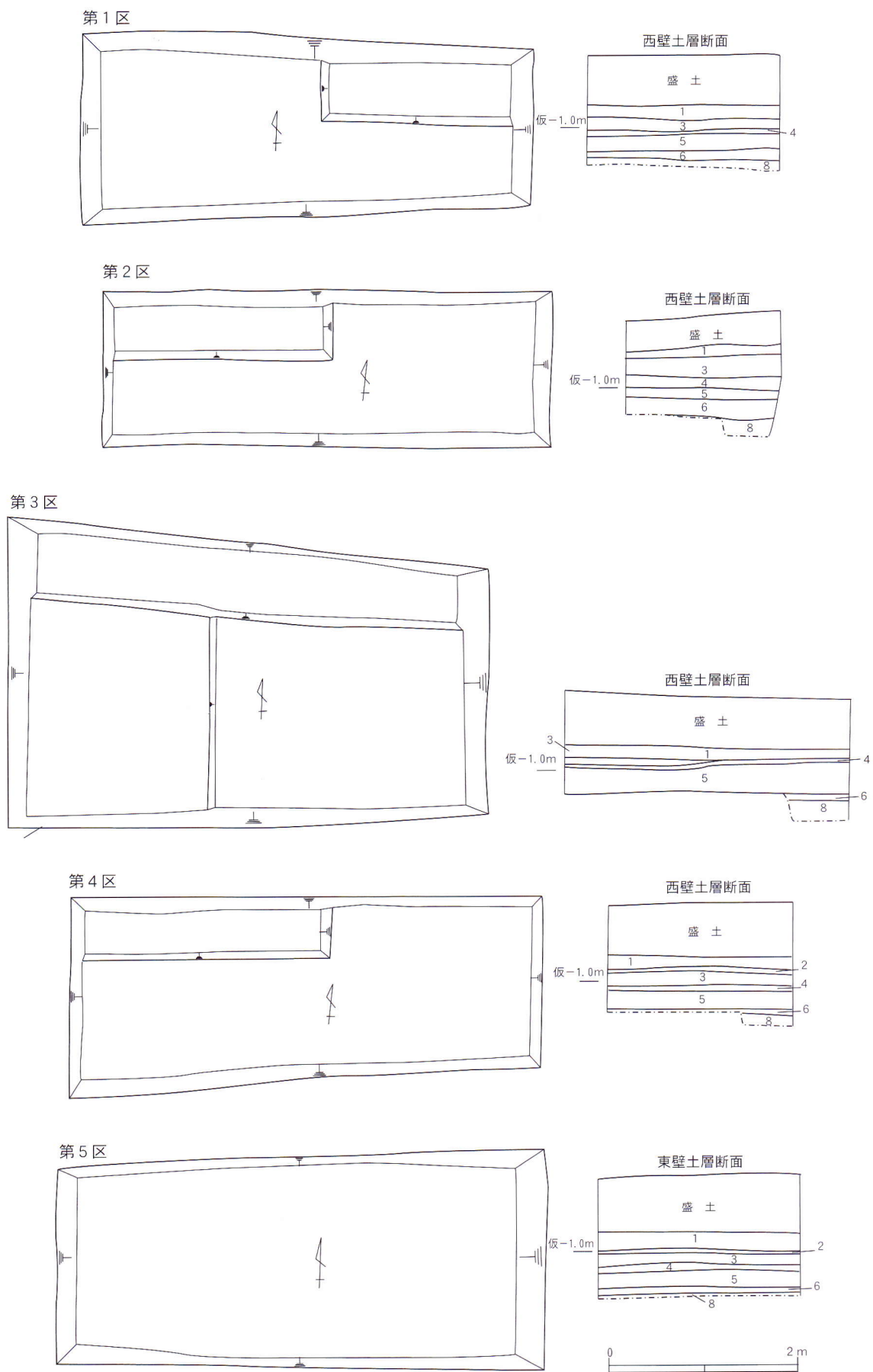
第1図 位置図



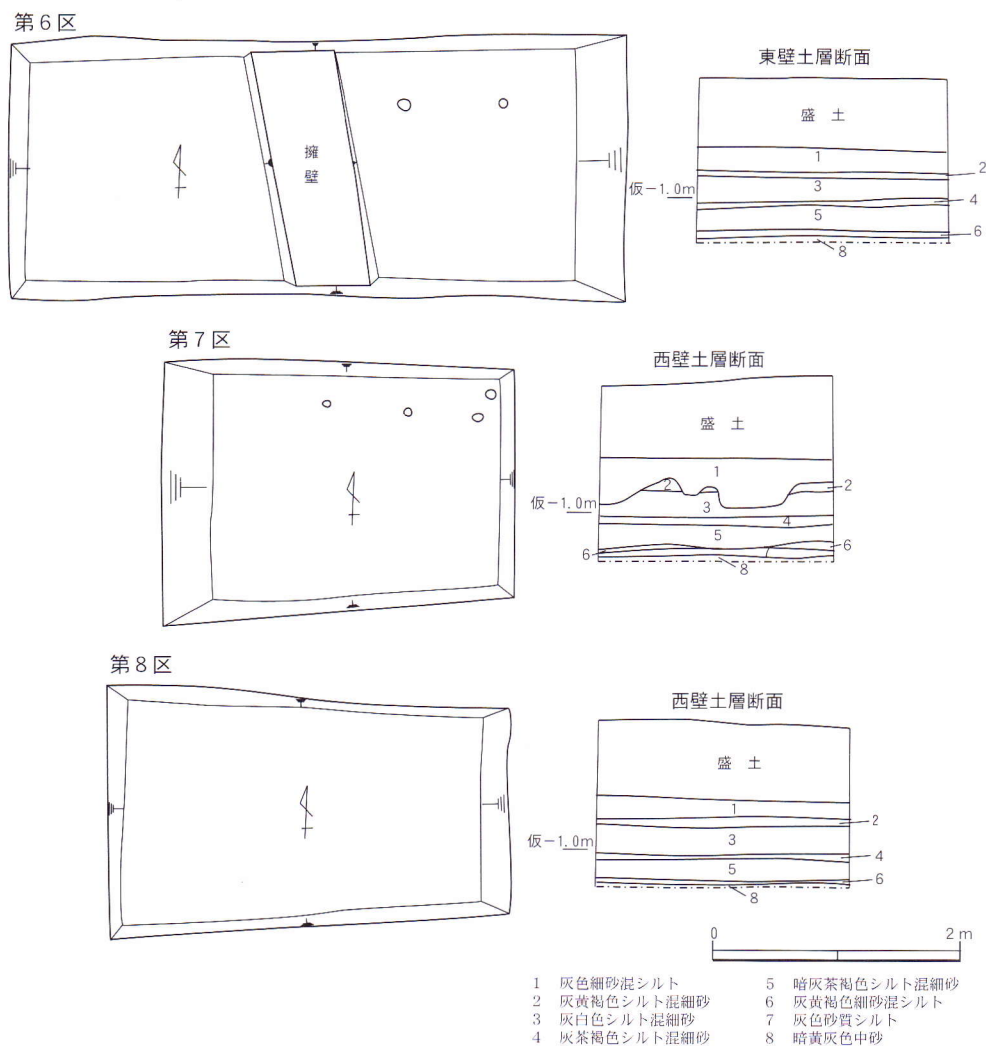
第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 第1～5区調査区平・断面図



第5図 第6～8区調査区平・断面図

基検出したが、遺構密度は低い状況である。また、土層断面観察の結果、中世の遺物を含む包含層がいずれも水平堆積を示すことから、中世の頃、対象地は生産域として機能していた可能性が想定できる。

②山口遺跡第8次確認調査

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

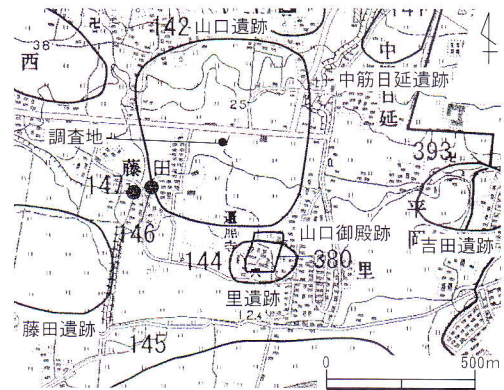
〔場所〕 和歌山市藤田116-5

〔面積〕 9.43m²（敷地面積266.99m²）

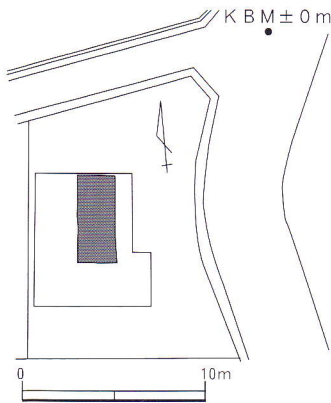
〔概要〕 山口遺跡（遺跡番号142）は、紀ノ川北岸の雄山川によって形成された標高18m前後の扇状地上に位置する。遺跡は南北約600m、東西約600mの範囲をもつ、弥生時代から平安時代の集落遺跡として周知されている（第1図）。今回の調査地は、遺跡の中央部において、宅地造成が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した（第2・3図）。

現地表面下、約170cmが宅地造成時の盛土で、その下に、約16cmの現代水田耕作土（第1層）、その床土と考えられる約6cmの青灰色砂質シルト（第2層）、15～25cmの青灰黄色砂質シルト（第3層）、約30cmの灰色砂礫（第4層）、約20cmの黄灰色砂質シルト（第5層）、約20cmの灰褐色砂質シルト（第6層）、約10cm以上の黄褐色細砂混シルト（第7層）が堆積する。今回の調査地の第7層は第7次調査の第10層に対応すると考えられ、第7層以下は自然堆積層と考えられる。

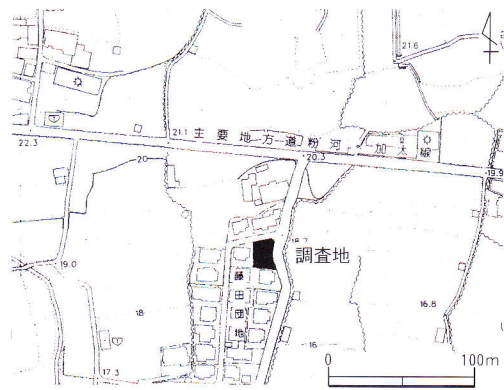
確認調査の結果、遺構・遺物は確認できなかった。第6層以下が北に向かって落ち込んでいくため、北側に谷状地形が存在したものと考えられる。したがって、対象地周辺に埋蔵文化財が展開している可能性は低いと考える。



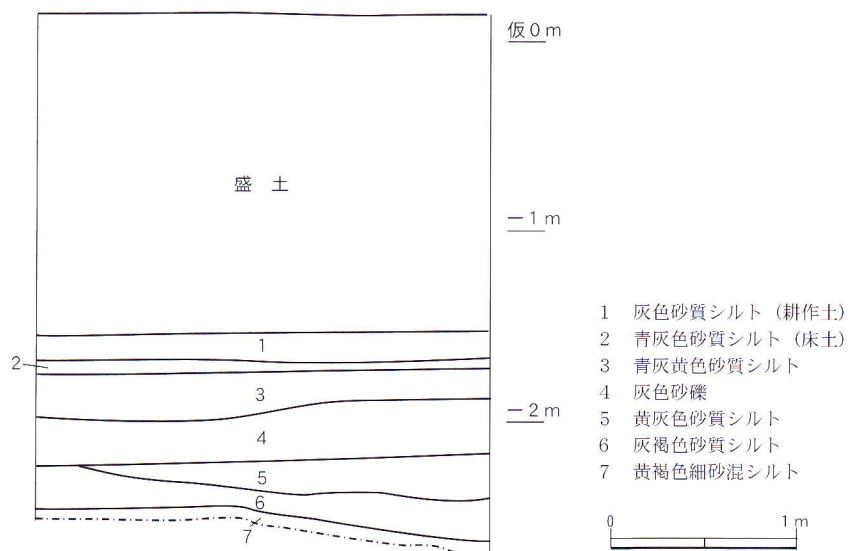
第1図 位置図



第3図 調査場所



第2図 調査対象地



第4図 調査区土層断面図・平面図

㊦井辺遺跡第9次確認調査

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市井辺134-22

〔面積〕 7.60m² (敷地面積211.47m²)

〔概要〕 井辺遺跡 (遺跡番号308) は、紀ノ川南岸の標高3.0m前後の沖積低地に位置する。東西約1.2km、南北約500mの規模をもつ弥生時代から古墳時代を中心とする遺物散布地として周知されている。対象地周辺では、2004・2005年度に和歌山市文化体育振興事業団が第6・7次調査を実施しており弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴建物や土坑・溝などの遺構が密集して確認されており、当該期の集落の中心部の可能性が想定されている。今回の対象地は想定されている集落中心部の南東の少し離れた場所に位置する (第1・2図)。

今回の調査地は、個人住宅建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。

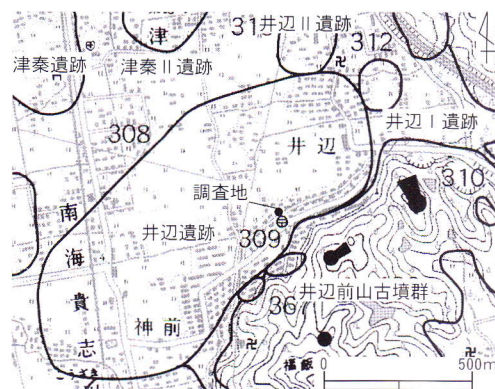
現地表面下約100cmが造成土で、その下に、現代の水田耕作土 (第1層) が約20~24cm堆積し、その床土と考えられる約10cmの淡青灰色細砂混シルト (第2層)、約5cmの青灰黄色細砂混シルト (第3層)、約15cmの灰黄褐色砂質シルト (第4層)、約10~15cmの黄褐灰色砂質シルト (第5層)、約10~15cmの暗灰色シルト混中砂

(第6層)、約10cm以上の青灰黄色中砂 (第7層) が堆積する (第4図)。第5層からは中世土師器小片が1点出土、第6層からは弥生時代後期から古墳時代初頭の壺・甕・高坏などが出土した。第7層以下は遺物を含まず、自然堆積層であると考え

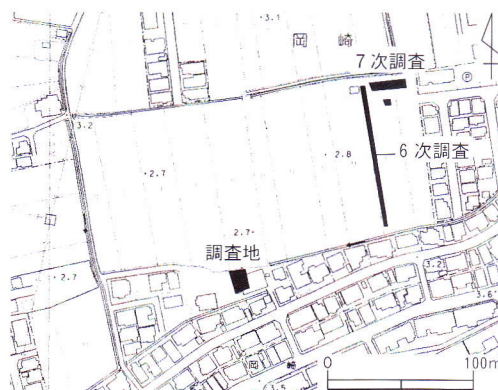
る。第6層から出土した遺物のうち、図化可能なものについて実測を行った (第5図)。

1は二重口縁壺の口縁部である。内外面に横方向のヘラミガキを施す。2は皿形の高杯である。摩滅しており調整は不明である。3~5は脚部である。5には透かしが確認できる。6~9は甕の底部である。平底状のもの (6~8) と上げ底状のもの (9) がある。外面にはタタキが施され、内底面にはクモの巣状のハケメの痕跡が確認できる。6は底径3.8cmを測る。体部中位に分割成形の痕跡が確認でき、その内面は、ユビオサエが施される。

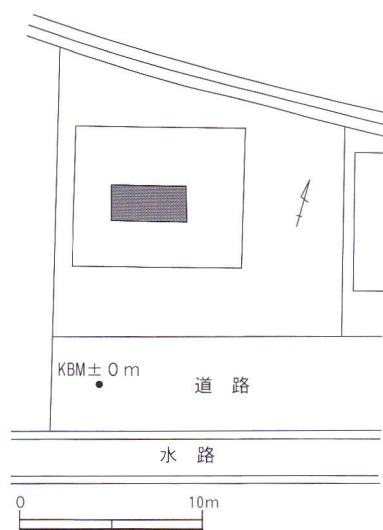
確認調査の結果、遺構はなく、遺物は第5層で中世土師器、第6層で古墳時代初頭の土師器を含



第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所

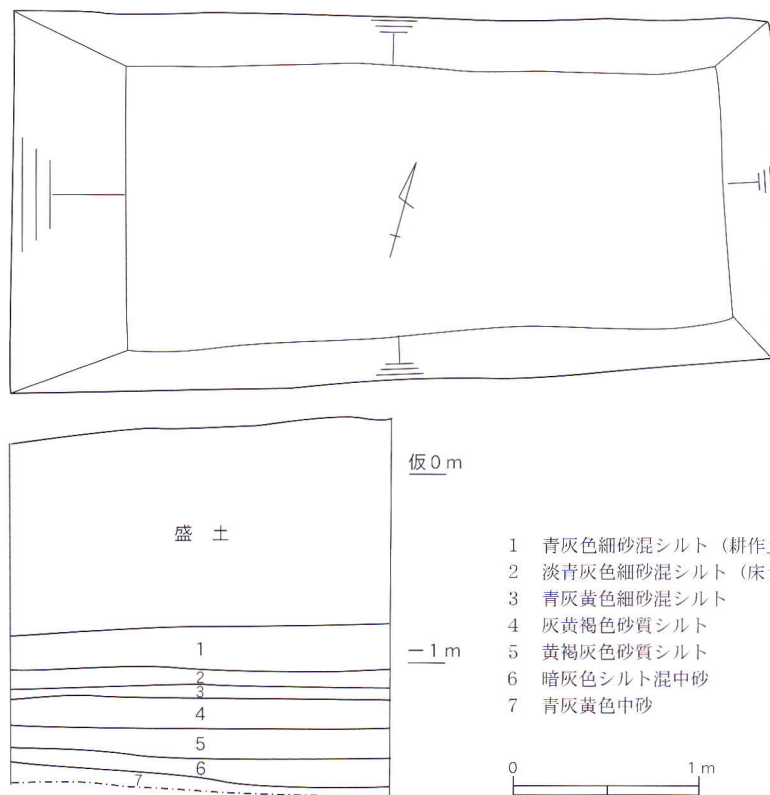
む遺物包含層を確認した。土層はいずれもグライ化しており低地部あるいは谷部の様相を呈する。第6・7次調査地で確認した弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構面と対応すると考えられるベース層は砂層（第7層）であることから、対象地は南側に向かって落ち込む谷状地形の北肩部周辺に位置する可能性が想定される。

第6層から出土した遺物は、出土量も比較的多いこと、摩滅も少なく破片も大きいことから、対象地北側に居住域が展開していた可能性が想定される。調査地と第6・7次調査地の位置関係から、第6・7次調査で確認した居住域が対象地の北側まで展開していた可能性が高いと考える。

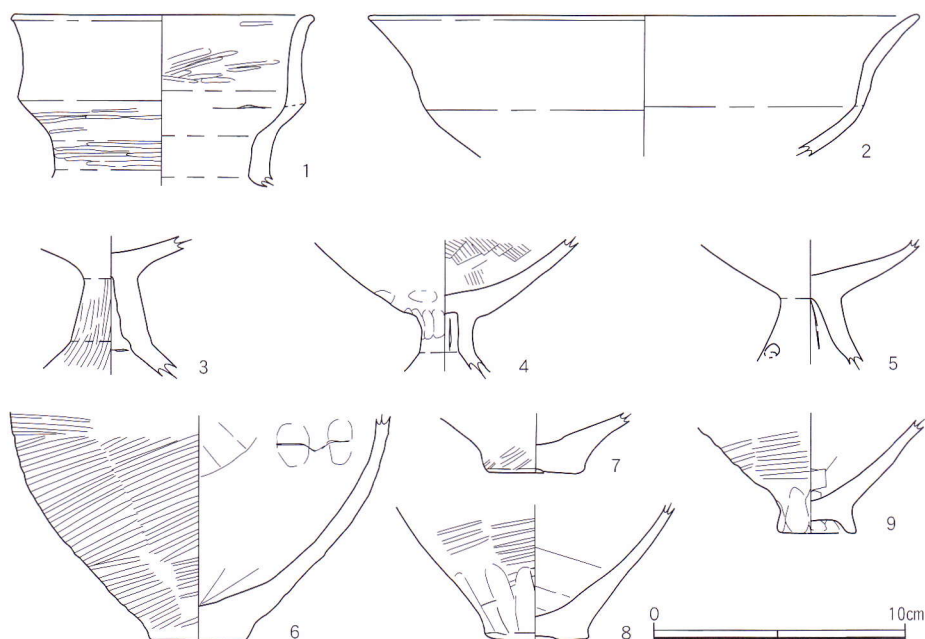
今後、周辺の調査により、当該期の状況を明らかにしていく必要がある。

【参考文献】

財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2005『井辺遺跡第6次発掘調査概報』
財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2006『井辺遺跡第7次発掘調査概報』



第4図 調査区土層断面図・平面図



第5図 遺物実測図

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前確認調査

〔面積〕 16.76m² (敷地面積480.67m²)

〔概要〕太田・黒田遺跡（遺跡番号327）は、紀ノ川北岸の標高4 m前後の沖積低地に立地する。遺跡は東西約500m、南北約850mの規模をもつ弥生時代から江戸時代の集落遺跡である（第1図）。今回の調査は遺跡南東隅の位置で、集合住宅建設が計画されたため、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した（第2・3図）。

〔第1区〕現地表面下、約80cmが造成土でその下に約10cmの旧耕作土（第1層）、その床土と考えられる約6cmの黄褐色細砂混シルト（第2層）、約5cmの灰黄褐色細砂混シルト（第3層）、約16cmの灰褐色細砂混シルト（第4層）、15～25cmの黄褐色シルト混中砂（第5層）、24～30cmの明黄褐色細砂混シルト（第6層）、20cm以上の黄褐色シルト混細砂（第7層）が堆積する。

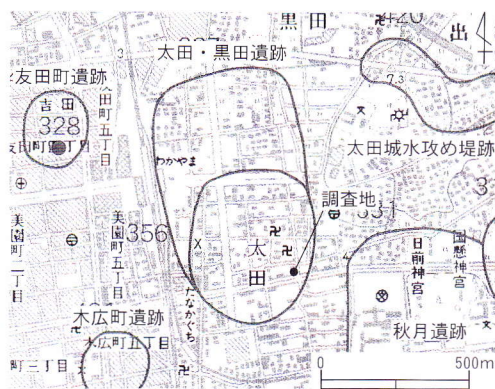
〔第2区〕現地表面下、約40cmが造成土で、その下に約20cmの旧耕作土（第1層）、その床土と考えられる5～10cmの黄褐色細砂混シルト（第2層）、約30cmの灰黄褐色細砂混シルト（第3層）、30～40cmの暗灰褐色細砂混シルト（第4層）、約30cmの暗灰褐色シルト混細砂（第5層）、約5cm以上の暗黄灰色細砂（第6層）が堆積する。

第1区第3・4層は近世陶磁器、中世土師器小片を含む希薄な包含層、第2区第4層は弥生時代中期の遺物包含層、第2区第5層は弥生時代前期～中期初頭の遺物包含層である。第1区の第7層、第2区第6層以下は遺物を含まず自然堆積層であると考える。

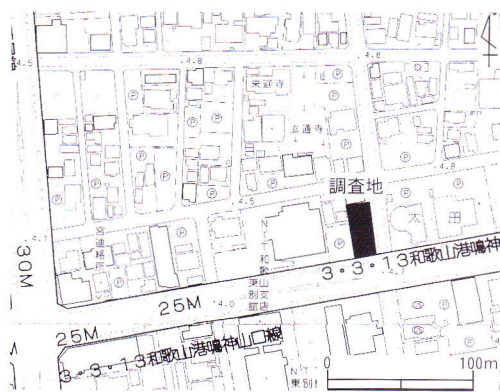
第1区と第2区の土層の対応関係は、第2区第3層は、第1区において近世に削平を受け存在しない(第3・4層)。それより下層は、第1区第5層が第2区第4層、第1区第6層が第2区第5層、第1区第7層が第2区第6層と対応する。

遺構は4面の遺構面を確認した。第1遺構面は第2区第3層上面でのみ確認した。第1区では第1遺構面はなく、近世の堆積が確認できる(第2区第3・4層)。おそらく、第1区周辺では第1遺構面は近世に耕作などで削平を受け残存していないものと想定される。第2遺構面は第1区第5層上面、第2区第4層上面、第3遺構面は第1区第6層上面、第2区第5層上面、第4遺構面は第1区第7層上面、第2区第6層上面である。

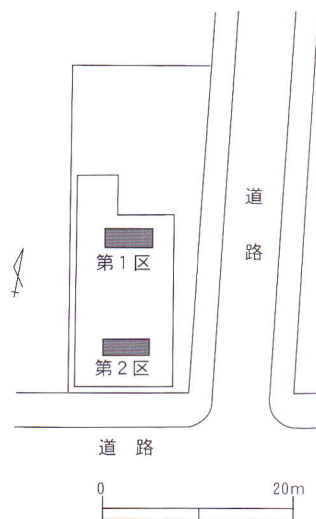
遺構面の時期は、包含層出土の遺物から第1遺構面が弥生時代中期後半～近世、第2遺構面が弥



第1図 位置図

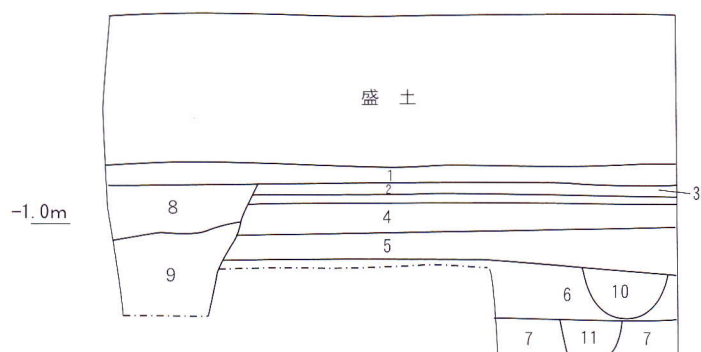
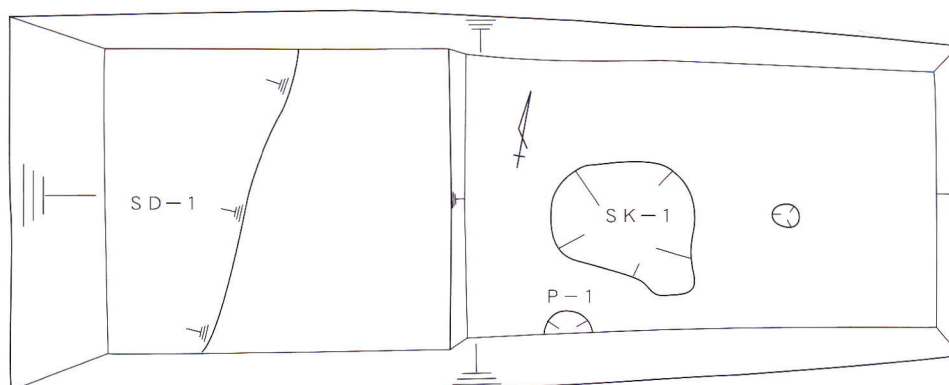


第2図 調査対象地



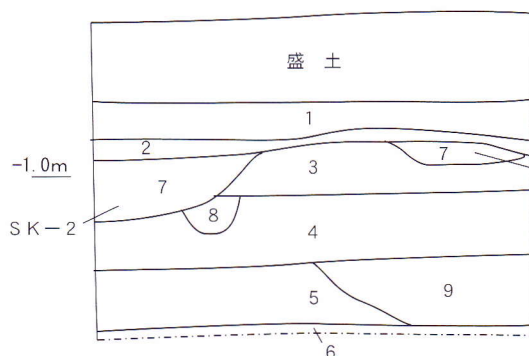
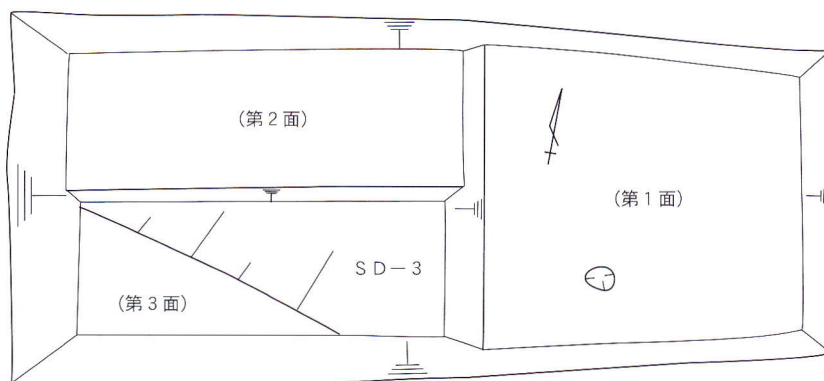
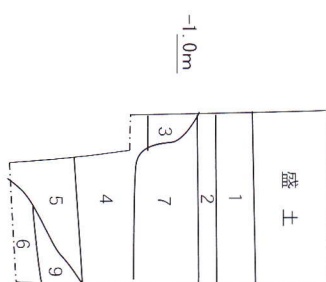
第3図 調査区位置図

第1区

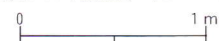


- 1 青灰色砂質シルト (耕作土)
- 2 黄褐色細砂混シルト (床土)
- 3 灰黄褐色細砂混シルト
- 4 灰褐色細砂混シルト
- 5 黄褐色シルト混中砂
- 6 明黄褐色細砂混シルト
- 7 黄褐色シルト混細砂
- 8 青灰色細砂混シルト [SD-1埋土]
- 9 青灰色中砂礫 [SD-1埋土]
- 10 明黄褐色細砂混シルト (炭混じる) [P-1埋土]
- 11 茶褐色細砂混シルト [P-2埋土]

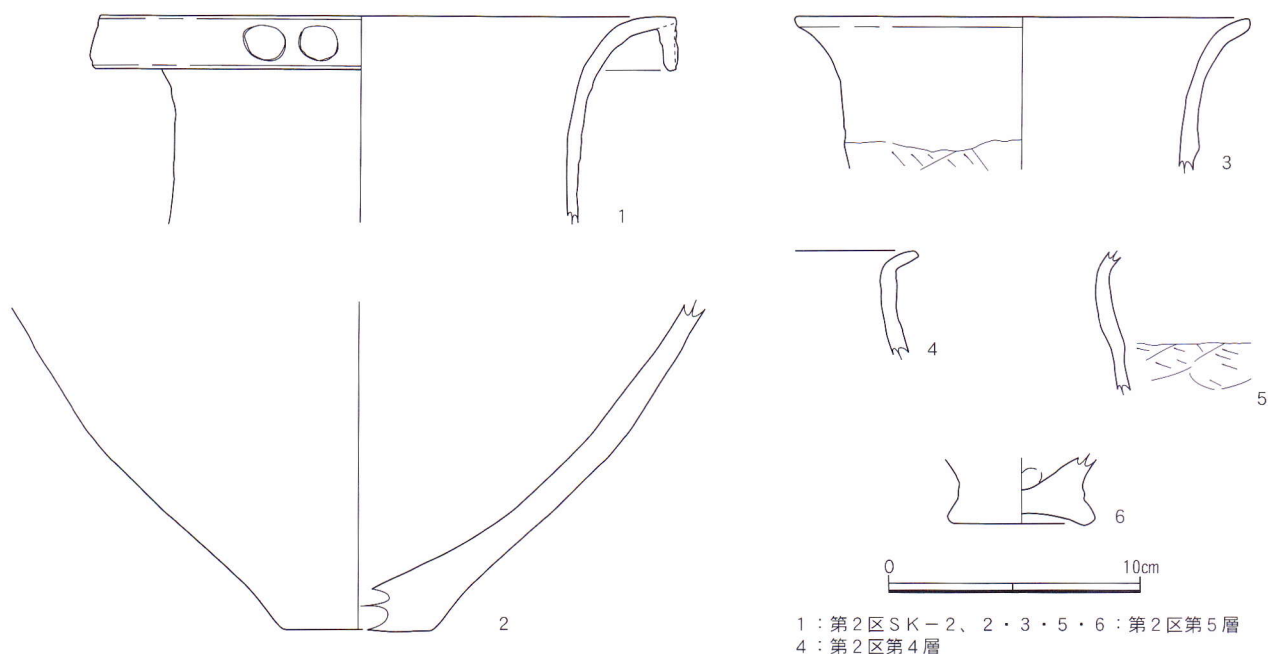
第2区



- 1 青灰色砂質シルト (耕作土)
- 2 黄褐色細砂混シルト (床土)
- 3 灰黄褐色細砂混シルト
- 4 暗灰褐色細砂混シルト
- 5 暗灰褐色シルト混細砂
- 6 暗黄灰色細砂
- 7 灰褐色シルト混細砂 [SK-2・SD-2埋土]
- 8 茶褐色シルト混細砂 [P-3埋土]
- 9 暗茶褐色シルト混細砂 [SD-3埋土]



第4図 調査区平面図・土層断面図



第5図 遺物実測図

生時代中期中葉、第3遺構面が弥生時代中期初頭、第4遺構面が弥生時代前期～中期初頭以前になると考えられる。

〔第1遺構面〕第2区で土坑1基（SK-2）、溝1条（SD-2）、小ピット1基を検出した。SK-2からは弥生時代中期後半の壺が1点出土した。SK-2は確認調査時には弥生時代中期後半の遺構と判断していたが、その後の発掘調査により、近世の遺構と判明した。

〔第2遺構面〕第2区で直径約0.3m、深さ約0.2mのピット1基（P-3）を検出した。

〔第3遺構面〕第1区で直径約0.44m、深さ約0.25mのピット1基（P-1）、第2区で幅0.9m以上、深さ約0.4m以上の大溝1条（SD-3）を検出した。

〔第4遺構面〕第1区で直径約0.75mの不整円形の土坑1基（SK-1）、直径約0.3m、深さ0.2m以上のピット1基（P-2）、直径約0.15mの小ピット1基を検出した。

遺物は、須恵器、弥生土器、近世瓦などコンテナ1／2箱が出土した。それらのうち、図化可能なものについて実測を行った（第5図）。

1は広口壺である。垂下口縁部外面に円形浮文を施す。2は壺の底部である。内外面が摩滅しており、調整は不明である。3～6は紀伊形甕である。3・5は肩部に稜がある。4は口縁端部がわずかに屈曲する。1は弥生時代中期後半、2～6は中期初頭に位置づけられる。

確認調査の結果、弥生時代中期後半～近世と考えられる遺構検出面、弥生時代中期中葉と考えられる遺構検出面、弥生時代中期初頭と考えられる遺構検出面、弥生時代前期～中期初頭以前と考えられる遺構検出面の合計4面の遺構面を確認した。ピット・土坑・溝などを検出したが、いずれの遺構面においても遺構密度は集落の中心部に比べるとそれほど高くなく、集落縁辺部の様相を呈している。

【参考文献】

財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2001『太田・黒田遺跡第45次発掘調査概報』

和歌山市教育委員会・財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2004『16 太田・黒田遺跡第51次調査』『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報8』

②和歌山城跡第10次確認調査

〔経緯〕 事務所建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市四番丁 6

〔面積〕 11.66m²（敷地面積480.67m²）

〔概要〕 和歌山城跡（遺跡番号379）は、紀ノ川南岸の平野部に存在する独立丘陵上に築かれた和歌山城を中心とする遺跡である（第1図）。今回の調査は、和歌山城三の丸の屋敷地に相当する場所において、事務所建設が計画されたことから、事前の確認調査を実施した（第2・3図）。

現地表面下、約15cmが造成土で、その下に戦災時の焦土層と考えられる約5～30cmの暗茶褐色シルト混中砂（第1層）、約80cmの砂礫を含む明茶褐色中砂（第2層）、約100cmの明茶褐色中砂（第3層）、約80cmの明茶褐色シルト混中砂（第4層）、約4cm以上の黄褐色シルト混中砂（第5層）が堆積する（第4図）。

第2次世界大戦時の焦土層である第1層以下の堆積がいずれも東側に向かって落ち込んでおり、明確な遺構面を確認できなかった。

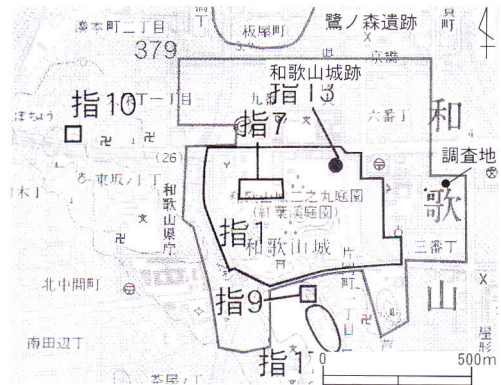
遺構はなく、第2・3層において土師器、堺焼播鉢、平瓦など江戸時代の遺物が出土した。

確認調査の結果、遺構はなかったが、第2・3層において江戸時代の遺物包含層を確認した。

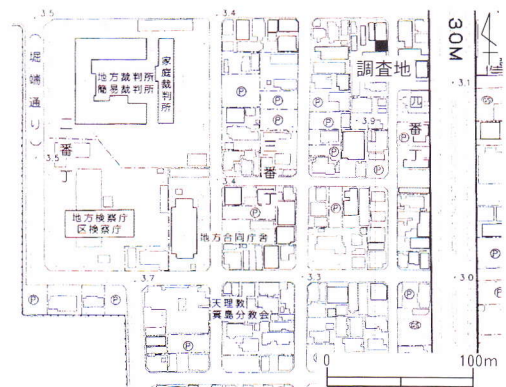
対象地は安政2年（1855）和歌山城下町図に対応させると、藤村三右衛門邸または道路から土塁にあたる部分に相当する。しかし、土層観察の結果、明確な遺構面は存在せず、江戸時代の遺物包含層以下の堆積がいずれも東側に向かって落ち込んでいる状況が確認できた。

今回の調査区の西側で行った第7次調査では、現地表面から0.35～0.45m下（第1遺構面）とさらに0.1m下（第2遺構面）で江戸時代の武家屋敷跡に関連する遺構が確認されている。今回の調査区では、現地表面から1.3m下まで掘削し、堆積状況を確認しており、これより下位に、第7次調査等で確認した遺構面が存在する可能性は低いものとする。

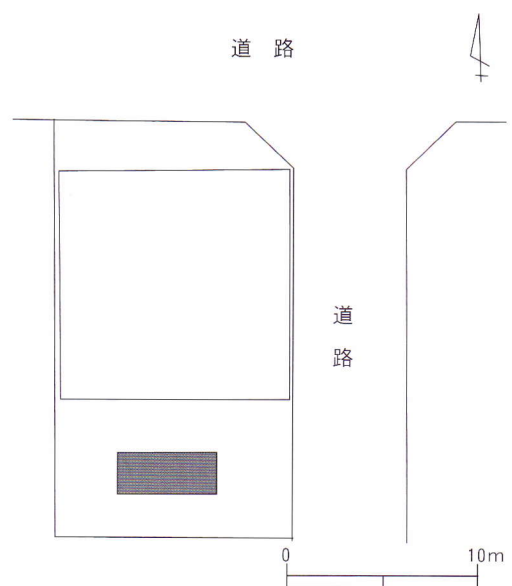
このような周辺の調査成果や堆積状況から判断すると、大規模な造成が行われている状況が想定され、堀に隣接することも考慮すると、対象地は堀の埋め立



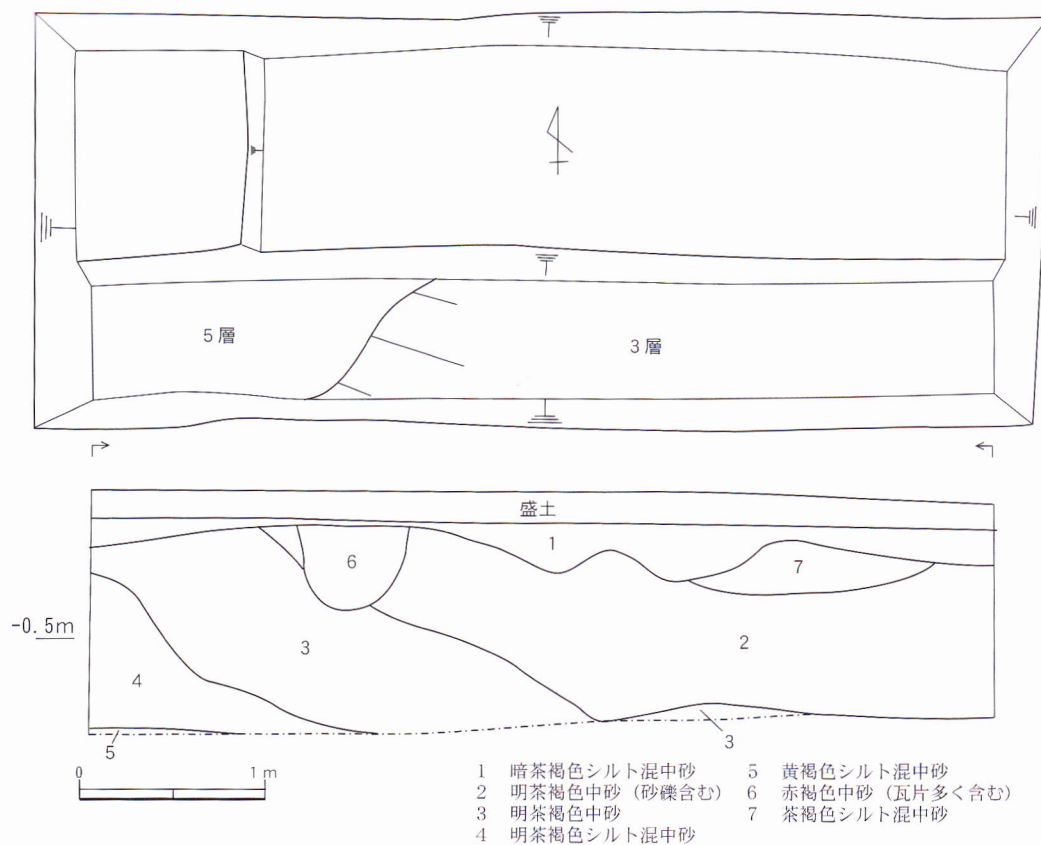
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 土層断面図・遺構平面図

て部分に相当する可能性も考えられる。今後、土塁が対象地の西側に存在する可能性についても検討する必要がある。

④上三毛遺跡確認調査

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市上三毛5番3

〔面積〕 8.75m² (敷地面積352.81m²)

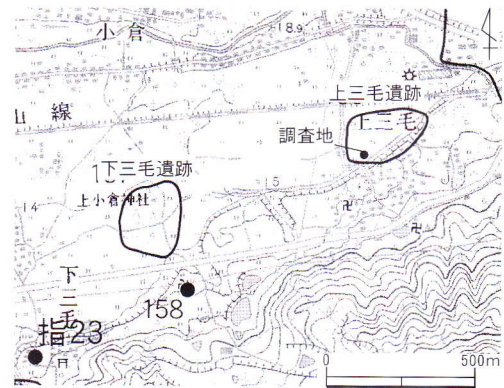
〔概要〕 上三毛遺跡 (遺跡番号156) は、紀ノ川南岸の平野部に存在する東西約300m、南北約200mの規模をもつ遺跡で、遺物散布地として周知されている。

(第1図)。今回の調査は、遺跡の南西隅の位置で個人住宅建設が計画されたことから、事前の確認調査を行った (第2・3図)。

現地表面下、約90cmが造成土で、その下に約24~30cmの現代耕作土 (第1層)、約8cmの灰黄色細砂混シルト (第2層)、約30cm以上の明黄褐色細砂混シルト (第3層) が堆積する (第4図)。

第2層は土師器小片を含む希薄な遺物包含層である。第3層以下は、遺物を含まないことから自然堆積層であると考えられる。

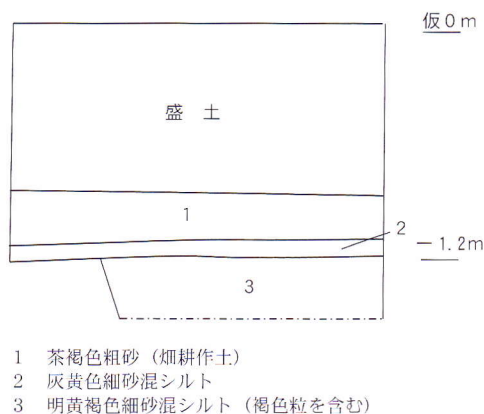
確認調査の結果、遺構はなく、第2層において土師器小片を含む希薄な遺物包含層を確認した。出土した遺物はかなり細片であり、点数も3点と少ない。そのため、周辺に埋蔵文化財が展開している可能性は低いと想定される。



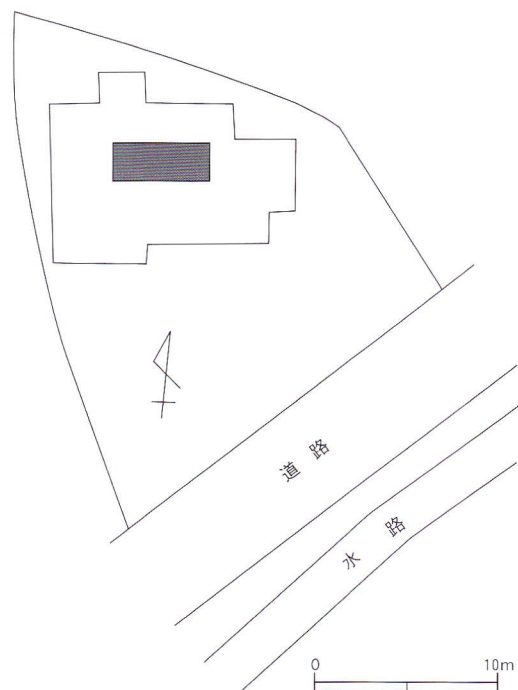
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第4図 調査区平・断面図



第3図 調査場所

㊦井辺遺跡第10次確認調査

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市神前112番 1

〔面積〕 30.55m² (敷地面積1567m²)

〔概要〕 井辺遺跡 (遺跡番号308) は、紀ノ川南岸の標高3.0m前後の沖積低地に位置する。遺跡は東西約1.2km、南北約500mの規模をもつ弥生時代から古墳時代を中心とする遺物散布地として周知されている。対象地周辺では、2004・2005年度に和歌山市文化体育振興事業団が第6・7次調査を実施しており弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴建物や土坑・溝などの遺構が密集して確認されており、当該期の集落遺跡であることが判明している (第1・2図)。今回の調査地は、遺跡の西側の位置で集合住宅建設が計画されたことから、事前の確認調査を実施した (第3図)。

調査区における土層断面図は第4図に示した。第1・2区と第3区の土層が異なるため、それぞれ分けて記載する。

〔第1・2区〕 現地表面下、約15~20cmが現代耕作土 (第1層)、その下にその床土と考えられる約5~12cmの黄灰色シルト (第2層)、約12~30cmの暗黄灰色細砂混シルト (第3層)、約16cmの黄灰色細砂混シルト

(第4層)、約20cm以上の黄灰色中砂 (第5層) が堆積する。

第3層は土師器を含む遺物包含層である。第4層以下は遺物を含まないことから、自然堆積層であると考ええる。

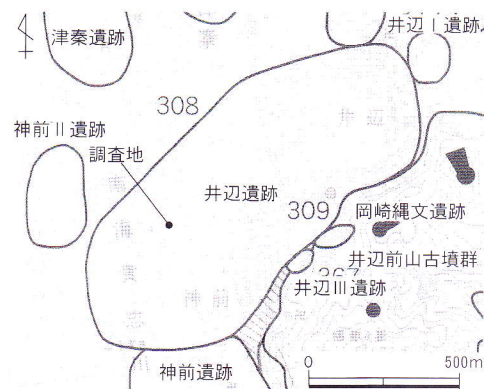
〔第3区〕 現地表面下、約26cmの現代耕作土 (第1層)、その床土と考えられる約2cmの黄褐色中砂混シルト (第2層)、約8cmの灰黄褐色中砂混シルト (第3層)、約4cmの黄褐色中砂混シルト (第4層)、約6cmの明灰黄褐色中砂混シルト (第5層)、約8cmの灰黄褐色シルト (第6層)、約14cmの灰茶褐色シルト (第7層)、約6cm以上の茶褐色シルト (第8層) が堆積する。

第3~5層において土師器、須恵器を含む包含層を確認した。第6層以下は遺物を含まないことから、自然堆積層であると考ええる。

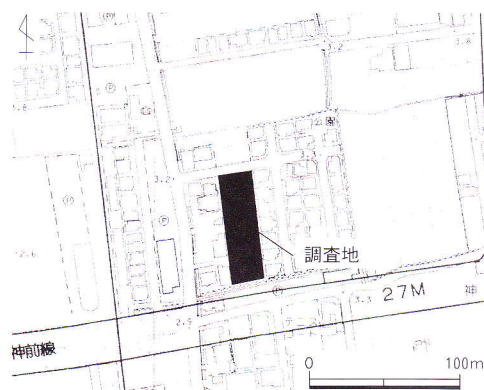
第1・2区の第4層上面において溝1条 (SD-1)、竪穴建物1棟 (SI-1) を検出した。

SD-1 第1区で検出した。長さ1.0m以上、幅約0.5m、深さ約0.2mの東西方向の溝である。

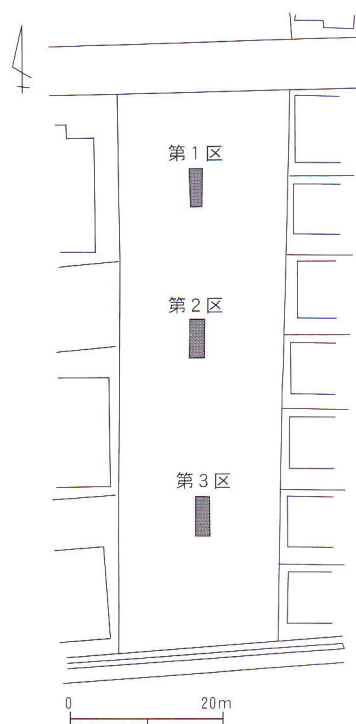
SI-1 第2区で検出した。おそらく方形のプランをもつ



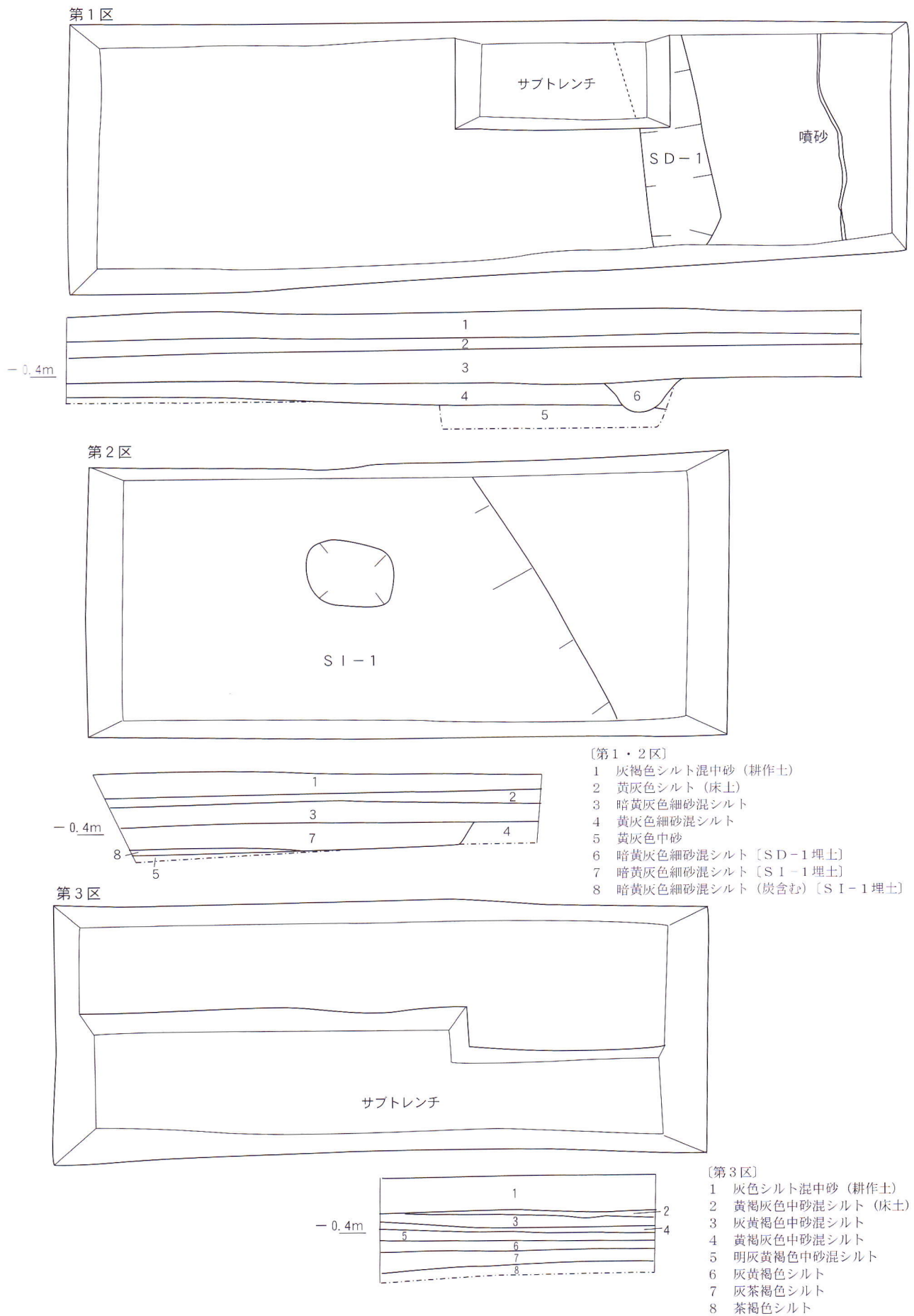
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平・断面図

建物で、約20cmの壁が残存している。壁溝は掘削されず、主柱穴と考えられる直径約0.6mのピットを1基検出した。埋土から出土した遺物は小片であり詳細な時期は特定できないが、弥生時代後期末から古墳時代初頭のものであると考えられる。

確認調査の結果、第1・2区の第4層上面において弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構を確認した。竪穴建物を確認したことから対象地周辺に当該期の集落域が展開しているものと想定される。しかし、第3区周辺は微低地部にあたり、対象地南側には遺構は展開しない。第3区の南側で行った個人住宅建設に関する立会調査では現代耕作土より約1.0m下で遺物が出土しない自然堆積層を確認している。竪穴建物を検出した遺構面の標高と比較すると約60cm低くなっており、対象地の南側に谷状地形が存在していた可能性が想定できる。

② 津秦遺跡第2次確認調査

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市津秦98番7

〔面積〕 16.00㎡（敷地面積406.22㎡）

〔概要〕 津秦遺跡（遺跡番号332）は、紀ノ川南岸の標高3.2m前後の沖積低地に位置する。遺跡は南北約450m、東西約300mの範囲をもつもので、弥生時代の遺物散布地として周知されている（第1図）。

今回の調査地は、遺跡の中央南側の位置において、個人住宅建設が計画されたため、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために確認調査を実施することになった。（第2・3図）。

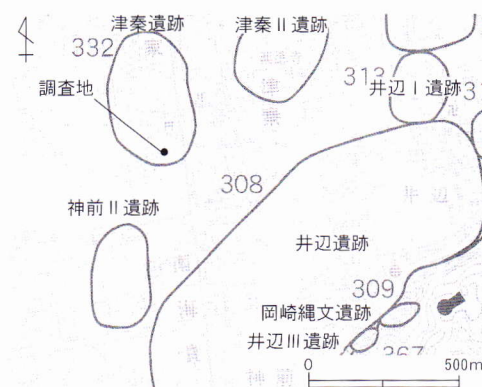
現地表面下、約74cmが造成土で、その下に約16cmの現代耕作土（第1層）、その床土と考えられる約4cmの灰褐色シルト混細砂（第2層）、約6cmの灰茶褐色シルト混細砂（第3層）、約6cmの灰黄褐色シルト混細砂（第4層）、約6cm以上の灰黄褐色細砂（第5層）が堆積する（第4図）。

第3層は土師器小片を含む遺物包含層である。第4層以下は遺物を含まないことから、自然堆積層であると考えられる。

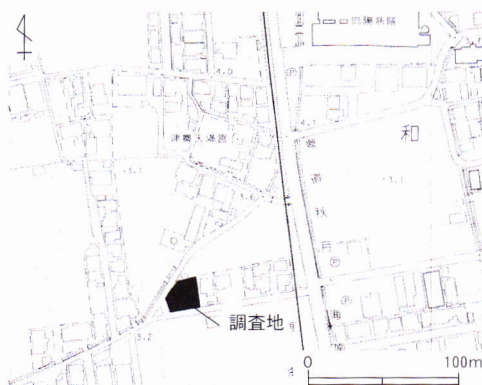
遺構は、第4層上面において古墳時代中期から後期の可能性のある溝を1条（SD-1）検出した（第4図）。

SD-1は東西方向に掘削された溝である。断面はU字形を呈し、幅約0.4m、深さ約0.2mを測る。溝の埋土より古墳時代の土師器小片・須恵器が出土した。時期を判別できるものは出土しなかったが、溝の時期は古墳時代中期から後期の可能性が考えられる。

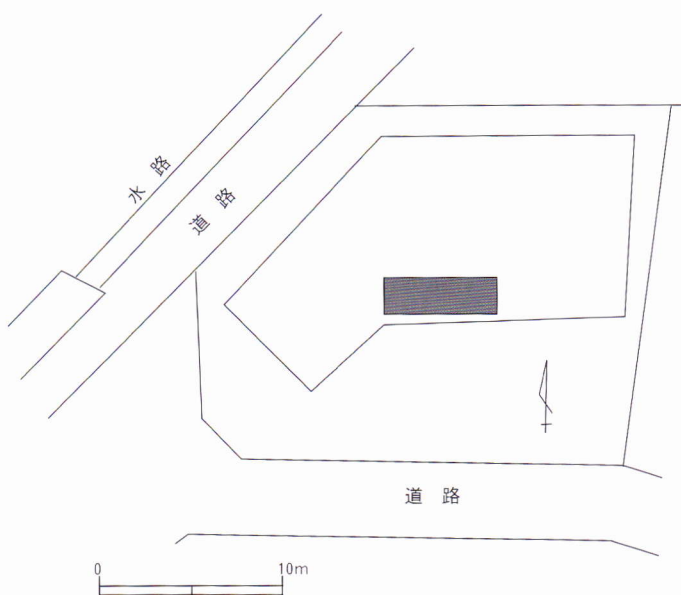
確認調査の結果、古墳時代中期から後期の溝1条を検出した。検出した遺構が溝1条であったこと、出土した遺物も少なかったことから、対象地周辺に集落域が存在する可能性は低く、溝などの存在から生産域に近い可能性も想定できる。



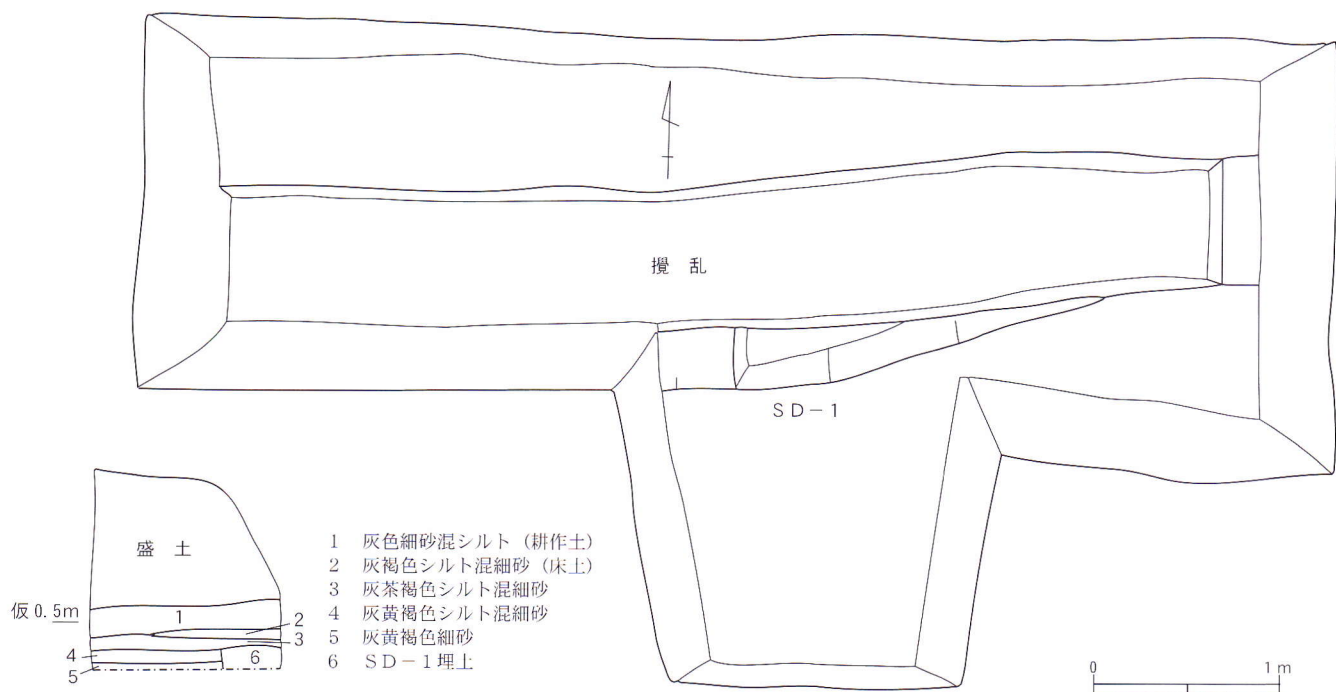
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平・断面図

②不
 〔線
 〔土
 〔面
 〔積
 地上
 範囲
 (第
 有
 跡南
 落ち
 れ、
 の南
 ら鎌
 今回
 され
 現
 堆積
 ルト
 ~200
 灰色細
 を含む
 約40c
 が堆積
 第4
 区のみ
 第3区
 地に付
 ら造成
 想定で
 遺構
 層上面
 性のあ
 素掘り
 認した
 遺物
 区の第
 土師器
 区の第

⑦有功遺跡第7次確認調査

〔経緯〕 宅地造成建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市六十谷1117番1

〔面積〕 42.80㎡（敷地面積980.89㎡）

〔概要〕 有功遺跡（遺跡番号77）は、紀ノ川北岸の台地上に位置する。遺跡は南北約450m、東西約350mの範囲をもつもので、遺物散布地として周知されている（第1図）。

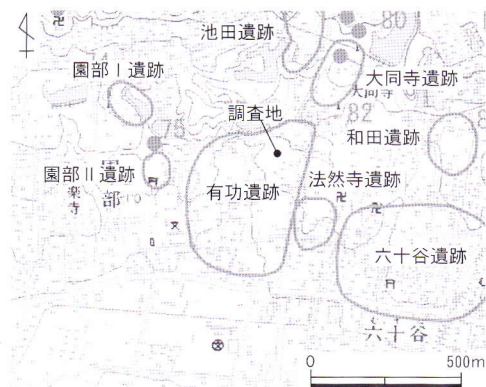
有功遺跡では6次の発掘調査が実施されている。遺跡南東隅で行われた第3・4次調査では、弥生時代の落ち込み、鎌倉時代のピット・土坑・溝などが検出され、集落域の存在が確認された。また、今回の調査地の南西に位置する第5・6次調査では平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物や溝などが確認されている。今回の調査は遺跡の北東部において、宅地造成が計画されたため、事前の確認調査を行った（第2・3図）。

現地表面下、現代の水田耕作土（第1層）が約20cm堆積しており、その床土と考えられる黄褐色細砂混シルト（第2層）が5～15cm堆積する。その下に、約5～20cmの灰色シルト混細砂（第3層）、約20～60cmの暗灰色細砂混シルト（第4層）、約20cmの地山のブロックを含む灰褐色～黄褐色のシルト混細砂（第5～9層）、約40cm以上の礫を含む明黄褐色シルト混細砂（第10層）が堆積する（第4図）。

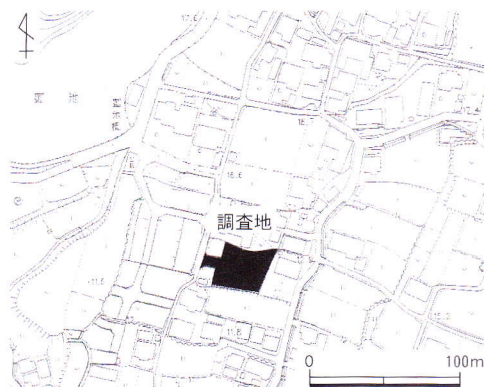
第4～9層は第3区のみ確認できる。第3区が丘陵の傾斜地に位置することから造成土の可能性が想定できる。

遺構は第1区第4層上面で近世の可能性のある南北方向の素掘り小溝1条を確認した（第4図）。

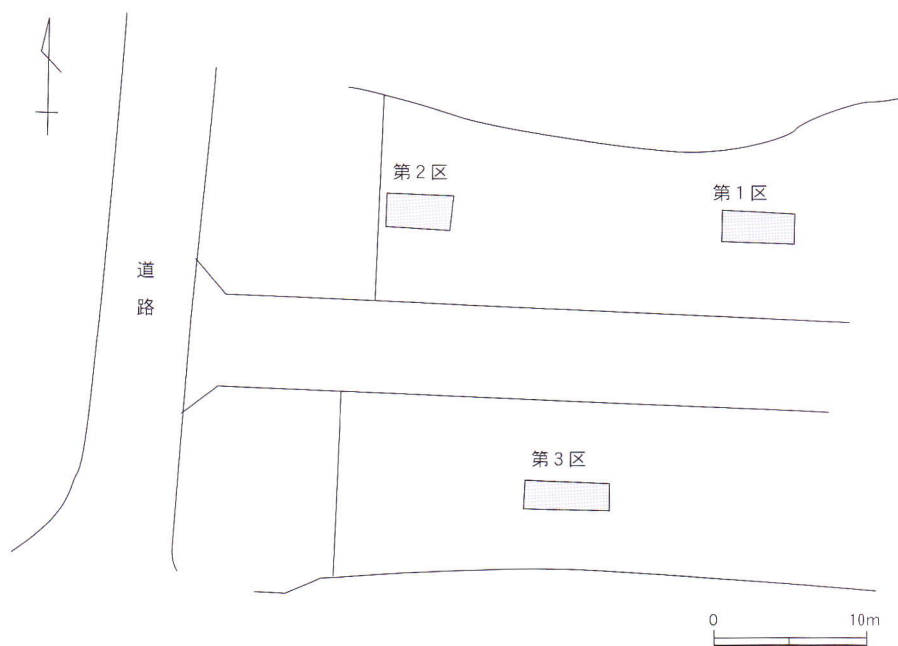
遺物は、第1・2区の第3層において土師器、瓦器、第3区の第4～9層で



第1図 位置図

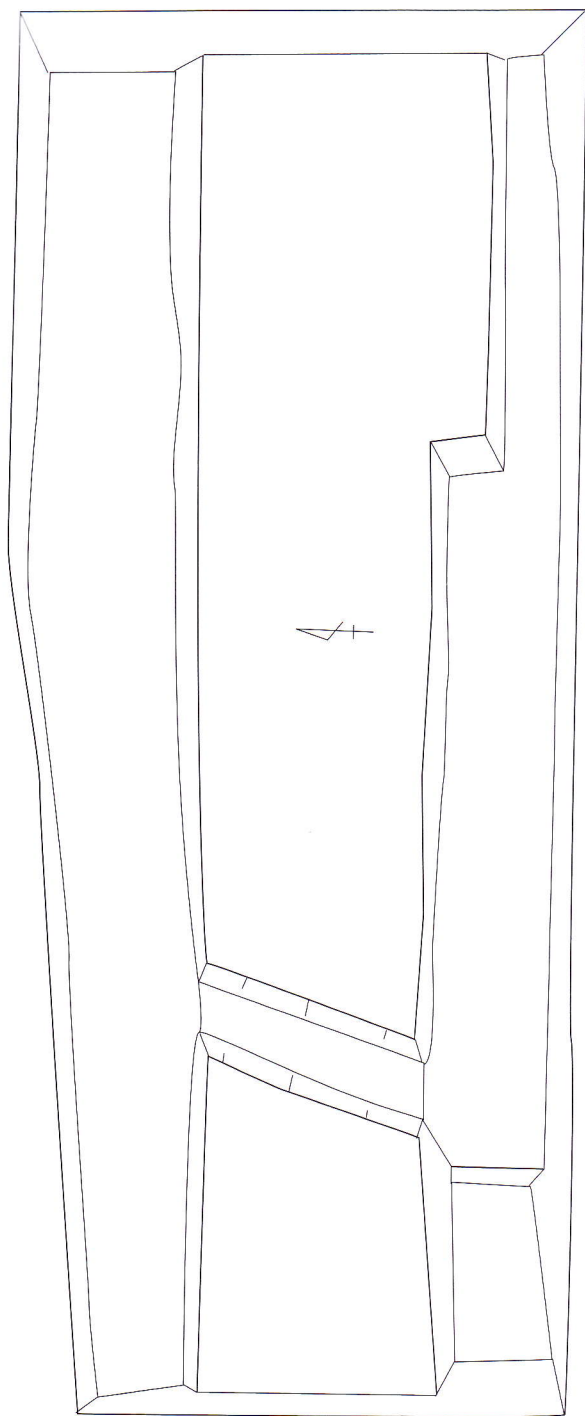


第2図 調査対象地

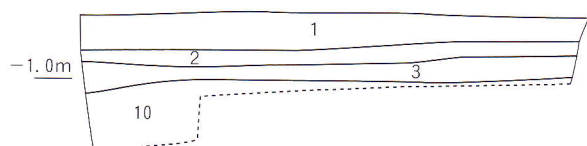
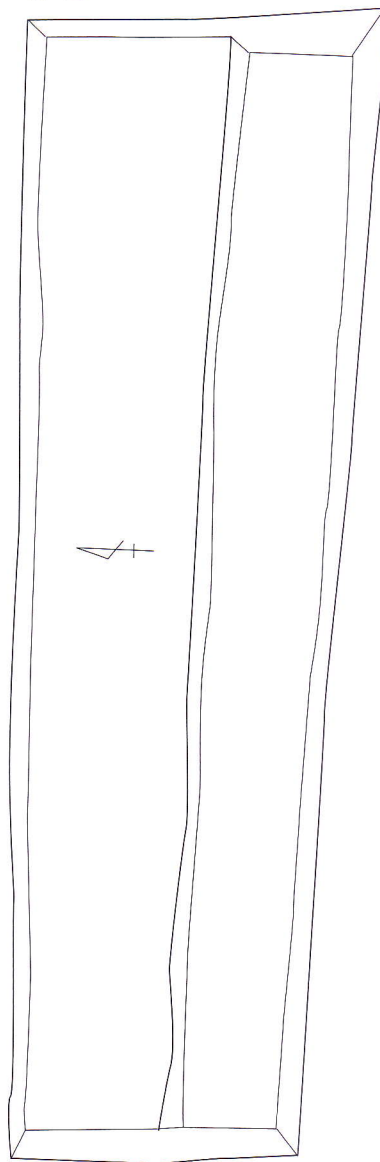


第3図 調査区位置図

第1区



第2区



- 1 灰色細砂混シルト
- 2 黄褐色細砂混シルト
- 3 灰色シルト混細砂
- 10 明黄褐色シルト混細砂

第4図 調査区平・断面図



第5図 第3区平・断面図

須恵器、黒色土器、瓦器小片が出土した。

確認調査の結果、近世以前にさかのぼる遺構は確認できなかった。第1・2区と第3区を比較すると、0.4～0.5mほど第3区が低くなっており、第3区が丘陵の斜面地にあたる。第1・2区において、第3層の下位は砂岩の風化礫が露出する状況であり、丘陵斜面地を耕作地などに造成する際、削平を受けている可能性も想定される。また、造成土と考えられる第3区の第4～9層からは小片であるが須恵器、中世土師器、黒色土器、瓦器が出土しており、削平を受けていることを考慮すると周辺に当該期の遺構が存在していた可能性も想定できる。

②8 磯脇遺跡確認調査

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市本脇263番2

〔面積〕 28.26m² (敷地面積919.59m²)

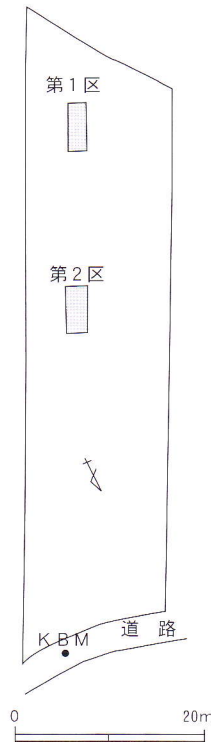
〔概要〕 磯脇遺跡 (遺跡番号37)

は東西約120m、南北約80mの規模をもつ遺跡で、砂州帯に立地する (第1図)。今回の調査は、遺跡の南東隅の位置で、集合住宅建設が計画されたため、事前の確認調査を行った (第2・3図)。

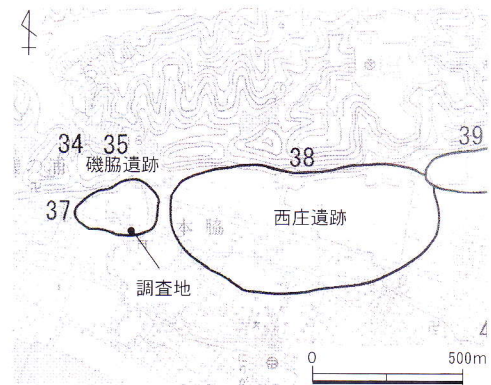
現地表面下、約60cmが造成土で、その下に約20~26cmのにぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂 (第1層)、約14~18cmの暗褐色 (10YR3/3) 細砂 (第2層)、約12~20cmの褐色 (10YR4/4) 細砂 (第3層)、約20~28cmのにぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 (第4層)、約12~22cmのにぶい黄褐色 (10YR5/3) (第5層)、約

4cm以上のオリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細砂 (第6層) が堆積する (第4図)。第3~5層から土師器・須恵器・瓦器が出土した。第6層以下は遺物を含まないことから自然堆積層であると考え。

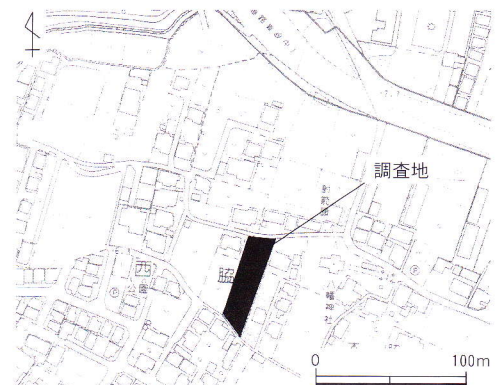
確認調査の結果、遺構はなかったが、第3~5層で中世の希薄な包含層を確認した。遺物は少量で摩滅しているものも多いことから、調査地周辺に遺構が展開している可能性は低いと考える。



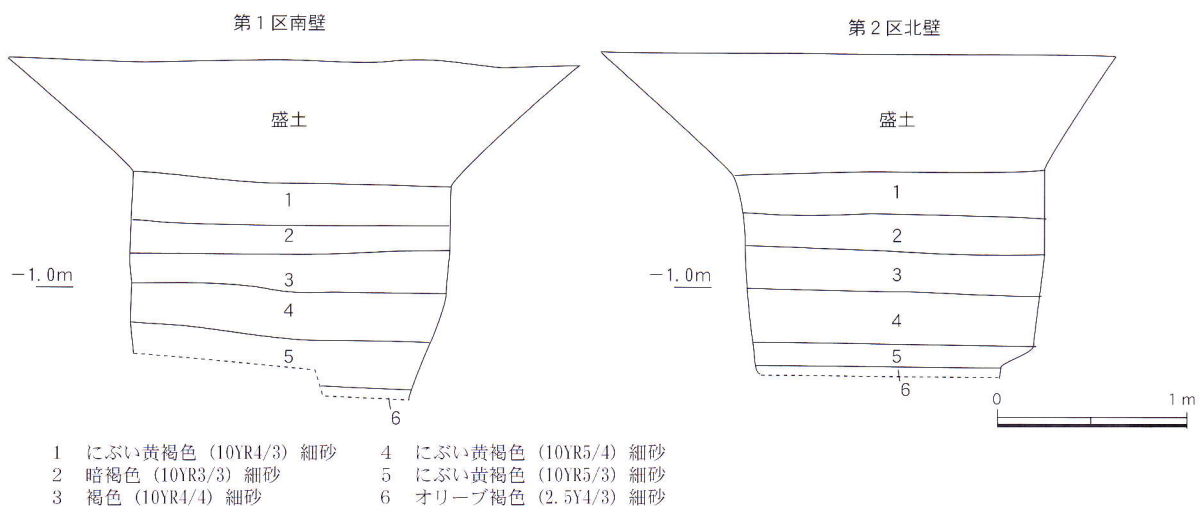
第3図 調査場所



第1図 位置図



第2図 調査対象地



第4図 調査区断面図

㊹明王寺遺跡確認調査

〔経緯〕 社会福祉施設建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市明王寺16番1

〔面積〕 58.20㎡（敷地面積1827.01㎡）

〔概要〕 明王寺遺跡（遺跡番号416）は、紀ノ川南岸に位置する。遺跡は南北約150m、東西約250mの範囲をもつもので、奈良時代から室町時代の遺物散布地として周知されている（第1図）。

今回の調査は遺跡の中央部において、社会福祉施設建設が計画されたため、事前の確認調査を行った（第2・3図）。

現地表面下、現代の水田耕作土（第1層）が14～26cm堆積しており、その床土と考えられる黄褐色細砂混シルト（第2層）が4～10cm堆積する。その下に、4～16cmの灰黄褐色細砂混シルト（第3層）、20～24cmの黄褐色シルト（第4層）、約20cm以上の茶褐色シルト（第5層）が堆積する（第4図）。

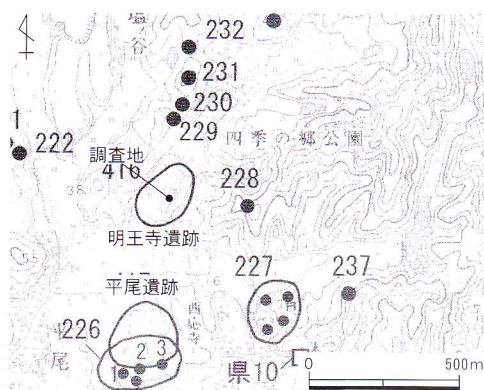
第3層は瓦器、中世土師器小片を含み、近世の遺物は出土しなかったことから中世の希薄な包含層の可能性がある。第4層以下は遺物を含まないことから、自然堆積層であると考えられる。

遺構は第4層上面で中世の可能性のある南北方向の溝1条（SD-1）、鎌倉時代に埋没する自然流路を1条（SD-2）確認した（第4～6図）。

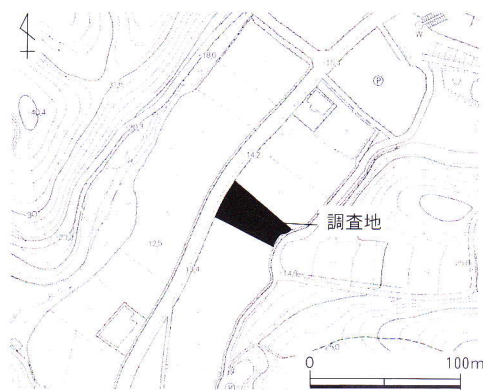
SD-1 第4～6区で同一の溝を検出した。幅約0.3m、深さ0.3～0.4mを測る。底面のレベルより南に向かって低くなっている。溝の埋土からは遺物は出土しなかった。

SD-2 第2区で自然流路の東端、第1・3区で自然流路の堆積を確認した。推定で幅20m以上、深さ0.9m以上を測る。溝埋土の最上層より退化した高台をもつ瓦器碗が出土した。高台の特徴より鎌倉時代に位置づけられる。そのため、自然流路は鎌倉時代には埋没していたものと考えられる。

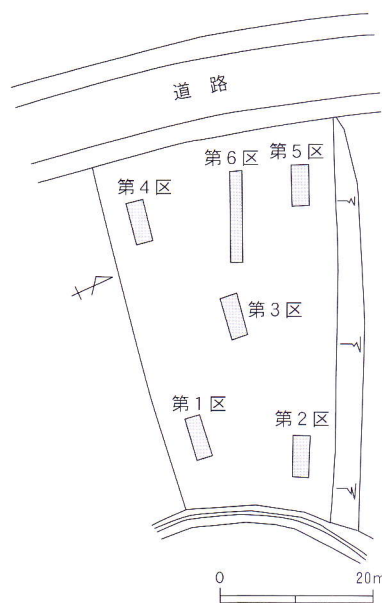
確認調査の結果、中世の可能性のある溝、鎌倉時代に埋没する自然流路を確認した。遺構、遺物ともに少なく、対象地のほぼ半分近くが自然流路に含まれる。また、地形的にも谷部にあたるため、周辺に居住域が展開する可能性は低いものと考えられる。



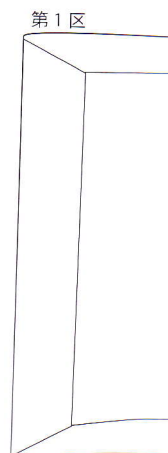
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



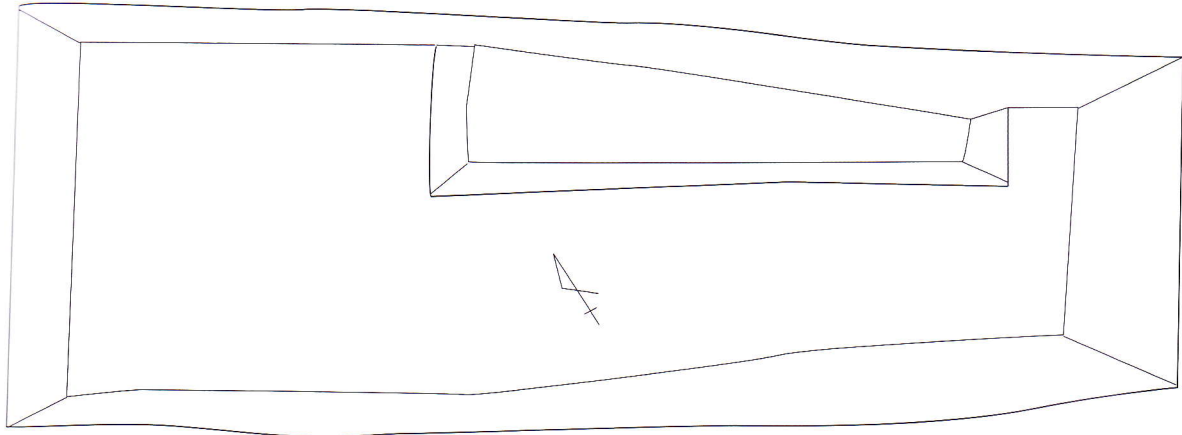
- 1 灰褐色細砂混シルト
- 2 黄褐色細砂混シルト
- 3 灰黄褐色細砂混シルト
- 4 灰色シルト
- 5 暗灰色シルト
- 6 灰白色細砂混シルト
- 7 灰白色中砂
- 8 暗灰色細砂混シルト
- 9 灰白色シルト
- 10 灰黄褐色シルト

第2

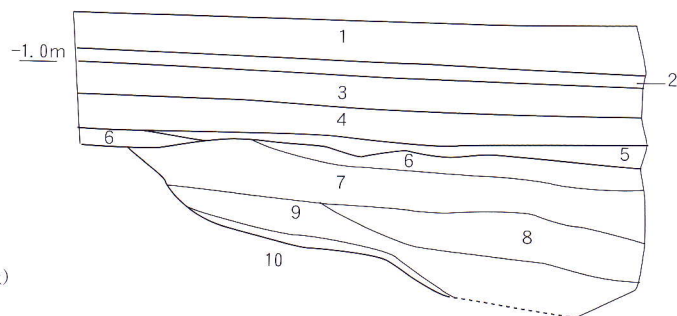
-1.0m

0

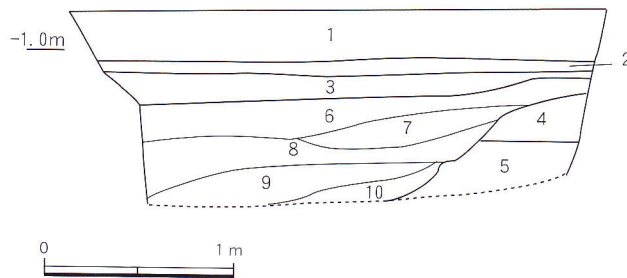
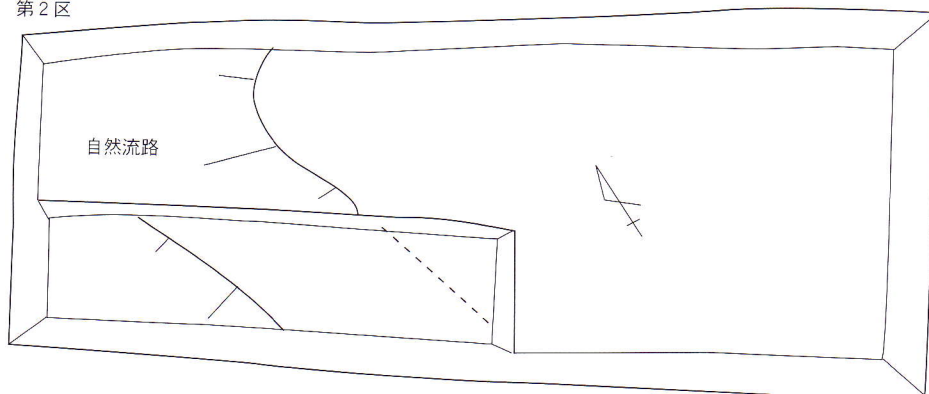
第1区



- 1 灰褐色細砂混シルト
- 2 黄褐色細砂混シルト
- 3 灰黄褐色細砂混シルト
- 4 灰色シルト (自然流路埋土)
- 5 暗灰色シルト (自然流路埋土)
- 6 灰白色細砂混シルト (自然流路埋土)
- 7 灰白色中砂 (自然流路埋土)
- 8 暗灰色細砂混シルト (自然流路埋土)
- 9 灰白色シルト混中砂 (自然流路埋土)
- 10 灰黄褐色シルト混中砂 (自然流路埋土)



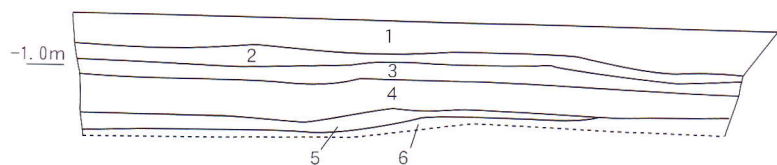
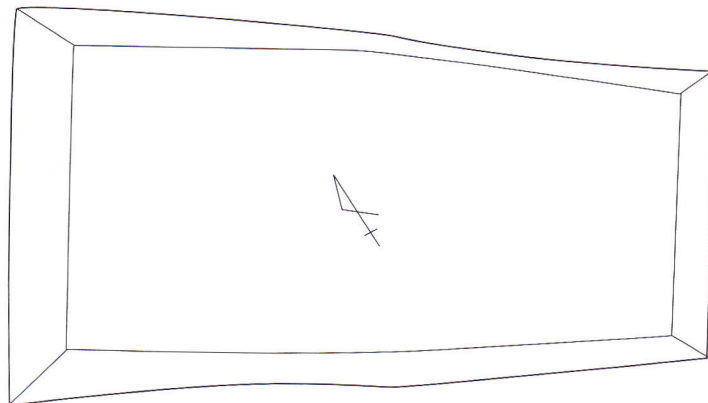
第2区



- 1 灰褐色細砂混シルト
- 2 黄褐色細砂混シルト
- 3 灰黄褐色細砂混シルト
- 4 黄褐色シルト
- 5 茶褐色粗砂混シルト
- 6 灰白色シルト (自然流路埋土)
- 7 灰白色細砂混シルト (自然流路埋土)
- 8 灰色細砂混シルト (自然流路埋土)
- 9 灰色シルト混細砂 (自然流路埋土)
- 10 灰褐色シルト混中砂 (自然流路埋土)

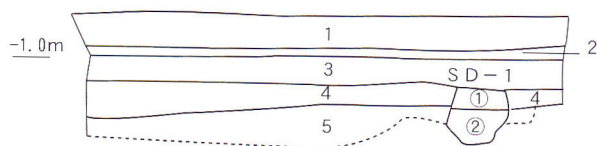
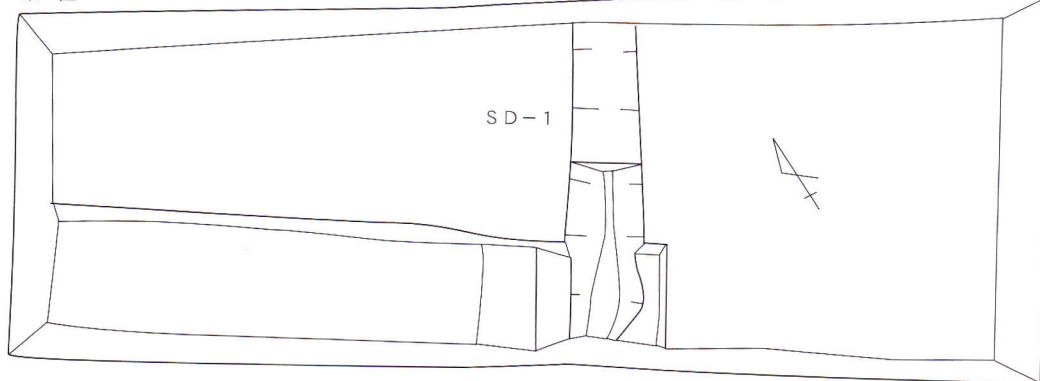
第4図 第1・2区平・断面図

第3区



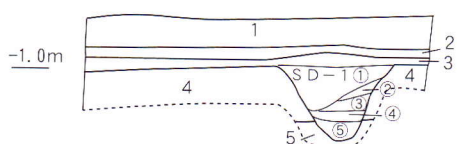
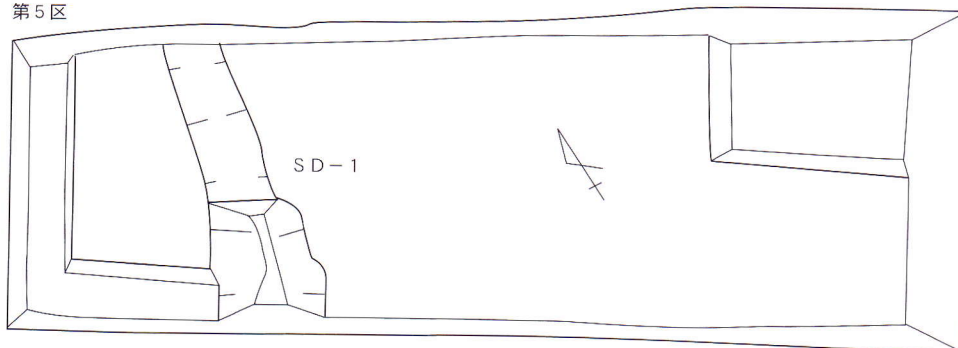
- 1 灰褐色細砂混シルト
- 2 黄褐色細砂混シルト
- 3 灰黄褐色細砂混シルト
- 4 暗灰色シルト
- 5 灰白色シルト
- 6 灰黄褐色中砂

第4区



- 1 灰褐色細砂混シルト
- 2 黄褐色細砂混シルト
- 3 灰黄褐色細砂混シルト
- 4 黄褐色シルト
- 5 茶褐色シルト
- SD-1 ① 灰色細砂
- ② 灰色中砂

第5区

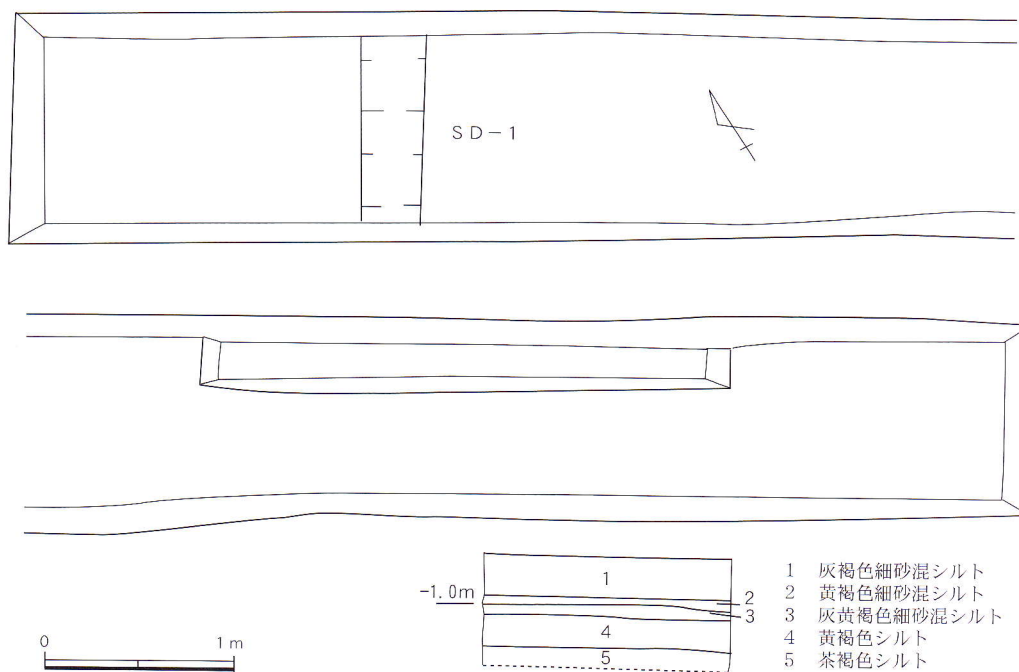


- 1 灰褐色細砂混シルト
- 2 黄褐色細砂混シルト
- 3 灰黄褐色細砂混シルト
- 4 黄褐色シルト
- 5 茶褐色粗砂混シルト
- SD-1 ① 灰黄褐色細砂混シルト
- ② 黄褐色細砂混シルト
- ③ 灰色細砂
- ④ 黄褐色シルト混中砂
- ⑤ 灰色中砂



第5図 第3～5区平・断面図

第6区



第6図 第6区平・断面図

(4) 財団法人和歌山市都市整備公社実施の発掘調査概要

①太田・黒田遺跡 第62次確認調査 (調査一覧22)

1. 調査の経緯と経過

太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流域南岸の和歌山平野ほぼ中央部に位置するJR和歌山駅東側の和歌山市太田から黒田にかけて広がる遺跡で、平野部でも微高地にあたる地点に位置し、数多くの遺跡が分布する地域に所在する。この遺跡は、東西約500m、南北約850mの範囲であり、これまで61次にわたる発掘調査及び確認調査が行われ、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡として周知されている。これらの調査では、竪穴建物や井戸、溝、土坑墓、土器棺墓などの遺構、銅鐸や多量の壺、甕などの弥生土器が発見され、弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模を誇る集落跡であることが確認されている。また古墳時代から江戸時代にかけての遺構、遺物を多数検出している。特に、室町時代には豊臣秀吉による水攻めによって滅ぼされた太田城跡の推定地が重複し、太田城に関わるとみられる濠状の遺構などが検出されている。今回の調査地は、太田・黒田遺跡の北西部に位置し、弥生時代中期の溝から木製鋤が出土した第47次調査の北西約80mに位置する(第1図)。

今回の調査は、和歌山市黒田一丁目4番9・11において計画された学習塾建設に伴う事前の確認調査として実施することになったもので、この建設用地が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である太田・黒田遺跡(遺跡番号327)の範囲内にあたる。調査は、財団法人和歌山市都市整備公社が和歌山市から委託を受けて実施した。また現地における調査は、平成22



第1図 調査対象地位置図(数字番号は既往の調査次数を示す。)

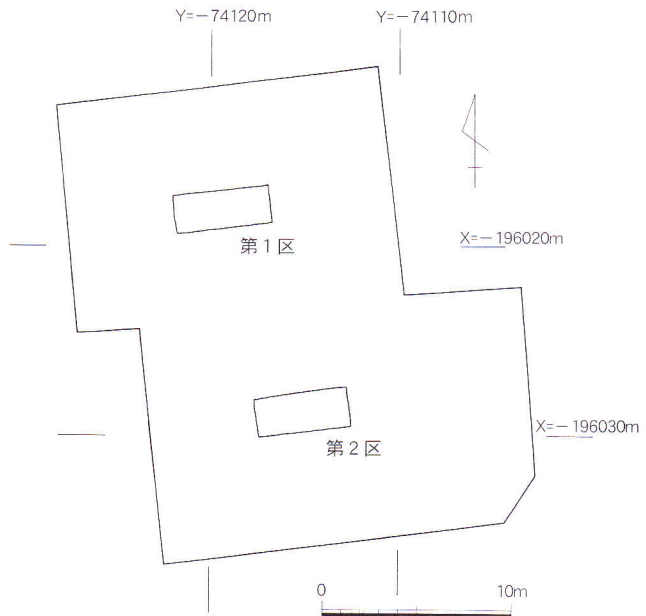
年6月7日から同年6月11日までの1週間の期間で行った。

2. 調査の方法と概要

(1) 調査の方法

調査区は、工事計画範囲の北半部及び南半部に2ヶ所の調査区を配置した。各区の名称は第2図に示した通り北側に位置するものを第1区、南側に位置する調査区を第2区とし、第1・2区とも南北幅2m、東西長5mの調査区として設定した。

調査の方法は、当地が既存建物を解体した宅地（図版1上）であったことから、表層の造成土及び第4層までの堆積層について、重機による掘削を慎重に行い、第5層以下の遺物包含層調査と遺構の調査を人力掘削によって行った。溝などの遺構掘削については、基本的に実施しないものとしていたが、第1区で検出した大規模な遺構の状況確認のため文化振興課担当者と協議し、調査区内での一部もしくは全体の掘削を行うこととなった。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。



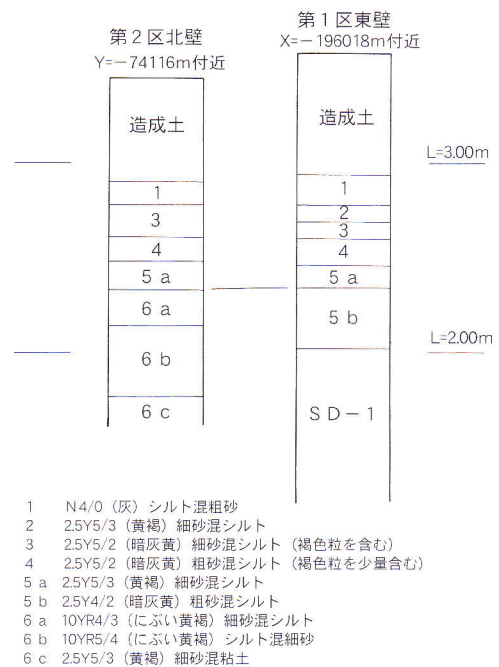
第2図 調査地区割図

図面による記録は、平面図に関しては国土座標軸（旧日本測地系）を基準とした値を使用し、このラインを基準に1/20の縮尺を用いた手実測を行った。また遺跡の水準は、国家水準点（T.P.値）を基準とした。

(2) 基本層序

調査地の基本層序は第3図に示した通りである（図版1）。

調査地は今回の調査に至る直前まで建物が存在し、この建物を解体したところで今回の確認調査を開始した。このため遺構面の一部もしくは上位堆積層の一部がこの建物の基礎等によって攪乱を受けていた。また、部分的に存在した旧耕作土（第1層）の上部には既存建物に伴う整地層が50～60cmの厚さで堆積していた。第1層は灰色系のシルト混粗砂の旧耕作土である。第2層は10cm程度の黄褐色細砂混シルトで第2区



第3図 土層柱状模式図

の中央部に存在した旧水田畦畔から西側には存在しない。第3層は暗灰黄色系の細砂混シルトで褐色粒を含む特徴をもつ。また第4層も厚さ10～15cm程度の第3層に類似する堆積である。第5層は黄褐色系の細砂混シルトで、2単位に細分した上位にあたる第5a層は約15cmの厚さでほぼ水平に堆積する。また第1区でのみ確認した第5b層は30cm程度の厚さをもつ暗灰黄色の粗砂混シルトである。この第5層の下面が今回の調査における遺構を確認した遺構面である。この遺構面を形成する第6層は、細砂を含むシルト質及び粘土質層で3単位に細分できる。

以上の土層堆積時期については、出土遺物の大半が細片で明らかにできていない。しかし、第5a層については奈良時代頃の堆積とみられる。

なお、本確認調査終了直後に行った本発掘調査（第64次調査）によって第1区で検出した第5b層は遺構覆土であることが判明している。

3. 遺構

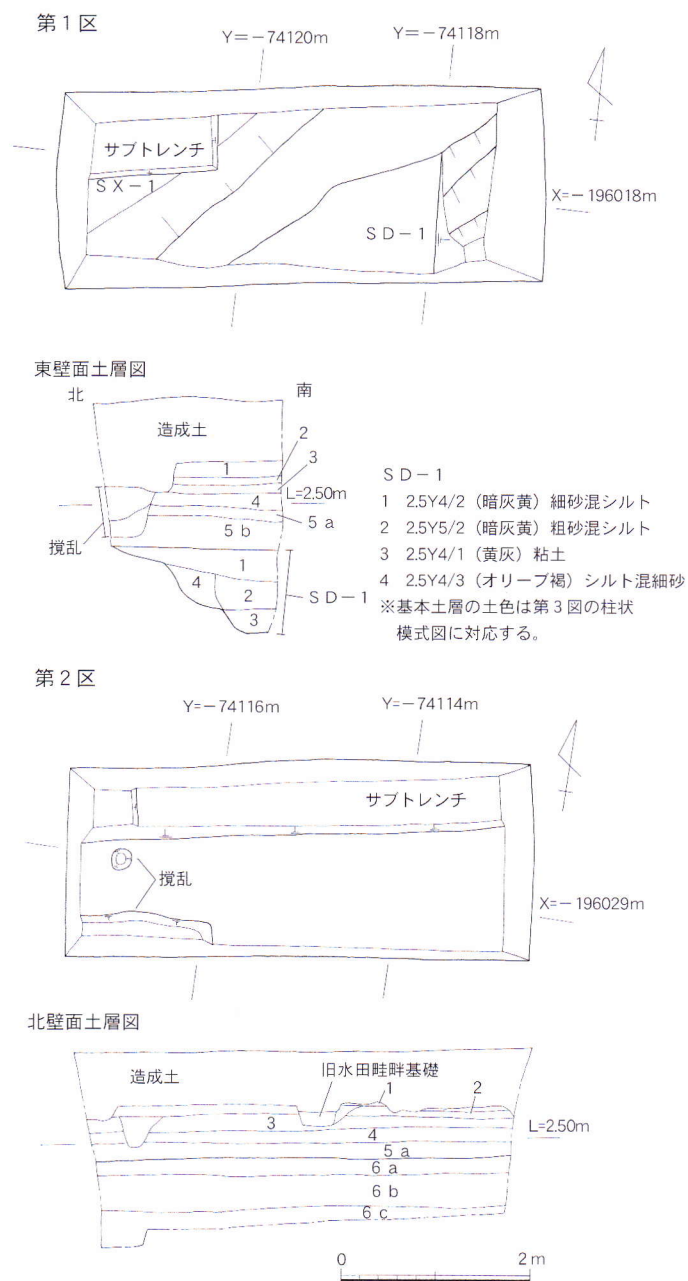
今回の調査では、第6a層上面（標高約2.30m）が遺構面であり、第1区において古墳時代を中心とした遺構を検出した。しかし、第2区も比較的安定した遺構面がほぼ水平に堆積し、第2区周辺にも遺構が存在する可能性が考えられた。

以下、調査区ごとに遺構等の説明を行う。

【第1区】（第4図、図版1）

第1区では調査区のほぼ中央部を東西に横切る遺構ラインを2条検出し、調査区内の大半が遺構であるものとみられた。この状況下、文化振興課担当者と協議し、東側に位置した遺構（SD-1）については東壁直下において幅60cmのサブトレンチ状に掘削し、また西側に検出した遺構（SX-1）については下層確認のためのサブトレンチ設定も含め調査区内での全面掘削を行うこととなった。この結果、SD-1は比較的規模の大きい溝の北肩部であり、SX-1は水田状の不明遺構であることが判明した。

SD-1は検出幅1.8m、推定幅4.0m、検出長3.3mの溝で、深さ90cmの底面は標高1.1mである。この溝の方向性は、N-56°-Eである。遺構覆土の状況は4単位に細分でき、上位は暗灰黄色系のシル



第4図 遺構平面図及び土層断面図

ト質土で下位層は黄灰色の粘土質となる。

SX-1は幅1.5m以上、検出長2.5mの水田状の遺構で深さ25cm前後である。遺構覆土は上下2単位に細分でき、上位はオリーブ褐色、下位は暗灰黄色の色調とともにシルト混細砂である。

なお、SX-1掘削後の遺構底面において北壁直下に下層調査のためのサブトレンチを設定し、標高1.35mまで掘削を行ったものの、遺構面等の確認にはいたっていない。またサブトレンチ内からの出土遺物は認められなかった。

【第2区】(第4図、図版1)

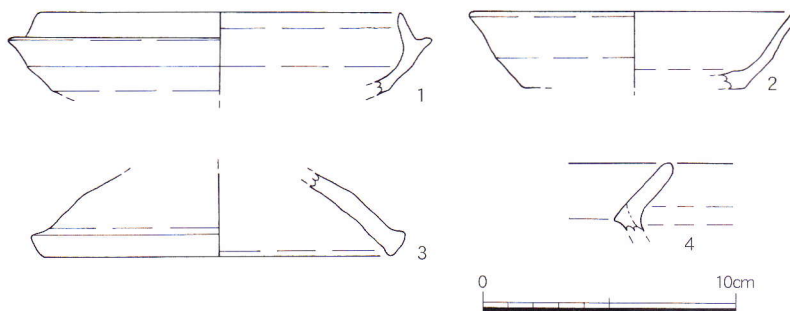
第2区では第6a層上面の遺構検出において遺構は確認できず、西半部に攪乱坑を2ヶ所検出し掘削した。この後、北壁直下にサブトレンチを設定し、標高1.40mまで掘削した。この結果、明確な遺構面は確認できず、第6層が3単位に細分できることを確認した。サブトレンチ内からの出土遺物は、第6a層から弥生土器の細片が1点出土したのみである。

4. 遺物

遺物は、遺構の覆土や第5・6層の遺物包含層から遺物収納コンテナ1箱分が出土した。これら遺物の内容は、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、国産陶磁器、瓦、土製品などがある。なかでも、遺構覆土からの出土遺物では、SD-1から土師器のタタキ甕の破片が、SX-1から土師器のハケメ調整を施した甕破片があり、ともに古墳時代の範疇におさまるものと考えられる。

なお、出土遺物の中で図示できるものを第5図に示した。

1・2は須恵器である。
1は口径14.2cmの杯身で、内傾してのびる口縁端部は丸く仕上げている。2も口径12.8cmの杯身で、平底になるものとみられ、口縁部



第5図 遺物実測図

は大きく外反させてシャープに仕上げている。3は底径13.6cmの弥生土器脚部である。端部はやや上下に肥厚させて丸く仕上げている。4は土師器甕の口縁部で頸部から屈折してのびる口縁端部を丸く仕上げている。

これらの出土位置は、1が第1区の第5b層、2が第2区の第5a層、3・4が第1区のSD-1である。

5. まとめ

今回の調査成果は、比較的調査例の少なかった遺跡北西部においてその様相の一端を明らかにしたことである。当調査地周辺では、第47次調査や第56次調査が行われている(第2図)。第47次調査では、2面の遺構を検出し、上位にあたる第1遺構面(標高2.5m前後)では弥生時代中期の土坑2基や溝4条、古墳時代の溝1条、奈良時代の溝1条を、また下位にあたる第2遺構面(標高2.2m前後)では弥生時代中期初頭の溝1条やピットなどを確認している。さらに、第56次調査では1面の遺構面(標高2.55m前後)を検出し、古墳時代前期の溝1条、後期の溝3条や奈良時代初頭の溝1

条などを確認している。

今回の調査において検出した遺構面（標高2.3m前後）は、時期的にみて、第47次調査の第1遺構面及び第56次調査検出の遺構面につながるもので、本調査区では20cm程度低くなることが明らかになった。また第47次調査で検出した第2遺構面につながる遺構面は確認できていない。また遺構の時期として、今回検出した遺構がともに古墳時代の範疇とみられることや先述の2例の調査例、さらに第56次調査の東側にあたる第51次調査で確認されている古墳時代前期の竪穴建物2棟の検出例など、遺跡北西部では古墳時代を中心とする遺構分布の展開が明らかとなりつつある。

最後に、本確認調査によって得られた成果をもとに、終了直後に行った本発掘調査（第64次発掘調査）によって遺構の詳細が明らかとなっている。この詳細については、今後に報告する予定である。

【参考文献】

和歌山市教育委員会・財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2004「16.太田・黒田遺跡第51次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報8』

財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2001『太田・黒田遺跡第47次発掘調査概報』

財団法人和歌山市都市整備公社 2008「2.太田・黒田遺跡第56次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報－平成17年度（2005年度）－』

②太田・黒田遺跡第65次発掘調査（調査一覧40）

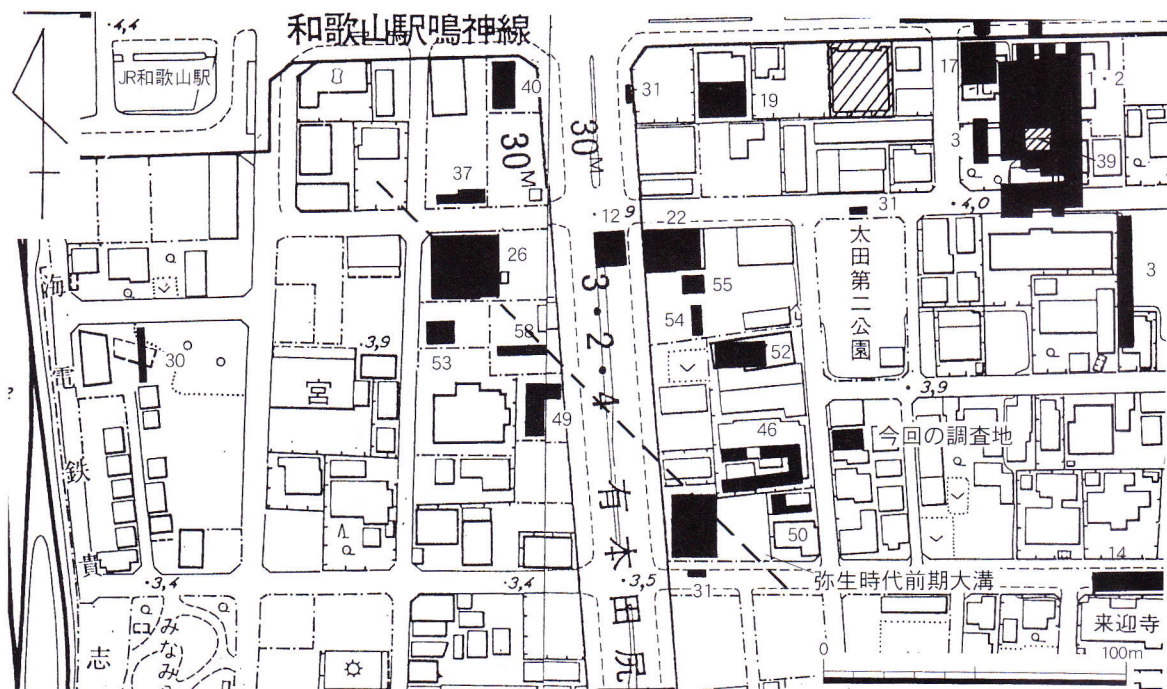
1. 調査の経緯と経過

太田・黒田遺跡は、和歌山平野の紀ノ川南岸平野部に立地する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。太田・黒田遺跡が立地するJR和歌山駅の東側一帯は、標高4.0m前後を測る微高地にあたり、秋月や鳴神地区とともに平野部でも古くから人々が生活を営んできた地域である（遺跡分布図参照P.3～4）。

そのなかでも太田・黒田遺跡は、東西約500m、南北約850mの範囲に広がる県内最大規模の集落遺跡であり、これまでに64次を数える発掘調査が行われている。過去の調査では、弥生時代前期の2条の大溝や竪穴建物及び土坑、中期の竪穴建物や溝及び井戸、土器棺墓、後期の溝など弥生時代前期から中期を中心とする遺構群の他、古墳時代の竪穴建物及び溝や井戸などの遺構群、飛鳥時代から奈良時代の溝や井戸、さらに平安時代から鎌倉時代の溝や井戸、また室町時代から江戸時代の井戸や土坑など長期にわたる多種多様な遺構群が検出されている。

遺物では、直柄広鋤及び一本平鋤などの木製農耕具、銅鐸や銅鏃などの金属器の他、絵画土器（高床建物・鹿）を含む多量の弥生土器が出土しており、弥生時代以降では古墳時代から江戸時代にかけての遺物も多数出土している。さらに遺跡の南半部は、日本三大水攻めのひとつとして室町時代に秀吉が水攻めを行った太田城跡の推定地にあたり、近年の調査研究によってその所在地についても明らかにされつつある。

今回の調査地は、JR和歌山駅の南東約250mに位置し、太田・黒田遺跡の中央部南側、また太田城跡の中央部北側にあたる。周辺における既往の調査では、南西約50mに位置する第45次調査において、北西から南東方向に延びる弥生時代前期の2条の大溝が検出されている（第1図）。またこの大溝を境として、その北及び北東側の調査（第46・50・52・54・55次）では、竪穴建物や溝及び土坑など弥生時代前期から中期中葉にかけての居住域を示す多数の遺構が検出されるとともに、弥生土器をはじめとする遺物が大量に出土している。



第1図 調査位置図（数字番号は調査次数を示す）

そのなかでも、調査地の西側に道路を隔て隣接する第46・50次調査地点では、弥生時代前期後葉の土坑及び前期末の土坑、中期初頭の竪穴建物や土坑、中期前葉から中葉にかけての溝や土坑の他、古墳時代前期から後期の竪穴建物及び溝や土坑、鎌倉時代の溝や土坑、室町時代の土坑など多数の遺構が検出されており、また弥生時代から江戸時代にかけての遺物が大量に出土している。よって、今回の調査地においてもこれら各時代の遺構及び遺物が検出される可能性が考えられた。

調査は、和歌山市太田二丁目9番2における個人住宅建築に伴う開発計画に起因し、この場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である太田・黒田遺跡（遺跡番号327）及び太田城跡（遺跡番号356）の範囲内であったため発掘調査を行ったものである。

現地における調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと、財団法人和歌山市都市整備公社が委託を受けて行った。また調査期間は、平成22年7月22日～平成22年9月29日までの約2ヶ月間で行った。

2. 調査の方法と概要

（1）調査の方法

今回の調査は、調査対象地である造成地のうち、北半部分に東西11.0m、南北6.0m、調査面積66.0㎡の調査区を設定し行った。ただし、土砂仮置場及び仮設テント設置場所等の制約から、東半分を第1区（東西5.5m×南北6.0m）、西半部を第2区（東西5.5m×南北6.0m）として2分割し、反転掘りによる調査となった。

重機による掘削は、隣接地の調査である第46・50次調査における第1遺構面である第3層（黒褐色の粗砂混シルト）上面までとし、検出した遺物包含層及び遺構、並びに下層調査のために設定したサブトレンチの掘削については人力によって行った。

平面図（1/20）による記録は、調査区の両端に仮原点を設置して行った。調査区の仮原点には、既存の3級基準点から基準点測量を行い国土座標（世界測地系）の数値を付した。また土層断面図（1/10～1/20）及び立面図（1/10）は、国家水準点（T.P.値）を基準とし、既存の3級基準点から水準点測量を行い作成した。その他、竪穴建物や溝及び土坑などのうち、遺構覆土に2層以上の堆積が認められるものについては、直交する位置に土層堆積状況を観察するためのセクションベルトを設定し、写真撮影及び土層断面図による記録を行った。また遺物の出土状態等が良好な重要遺構については、写真撮影後、遺物出土状況図及び立面図（1/10）などによる記録を行った。

遺構の覆土並びに堆積土の色調及び土質の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

（2）基本層序

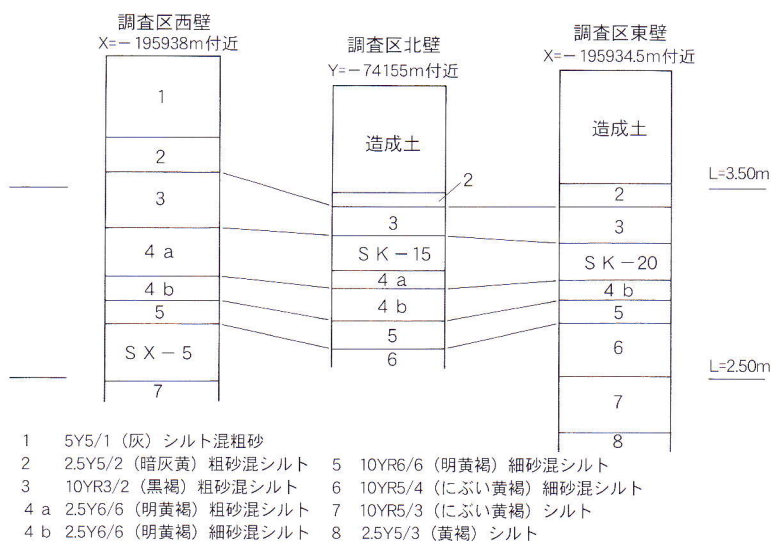
調査地の現況は、畑地及び造成地である。調査地における基本層序については、第2図に示した通りである（写真1・図版5）。まず調査地には、現表土として40～60cmの厚さで造成土及び現代の耕作土とみられる灰色のシルト混粗砂（第1層）が堆積しており、これらを除去した下面が近代の耕作土と考えられる暗灰黄色の粗



写真1 調査前の状況（南西から）

砂混シルト（第2層）である。

第3層は、厚さ20～30cmを測る黒褐色の粗砂混シルトであり、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺物を大量に含む遺物包含層である。この第3層は、調査区の南西部において厚く堆積し、北東に向かって薄く堆積するもので、その上面の標高は南西部において3.6m前後、北東部では3.4m前後を測り約20cmの高低差で低く傾斜する。またこの第3層上面は、室町時代



第2図 調査地土層柱状模式図

から明治時代の遺構を検出した遺構検出面（第1遺構面）である。第4層は、明黄褐色のシルト質土であり、土質によって2単位に細分が可能である。このうち第4 a層は厚さ20～30cmを測るもので、弥生時代中期中葉の遺物包含層である。またこの上面は標高3.2～3.3mを測り、弥生時代中期中葉から鎌倉時代の遺構を検出した遺構検出面（第2遺構面）である。第4 b層は厚さ10～20cmを測るもので、弥生時代中期前葉の遺物包含層である。この上面は標高2.9～3.0mを測り、弥生時代中期前葉から中葉の遺構を検出した遺構検出面（第3遺構面）である。第5層は、厚さ15cm前後を測る明黄褐色の細砂混シルトであり、弥生時代前期末から中期初頭の遺物包含層と考えられる。またこの上面は標高2.8～2.9mを測り、弥生時代中期前葉の遺構検出面（第4遺構面）である。第6～7層は調査区東壁面際において設定したサブトレンチ調査によって確認したもので、第6層がにぶい黄褐色の細砂混シルト、第7層はにぶい黄褐色のシルト、また第8層は黄褐色のシルトである。今回の調査では、これらの各堆積土から遺物は出土しなかった。そのうち第6層上面は標高2.7～2.8cmを測り、弥生時代前期後葉から中期初頭の遺構を検出した遺構検出面（第5遺構面）である。

第46・50次調査では、6面の遺構検出面が確認されている。これらの各遺構検出面は、最下面の第6遺構面（標高2.5m前後、弥生時代前期後葉）をのぞき、その上面の標高及び検出遺構の時期から判断して今回検出した第1～5遺構面とそれぞれ対応するものとする。

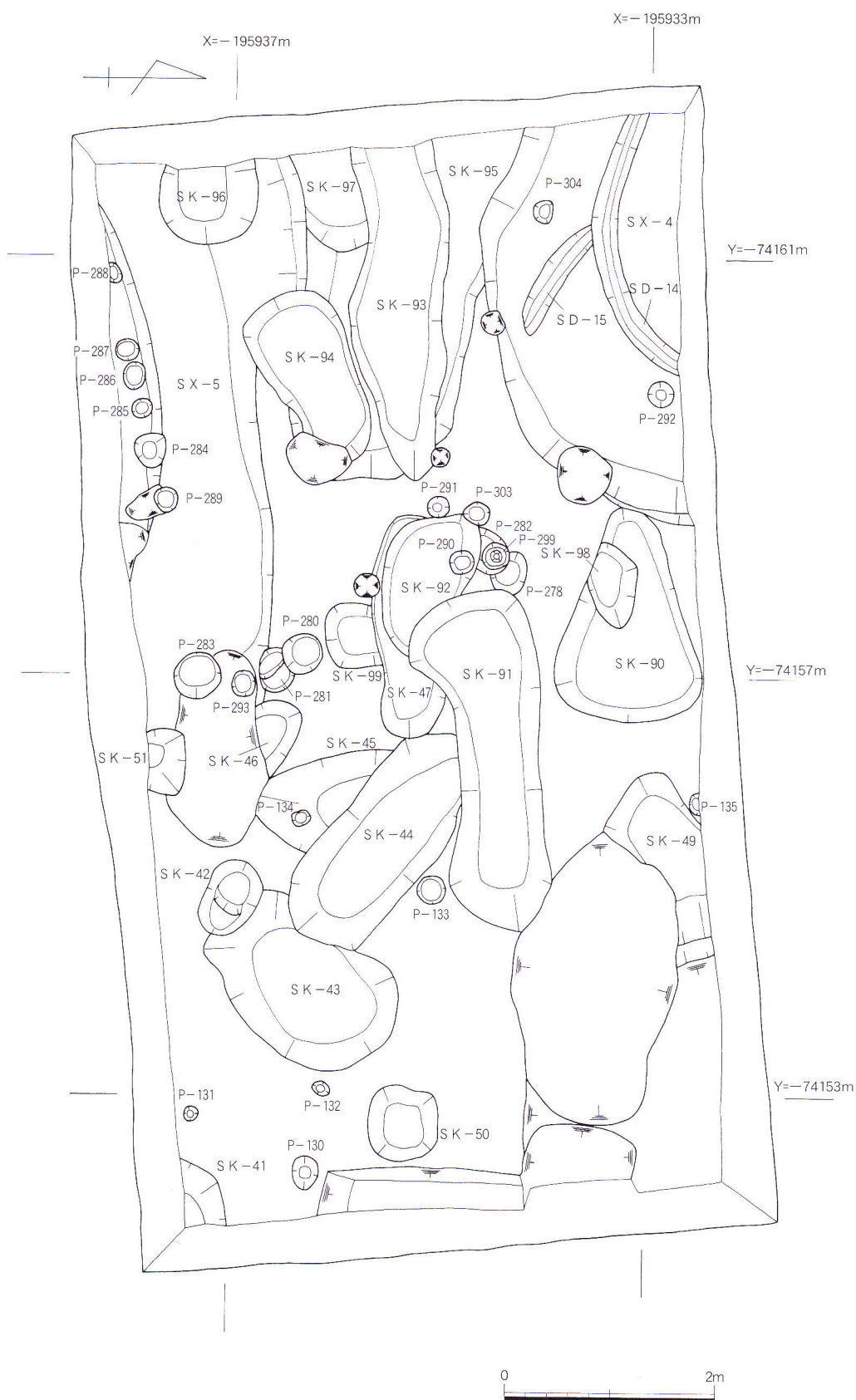
3. 遺構

今回の調査では、第3～6層上面において弥生時代前期から明治時代初頭までの各時期の遺構を多数検出した（第3・8～10・17、写真3・4、図版2）。これらの遺構群は、今回の調査の工程的な制約上、第1区及び第2区に分かれて検出している。よって今回の報告では、第1区及び第2区を合わせて図示し説明を行う。また写真図版に関しては各調査区における遺構検出状況を示すこととする。

以下、各遺構検出面において検出した遺構について古い時期のものからその概略を記述する。

第6層上面検出の遺構（第3図、図版2）

第6層上面では、弥生時代前期後葉とみられる土坑（S K - 45・49・95・97）の他、前期末から中期初頭のものと考えられる土坑（S K - 43・91・93・96）及び、遺構底面で壁溝とみられる弧状



第3図 第6層上面遺構全体平面図

にめぐる溝（SD-14）を検出したことから堅穴建物と考えられる落ち込み（SX-4）など多数の遺構を検出した。これらの遺構のうち大半をしめる土坑については、平面形が長楕円形を呈するもので、遺構覆土の下位層に炭層がみられることを特徴とする。

〔SK-49〕（第4・18図、図版3）

SK-49は、調査区の北東隅部、北壁際で検出した土坑である。この土坑は、その大半を削平され全体の形状は不明であるものの、遺構覆土は深さ33cmを測り、第3層が炭を含む黒褐色の細砂混シルトである。

遺構の時期は、遺構覆土からへら描沈線文を多条に施す弥生土器の壺（第18図1）や甕（2）などが出土したことから弥生時代前期後葉と考えられる。

〔SX-4〕（第5・19図、図版3）

SX-4は、調査区の北西隅部、北壁際において弧状を呈する掘方を検出したもので、この底面で掘方と平行する溝（SD-4）を検出した。SD-14は、幅約25cm、深さ約10cmを測るもので、その形態が堅穴建物の壁溝と類似する。

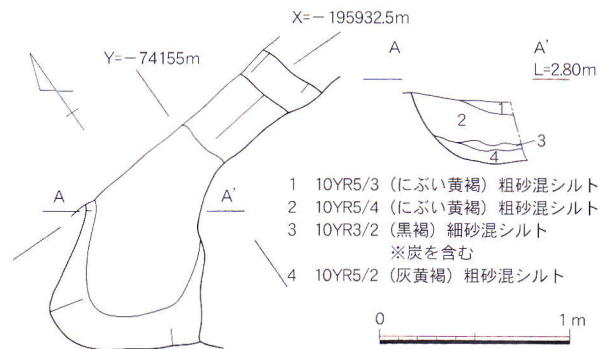
またSD-15、P-292・304の性格については不明である。

遺構の時期は、遺構覆土から2条の幅広のへら描沈線文間に細いへら描沈線文を多条に施す弥生土器の鉢（第19図11）などが出土したことから、弥生時代前期末から中期初頭と考えられる。

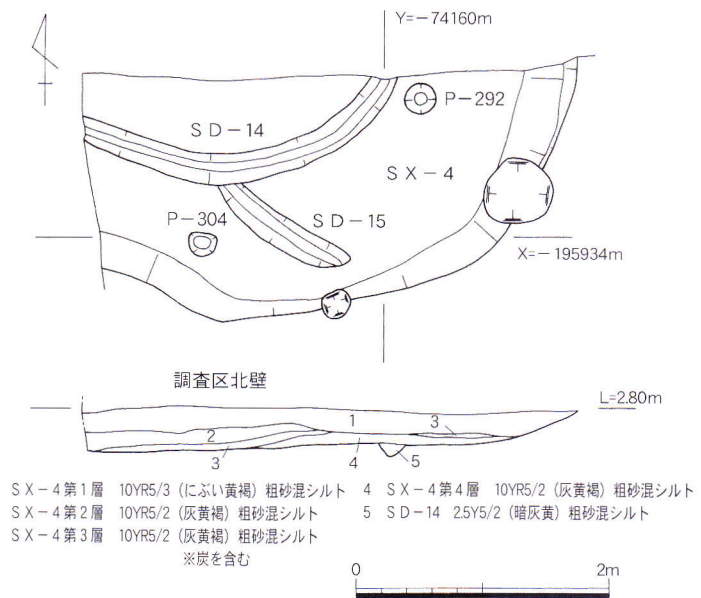
〔SK-43〕（第6・20図、図版3）

SK-43は、調査区の南東隅部において検出したもので、長径2.0m以上、短径約1.2m、深さ43cmを測る。遺構覆土は、第1層ににぶい黄褐色の粗砂混シルト、第2・3層に炭を含む堆積層を確認し、第4層に灰黄褐色の粗砂混シルトが堆積する。また第5層は炭層であり、この第5層を除去した下面が遺構底面となる。底面では、南西部において多量の土器がまとまって出土した。これらの土器を復元した結果、口縁部から体部下半にかけての遺存する壺1（第20図12）及びこれとは別個体の底部から体部にかけて遺存する壺2（13）、さらに完形の小型の鉢が1個体（14）となった。またその出土状況は、土器検出範囲の南端部に底面を上に向けた状態で壺2が、また口縁部を北にして壺1が全面に広がり、さらに鉢は壺1の中央部に位置し、壺1の破片がその上部に重なる状態であった。

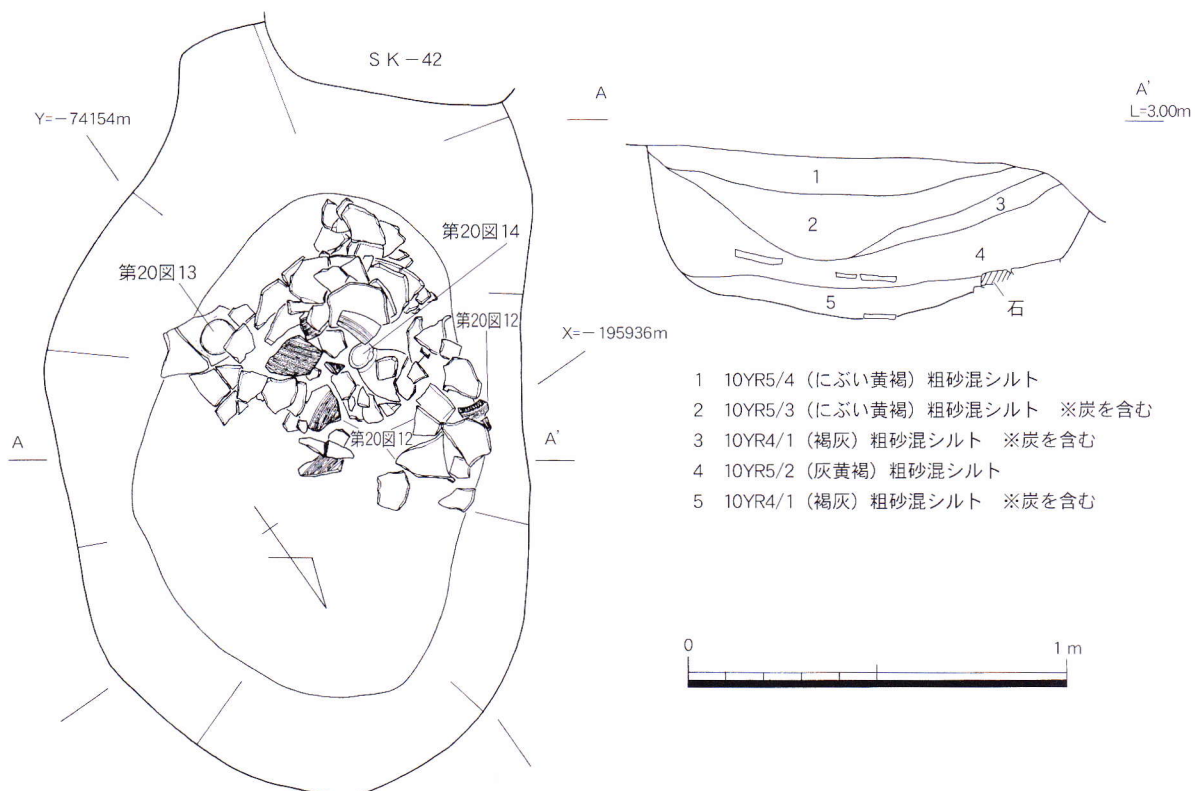
これらの土器の出土状態から考えられることは、壺1を遺構底面に横倒しにして置き、その中に小型の鉢を入れ、そして壺1の下部に壺2を被せて人為的に埋めた後、これが土圧によって潰された状況が復元できる。よって、この土坑は土器を棺として使用した土器棺墓と考えられ、また鉢



第4図 SK-49遺構平面図及び土層断面図



第5図 SX-4遺構平面図及び土層断面図



第6図 SK-43遺構平面図及び土層断面図

はその副葬品である可能性が高い。

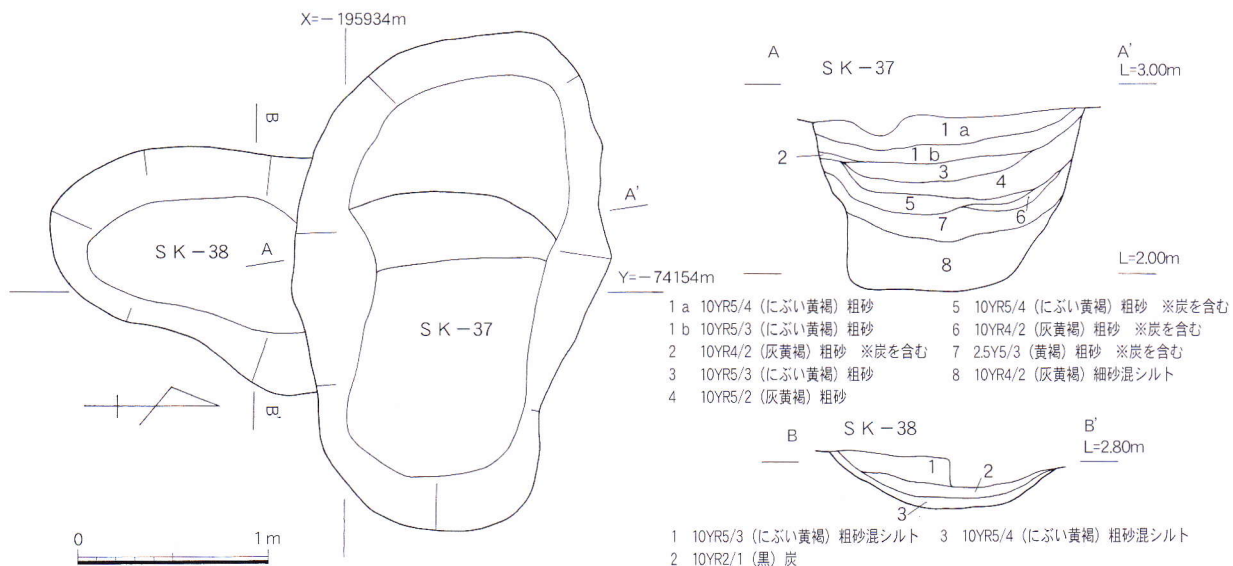
遺構の時期は、ヘラ描沈線文及び櫛描直線文を多条に施す弥生土器の壺（第20図12）などがみられることから、弥生時代前期末から中期初頭と考えられる。

第5層上面検出の遺構（第8図、図版2）

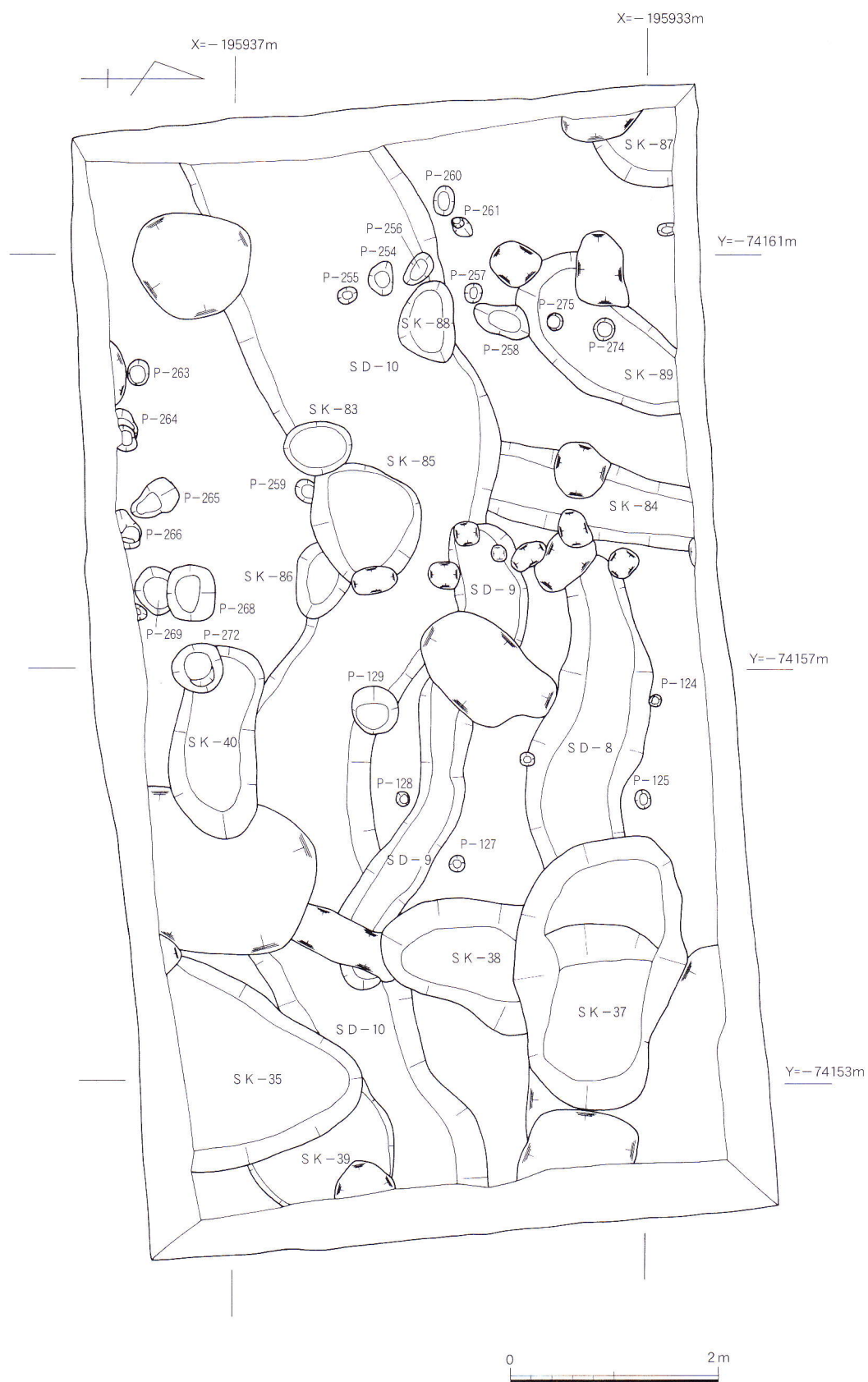
第5層上面では、調査区の全面において弥生時代中期前葉のものと考えられる土坑（SK-37・38・89）、溝（SD-8～10）及びピット（P-268）など多数の遺構を検出した。

[SK-38]（第7・21図、図版3）

SK-38は、調査区の北東隅部において検出したもので、北側はSK-37によって削平されている



第7図 SK-37・38遺構平面図及び土層断面図



第8図 第5層上面遺構全体平面図

る。規模は、長径1.3m以上、短径約1.3mを測る。遺構覆土は第2層に炭層がみられるものである。

遺構の時期は、遺構覆土から櫛描直線文を施す弥生土器の広口壺（第21図15）などが出土したことから弥生時代中期前葉のものと考えられる。

[SK-37]（第7・21図、図版3）

SK-37は、調査区の北東隅部において検出したもので、長径2.7m、短径1.7m、深さは西側で72cm、東側で89cmを測る平面形が楕円形を呈する土坑である。遺構底面は西側において一段高くなる。遺構覆土は第1～4層が黄褐色系の粗砂であり、また第5～7層は炭を含む黄褐色系の粗砂となる。さらに第8層は灰黄褐色の細砂混シルトである。

遺構の時期は、遺構覆土から弥生土器の広口壺（第21図17）などが出土したことから、弥生時代中期前葉のものと考えられる。

第4b層上面検出の遺構（第9図、図版2）

第4b層上面では、調査区の全面において弥生時代中期前葉から中葉のものと考えられる竪穴建物（SI-2・3）及び土坑（SK-75・79～81）、ピットなど多数の遺構を検出した。

これらの遺構のうち、ここでは竪穴建物（SI-2・3）について説明を行う。ただしSI-2・3は、第4a層上面において検出した竪穴建物（SI-1）の床面において検出した建物である。よって、便宜上次に述べる第4a層上面において検出したSI-1の調査結果について説明を行うなかで記述する。

第4a層上面検出の遺構（第10図、図版2）

第4a層上面では、弥生時代中期中葉の竪穴建物（SI-1）及び土器棺墓（SX-1）、土坑（SK-24・60・62・66）、古墳時代前期後葉から中期前葉に埋没した井戸（SE-1）や中期の土坑（SK-17）及びピット（P-153）、後期の土坑（SK-54）、飛鳥時代の土坑（SK-16・65）など長期にわたる多数の遺構を検出した。

[SI-1]（第11・22図、写真2、図版4）

SI-1～3は、調査区の南半部において検出したもので、平面形が円形の竪穴建物である。この建物の大半は、調査区の南側に展開する。またこの建物の床面では、第4b層上面に対応すると考えられるSI-2・3を検出した。よって、ここでは調査過程に沿ってSI-1～3について検出順に説明する。

SI-1は、検出範囲が東西約9.0mを測る大型建物とみられるものである。遺構覆土は、厚さ37cm前後を測り、3単位に細分ができる。第1層が褐灰色の粗砂混シルト、第2層が暗灰黄色の粗砂混シルト、第3層が明黄褐色のシルトである。これらの覆土を除去した床面において、壁溝と考えられる溝（SD-3・4）を検出した。よって、SI-1は拡張または移動されたふたつの建物となる可能性がある。そのうちSD-3は幅10～52cm、深さ1～6cm、SD-4は幅12～41cm、深さ5～10cmを測る。また、これらの壁溝の内側において多数のピットを検出した。これらのうち、その位置や深さなどからSI-1の柱穴と考えられるものは、P-78・80・83・89・180・183・185があげられる。これらのピットは直径40cm前後、深さ11～57cmを測るものである。その

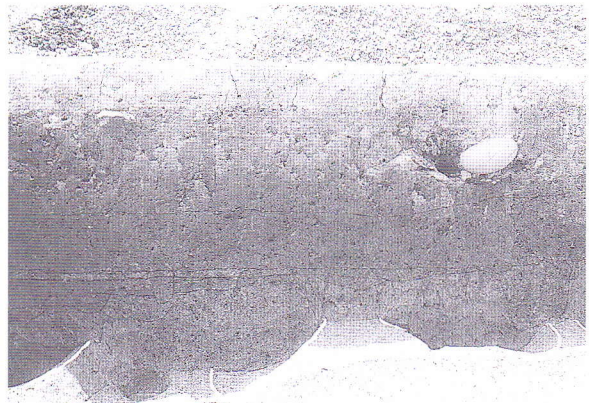
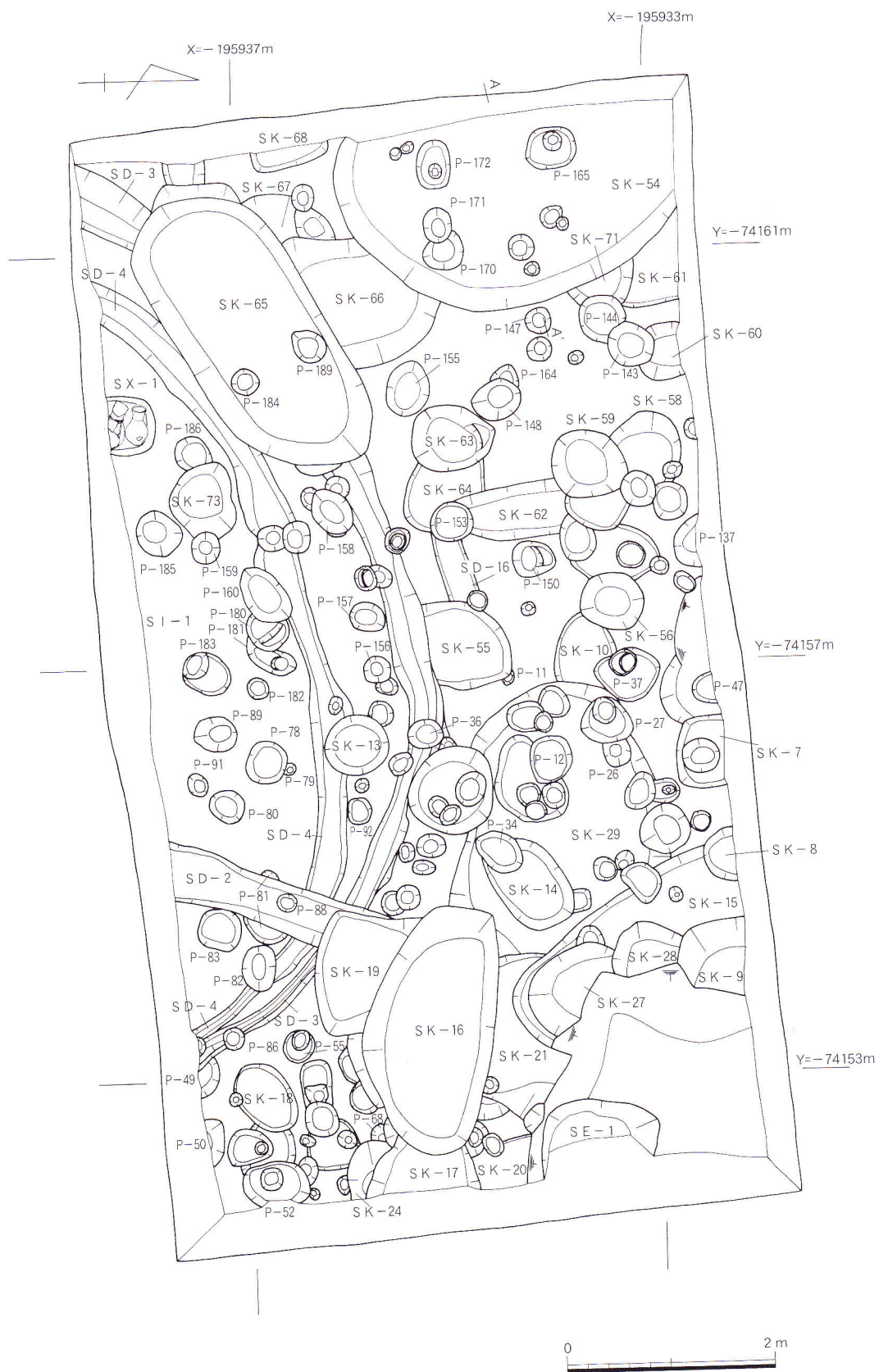
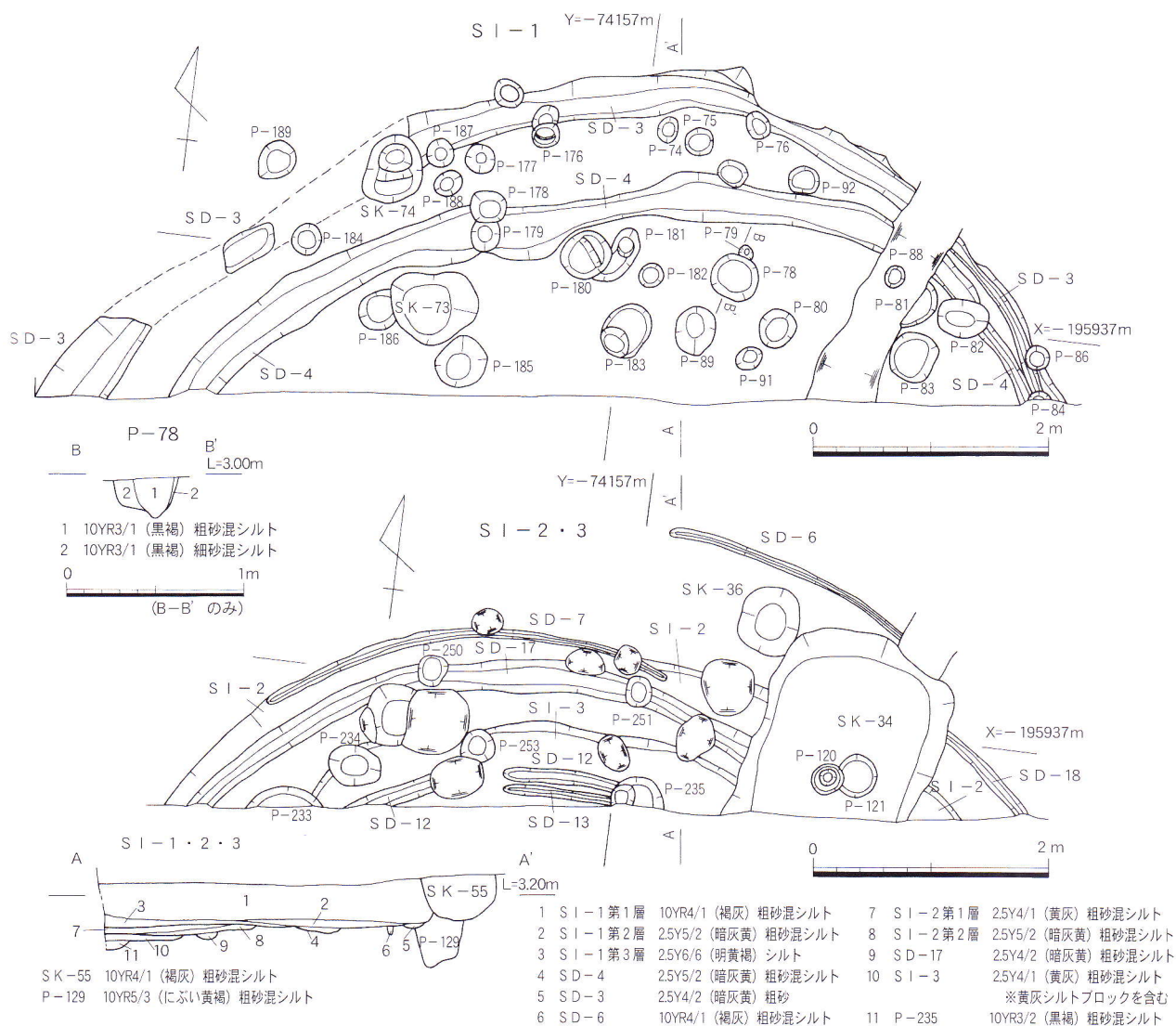


写真2 第1区西壁SI-1～3土層堆積状況（南から）



第10図 第4 a層上面遺構全体平面図



第11図 SI-1～3・P-78遺構平面図及び土層断面図

うち、P-78は、直径48～53cm、深さ34cmを測り、柱痕を確認した。またP-89は深さ57cmを測るものである。

SI-2は、SI-1の床面において検出したもので、検出範囲は6.8mを測る。遺構覆土は2単位に細分でき、第1層が黄灰色の粗砂混シルト、第2層が暗灰黄色の粗砂混シルトである。この建物の床面において壁溝と考えられるSD-17及び、その北側に幅10～20cmの間隔で平行するSD-7を検出した。そのうち、SD-17は幅18～30cm、深さ5cm前後を測るものである。またSD-7は、幅5～10cm、深さ3cm測るもので、その機能及び性格については不明である。このSD-7と同様の形状及び性格をもつと考えられるものとしてSD-6・18がある。これらの遺構は、SI-2の建物外となることから、SI-2が埋没し、SI-1が構築されるまでの間に存在した建物に伴う遺構（壁溝か）となる可能性が高い。さらに、SI-2の東側において土坑（SK-34）を検出した。このSK-34は、SI-2、SD-6・18が埋没した後に掘削され、SI-1構築時にはすでに埋没していたもので、東西1.7m以上、南北1.5mを測る。遺構覆土は褐灰色の粗砂混シルトの単一層である。このSK-34が示すように、SI-2、SD-6・18が埋没した後、SI-1構築までには一時期建物構築の断絶期が存在した可能性が高い。SI-2の柱穴と考えられるものにつ

いては、P-234・235がある。P-234は、長径46cm、短径36cm、深さ35cm前後、P-235は直径44cm、深さ51cmを測るもので柱痕を確認した。

SI-3は、SI-2の床面において検出したもので、検出範囲は3.5m以上を測る。遺構覆土は、黄灰色系のシルトブロックを含む黄灰色の粗砂混シルトである。

この建物の床面において壁溝と考えられるSD-12・13を検出した。これらの壁溝は、SI-3の肩部から40cm前後内側において検出したもので、SD-12は幅10~16cm、深さ4cm前後、SD-13は幅11cm前後、深さ3cm前後を測る。

これらの建物の埋没時期は、SI-1の遺構覆土から出土した土器（第22図）及び、後述する土器棺墓（SX-1）出土土器が弥生時代中期中葉のものと考えられる。よって、構築時期は弥生時代中期中葉から中葉と考えられる。

〔SX-1〕（第12・23図、図版4）

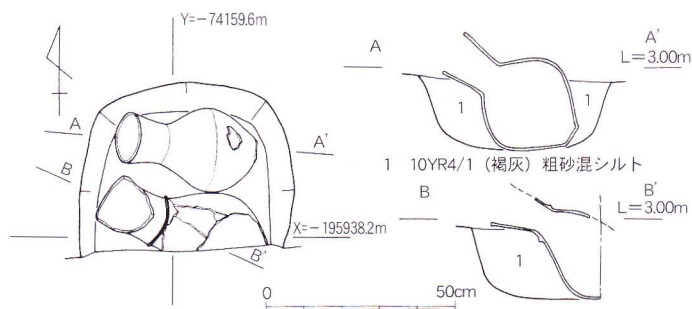
SX-1は、調査区の南西隅部、SI-1内において検出した土器棺墓である。このSX-1は、SI-1の埋没後に掘削されており、東西57cm、南北45cm以上、深さ30cm前後を測る土坑のなかに、ほぼ完形に復元できる直口壺を2個体並べて埋置したものである。これらの土器は、ともに口縁部を西方に向け、口を斜め上方に底部を下にして横倒しの状態で据えられていた。また、北側の土器の体部下半には焼成後に直径6cm前後の不定形な穿孔が認められる。南側の土器については、遺存状態が悪く、穿孔の有無は不明である。これらの土器の出土状態から判断して、この土坑は土器を棺として使用した土器棺墓とみられる。遺構覆土は、SI-1の埋土と同様であり褐灰色の粗砂混シルトである。

遺構の時期は、出土した弥生土器の直口壺（第23図24・25）の時期からみて、弥生時代中期中葉のものと考えられる。

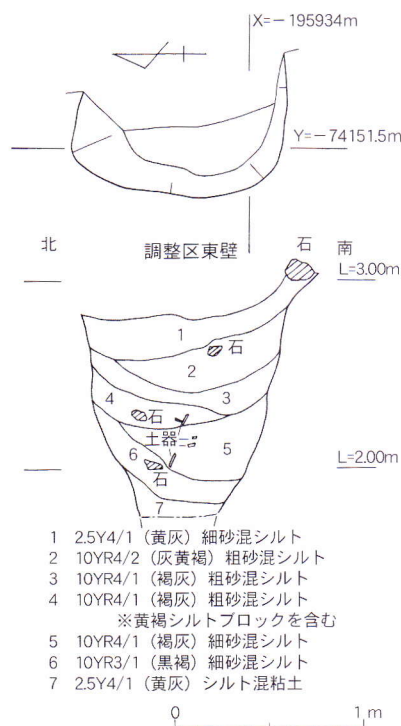
〔SE-1〕（第13・24図、図版4）

SE-1は、調査区の北東隅部において検出したもので、東西75cm以上、南北1.1m前後、深さ1.3m以上を測るものである。遺構覆土は調査区東壁面において7単位に細分でき、第1層が黄灰色の細砂混シルト、第2層が灰黄褐色の粗砂混シルト、第3・4層が褐灰色の粗砂混シルト、第5層が褐灰色の細砂混シルト、第6層が黒褐色の細砂混シルト、第7層は黄灰色のシルト混粘土となる。このうち、第5層以下から土師器（壺・甕・高坏・鉢）が多量に出土した。

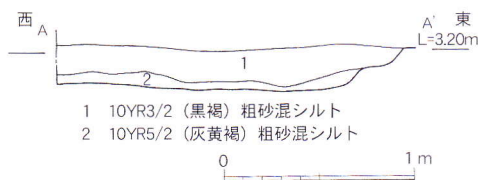
遺構の時期は、遺構覆土から古墳時代前期後葉から中期中葉の土師器（第24図）が出土したことから前期のも



第12図 SX-1 遺構平面図及び土層断面図



第13図 SE-1 遺構平面図及び土層断面図



第14図 SK-54土層断面図

のと考えられる。

[SK-54] (第10・14図、図版5)

SK-54は、調査区の北西隅部において検出したもので、南北3.4m以上、東西1.9m以上、深さ20～23cmを測る。遺構覆土は、第1層が黒褐色の粗砂混シルト、第2層が灰黄褐色の粗砂混シルトである。

遺構の時期は、遺構覆土から土師器(第25図33)、須恵器(6世紀代)などの他、滑石製有孔円板が1点(第27図41)出土している。よって、古墳時代後期のものと考えられる。

[SK-16・65] (第10・25図)

SK-16は、調査区の東端部において検出したもので、長径2.2m、短径約1.3m、深さ25cm前後を測る楕円形の土坑である。遺構覆土は、黒褐色の粗砂混シルトの単一層である。

遺構の時期は、遺構覆土から須恵器杯Hの身(第25図34)などが出土した。よって飛鳥時代前期と考えられる。

SK-65は、調査区の西端部において検出したもので、長径3.1m、短径1.4m、深さ30cm前後を測る楕円形の土坑である。遺構覆土は、黒褐色の粗砂混シルトの単一層である。

遺構の時期は、遺構覆土から須恵器杯G身(第25図35)などが出土したことから、飛鳥時代中期と考えられる。

第3層上面検出の遺構(第17図、写真3・4)

第3層上面では、室町時代後期のものと考えられる土坑(SK-1・52)及び溝(SD-11)、江戸時代の井戸(SE-2)及び土坑(SK-53)、江戸時代末から明治時代初頭と考えられる土坑(SK-2)などの他、ピットを検出した。この第3層上面は、層位的に太田城跡に関連する遺構が検出される遺構検出面である。今回の調査では、室町時代後期と考えられる土坑を数基検出したものの、これらの遺構が太田城跡に関連するものであるかは今後の課題である。

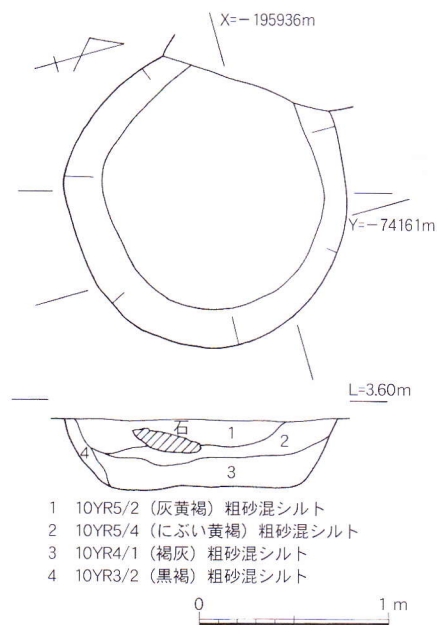
[SK-52] (第15・26図、図版5)

SK-52は、調査区の西端部において検出したもので、遺構の北西部を攪乱によって削平されているものの、直径1.5m、深さ35cm前後を測るほぼ円形を呈する土坑である。遺構覆土は、第1層が灰黄褐色の粗砂混シルト、第2層がにぶい黄褐色の粗砂混シルト、第3層が褐灰色の粗砂混シルト、第4層が黒褐色の粗砂混シルトである。

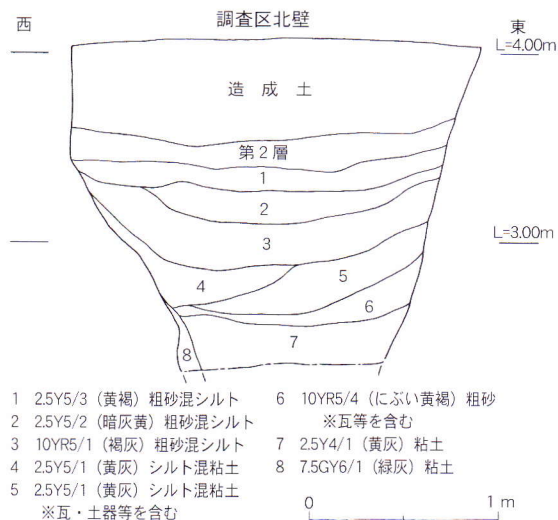
遺構の時期は、遺構覆土から備前焼壺及び中国製染付皿(第37図36・37)などが出土したことから、室町時代後期と考えられる。

[SK-2] (第16図、図版5)

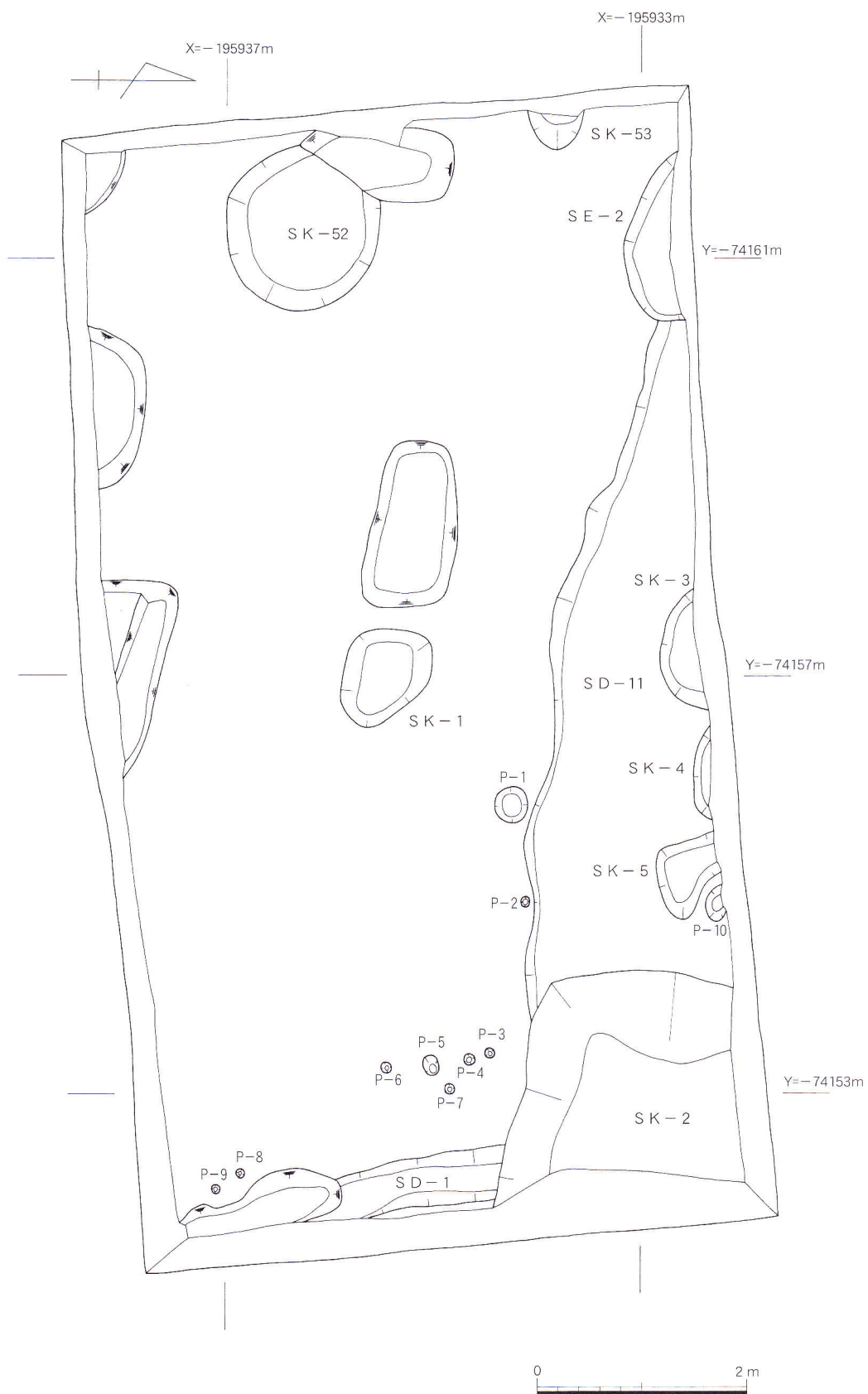
SK-2は、調査区の北東隅部において検出し



第15図 SK-52遺構平面図及び土層断面図



第16図 SK-2土層断面図



第17図 第3層上面遺構全体平面図

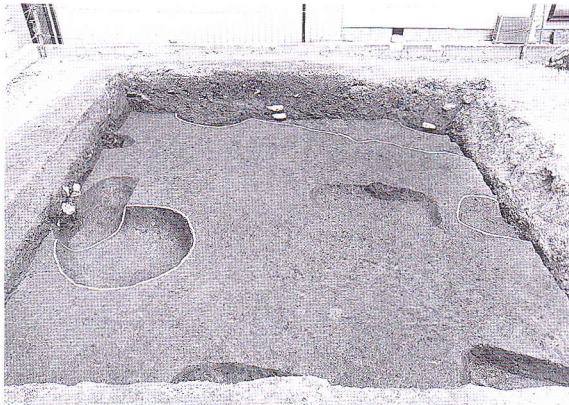


写真3 第2区第3層上面全景（南から）

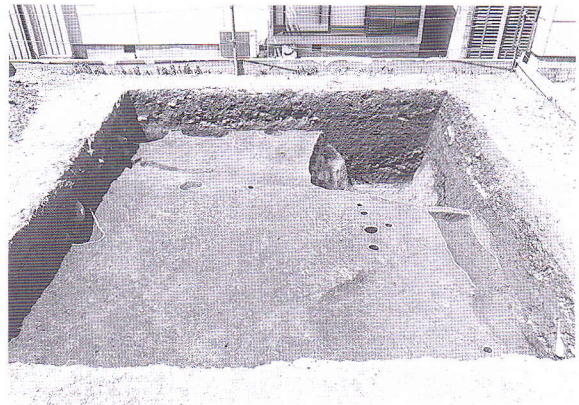


写真4 第1区第3層上面全景（南から）

たもので、東西2.2m以上、南北2.4m以上、深さ1.7m以上を測るものである。遺構覆土は、8単位に細分でき、第1～3層は粗砂混シルトであり、第4～6層は粘土及び粗砂の互層である。また第7・8層は粘土となる。そのうち第5・6層は土器及び瓦などを多量に含む黄灰色のシルト混粘土及びにぶい黄褐色の粗砂である。この第5・6層中から江戸時代末から明治時代にかけての肥前系磁器染付及び瀬戸・美濃系磁器染付を含む多量の陶磁器、近世土師器、瓦質土器、瓦、泥面子、窯道具が大量に出土した（図版9）。これらの出土遺物には、陶器製の急須や鉢などに施釉前の未製品と考えられる素焼きのものなどが一定量含まれる。そのなかには、江戸時代末から明治時代初頭にかけて、太田周辺において焼造された太田焼にみられる『物化堂』の銘を有する未製品が含まれていた。よって、調査地の近辺に太田焼の陶器場が所在していたと考えられる。

4. 遺物

遺物は、各時代の遺構覆土や第3～5層の遺物包含層から収納コンテナに約45箱分が出土した。これらなかには、弥生時代前期から中期にかけての弥生土器をはじめ、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世土師器、中世須恵器、中世土師質土器、中世瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、近世土師器、近世瓦質土器、瓦、土製品、石器、石製品、金属器など多種多様な遺物がある。そのうち、弥生時代前期後葉の土坑（SK-49、SX-4）及び前期末から中期中頭の土坑（SK-43）、また弥生時代中期中葉の土器棺（SX-1）、古墳時代前期の井戸（SE-1）などから出土した一括性の高い土器群がある。また、明治時代初頭の「太田焼」に関わる陶磁器類及び窯道具などは、太田地域における産業の隆盛を示す遺物として貴重な資料と考えられる（図版6～9）。

以下、遺構出土の土器について古い時期のものから述べる。また石器・石製品・土製品は最後に説明する。

〔SK-49出土土器〕（第18図、図版6）

1～3は弥生土器である。

1は広口壺であり、底部径9.0cm、体部最大径21.5cmを測る。体部中位には、円形浮文が貼り付けられており、復元すると39個となる。また、その上部にはヘラ描沈線文が6条、さらに約6mmの間隔を空けて同じくヘラ描沈線文が4条施されており、頸部にも2条以上のヘラ描沈線文が施されている。外面の調整には、底部から頸部上位にかけてタテ方向のハケが施されており、内面の調整には底部付近に板状工具によるナデが認められる他、体部上位にタテ方向に長い指オサエが施されている。胎土には1～7mm大の結晶片岩及び石英、チャートが含まれ、色調は淡褐色から黄灰色を呈

する。

2は遠賀川系の甕であり、口径24.4cmを測る。外傾する体部からナナメ上方へ屈曲し短くのびる口縁部をもつもので、口縁部下には4条のヘラ描沈線文が施されている。外面の調整には、ナナメ方向のハケが施されており、口縁部下には成形時の指オサエが認められる。胎土には、1～2mm大の砂粒を含み、色調は黒褐色から黄褐色である。

3は、鉢の口縁部とみられるもので、細片のため口径は復元できなかった。口縁部は、口縁上端部に面をもち、ヨコ方向のナデによって仕上げられている。外面の調整にはナナメ方向のハケが施されており、内面の調整にはナデが施されている。胎土には、1～3mm大の結晶片岩及び石英、細かな赤色軟質粒を含み、色調は灰黄褐色である。

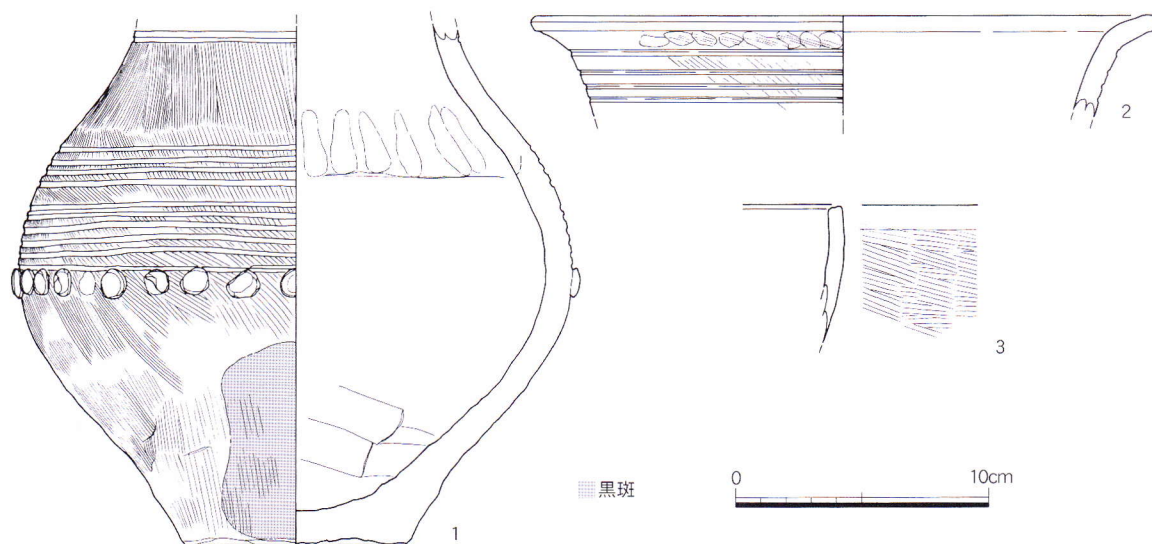
以上の遺物の出土位置はSK-49第1層であり、その時期は弥生時代前期後葉のものと考えられる。

〔SX-4出土土器〕(第19図、図版6)

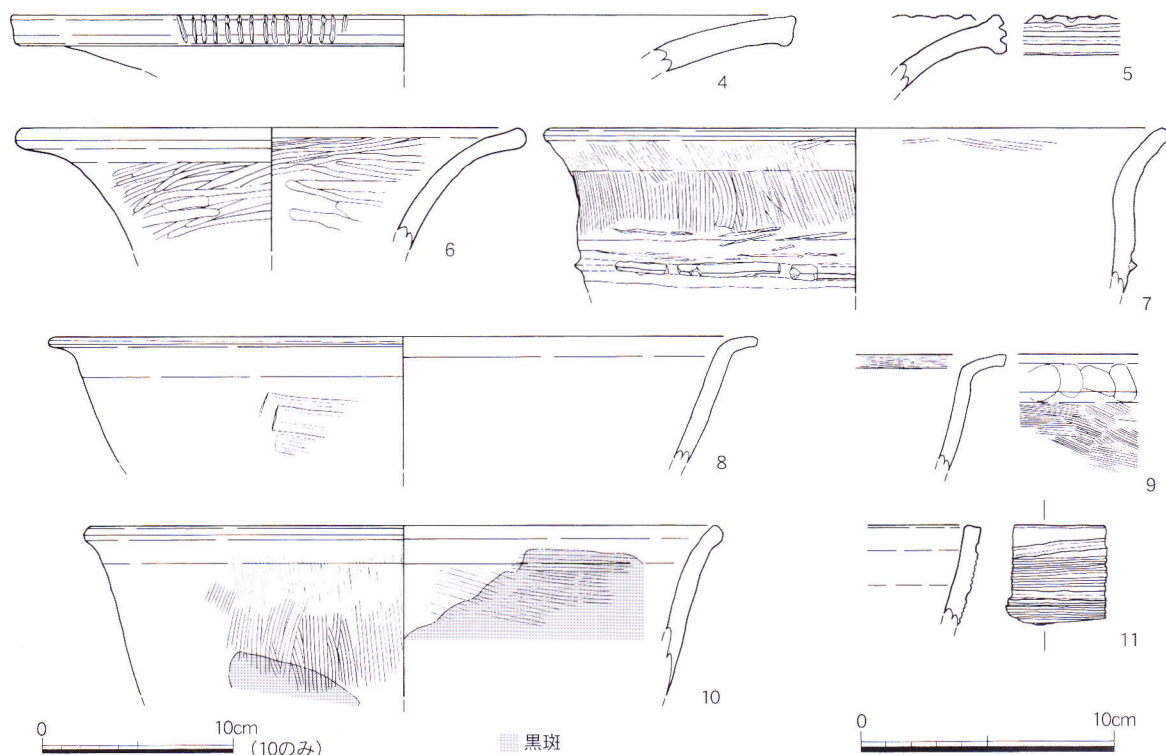
4～11は弥生土器である。

4～6は広口壺の口縁部である。4は、口径30.8cmを測るもので、口縁外端面に板状工具の先端部とみられるものでタテ方向の刻目を施すものである。内外面の調整にはナデが施されている。胎土には1～5mm大の結晶片岩及び赤色軟質粒を含み、色調は淡褐色を呈する。5は、口縁端部を上下に肥厚させるもので、口縁上端面には刻目が施されている。また口縁外端面にはヘラ描沈線文が2条施されている。内外面の調整にはナデが施されており、胎土には結晶片岩が認められず、1～3mm大の石英及びチャートを含み、色調は明褐色を呈する。6は、口径19.5cmを測るもので、緩やかに外反する口縁部の端部を丸くおさめるものである。内外面の調整には、ヨコ方向のヘラミガキを施した後、口縁部付近にはヨコ方向のナデが施されている。胎土には、1～5mm大の石英及び、雲母を含み、色調は明褐色である。

7～10は甕である。7は紀伊型甕の口縁部であり、口径24.2cmを測る。内彎する体部から外反する口縁部がのびるもので、口縁部及び体部の境には断面形が三角形状を呈する突帯がめぐるものである。外面の調整には体部に粗いヘラケズリが施されており、口縁部にはそれに先行するタテ方向のハケが認められる。また口縁端部付近にはヨコ方向のナデが施されている。内面の調整には、ナ



第18図 遺物実測図 1



第19図 遺物実測図2

デが施されており、口縁端部にはヨコ方向のハケがみとめられる。さらに突帯の剥落部には、突帯を貼り付ける位置に目印として施された沈線が認められる。胎土には、1～5mm大の結晶片岩及び石英を含み、色調は暗黄褐色を呈する。8は、遠賀川系の甕であり、口径28.0cmを測る。外傾する体部から口縁部を短く水平方向に屈曲させるものであり、外面の調整にはヨコ方向のハケ後ナデが施されている。また内面の調整には板状工具によるナデの後、口縁部をヨコ方向にナデて仕上げている。胎土には、1～5mm大の結晶片岩及び砂粒を含み、色調は淡褐色である。9は、やや丸味をおびる体部から短く屈曲する口縁部がのびるものである。外面の調整には、体部にヨコ及びナナメ方向のハケが施されており、口縁部には成形時の指オサエが認められる。また内面の調整には、体部に板ナデが施されており、口縁部にはヨコ方向のハケが施されている。胎土には、1～3mm大の結晶片岩及び石英、赤色軟質粒を含むもので、色調は黄褐色から暗灰黄色を呈する。10は、甕もしくは鉢と考えられるものであり、口径33.0cmを測る。外傾する体部からわずかに屈曲し、端部を丸く肥厚させる口縁部をもつもので、外面の調整にはタテ方向のハケが施され、内面の調整にはヨコ方向のハケが施されている。またこれらのハケの後、口縁部の内外面にはヨコ方向のナデを施し仕上げている。胎土には1～6mm大の結晶片岩及び石英を含み、色調は明褐色から黒褐色を呈する。

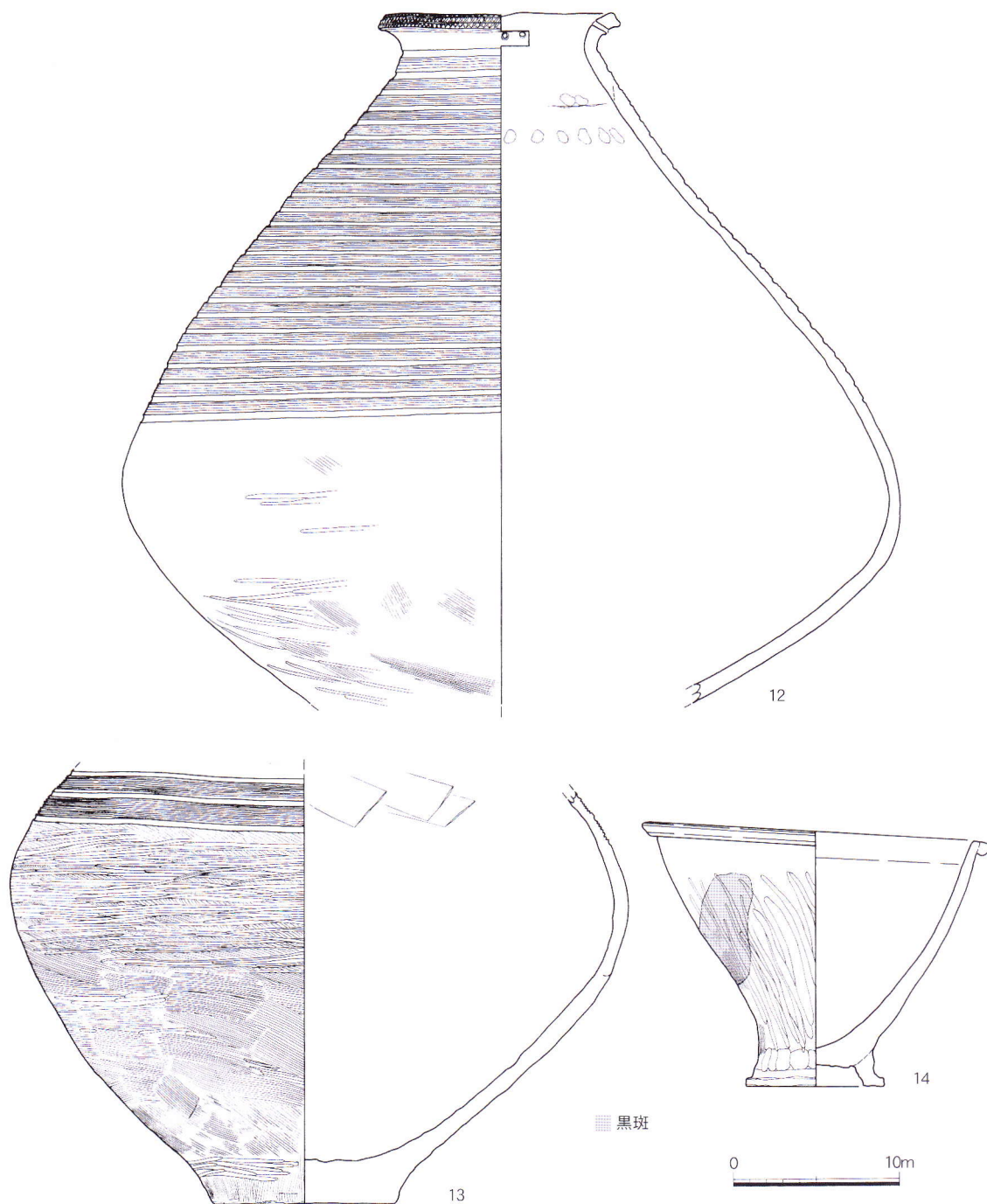
11は鉢の口縁部であり、口縁上端部に面をもつものである。口縁部外面には、約4mmを測る幅広のヘラ描沈線文を2条施し、その間を幅約1mmを測る幅狭のヘラ描沈線文によって充填する単位が2単位以上確認できる。胎土には1～3mm大の石英を含み、色調は黄褐色である。

これらの遺物の出土位置はS X - 4 第1層から出土し、その時期は弥生時代前期末から中期初頭のものと考えられる。

[S K - 43出土土器] (第20図、図版6・7)

12～14は弥生土器である。

12・13は壺である。12は、体部最大径が47.1cmを測る算盤玉形を呈する体部に、短く屈曲する口



第20図 遺物実測図 3

縁部がつく無頸壺であり、口径13.7cm、頸部径11.9cmを測る。体部上半には、櫛描直線文を施した後に、約8mmごとにヘラ描沈線文を24条施し加飾している。また口縁外端面には、×印状の刻み目を施した後、2条のヘラ描沈線文を施している。その他、口縁部下には2個を一对とし、対向する位置に穿たれた直径3mm程度の紐通し穴が認められる。外面の調整には、体部下半にナメ方向のハケの後ナデが施されており、一部にヨコ方向のヘラミガキが認められる。さらに内面の調整はナデによって仕上げられており、体部上位には等間隔に並んだ指オサエが認められる。

胎土には1～4mm大の石英及びチャートを含み、結晶片岩は認められなかった。色調は明褐色か

ら灰黄褐色を呈する。この12は、その形態及び胎土から、和泉地域から持ち運ばれた搬入土器と考えられる。13は、底径11.0cm、体部最大径37.6cmを測る。体部上半には、約4mmを測る幅広のヘラ描沈線文を1.4cm間隔で施し、その間を幅約1mmのヘラ描沈線文によって充填する文様単位が2単位確認できる。外面の調整には、底部下端からナナメ及びヨコ方向のハケを施した後、体部中位にヨコ方向のヘラミガキを密に施すもので、体部下半及び底部付近にも部分的にヨコ方向のヘラミガキが施される。また内面の調整には、板状工具によるナデが施されている。さらに底面の調整はナデの後、部分的にヘラミガキが施されている。胎土には、1～5mm大の結晶片岩及び石英を含み、色調は灰黄褐色から黒褐色である。

14は鉢であり、口径21.3cm、脚部径8.3cm、器高15.8～16.0cmを測る。外傾する体部に断面形が歪な三角形の突帯を貼り付けることによって口縁部を肥厚させるもので、底部には外方に張り出す脚部を貼り付けている。外面の調整は、ナデの後、タテ方向のハケ及びヘラミガキを部分的に施すもので、内面の調整はナデによって仕上げられている。また底部付近には、脚部貼り付け時の指オサエやナデがみられ、脚端部は面をもつものである。胎土には、1～5mm大の結晶片岩及び石英を含み、色調は黒褐色から暗褐色を呈する。

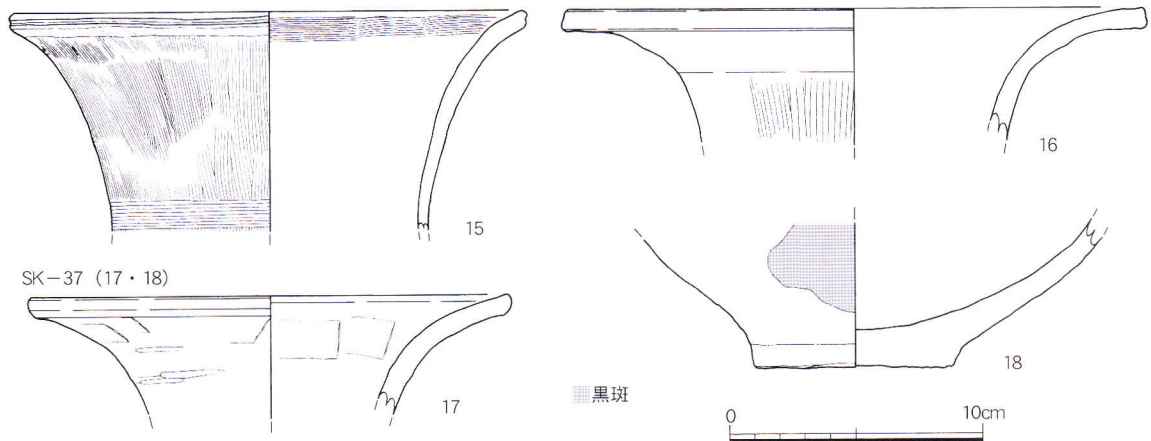
これらの出土位置は、SK-43第5層から出土し、その時期は弥生時代前期末から中期前葉と考えられる。

〔SK-38出土土器〕（第21図、図版7）

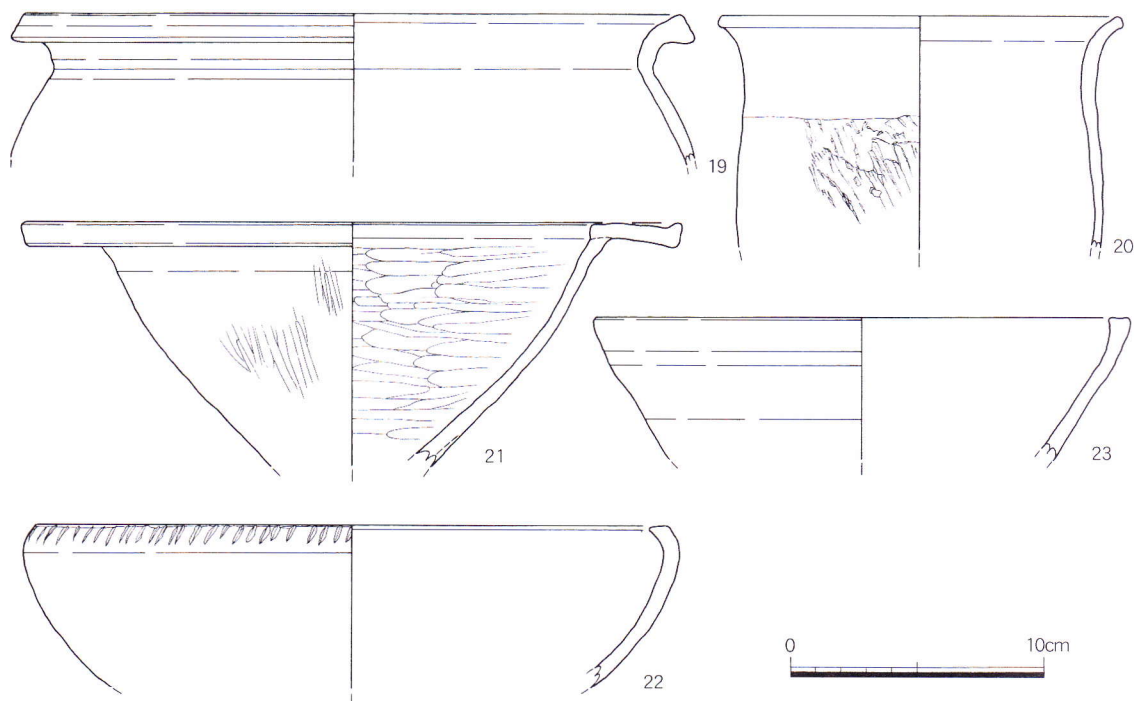
15・16は弥生土器の広口長頸壺である。15は、口径20.0cmを測るもので、緩やかに外反する口縁部の端部を丸くおさめるものである。口縁端部の外端面にはヘラ描沈線文が1条施されており、また頸部には9条を1単位とする櫛描直線文が1条施されている。外面の調整には、タテ方向のハケが施されており、内面の調整はナデを施した後、口縁部にヨコ方向のハケを施している。胎土には1～3mm大のチャート及び黒色粒を含み、色調は暗灰黄色を呈する。16は口径23.2cmを測り、緩やかに大きく外反する口縁部をもつもので、端部をわずかに肥厚させ丸くおさめるものである。外面の調整には、タテ方向のハケの後、口縁部周辺にヨコ方向のナデが施されており、内面はナデによって仕上げられている。このナデは、器表面が滑らかな光沢をもつ紀伊型甕の調整に類似する。胎土には、1～3mm大の結晶片岩及び石英、チャートを含み、色調は黄褐色から灰黄褐色である。

これらの出土位置は、SK-38第2層であり、その時期は弥生時代中期前葉と考えられる。

SK-38 (15・16)



第21図 遺物実測図 4



第22図 遺物実測図 5

〔S K - 37出土土器〕（第21図、図版 6）

17・18は弥生土器の壺である。17は、口径18.8cmを測るもので、緩やかに外反する口縁部の端部を丸くおさめるものである。内外面の調整は、板状工具によるナデであり、外面には一部にヘラミガキが認められる。胎土には1～4mm大の結晶片岩及び石英を含み、色調は明褐色を呈する。

18は、壺の底部であり、底径9.8cmを測る。外面の調整にはハケの後、ナデが施されており、内面の調整には、ナデが施されている。胎土には、1～3mm大の結晶片岩及び石英、チャートを含み、色調は明褐色から淡褐色である。

これらの遺物の出土位置は、17がS K - 37第4層、18がS K - 37第6層である。時期については、弥生時代中期前葉のものと考えられる。

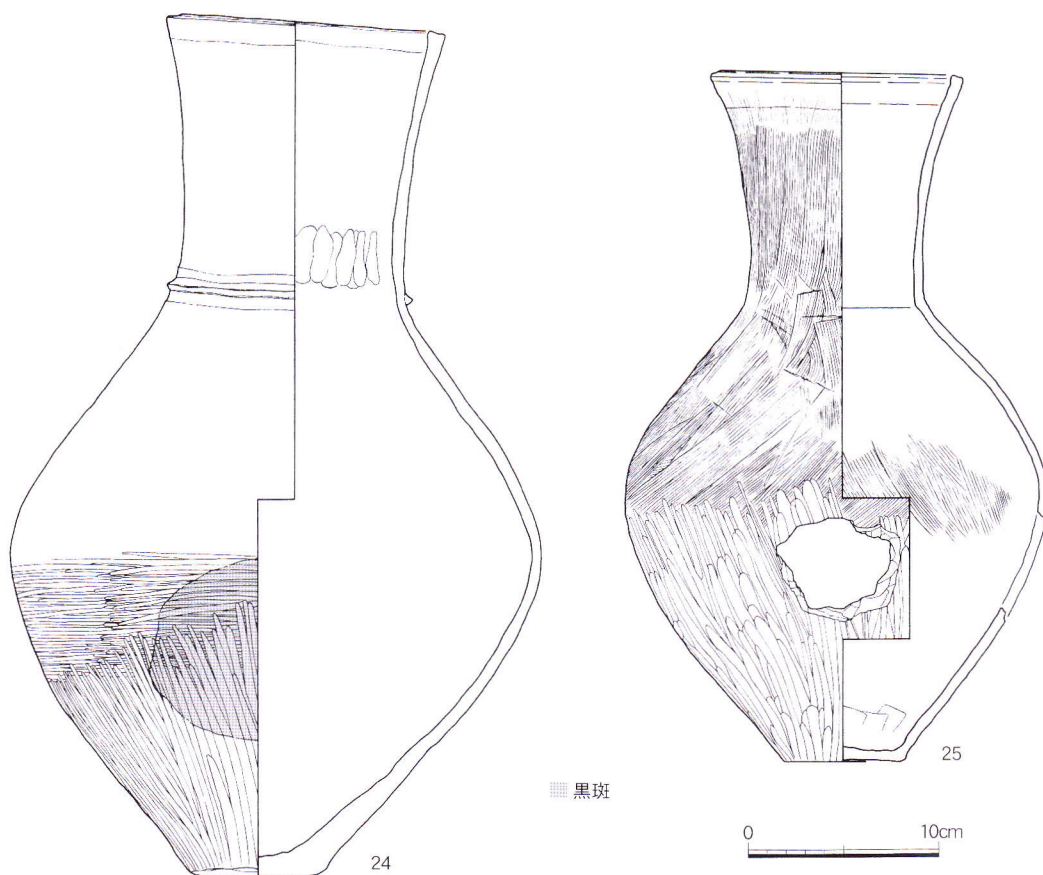
〔S I - 1出土土器〕（第22図、図版 7）

19～23は弥生土器である。

19・20は甕である。19は、口径25.8cmを測り、短く屈曲する口縁部の端部を上下に肥厚させるものである。内外面の調整にはナデが施されている。胎土には1～2mm大の結晶片岩及び石英を含み、色調は黄褐色から灰褐色である。20は紀伊型甕である。口径は15.6cmを測り、体部及び口縁部との境に明瞭な稜線がみられないものである。外面の調整には、体部にヘラケズリが施されており、口縁部及び内面の調整にはナデが施されている。胎土には1～4mm大の結晶片岩を含み、色調は暗褐色を呈する。

21は高坏であり、口径25.8cmを測る。緩やかに内彎する杯部から水平方向にのびる板状の粘土を貼り付けて口縁部としたもので、口縁端部は上部につまみ肥厚させている。外面の調整には、タテ方向のヘラミガキが施されており、内面の調整にはヨコ方向のヘラミガキが施されている。また口縁部の上面にも丁寧なヘラミガキが認められる。胎土には、1～3mm大の結晶片岩及び石英を含み、色調は、黒褐色から明褐色を呈する。

22・23は鉢である。22は、口径24.8cmを測り、緩やかに内彎する椀形を呈するものである。口縁



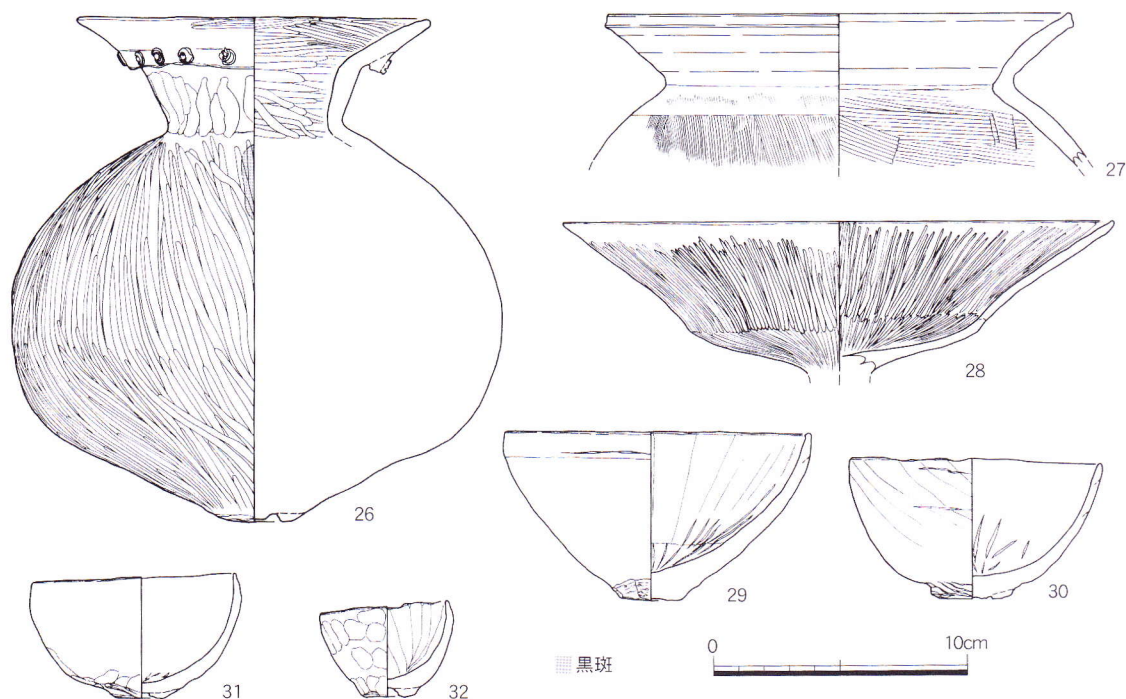
第23図 遺物実測図 6

端部はやや内側に肥厚させ、上端部に面をもつもので、外端面には板状工具による縦長の刻目が施されている。また内外面の調整にはナデが施されている。胎土には1～3mm大の結晶片岩及び赤色軟質粒を含み、色調は黄褐色から黒褐色を呈する。23は、鉢とみられるものであり、口径21.0cmを測る。外傾する体部にやや内彎し端部を内外に肥厚させる口縁部をもつもので、内外面の調整にはナデが施されている。胎土には、1～2mm大の結晶片岩及び石英を含み、色調は黄褐色である。

これらの遺物の出土位置はすべてS I - 1 第1層から出土し、その時期は弥生時代中期中葉のものと考えられる。

〔S X - 1 出土土器〕（第23図、図版7）

24・25は、弥生土器の直口壺である。24は、口径13.1cm、体部最大径28.1cm、底径7.3cm、器高44.8～45.6cmを測る。卵形の体部中位に最大径をもつもので、体部から頸部の境に断面形が三角形の突帯を1条めぐらし、上方へのびる口縁部の端部をわずかに内外に肥厚させるものである。外面の調整には、ヨコ方向のヘラミガキの後、底部下端からタテ方向のヘラミガキが丁寧に施されている。また内面の調整はナデによって仕上げられており、頸部付近に縦長の指オサエが認められる。胎土には1～5mm大の結晶片岩及び石英を含み、色調は黄褐色から暗灰黄色を呈する。25は、口径12.2cm、体部最大径22.3cm、底径6.1cm、器高36.4～36.6cmを測る。形態的な特徴は、24と共通するものの、25では体部から頸部の境に突帯がみとめられない。また、体部下半には焼成後に穿孔されたと考えられる直径5～6cmを測る不定形な穿孔が認められる。外面の調整には、体部から頸部にかけてタテ及びナナメ方向のハケが施された後、体部下半には縦方向のヘラミガキが施されている。また内



第24図 遺物実測図 7

面の調整は、底部付近に板状工具によるナデが施されており、体部中位にはナナメ方向のハケが認められる。さらに頸部から口縁部にかけてはナデによって仕上げられている。胎土には、1～2mm大の砂粒を含み、色調は淡褐色から灰黄褐色を呈する。

これらの遺物の時期は、その形態的特徴からともに弥生時代中期中葉のものと考えられる。

〔SE-1出土土器〕（第24図、図版8）

26～32は土師器である。

26は複合口縁壺であり、口径14.0cm、体部最大径19.3cm、底径2.4cm、器高19.9cmを測る。形態的特徴は、やや下膨れ気味の体部に外傾する頸部及び直線的に開く口縁部をもつものである。また、頸部から口縁部への屈曲部には粘土を補充し下方に肥厚させ、円形浮文に竹管文を施した浮文を合計17個貼り付けて加飾している。外面の調整には、体部にタテ方向のヘラミガキが密に施されており、頸部にはナデの後、幅約5～7mmを測る幅広のヘラミガキが縦方向に施されている。また口縁部にはナデの後、ヨコ方向のヘラミガキが一部に認められる。内面の調整には、口縁部及び頸部にヨコ方向のヘラミガキが施されている。胎土には1～5mm大の結晶片岩及び石英を含み、色調は灰黄褐色から明褐色である。

27は甕であり、口径18.2cmを測る。丸味のある体部に鋭く屈曲し直線的にのびる口縁部をもつもので、口縁端部はナデによって仕上げ上端部に面をもつものである。また外面の調整には体部上位にタテ方向のハケが施され、屈曲部及び口縁部にはナデが施されている。内面の調整には体部にヨコ方向のハケが施されており、口縁部はナデによって仕上げられている。胎土には1～2mm大の結晶片岩及び石英を含み、色調は暗赤褐色から灰黄褐色である。

28は、高坏であり、口径11.6cm、器厚3mm前後を測る。杯部から口縁部の境に明瞭な稜を作り出すもので、内外面の調整には、杯部から口縁部にかけてタテ方向のヘラミガキを密に施している。この高坏は、器壁が薄く、調整にヘラミガキを密に施すなど丁寧なつくりのものである。胎土には1

～3mm大の結晶片岩及び石英を含み、色調は淡褐色から黄褐色である。

29～31は鉢とみられるもので、30・31は杯もしくは碗となる可能性もある。29は、口径12.0cm、底径2.4cm、器高6.6cmを測り、平底状の底部からやや内彎気味に立ち上がる体部をもつものである。底部は粘土を補充し、平底状に成形するものである。外面の調整には、底部下端に成形時のものとみられるヘラケズリが施されており、体部及び口縁部はナデによって仕上げられている。また内面の調整は、底部付近にクモの巣状の工具痕が認められ、体部には板状工具によるヨコ方向のナデが施されている。胎土には、1～2mm大の石英を含み、色調は明褐色である。30は、口径9.8cm、底径2.9cm、器高5.3～5.6cmを測るもので、平底状の底部から内彎する体部がのびるものである。底部は粘土を補充し、平底状に成形する。外面の調整には、底部下端に成形時のものとみられる絞り目が認められ、体部及び口縁部はナナメ方向のナデによって仕上げられている。また成形時の粘土紐痕が認められる。内面の調整は、体部下半にクモの巣状の工具痕がみられる他はナデによって仕上げられている。胎土には、1～3mm大の結晶片岩及び石英を含み、色調は明褐色である。31は、口径8.0cm、底径1.8cm、器高4.5～4.9cmを測るもので、平底状の底部から内彎する体部がのびるものである。底部は、粘土紐を輪状に貼り付け平底状に成形されている。外面の調整には、底部下端に成形時のものとみられるヘラケズリ及び指オサエが認められ、体部及び口縁部はナデによって仕上げられている。また内面の調整は、底部付近に爪形の圧痕が認められる他はナデによって仕上げられている。胎土には1mm大の石英を含み、色調は黒褐色から淡褐色である。

32は、ミニチュアの鉢であり、口径5.0cm、底径1.7cm、器高3.2～3.7cmを測る。手づくねによって成形されており、底部は粘土紐を輪状に貼り付けて平底状に成形している。外面の調整には指オサエの痕跡が明瞭に認められ、内面の調整はタテ方向のナデによって仕上げられている。胎土には砂粒をほとんど含まず、色調は黒灰色を呈するものである。

これらの遺物の出土位置は、26・28・30・32が第5層、27・31が第1層、29が第6層である。また時期については、下層から出土した26・28・29が古墳時代前期後葉のものであり、上層から出土した27が古墳時代中期前葉のものと考えられる。よって、SE-1は、古墳時代前期後葉から中期前葉にかけて埋没したものと考えられる。

〔SK-54出土土器〕（第25図、図版8）

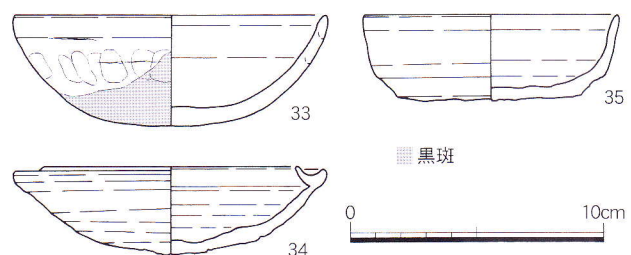
33は、土師器の杯もしくは碗と考えられるもので、口径12.3cm、器高4.4cmを測る。内彎して立ち上がる口縁部の端部を丸くおさめるもので、内外面の調整にはナデ及び指オサエを施すものである。胎土には1mm大の赤色軟質粒を含み、色調は黄褐色から褐色である。

出土位置は、SK-54第1層であり、時期については古墳時代後期のものと考えられる。

〔SK-16・65出土土器〕（第25図、図版8）

34・35は須恵器である。

34は、杯Hの身であり、口径10.0cm、器高3.4cmを測る。内外面の調整は回転ナデを施し、杯部約1/2にヘラ切りの痕跡とその後にはナデが施されている。還元はやや不良であり、色調は明灰色を呈する。35は、杯Gの身であり、口径10.0cm、器高3.2～3.4cmを測る。内外面の調整は回転ナデを施



第25図 遺物実測図8

し、底面にはヘラ切りの痕跡が残る。還元は良好であり、色調は黒灰色から灰色を呈する。

これらの出土位置は、34がS K - 16、35がS K - 65であり、時期については34が飛鳥時代前期、35が飛鳥時代中期のものと考えられる。

〔S K - 52出土土器〕（第26図、図版 8）

36は、備前焼の壺であり、底径10.4cmを測るものである。平底の底部に直線的に立ち上がる体部がつくもので、底面にはヘラ記号と考えられる1条の沈線が認められる。内外面の調整は、ロクロナデによるもので底面には離れ砂が付着している。胎土には1～3mm大の白色粒を含み、色調は暗褐色から明灰色である。

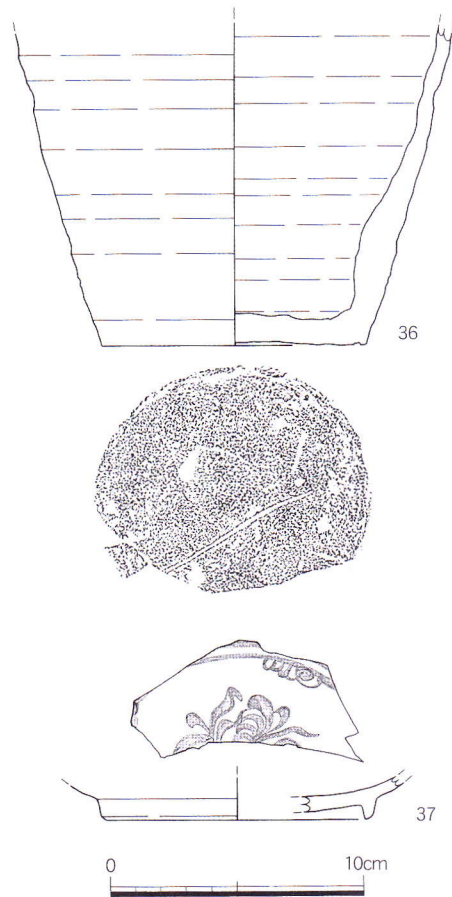
37は、中国製染付の皿であり、底径10.2cmを測る。高台部置付け部の釉薬を削り取る以外は、全面に施釉するもので、内底面の見込み部及び中央部には呉須によって2条の圈線と蔓草文が描かれている。

これらの出土位置は、36が第1層、37が第2層であり、時期については室町時代後期のものと考えられる。

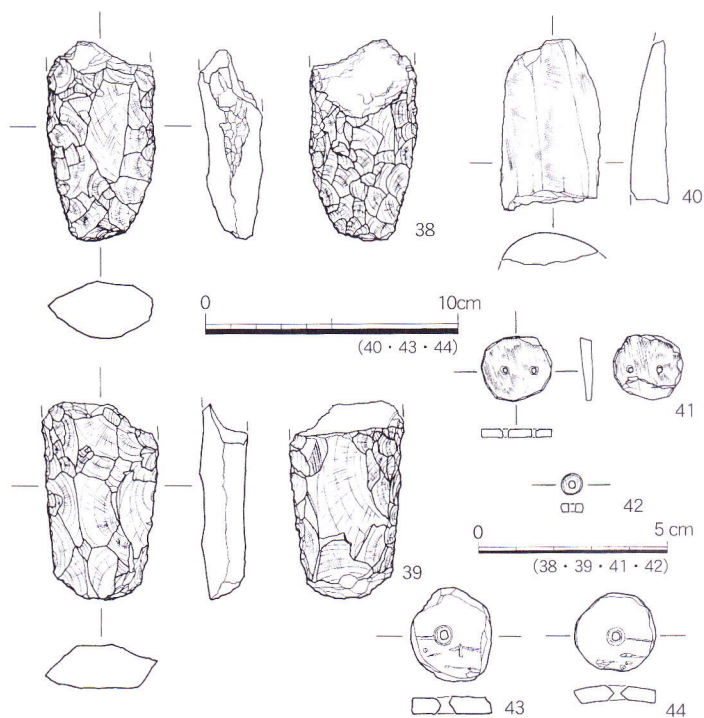
〔石器・石製品〕（第27図、図版 9）

38・39はサヌカイト製打製石剣の基部と考えられるものである。38は、残存長5.2cm、幅2.9cmを測り、重量25.9gを量る。表裏面とも一部に素材剥片からの大剥離面を残すものの、全面に丁寧な調整剥離を施すもので、両側の刃部を押圧剥離によって成形した後、人為的にその稜線を潰すものである。色調は黒色である。39は、残存長5.2cm、幅2.9cmを測り、重量27.4gを量る。表裏面ともに素材剥片からの大剥離面を残し、下端部に自然面を残すもので、38と比較し調整剥離の単位が大きいものである。両側の刃部は38と同様に押圧剥離によって成形した後、人為的に潰している。色調は黒色である。

40は、結晶片岩製の磨製太型蛤刃石斧と考えられるものである。



第26図 遺物実測図 9



第27図 遺物実測図10

表面は研磨によって平滑に仕上げられており、擦痕が顕著にみとめられるものである。色調は淡緑色である。

41・42は滑石製品である。41は有孔円版であり、直径1.7～1.8cm、厚さ2～3mmを測り、重量1.4gを量るものである。不定形な原材を円形に近づけるため、回転させながら周囲を研磨した痕跡が明瞭に残るもので、平面形が多角形状を呈する。中央部に直径1mm前後の紐通し孔が2カ所に認められる。また表裏面ともに研磨痕が明瞭に認められる。色調は明灰色である。42は臼玉であり、直径5.5mmを量るもので、断面形が算盤玉形を呈するものである。中央には直径1.5mmの円孔が認められる。色調は明灰色である。

これらの遺物の出土位置は、38がS I - 1 第1層、39がS X - 4 第1層、40がS I - 1 第2層、41がS K - 54 第1層、42がP - 55である。また時期については、38～40が弥生時代のもの、41・42が古墳時代のものと考えられる。

〔土製品〕（第27図、図版9）

43・44は土器片を転用した紡錘車とみられるもので、いわゆる有孔円板である。43は、直径3.2～3.6cmを測り、重量11.3gを量るものである。周囲を研磨し円形に成形しようとする意識は感じられるものの、不正円形を呈するものである。中央部には、直径3mmを測る円孔が表裏面から穿たれている。44は、直径3.1～3.2cmを測り、重量7.9gを量るものである。周囲を丁寧に研磨し、円形を呈するものである。中央部には、直径3mmを測る円孔が表裏面から穿たれている。

これらの出土位置は、43がS I - 1 床面、44がS I - 3 の覆土から出土し、時期は弥生時代のものと考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、弥生時代前期後葉から明治時代初頭にかけての遺構検出面（生活面）を5面確認し、それぞれの生活面において人間生活の痕跡としての遺構を検出した。これらの遺構のうち、弥生時代のものについては前期後葉から中期中葉にかけての竪穴建物や土坑及びピットなど居住を示す遺構が高密度に分布し、調査地周辺が弥生時代の集落内部に位置することを示している。特に、S I - 1～3は、弥生時代中期中葉に同じ場所に継続して数棟の建物を構築したものであり、調査地周辺が居住に適していたことを示している。また調査地の南西約50mに位置する第45次調査地点では、北西から南東方向へ並行してのびる弥生時代前期の大溝が2条検出されている。この大溝の北及び北西側における調査（46・50・52次）では、今回の調査において検出された弥生時代の遺構と同時期の遺構が多数検出されており、調査地周辺が弥生時代前期から中期にかけての集落の中心部のひとつと考えられている。今回の調査成果はこの想定を補強するものと言える。また、調査において検出された生活面のうち、前述の第45次調査で検出された前期の大溝と同時期の生活面は、出土遺物の時期や層位から第5遺構面と考えられる。

調査地周辺では、調査地の西側における第46・50次調査において6面の遺構検出面が確認されている。これらの遺構検出面と今回の調査によって確認した遺構検出面との対応関係については、その標高及び検出遺構の時期などから、概ね第46・50次調査第1～5遺構面と今回の第1～5遺構面は対応するものとする。また、第46・50次調査によって確認した第6遺構面（第7層上面、標高2.5m前後）については、今回の調査では遺構を確認することができなかった。さらに、今回検出した第7・8層においては遺物の出土が認められなかったものの、第50次調査では第7層にも遺物が

含まれており、さらにその下層において弥生時代前期後葉以前に遡る遺構の存在が指摘されている。よって今回の調査地においても希薄ではあるものの、第7層上面に生活面が存在する可能性は否定できないものと考ええる。今後、調査地周辺部における調査データの蓄積を待って、弥生時代前期段階の生活面についての対応関係の整理が必要であると考ええる。

次に、今回の調査では江戸時代末から明治時代初頭にかけて埋没したと考えられる土坑（SK-2）から、当時の太田周辺で窯業生産されていた「太田焼」とみられる陶磁器類及びその未製品、窯道具が出土した。「太田焼」は、紀州御庭焼のひとつである偕楽園焼を模倣した製品を焼造していたと伝えられている。これらの遺物は、太田周辺における産業史を復元する上で貴重なものと考えられる。

以上、今回の調査成果について述べてきた。太田・黒田遺跡は、弥生時代前期から明治時代初頭という長期にわたり人々が生活の場として、また産業の場として歴史を刻んできた複合遺跡として貴重な遺跡である。

【参考文献】

- 角谷江津子 2001「出土資料にみる「太田焼」」『研究紀要15』和歌山市立博物館
財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2001『太田・黒田第45次発掘調査概報』
財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2002『太田・黒田第52次発掘調査概報』
財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2002「太田・黒田遺跡第46次発掘調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成12年度－』和歌山市教育委員会
財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2003「太田・黒田遺跡第50次発掘調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成13年度－』和歌山市教育委員会

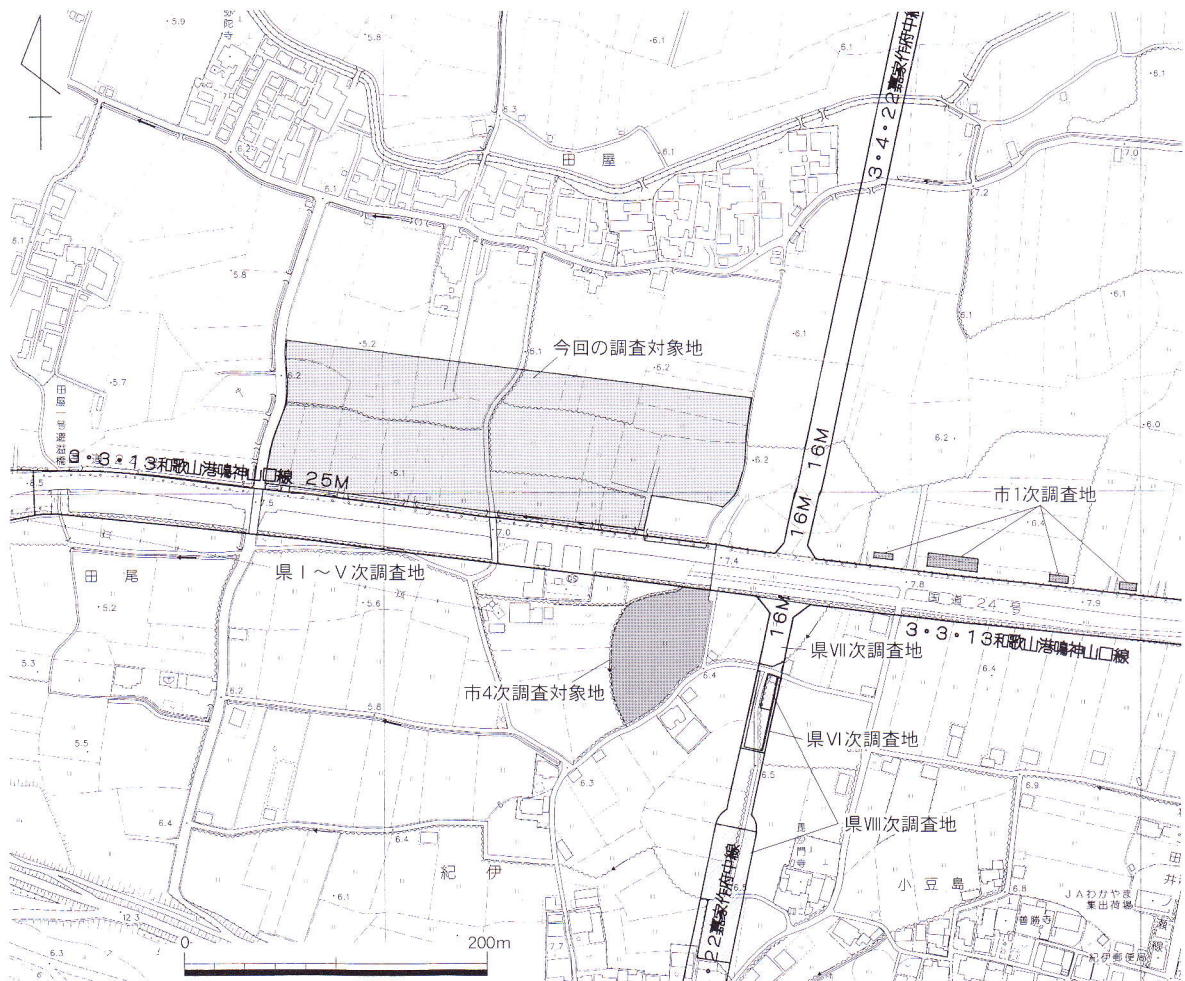
③田屋遺跡 第5次確認調査（調査一覧59）

1. 調査の経緯と経過

和歌山市域の北東部にあたる和歌山市田屋・小豆島周辺に所在する田屋遺跡は、紀ノ川北岸の標高6.00m前後の沖積平野に立地する遺跡である。この遺跡は東西約1km、南北約750mの範囲をもち、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡として知られている。また遺跡東端は弥生時代から室町時代の集落遺跡である西田井遺跡と接している。

当遺跡の過去の調査には、和歌山県関係の調査として社団法人和歌山県文化財研究会が行った一般国道24号バイパス線関連の調査が5件、財団法人和歌山県文化財センター（以下、「県センター」という。）が行った県道紀伊停車場田井ノ瀬線関連の調査が2件の他、和歌山県教育委員会が行った調査が1件ある。また和歌山市関係の調査としては一般国道24号バイパス線北側の大規模店舗建設に伴う調査（市第1次調査）など4件の調査が行われている（第1図）。これらの調査では、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴建物約50棟の他、同時期の掘立柱建物や溝、平安時代の掘立柱建物や自然流路などが発掘され、弥生土器・土師器・須恵器をはじめとする多量の遺物が出土している。

今回の調査は、田屋遺跡の中央部一般国道24号バイパス線北側の大規模店舗建設に伴う約30,000㎡を対象とした確認調査として実施したものである。一般国道24号バイパス線はその建設に伴う発掘調査（以下、バイパス調査区と呼ぶ。）が行われ、その内容が1990年県センター発行の報告書にま



第1図 調査対象地位置図

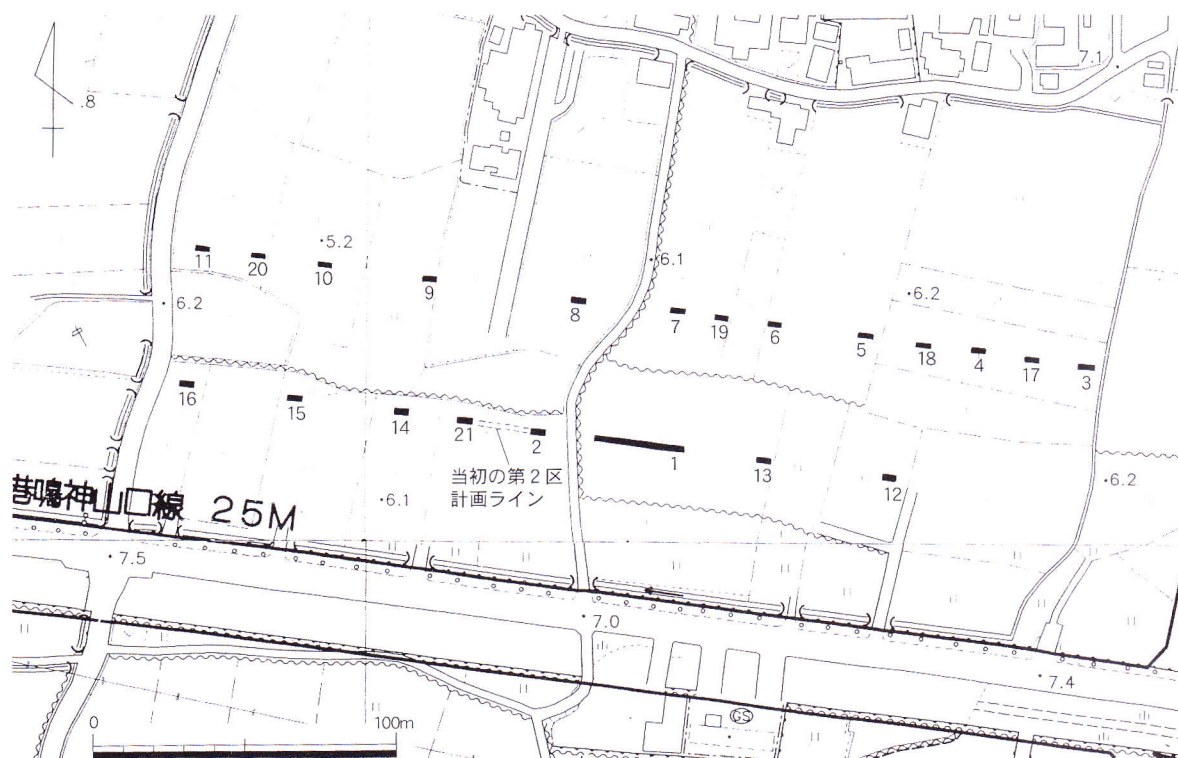
とめられており、今回の調査対象地には堅穴建物等を中心とする遺構の広がりが確実に及ぶものと推定されていた。このことから、今回の調査区はバイパス調査区から北に50m及び100mの距離に東西方向の調査区（以下、50mライン・100mラインの調査区と呼称する。）を21ヶ所設定し、集落域の範囲確認とバイパス調査区で検出されていた自然流路（以下、NR-1とする。）の位置確認を目的として実施することとなった。

調査は、大規模店舗建設を目的とする開発計画を起因とするものであり、事前の確認調査として、和歌山市教育委員会文化振興課指導のもと財団法人和歌山市都市整備公社が和歌山市から委託を受け実施することとなった。現地における調査は、平成22年10月18日から同年11月30日までの約40日間の期間を要した。

2. 調査の方法と概要

（1）調査の方法

今回の調査対象地は、一般国道24号バイパス線の北側隣地であり、東西約300m、南北約100mの範囲であった。一般国道24号バイパス線付近は、バイパス調査区の成果が存在したことから北側50mラインと100mラインに沿って調査区を設定することになった。当初の計画は、NR-1の延長部確認のための調査区として第1・2区を東西長30m、南北幅2mで設定し、それ以外の遺構確認調査区として東西長5m、南北幅2mの調査区を北東部から14ヶ所（第3～16区）設定した。なお、調査区が広範囲に分布していたことから調査工程を2回に分け、対象地ほぼ中央部を南北に縦断する里道を境として東側を第Ⅰ工程、西側を第Ⅱ工程として調査を開始した。第Ⅰ工程調査の進捗によって、第1区の範囲においてNR-1が確認できたことから文化振興課担当者と協議して第2区を縮小し、第17～21区（東西長5m、南北幅2m）を新設して遺構の確認に努めた（第2図）。



重機による掘削は、バイパス調査区の調査成果をもとに古墳時代以降の遺物包含層である第5層上面まで慎重に行った。人力による調査は、遺物包含層（第5層）の掘削並びに第6層上面の遺構調査を行った後、サブトレンチによる下層調査を行った。溝などの遺構掘削については、基本的に実施しないものとしていたが、帰属時期などの状況確認のため文化振興課担当者と協議し、検出した遺構の一部もしくは全体の掘削を行うこととした。

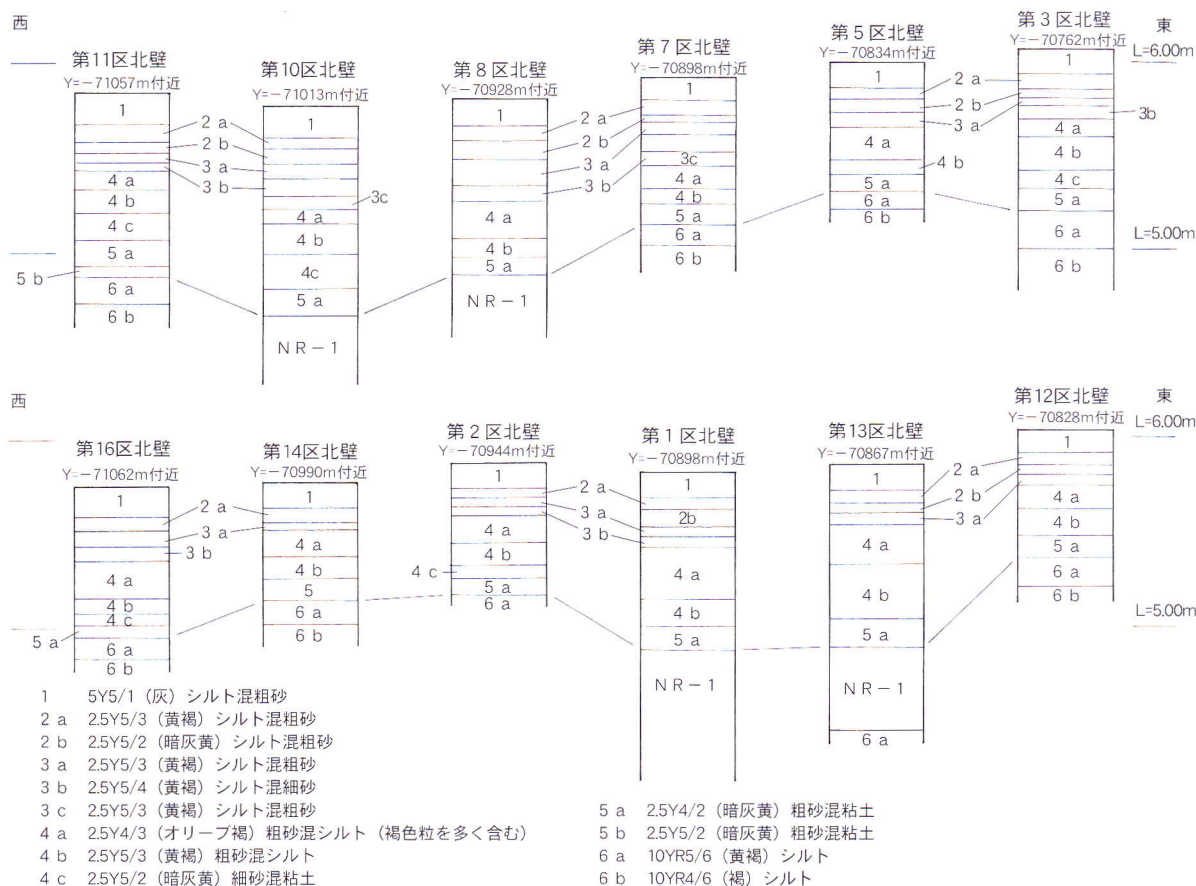
図面による記録は、各調査区に仮原点を設置して遺構平面図及び壁面土層断面図（縮尺1/20）の作成を行った。調査区の仮原点は、基準点測量を行い旧国土座標（日本測地系）の数値とし、これまでの調査区との位置関係を明確にした。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、水準値は国家水準点（T.P.値）を基準とした。

（2）基本層序

調査地の基本層序は第3図に示した通りである。

まず調査対象地の現況は、水田及び休耕田であり、耕作面の標高（6.10～5.70m）は、東から西に向かって緩やかに下降する傾斜をもつ（図版10上）。また確認したNR-1の範囲である第8～10区周辺と第13～1区周辺は上部の耕作面までやや低くなる傾向を示す。

堆積土の状況は、上位から灰色系のシルト混粗砂である現代の水田耕作土、黄褐色系のシルト混粗砂である江戸時代の耕作土（第2層）、黄褐色系のシルト混粗砂及び細砂である室町時代から江戸時代にかけての耕作土（第3層）、鎌倉時代の堆積と考えられる褐色粒を含むことを特徴とするオ



第3図 調査地土層柱状模式図

リーブ褐色系の粗砂混シルト（第4層）、暗灰黄色系の粗砂混粘土である奈良時代から鎌倉時代にかけての堆積土（第5層）、今回の調査では遺物の出土は認められなかった黄褐色系のシルト質土（第6層）に大別でき、第1層を除く各層位は2～3単位に細分できる。なお、今回の調査において確認した遺構面は第6層上面の1面であり、NR-1も第6層上面に対応する層位において確認した。この遺構面の対応関係も第3図に示した。

3. 遺構

今回の調査では第6a層上面の1面において遺構を検出した。検出した遺構には溝や土坑、ピットなどがある。

なお、対象地中央部を南北に貫く里道を境とし、50mラインと100mラインの調査区に4分割してNR-1を確認した南東部の調査区から遺構等の説明を行う。

（1）南東部の調査

南東部にあたる調査区は50mラインに設定した調査区で、東から順に第12・13・1区であり、このうち第1区がバイパス調査区で確認されていた自然流路（NR-1）の延長部確認を目的とした調査区である。この第1区では、NR-1西肩部を検出し、その方向性を明らかにした。これら調査区における遺構検出面（第6a層上面）の標高は、東端部における第12区で約5.30mと最も高く、西側第1区のNR-1確認部分では40cm程度低くなる。

【第1区】（第4図、図版10）

第1区は対象地ほぼ中央部に設定した調査区で、調査区西端部から約10.50mの地点においてNR-1の西肩部を検出した。NR-1の掘削は、上位層の第2層までとし、北壁下及び東端部に設定したサブトレンチによって標高4.20mまで掘削を行ったものの底面の検出には至っていない。またNR-1の西側において土坑1基（SK-3）、ピット2基（P-3・4）を検出した。SK-3は東西長1.5m、南北幅60cm、深さ20cmのもので、土師器甕の底部（第8図1）などが一定量出土したことから古墳時代前期の遺構と考えられる。またP-4からも土師器片が出土している。

【第12区】（第4図、図版11）

第12区は、50mラインの最も東側にあたる調査区である。遺構検出面（第6a層上面）の標高は、5.30m程度と安定した状況であり、ピット1基（P-2）を検出した。

【第13区】（第4図、図版11）

第13区は、第12区の西側約37mに設定した調査区である。この調査区全体がNR-1の内部に位置し、NR-1埋没後に掘削された土坑1基（SK-2）を検出した。SK-2は北壁面下に確認したもので、東西幅2.3m、南北幅1.1m以上の円形土坑である。深さは、検出面から約70cm掘削を行ったが底面の確認には至っていない。掘削した状況や覆土内部から出土した須恵器杯身（第8図3）から奈良時代前期の井戸と考えられる。また東壁面下に設定したサブトレンチによってNR-1を掘削した結果、深さ10～40cmにおいて第6層を確認し、NR-1東肩部からの傾斜部であることを確認した。このことから、この調査区は、極めてNR-1南肩部に近接する位置であることが判明した。

以上のように対象地南東部では、NR-1を確認した他、NR-1の両肩部である第1・12区において土坑やピット等の遺構を検出し、バイパス調査区と同様にNR-1肩部における遺構の展開が明らかである。さらに、NR-1埋没後に掘削された土坑1基（SK-2）を確認したことは、

これまでの成果のなかで新しい知見といえる。

(2) 北東部の調査

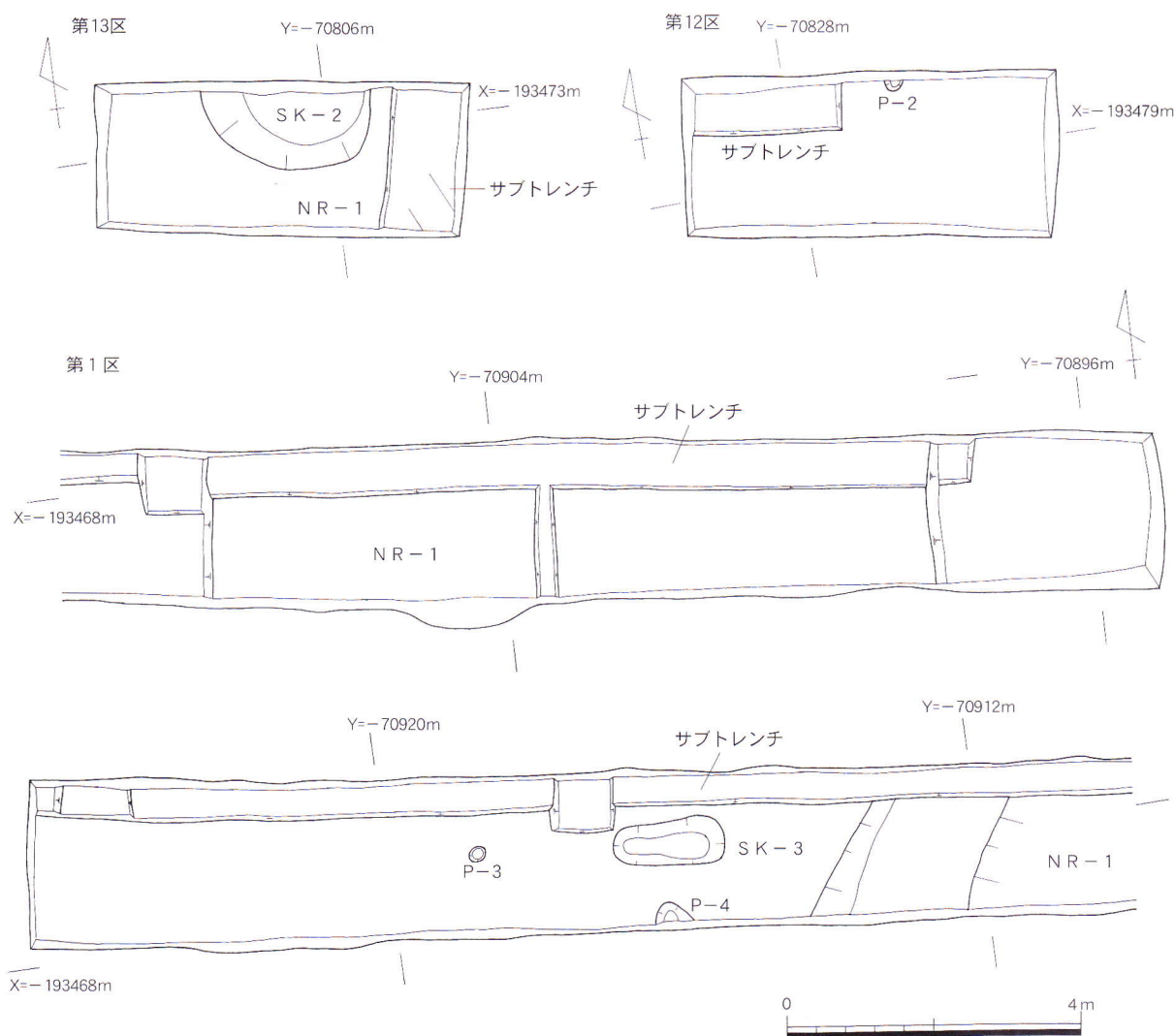
北東部にあたる調査区は100mラインに設定した調査区で、東から順に第3・17・4・18・5・6・19・7区である。遺構検出面（第6 a 層上面）の標高が5.2m前後と比較的高く、対象地内での微高地部にあたる。

〔第3・17・4・18・5区〕（第5図、図版11・12）

第3区は100mラインの東端部に設定した調査区である。この第3区から西に向け約13mごとに第17・4・18・5区を設定した。遺構検出面（第6 a 層上面）の標高は第3区では5.20m、第5区では5.30mとなり、西側に向け緩やかに上昇する傾斜を示し、比較的安定した遺構面を形成する。しかし、これらの調査区では遺構が確認されず、上位の堆積である第5層の遺物包含量も比較的小さい状況であった。また北壁下に設定したサブトレンチ内部からも遺物は出土していない。

〔第6区〕（第5図、図版12）

第6区は第5区の西側約26mに設定した調査区である。この調査区の遺構検出面（第6 a 層上面）の標高は5.25m程度で安定した遺構面を形成する。検出した遺構は、土坑1基（SK-1）とピット1基（P-1）であり、SK-1から土師器片が出土している。

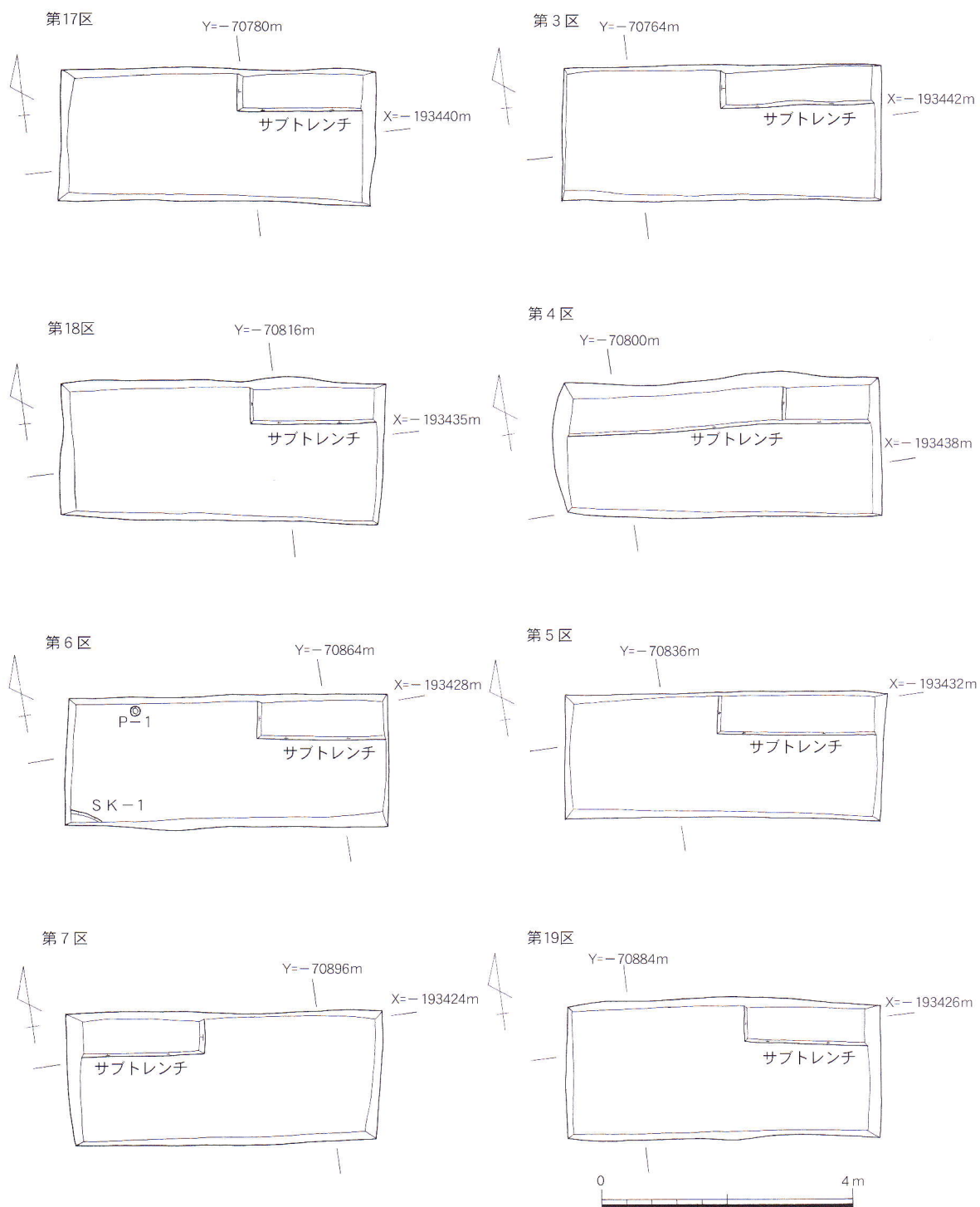


第4図 遺構平面図1

〔第19・7区〕（第5図、図版13）

第19区は第6区の西側約13mに設定した調査区であり、また第7区は第19区の西側約10mに設定した調査区である。遺構検出面（第6a層上面）の標高は第19区及び第7区とも5.10m程度となり、第6区から西側に向かって緩やかに下降する傾斜を示す。これらの調査区でも遺構が確認されず、上位の堆積である第5層の遺物包含量も比較的少ない状況であった。

以上から対象地北東部では、比較的安定した微高地を形成するにも関わらず遺構が希薄であり、



第5図 遺構平面図2

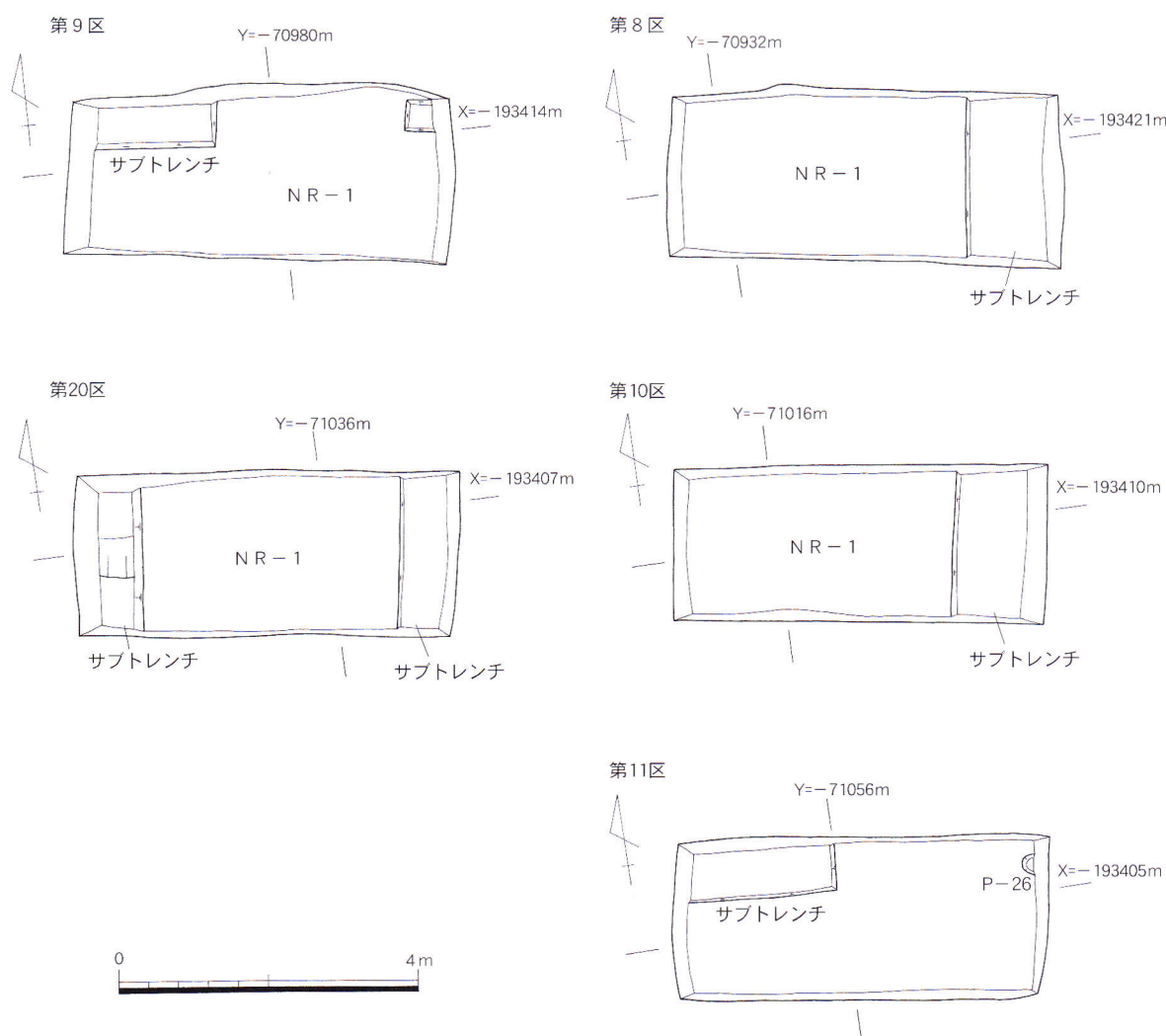
遺物分布も比較的少ない状況である。しかし、第6区のように遺構が検出される部分も存在することから全く遺構が存在しない地区とはいえないものと思われる。

(3) 北西部の調査

北西部にあたる調査区は100mラインに設定した調査区で、東から順に第8～10・20・11区である。これらの調査区は、その大半がNR-1の内部にあたり、西端部の第11区においてNR-1南肩部付近に相当するベース面（第6a層上面）を検出した。遺構検出面の標高は、第8区のNR-1検出面と第11区の第6a層上面で4.90m程度と比較的低く、さらにNR-1中央部付近と考えられる第10区ではNR-1の検出面が4.70mと最も低い。

〔第8～10区〕（第6図、図版13・14）

第8区は先述の第7区の西側約28mに設定した調査区であり、その約45m西側に第9区、さらに約30m西側に第10区を設定した。調査の結果、これらの調査区はすべてNR-1の内部にあたり、NR-1の上面には遺構は確認されなかった。NR-1の掘削は、それぞれサブトレンチを設定して掘削を行ったものの、底面の検出には至らず、第8区では標高4.50m、第10区では標高4.30mまで掘削を行った。NR-1の覆土内からは、6世紀代までの須恵器・土師器が一定量出土した。



第6図 遺構平面図3

〔第20区〕（第6図、図版14）

第20区は第10区の西側約17mに設定した調査区であり、調査区はすべてNR-1の内部にあたり、NR-1の上面には遺構は確認されなかった。NR-1検出面の標高は4.70mである。この調査区では東西両壁面下にサブトレンチを設定して掘削を行った。その結果、西側サブトレンチ内の深さ40～70cmにおいて第6層を確認し、NR-1南肩部からの傾斜部であることを確認した。このことから、この調査区は極めてNR-1南肩部に近接する位置であることが判明した。

〔第11区〕（第6図、図版14）

第11区は第20区の西側約14mに設定した調査区であり、遺構検出面（第6a層上面）の標高は4.90m程度で安定した遺構面を形成する。検出した遺構は、直径25cm、深さ10cmのピット1基（P-26）であり、内部から須恵器片1点が出土した。

以上の成果から、北西部はその大半がNR-1内部にあたり遺構の展開が不明瞭であるものの、NR-1の覆土内部に一定量の遺物が含まれていることや第11区検出のピットなどからNR-1肩部における遺構の展開が十分考えられる。

（4）南西部の調査

南西部にあたる調査区は50mラインに設定した調査区で、東から順に第2・21・14～16区である。遺構検出面（第6a層上面）の標高は5.10m前後と比較的安定した状況にあり、すべての調査区においてピットや溝、土坑などの遺構を検出した。

〔第2区〕（第7図、図版14）

第2区は、先述の第1区の西側約16mに設定した調査区で、遺構検出面（第6a層上面）の標高は5.15m程度で安定した遺構面を形成する。検出した遺構は、土坑2基（SK-4・5）やピット8基（P-5～12）がある。SK-4は東西幅2.7m以上、南北幅1.2m以上で深さが35cm程度の土坑であり、東西両端部を掘削した。覆土には須恵器や土師器片が一定量含まれおり、時期的には6世紀代と考えられる。また、この土坑と重なりをもつSK-5は、全形は不明であるものの、最深部で深さ77cmを測るもので、出土した須恵器から5世紀代の遺構とみられる。ピットは直径40cm程度のものと直径20cm程度のものがあり、P-5内部から土師器片が出土した。

〔第21区〕（第7図、図版15）

第21区は、第2区の西側約20mに設定した調査区で、遺構検出面（第6a層上面）の標高は5.10m程度で安定した遺構面を形成する。遺構は、土坑1基（SK-6）やピット6基（P-13～18）を検出した。SK-6は東西1.9m以上、南北1.2m以上で深さが10～20cm程度の不正形土坑で、内部から一定量の炭化木や焼土が出土した。またピットは第2区の様相に類似するもので、遺物は出土していない。

〔第14区〕（第7図、図版15）

第14区は、第21区の西側約16mに設定した調査区で、遺構検出面（第6a層上面）の標高は5.10m程度である。検出した遺構は、溝2条（SD-1・2）、土坑1基（SK-7）の他、ピット7基（P-27～33）がある。溝2条（SD-1・2）はともに南北方向に掘削された小溝である。またSK-7は北東隅部において検出した深さ5cm程度の方形土坑である。ピットは直径15cm程度の小規模なものが多い。これらの覆土から遺物は出土していない。

〔第15区〕（第7図、図版15）

第15区は、第14区の西側約31mに設定した調査区で、遺構検出面（第6a層上面）の標高は5.10

m程度である。検出した遺構は、溝4条（SD-3～6）やピット4基（P-34～37）がある。SD-3～5はともに南北方向に掘削された小溝であり、第14区で検出したSD-1・2に類似する。またSD-6は幅80cm、深さ10cm程度の南北方向に掘削された溝で、覆土内から瓦器や中世土師器片が出土していることから中世の遺構と考えられる。またピットは比較的小規模なものが多く、P-37から土師器片が出土している。

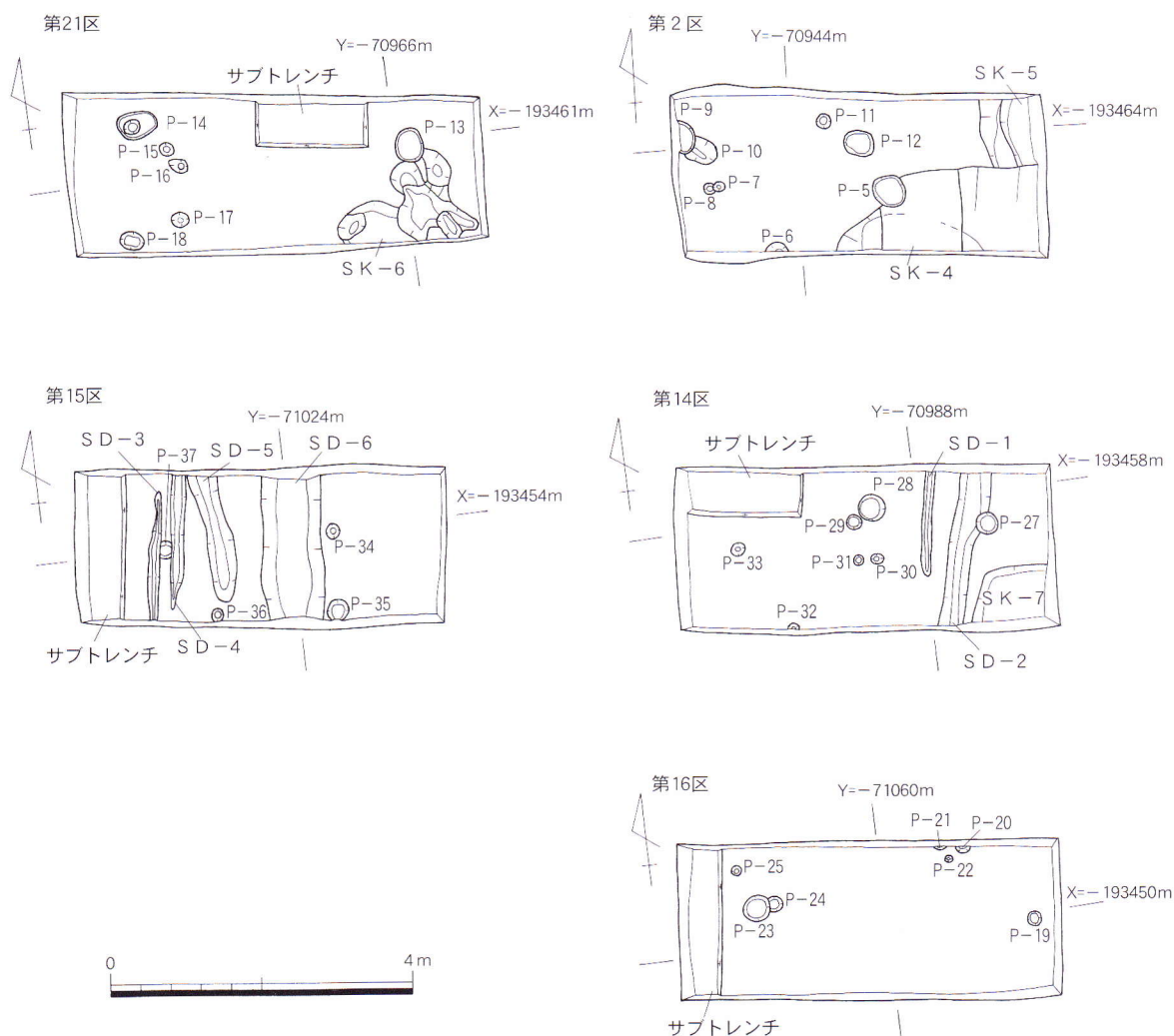
〔第16区〕（第7図、図版15）

第16区は、第15区の西側約31mに設定した調査区で、遺構検出面（第6a層上面）の標高は4.95m程度である。検出した遺構は、ピット7基（P-19～25）がある。ピットは比較的小規模なものが多く、覆土内から遺物は出土していない。

以上の状況から南西部は数多くの遺構分布が展開しているものとみられ、遺物包含層などの遺物量も比較的多く、集落の中心部分に近接するものと考えられる。

4. 遺物

今回の調査において出土した遺物は、遺物包含層や遺構覆土から出土したものが遺物収納コンテナ2箱分あり、その種類には、弥生土器、土師器、須恵器、黑色土器、瓦器、中世土師器、中世須



第7図 遺構平面図4

恵器、国産陶磁器、瓦、石器などがある。

今回の遺物出土傾向は、種類のには多いものの、量的には古墳時代に比定できる土師器、須恵器が大半を占めている。また遺構出土の遺物は細片が多く、時期判定が比較的困難であり、大半はNR-1の肩部や遺物包含層である第5層から出土し、特に南西部の第14区周辺の上位堆積層から中世の土器類が一定量出土している。

以下、今回出土した遺物の中で図示できたものについて説明する。

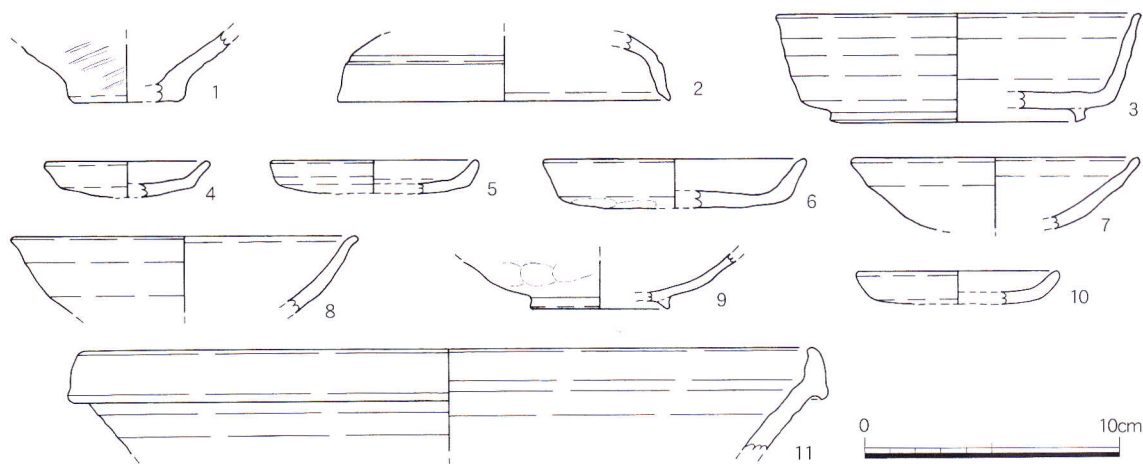
(1) 遺構出土の土器 (第8図、図版16)

1は土師器の底部である。外面には成形時のタタキ痕が観察できる。2は須恵器杯蓋の口縁部である。肩部には1条の沈線が廻り、口縁部内端部に面をもつ。3は須恵器杯身である。外反気味にのびる口縁部は強いヨコナデによって段をなす。比較的内側に貼付された高台は、内端部によって接地する。

これらの出土位置は、1が第1区SK-3、2が第8区のNR-1第2層、3が第13区のSK-2である。

(2) 遺物包含層等出土の土器 (第8図、図版16)

4~7は土師器皿である。4は口径6.4cmを測る最も小さなもので、口縁部は強いヨコナデによって外反する。5は口径8.0cmのもので、口縁部は肥厚させて丸く仕上げている。6は口径10.2cm、器高1.9cmのものであり、口縁部は強いヨコナデによって外反する。7は口径13.4cm、残存高3.0cmのもので、比較的深い器形を呈する。口縁部は強いヨコナデによって稜をなす。8~10は瓦器である。8は比較的肉厚な碗の口縁部で、端部を外反させて丸く仕上げている。9は碗の体部下半の小片で、貼付による高台は三角形の断面である。8・9とも摩滅が著しく暗文等は確認できない。10は口径7.8cmの皿である。全体的に肉厚で口縁部を丸く仕上げている。11は東播系須恵器のこね鉢である。口縁部は上下に肥厚させて外端面を作り出している。これらの出土位置は、4・5・7・8・14が第14区の層位不明、6が第16区の層位不明、9が第11区の第5層、11が第12区の第4層として取り上げたものである。



第8図 遺物実測図

3. まとめ

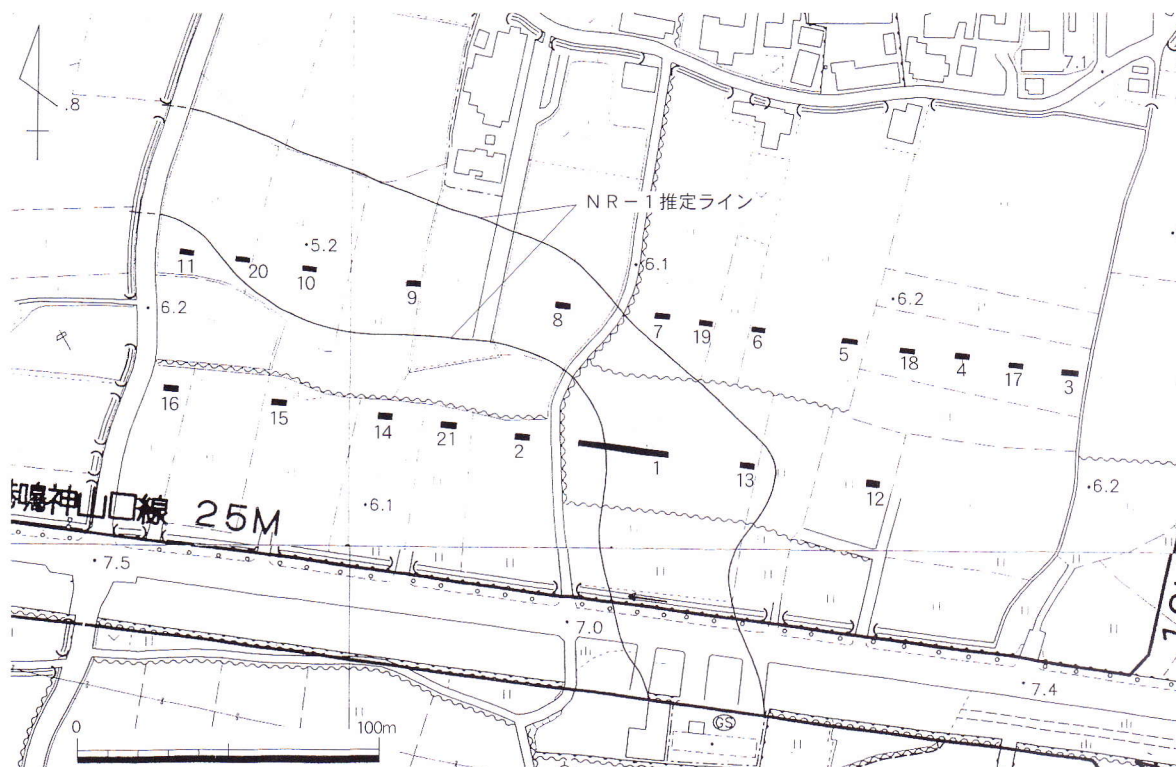
今回の広範囲における確認調査において検出したNR-1の状況からその推定範囲を第9図に示し、確認した遺構等の状況を別表にまとめた。

NR-1はバイパス調査区から今回の第1～13区周辺まで北進し、そこから西に向け大きく屈曲して北西部を東西に貫くものと推定される。バイパス調査区の調査成果からみて、NR-1の隣接地には弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴建物など居住域を示す遺構群が多く分布する傾向にあり、NR-1の覆土には同時期の遺物群が膨大に含まれていることが明らかとなっている。今回の調査において比較的多くの遺構を検出した南東部及び南西部はNR-1に沿った範囲に相当し、竪穴建物は確認していないものの掘立柱建物を構成するとみられるピット群などを検出し、居住域と考えられる遺構群と位置づけられる。その反面北東部に位置する第3～5区にかけてはNR-1とやや離れている位置関係にあり、遺構分布が減少する傾向を示すものと考えられる。このことは、バイパス調査区のNR-1西側の調査成果にも現れている。

以上の調査成果から、NR-1の範囲やその周辺を踏まえた調査が必要と考えられよう。

【参考文献】

- 財団法人和歌山県文化財センター 1990『田屋遺跡発掘調査報告書』
- 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2005『田屋遺跡発掘調査概報』

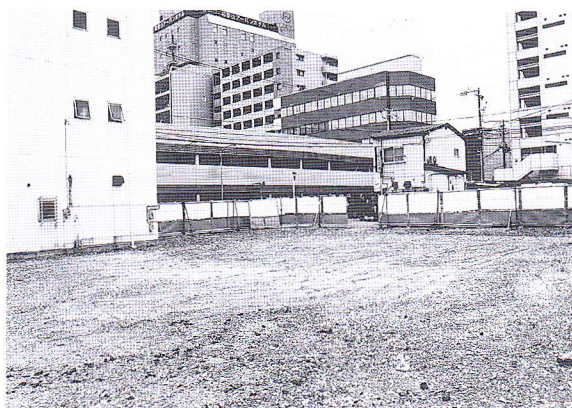


第9図 NR-1 推定図

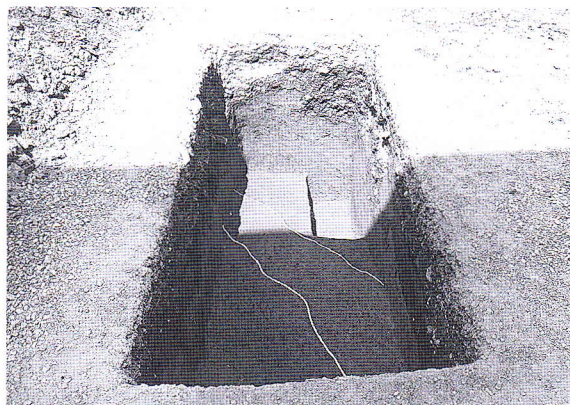
検出遺構一覧表

対象地	調査区	調査区幅 (m)	調査区長 (m)	面積 (㎡)	遺構面の 標高(m)	検出遺構	備考
南東部	第12区	2.2	5.1	11.22	5.30	ピット1基	
	第13区	2.1	5.0	10.50	5.05	土坑1基、NR-1	NR-1の東肩近接地
	第1区	2.2	30.0	66.00	4.90 5.15	ピット1基、土坑1基、 NR-1	NR-1の西肩部分
北東部	第3区	2.1	5.1	10.71	5.20		
	第17区	2.1	5.0	10.50	5.20		
	第4区	2.2	5.1	11.22	5.30		
	第18区	2.2	5.1	11.22	5.30		
	第5区	2.0	5.1	10.20	5.30		
	第6区	2.1	5.1	10.71	5.20	ピット1基、土坑1基	
	第19区	2.1	5.0	10.50	5.10		
	第7区	2.1	5.0	10.50	5.10		
北西部	第8区	2.2	5.2	11.44	4.80	NR-1	NR-1の中央部
	第9区	2.2	5.1	11.22	4.70	NR-1	NR-1の中央部
	第10区	2.1	5.0	10.50	4.70	NR-1	NR-1の中央部
	第20区	2.2	5.1	11.22	4.70	NR-1	NR-1の南肩近接地
	第11区	2.2	5.0	11.00	4.90	ピット1基	
南西部	第2区	2.2	5.0	11.00	5.15	ピット8基、土坑2基	
	第21区	2.1	5.5	11.55	5.10	ピット6基、土坑1基	
	第14区	2.2	5.0	11.00	5.10	ピット7基、溝2条、 土坑1基	
	第15区	2.1	4.9	10.29	5.10	ピット4基、溝4条	
	第16区	2.1	5.1	10.71	4.95	ピット7基	
			計	283.21			

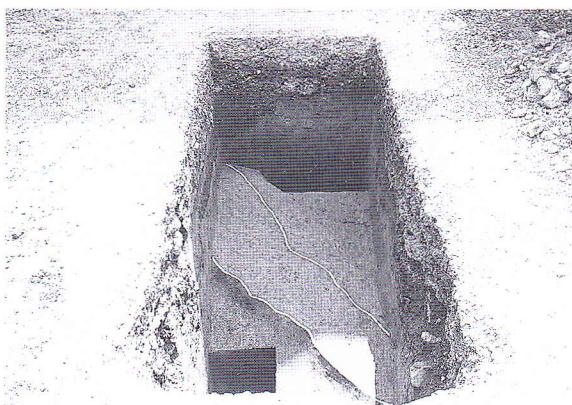
図 版



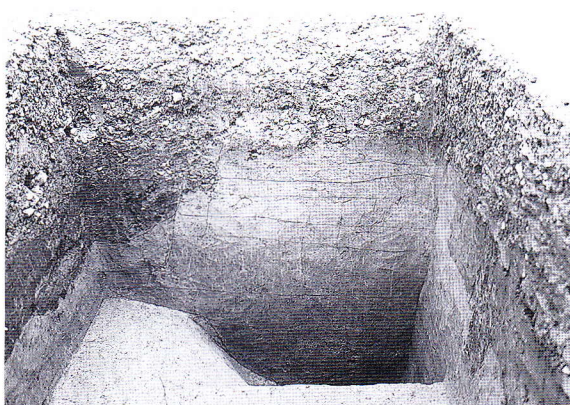
調査前の状況（北西から）



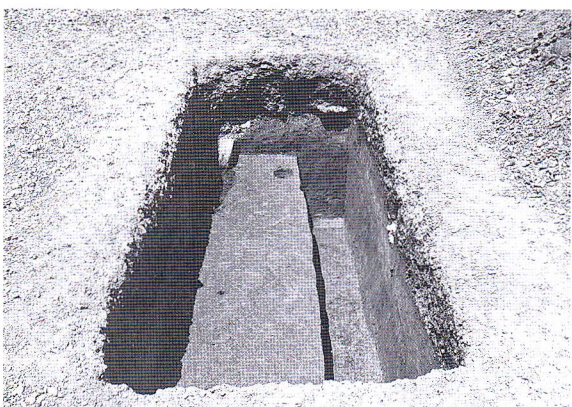
第1区 全景（東から）



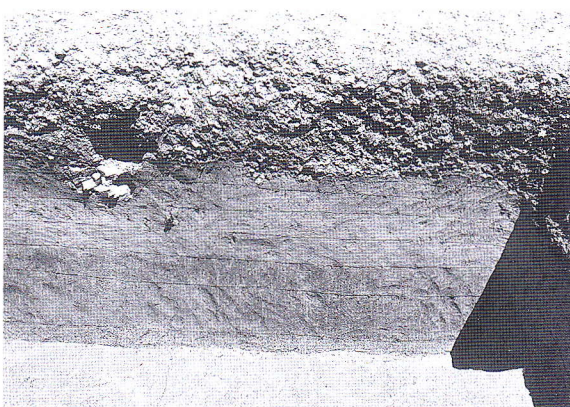
第1区 全景（西から）



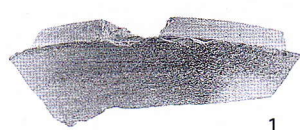
第1区 東壁土層堆積状況（西から）



第2区 全景（東から）



第2区 北壁土層堆積状況（南から）



1



2

須恵器（杯身1・2）

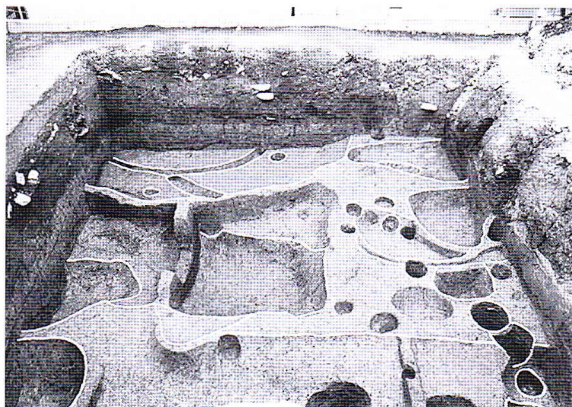


3

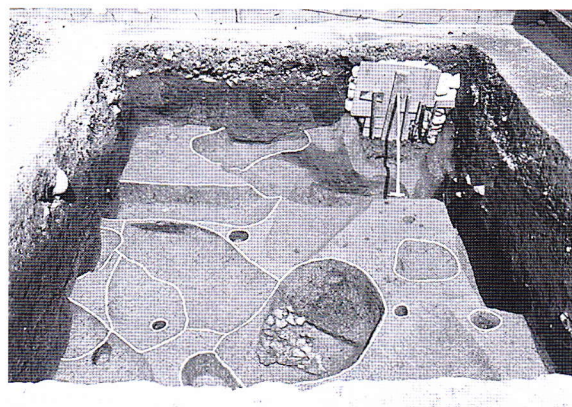


4

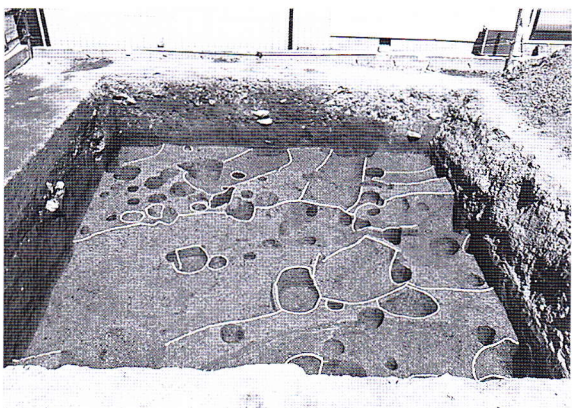
弥生土器（脚部3）、土師器（甕4）



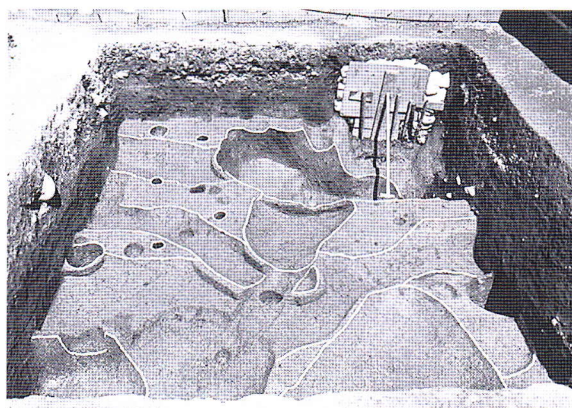
第2区 第6層上面全景（南から）



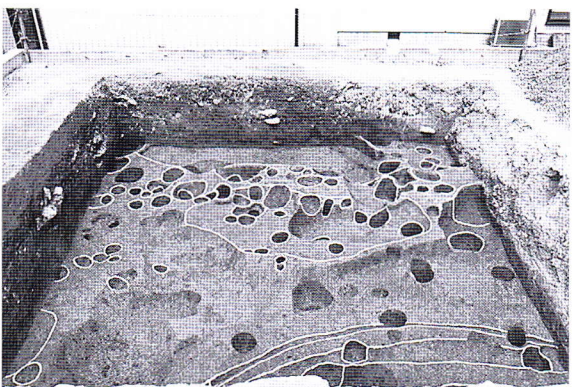
第1区 第6層上面全景（南から）



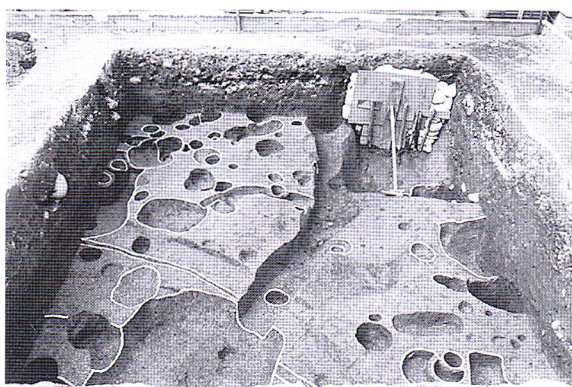
第2区 第5層上面全景（南から）



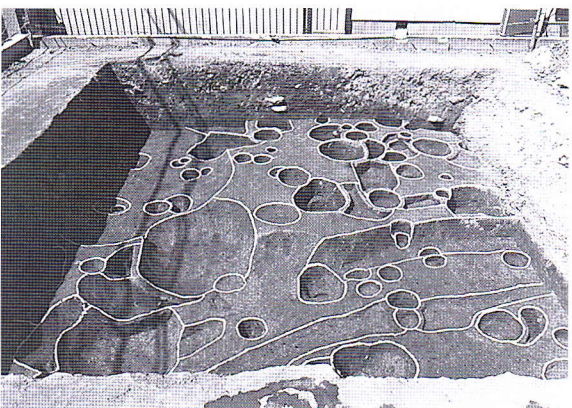
第1区 第5層上面全景（南から）



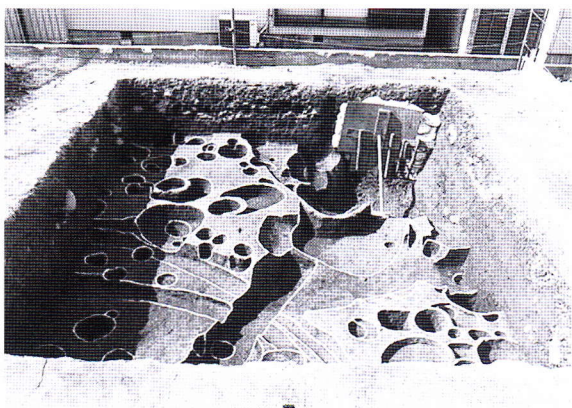
第2区 第4b層上面全景（南から）



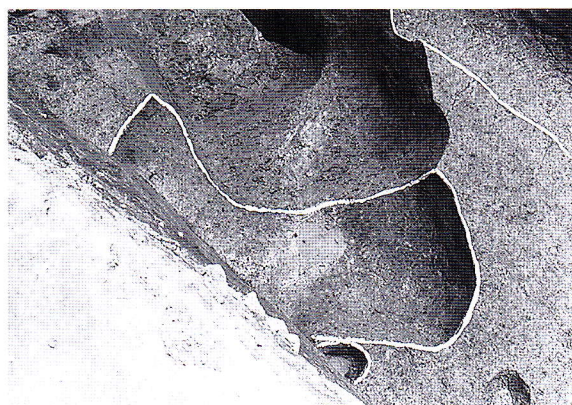
第1区 第4b層上面全景（南から）



第2区 第4a層上面全景（南から）



第1区 第4a層上面全景（南から）



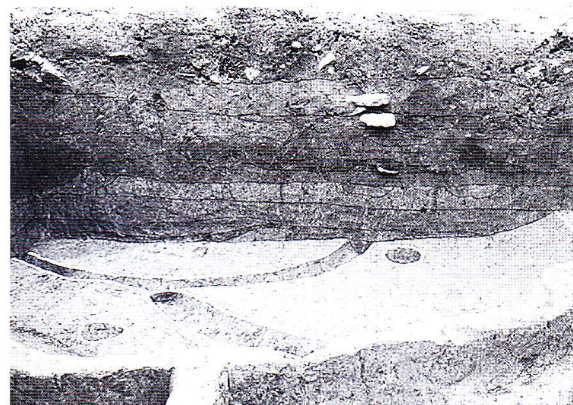
第1区 SK-49 (北西から)



第1区 SK-49土層堆積状況 (南西から)



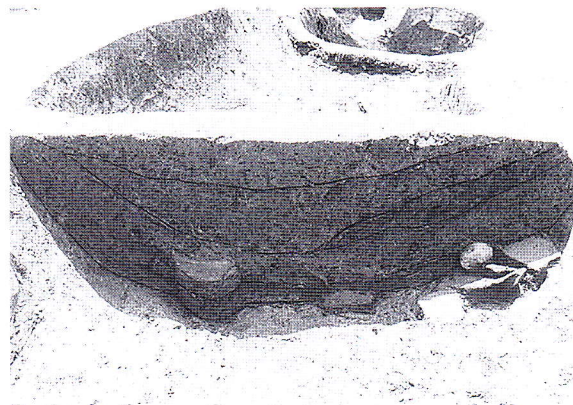
第2区 SX-4 (西から)



第2区 SX-4土層堆積状況 (南から)



第1区 SK-43 (東から)



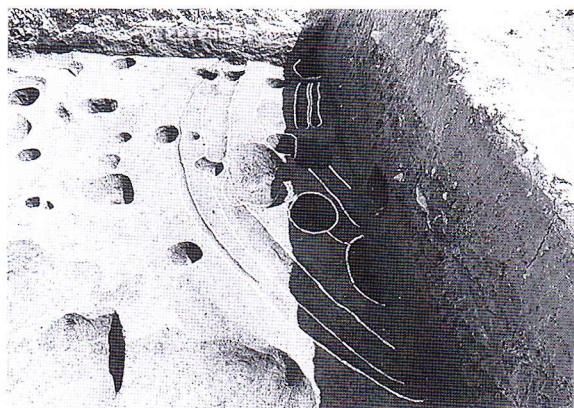
第2区 SK-43土層堆積状況 (北東から)



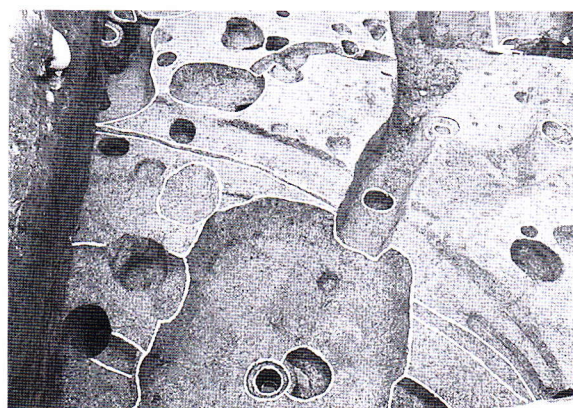
第1区 SK-37・38 (東から)



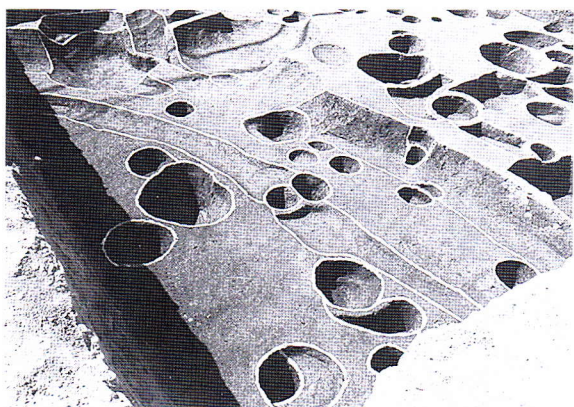
第1区 SK-37土層堆積状況 (東から)



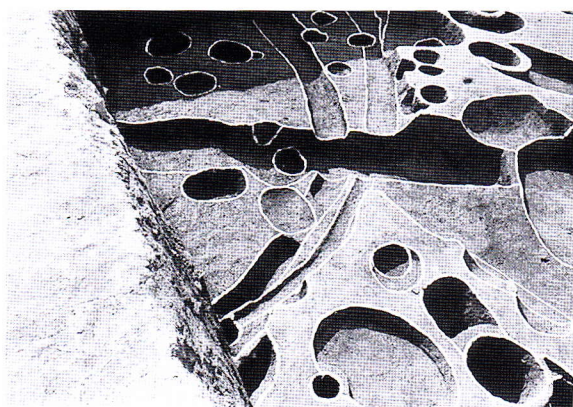
第2区 S I - 2・3 (西から)



第1区 S I - 2・3 (南から)



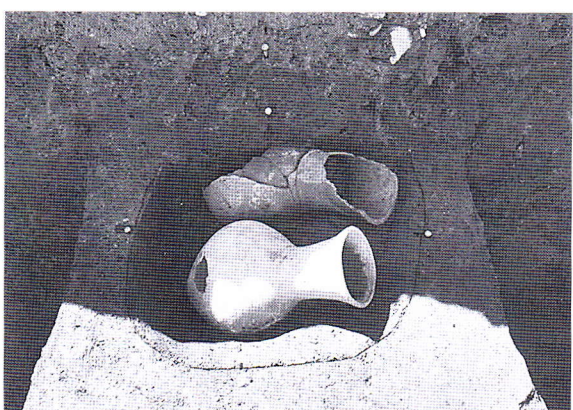
第2区 S I - 1 (南東から)



第1区 S I - 1 (南東から)



第2区 S X - 1 (東から)



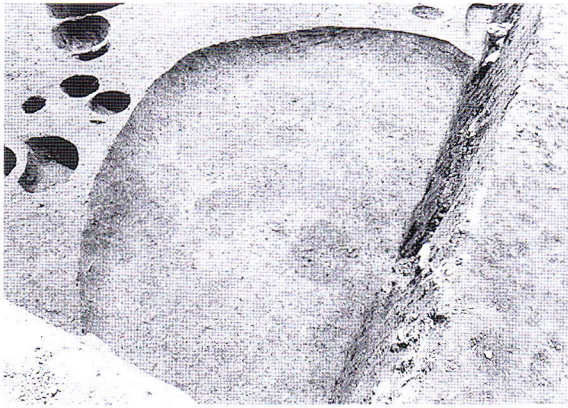
第2区 S X - 1 (北から)



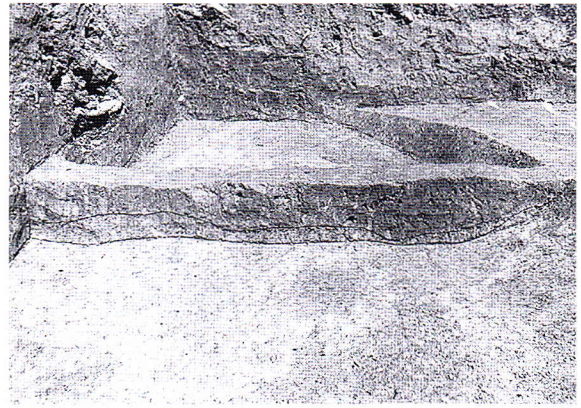
第1区 S E - 1 (東から)



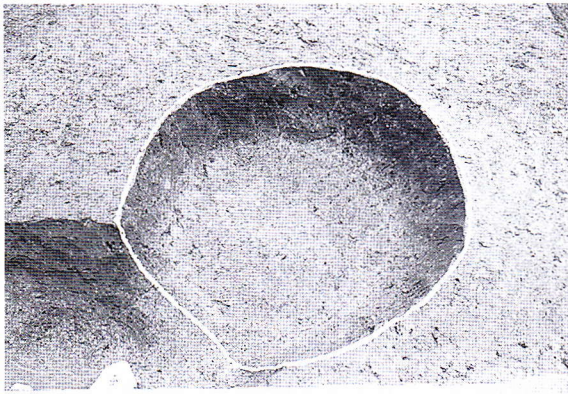
第1区 S E - 1 土層堆積状況 (西から)



第2区 SK-54 (北西から)



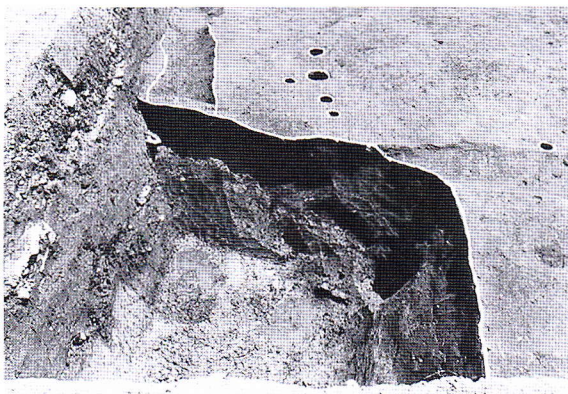
第2区 SK-54土層堆積状況 (南から)



第2区 SK-52 (西から)



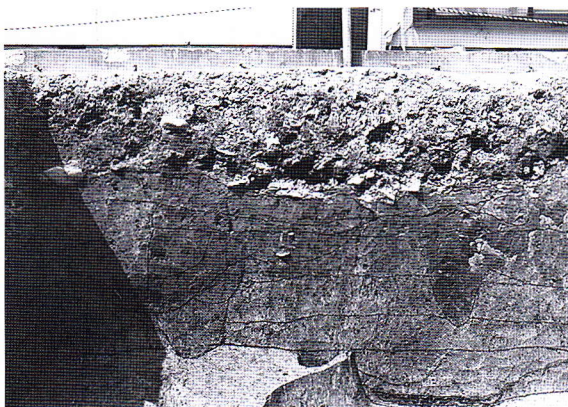
第2区 SK-52土層堆積状況 (東から)



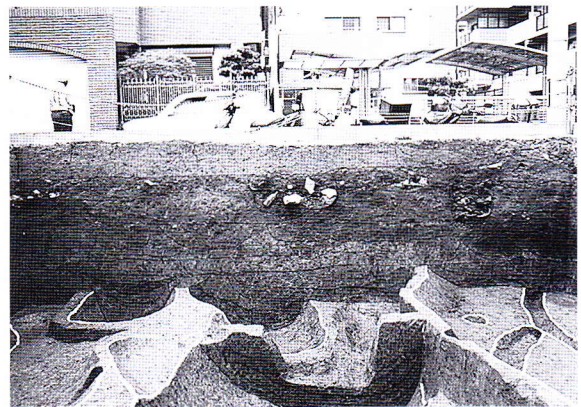
第1区 SK-2 (北から)



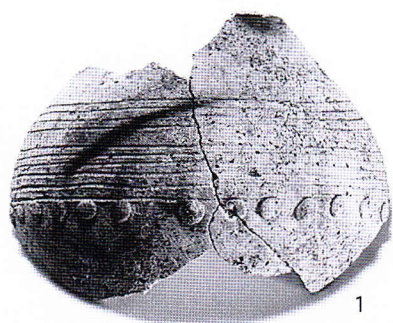
第1区 SK-2土層堆積状況 (南から)



調査区北壁Y=-74156m付近土層堆積状況 (南から)



調査区西壁土層堆積状況 (東から)



弥生土器 (1 壺)



2



3

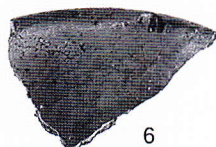
弥生土器 (2 甕、 3 鉢)



4

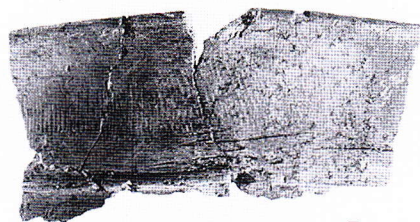


5



6

弥生土器 (4 ~ 6 壺)



7

弥生土器 (7 甕)



8

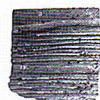


9

弥生土器 (8、 9 甕)



10



11

弥生土器 (10 甕、 11 鉢)



12

弥生土器 (12 壺)



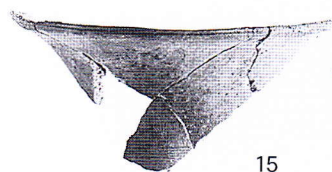
13

弥生土器 (13 壺)



14

弥生土器 (14鉢)



15



17

弥生土器 (15・17壺)



19



20

弥生土器 (19・20甕)



21



22



23

弥生土器 (21高杯、22・23鉢)



24

弥生土器 (24壺)

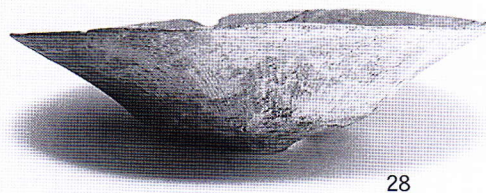


25

弥生土器 (25壺)



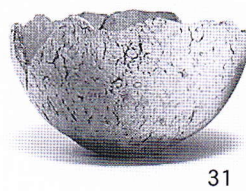
土師器 (26壺)



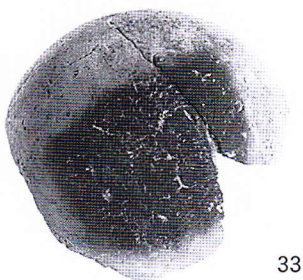
土師器 (28高杯)



土師器 (29・30鉢)



土師器 (31鉢、32ミニチュア鉢)



土師器 (33杯)



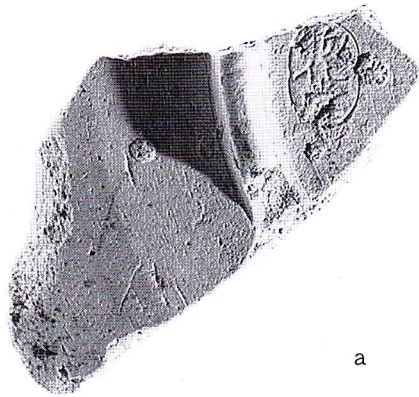
須恵器 (35・36杯身)



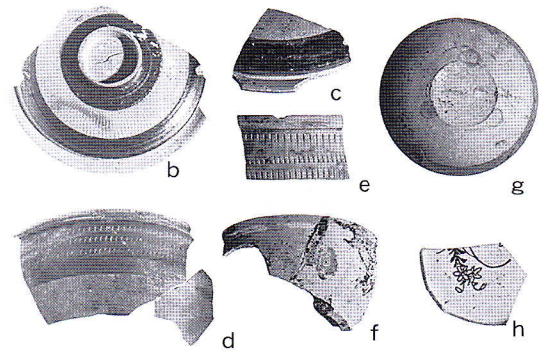
備前焼 (36壺)



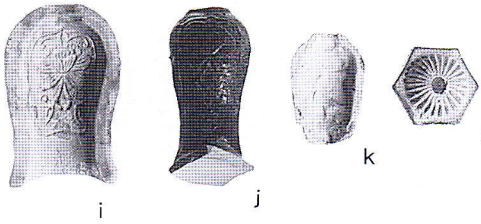
中国製染付 (37皿)



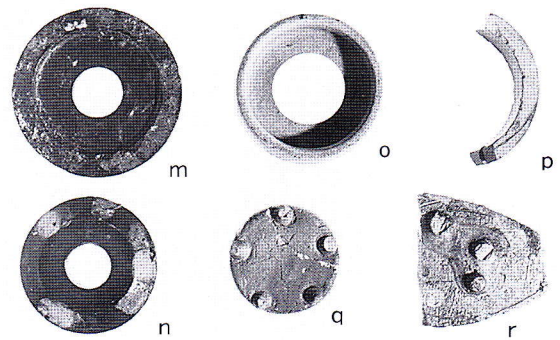
「太田焼」(a 皿末製品、「物化堂」銘)



「太田焼」(b鍋蓋、c鍋蓋末製品、d鍋、e鍋末製品、f鉢末製品、g・h皿末製品)



「太田焼」(i 鍋把手型、j 鍋把手、k 把手型、l 紅皿型)



「太田焼」(m~r 窯道具)

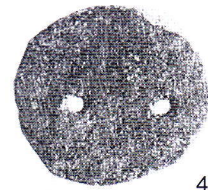


38



39

サヌカイト製品 (38・39打製石剣)



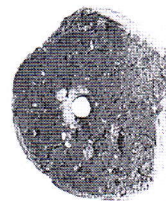
41

滑石製品 (41有孔円板)

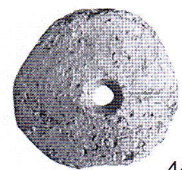


42

滑石製品 (42白玉)



43

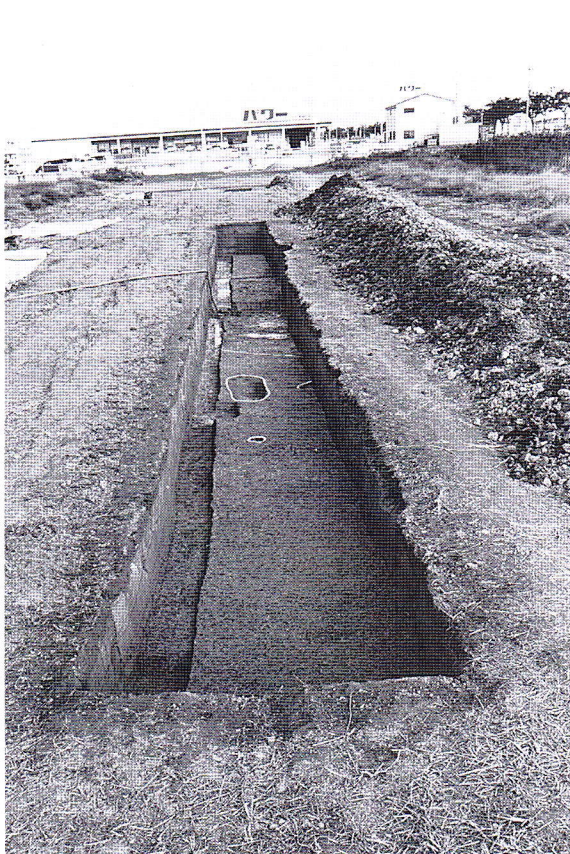


44

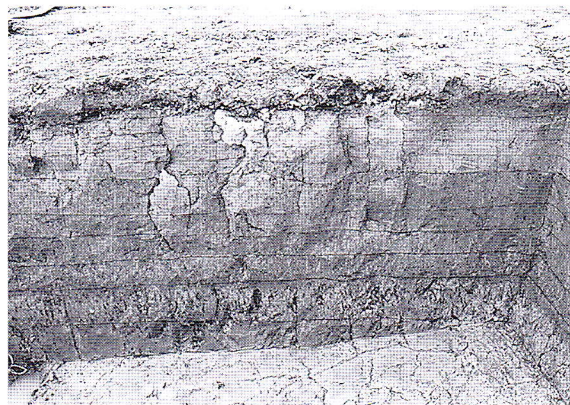
土器転用品 (43・44有孔円板)



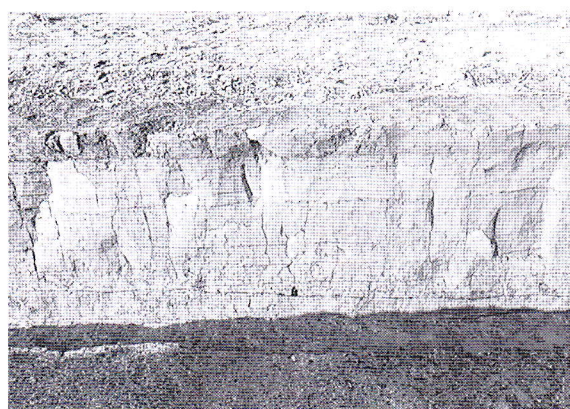
調査前の状況（東から）



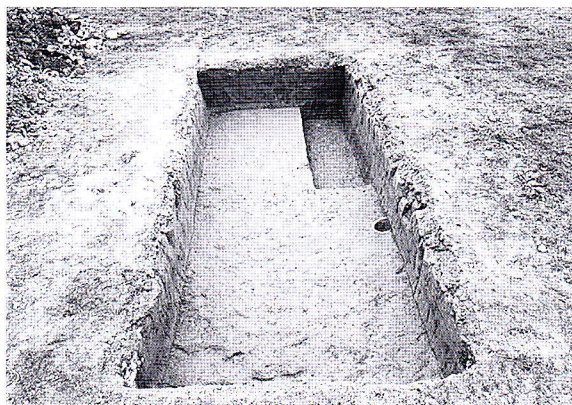
第1区 全景（西から）



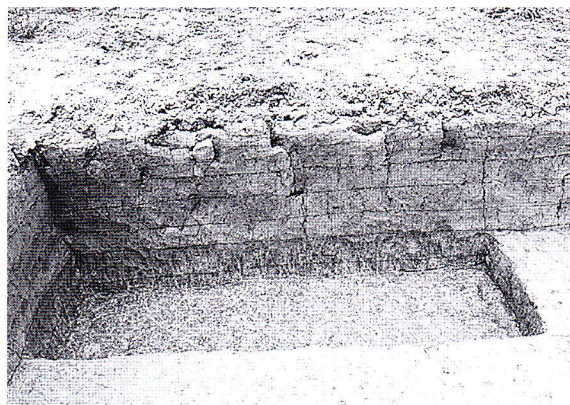
第1区 東端部北壁土層堆積状況（南から）



第1区 中央部北壁土層堆積状況（南から）



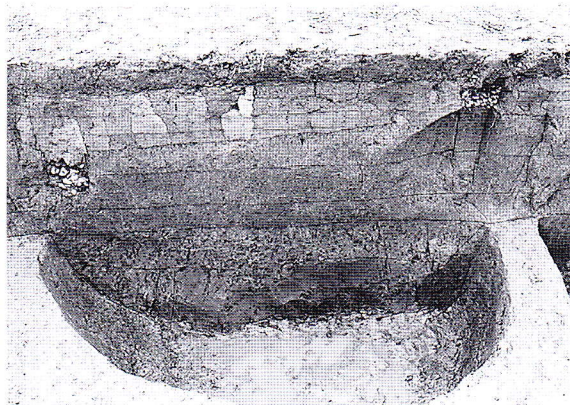
第12区 全景（東から）



第12区 西半部北壁土層堆積状況（南から）



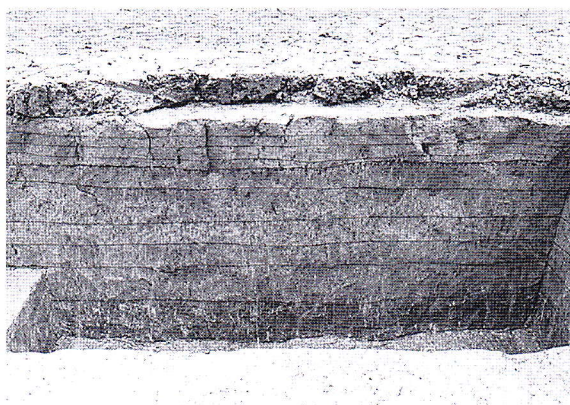
第13区 全景（東から）



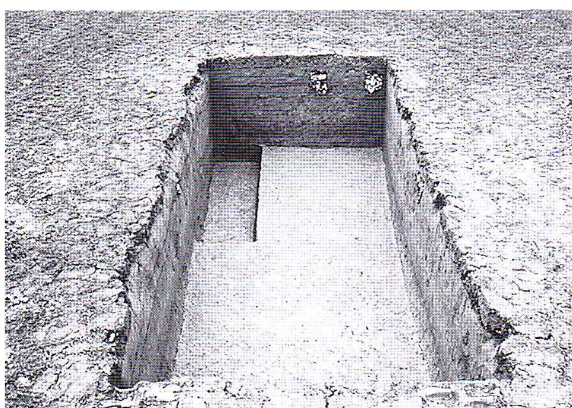
第13区 中央部北壁土層堆積状況（南から）



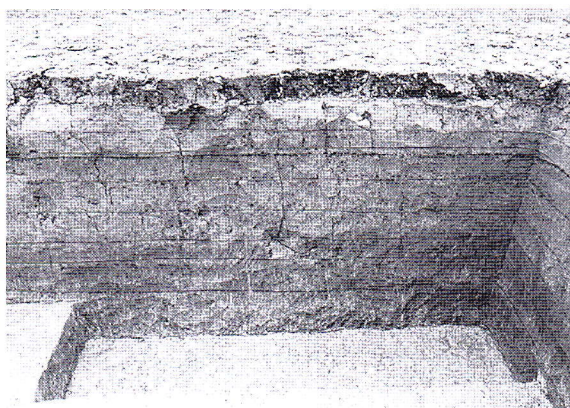
第3区 全景（西から）



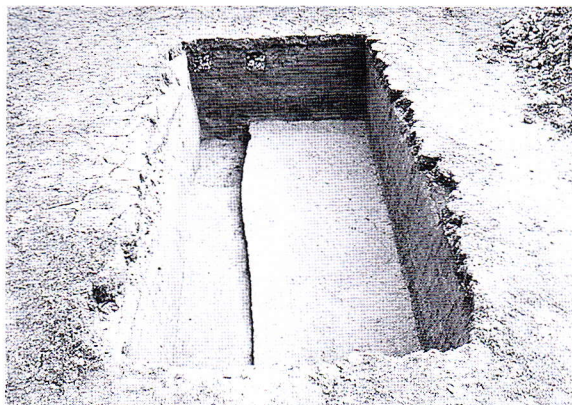
第3区 東半部北壁土層堆積状況（南から）



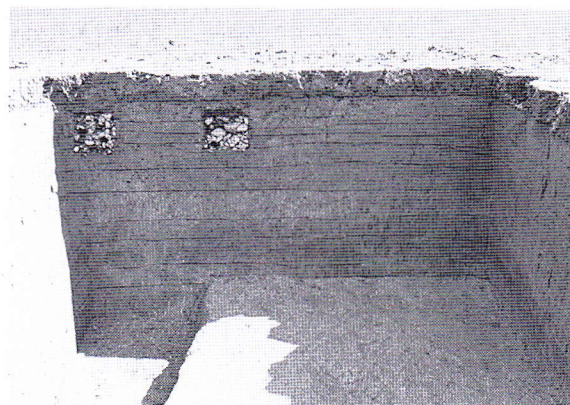
第17区 全景（西から）



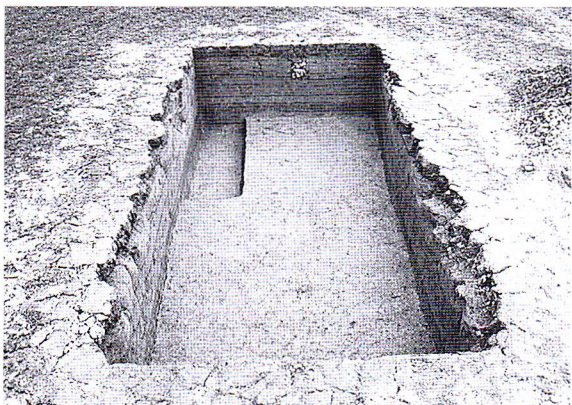
第17区 東半部北壁土層堆積状況（南から）



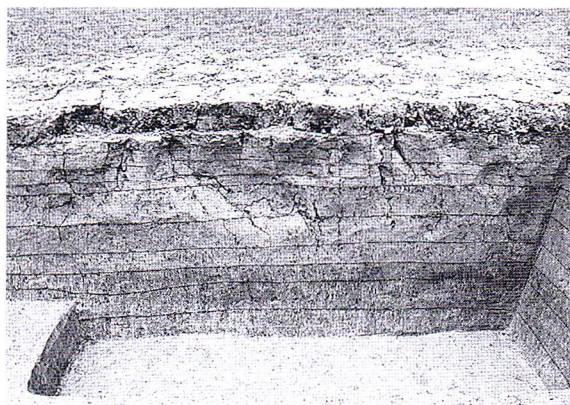
第4区 全景（西から）



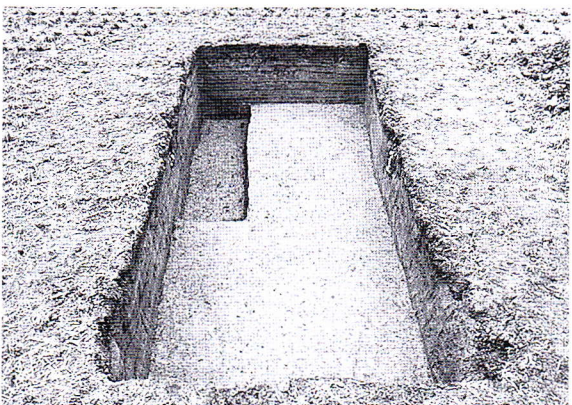
第4区 東壁土層堆積状況（西から）



第18区 全景（西から）



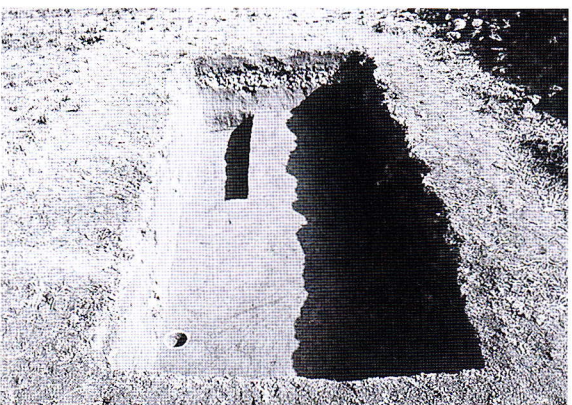
第18区 東半部北壁土層堆積状況（南から）



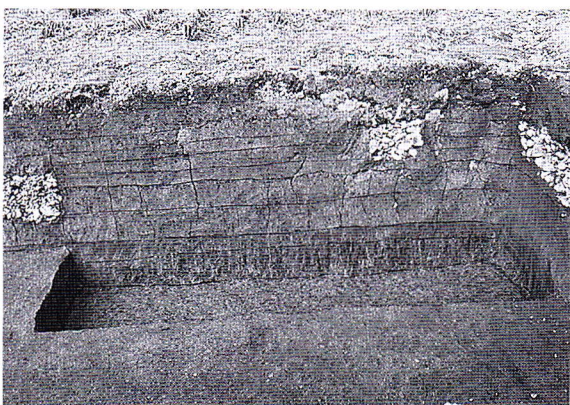
第5区 全景（西から）



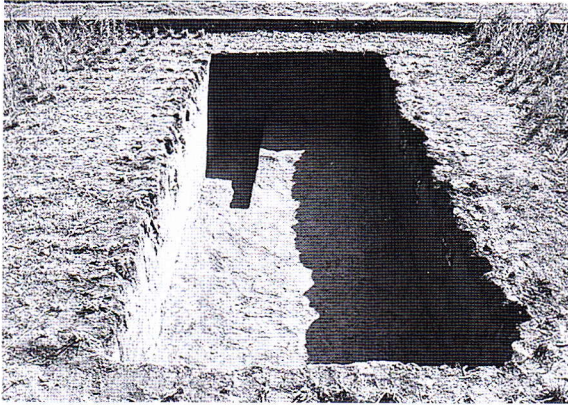
第5区 東半部北壁土層堆積状況（南から）



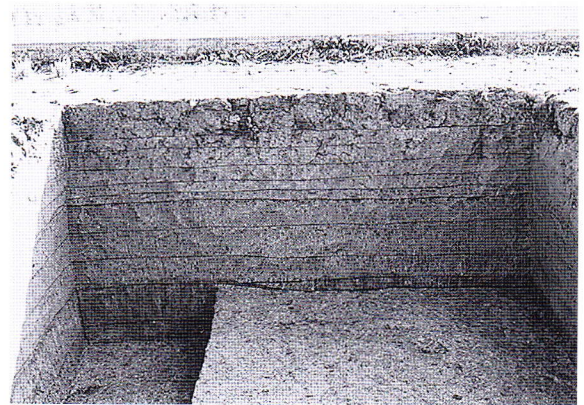
第6区 全景（西から）



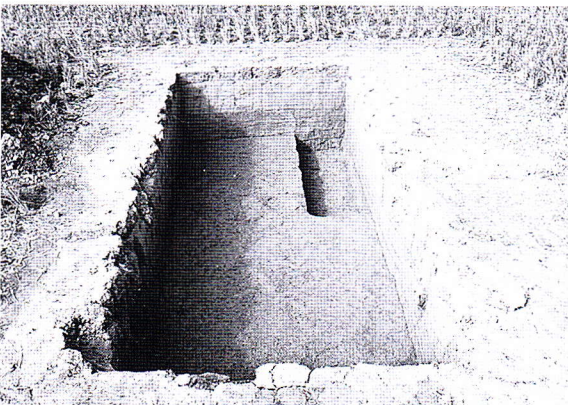
第6区 東半部北壁土層堆積状況（南から）



第19区 全景（西から）



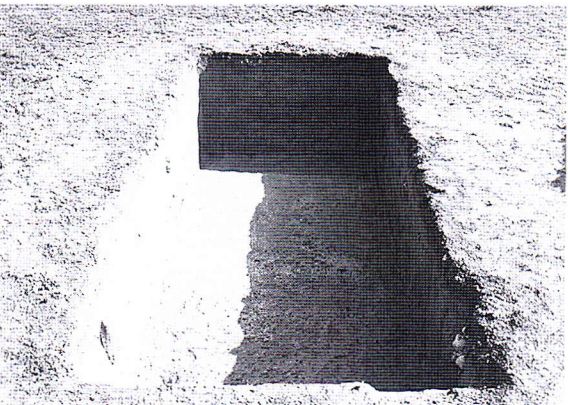
第19区 東壁土層堆積状況（西から）



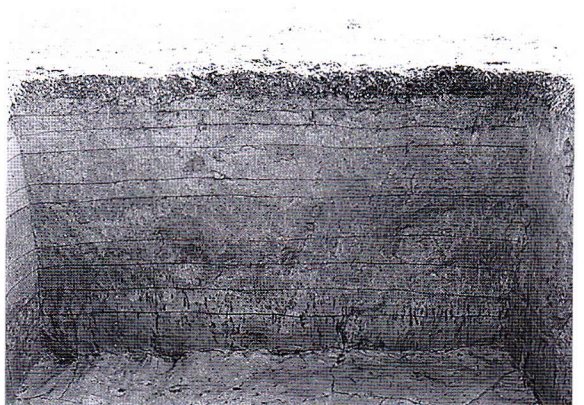
第7区 全景（東から）



第7区 西半部北壁土層堆積状況（南から）



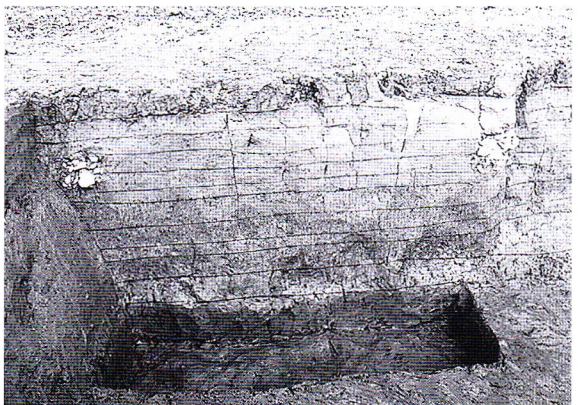
第8区 全景（西から）



第8区 東壁土層堆積状況（西から）



第9区 全景（東から）



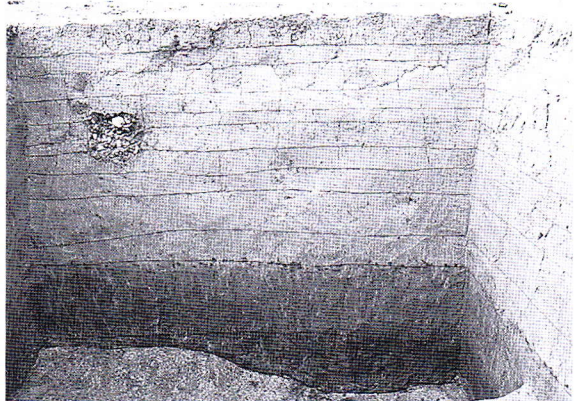
第9区 西半部北壁土層堆積状況（南から）



第10区 全景（西から）



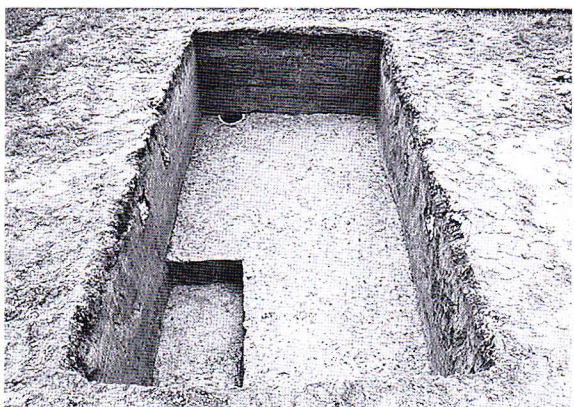
第10区 東半部北壁土層堆積状況（南から）



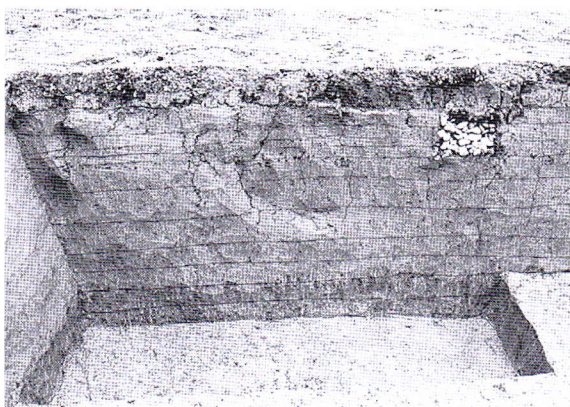
第20区 全景（東から）



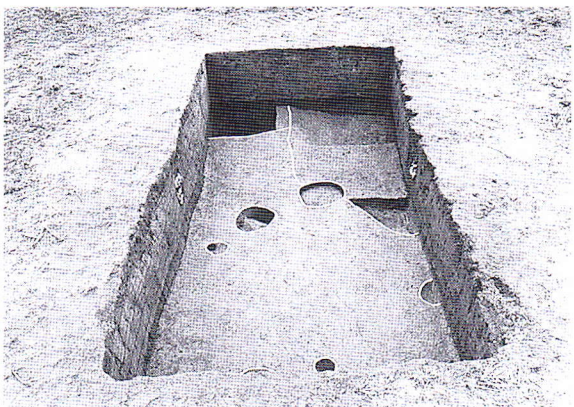
第20区 西壁土層堆積状況（東から）



第11区 全景（西から）



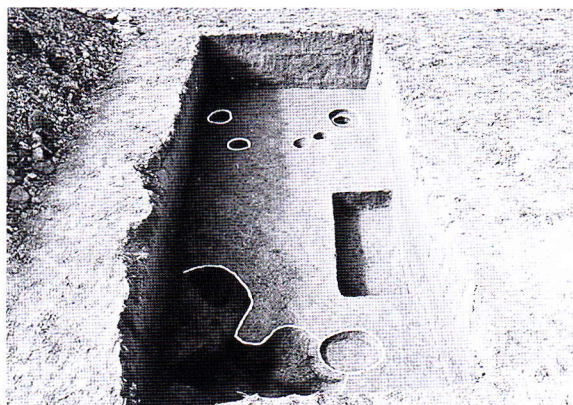
第11区 西半部北壁土層堆積状況（南から）



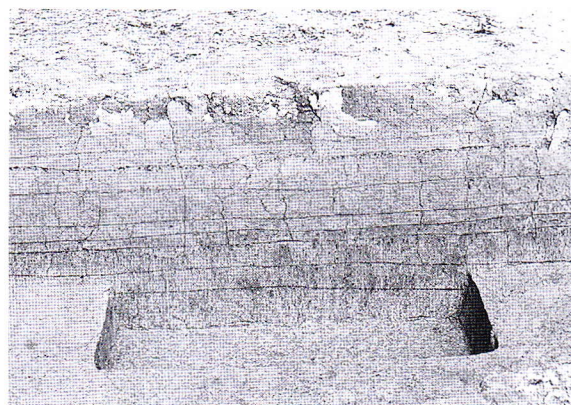
第2区 全景（西から）



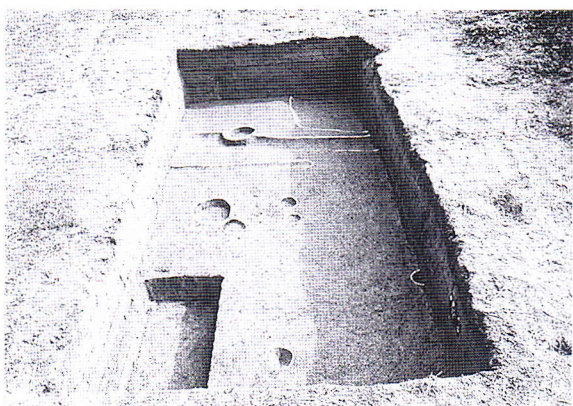
第2区 東壁土層堆積状況（西から）



第21区 全景（東から）



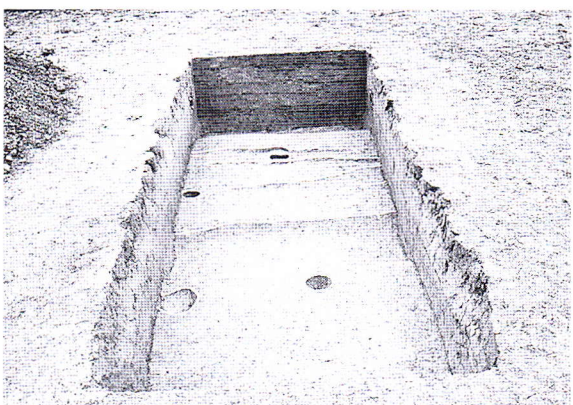
第21区 中央部北壁土層堆積状況（南から）



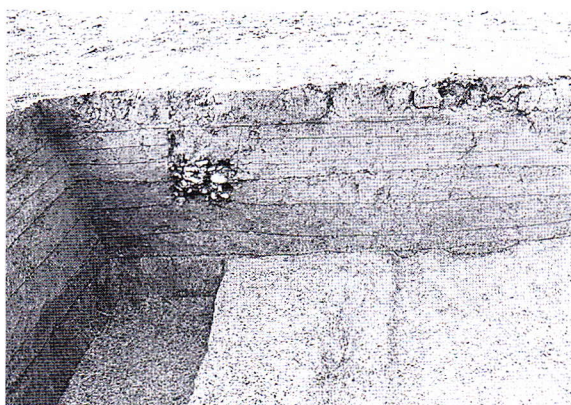
第14区 全景（西から）



第14区 西半部北壁土層堆積状況（南から）



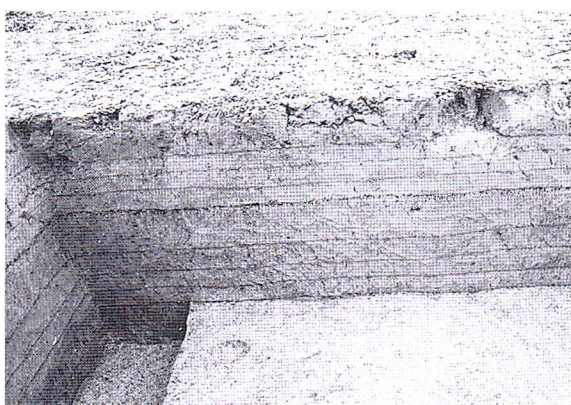
第15区 全景（東から）



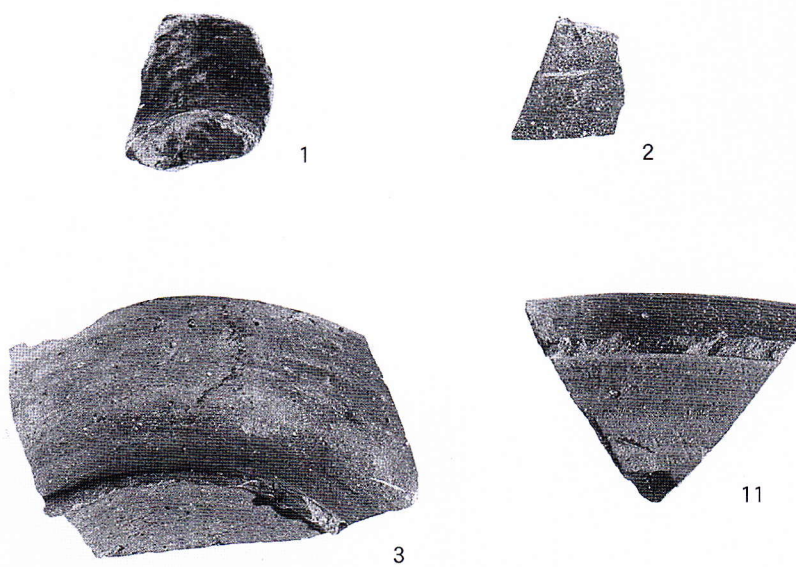
第15区 西半部北壁土層堆積状況（南から）



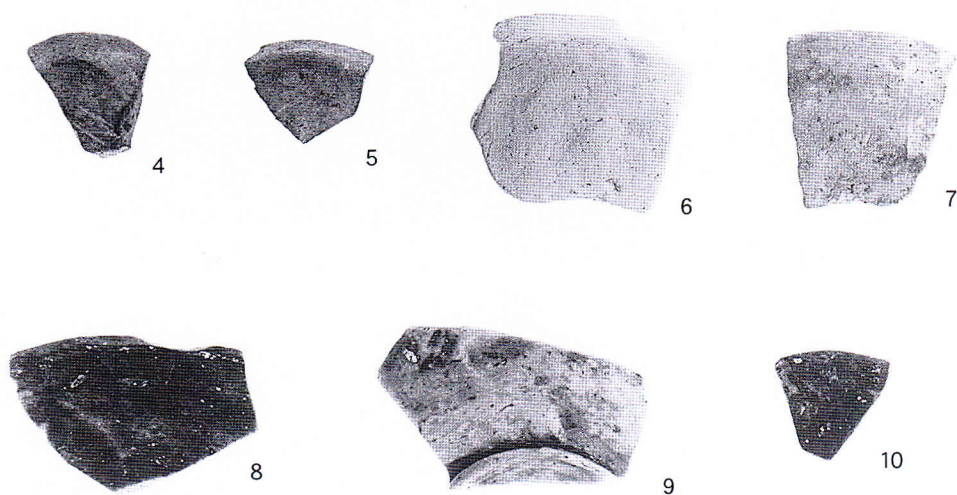
第16区 全景（東から）



第16区 西半部北壁土層堆積状況（南から）



土師器（底部1）、須恵器（杯蓋2、杯身3）、東播系須恵器（こね鉢11）



土師器（4～7皿）、瓦器（8・9碗、皿10）

報告書抄録

ふりがな	わかやましないいせきはつくつちようさがいほう
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成22年度
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大木 要 井馬好英 藤藪勝則
編集機関	和歌山市教育委員会
所在地	〒640-8511 和歌山県和歌山市七番丁23 TEL 073-432-0001
発行年月日	西暦2012年 3 月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つはたいせき 津秦遺跡 (調査一覧3、市教委①)	わかやまけんわかやましありえ 和歌山県和歌山市有家	3020150	332	34° 13′ 14″	135° 12′ 12″	20100414	26.75	開発に伴う 遺跡確認
にしたいせき 西田井遺跡 (調査一覧5、市教委②)	わかやまけんわかやましきた 和歌山県和歌山市北	3020150	388	34° 15′ 12″	135° 14′ 31″	20100420	6.75	開発に伴う 遺跡確認
やまぐちいせき 山口遺跡 (調査一覧7、市教委③)	わかやまけんわかやましきたに 和歌山県和歌山市谷	3020150	142	34° 16′ 02″	135° 16′ 02″	20100421～ 0426	50.66	開発に伴う 遺跡確認
かわなべいせき 川辺遺跡 (調査一覧10、市教委④)	わかやまけんわかやましかわなべ 和歌山県和歌山市川辺	3020150	145	34° 15′ 23″	135° 16′ 03″	20100430～ 0507	247.25	開発に伴う 立会調査
おおだ・くろだいせき 太田・黒田遺跡 (調査一覧11、市教委⑤)	わかやまけんわかやましくろだ 和歌山県和歌山市黒田	3020150	327	34° 13′ 51″	135° 11′ 38″	20100513	12.24	開発に伴う 遺跡確認
いさおいせき 有功遺跡 (調査一覧16、市教委⑥)	わかやまけんわかやましむそた 和歌山県和歌山市六十谷	3020150	77	34° 15′ 35″	135° 12′ 11″	20100525	12.88	開発に伴う 発掘調査
むそたいせき 六十谷遺跡 (調査一覧25、市教委⑦)	わかやまけんわかやましむそた 和歌山県和歌山市六十谷	3020150	84	34° 15′ 36″	135° 12′ 38″	20100616	3.36	開発に伴う 立会調査
たやいせき 田屋遺跡 (調査一覧26、市教委⑧)	わかやまけんわかやましあずしま 和歌山県和歌山市小豆島	3020150	93	34° 15′ 07″	135° 13′ 51″	20100621～ 0623	36.36	開発に伴う 遺跡確認
せきといせき 関戸遺跡 (調査一覧30、市教委⑨)	わかやまけんわかやましせきど 和歌山県和歌山市関戸	3020150	334	34° 11′ 33″	135° 09′ 59″	20100628	5.26	開発に伴う 遺跡確認
つはたにいせき 津秦Ⅱ遺跡 (調査一覧34、市教委⑩)	わかやまけんわかやましつはた 和歌山県和歌山市津秦	3020150	407	34° 13′ 10″	135° 12′ 37″	20100707	20.14	開発に伴う 遺跡確認
おおたじょうみずづめつみあと 太田城水攻め堤跡 (調査一覧35、市教委⑪)	わかやまけんわかやましでみず 和歌山県和歌山市出水	3020150	420	34° 13′ 54″	135° 12′ 15″	20100713	8.82	開発に伴う 遺跡確認
いんべいせき 井辺遺跡 (調査一覧37、市教委⑫)	わかやまけんわかやましいんべ 和歌山県和歌山市井辺	3020150	308	34° 13′ 02″	135° 12′ 67″	20100715	18.40	開発に伴う 遺跡確認
いわせいせき 岩橋遺跡 (調査一覧41、市教委⑬)	わかやまけんわかやましいわせ 和歌山県和歌山市岩橋	3020150	321	34° 13′ 02″	135° 12′ 67″	20100728	12.38	開発に伴う 遺跡確認
だいにちやまいちいせき 大日山Ⅰ遺跡 (調査一覧43、市教委⑭)	わかやまけんわかやましいんべ 和歌山県和歌山市井辺	3020150	311	34° 13′ 12″	135° 13′ 10″	20100817～ 0819	57.22	開発に伴う 遺跡確認
いさおいせき 有功遺跡 (調査一覧48、市教委⑮)	わかやまけんわかやましむそた 和歌山県和歌山市六十谷	3020150	77	34° 15′ 31″	135° 06′ 05″	20100907・ 0908	43.27	開発に伴う 遺跡確認
うだもりいせき 宇田森遺跡 (調査一覧49、市教委⑯)	わかやまけんわかやましうだもり 和歌山県和歌山市宇田森	3020150	149	34° 15′ 18″	135° 15′ 04″	20100910	3.08	遺跡確認

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むそたいせき 六十谷遺跡 (調査一覧50、市教委17)	わかやまけんわかやましむそた 和歌山県和歌山市六十谷	3020150	84	34° 15′ 34″	135° 12′ 28″	20100916	4.00	開発に伴う 立会調査
わかやまじょうあと 和歌山城跡 (調査一覧55、市教委18)	わかやまけんわかやましじゅうさんばんちょう 和歌山県和歌山市十三番丁他	3020150	379	34° 13′ 43″	135° 10′ 41″	20101004	4.50	開発に伴う 立会調査
きのもとにいせき 木ノ本Ⅱ遺跡 (調査一覧56、市教委19)	わかやまけんわかやましきのもと 和歌山県和歌山市木ノ本	3020150	41	34° 15′ 39″	135° 07′ 35″	20101005～ 1007	72.24	開発に伴う 遺跡確認
やまぐちいせき 山口遺跡 (調査一覧60、市教委20)	わかやまけんわかやましふじた 和歌山県和歌山市藤田	3020150	142	34° 13′ 27″	135° 13′ 42″	20101025	9.43	開発に伴う 遺跡確認
いんべいせき 井辺遺跡 (調査一覧68、市教委21)	わかやまけんわかやましいんべ 和歌山県和歌山市井辺	3020150	308	34° 12′ 54″	135° 12′ 52″	20101108	7.60	開発に伴う 遺跡確認
おおだくろだいせき 太田・黒田遺跡 (調査一覧69、市教委22)	わかやまけんわかやましおおだ 和歌山県和歌山市太田	3020150	327	34° 13′ 34″	135° 11′ 58″	20101112	16.76	開発に伴う 遺跡確認
わかやまじょうあと 和歌山城跡 (調査一覧80、市教委23)	わかやまけんわかやましよんばんちょう 和歌山県和歌山市四番丁	3020150	379	34° 13′ 31″	135° 10′ 49″	20101227	11.66	開発に伴う 遺跡確認
かみみけいせき 上三毛遺跡 (調査一覧84、市教委24)	わかやまけんわかやましかみみけ 和歌山県和歌山市上三毛	3020150	156	34° 14′ 34″	135° 18′ 27″	20110113	8.75	開発に伴う 遺跡確認
いんべいせき 井辺遺跡 (調査一覧91、市教委25)	わかやまけんわかやましこうざき 和歌山県和歌山市神前	3020150	308	34° 13′ 21″	135° 12′ 58″	20110128	30.55	開発に伴う 遺跡確認
つはたいせき 津秦遺跡 (調査一覧93、市教委26)	わかやまけんわかやましつはた 和歌山県和歌山市津秦	3020150	332	34° 13′ 04″	135° 12′ 21″	20110301	16.00	開発に伴う 遺跡確認
いさおいせき 有功遺跡 (調査一覧97、市教委27)	わかやまけんわかやましむそた 和歌山県和歌山市六十谷	3020150	77	34° 15′ 46″	135° 12′ 13″	20110322	42.80	開発に伴う 遺跡確認
いそわきいせき 磯脇遺跡 (調査一覧98、市教委28)	わかやまけんわかやましもとわき 和歌山県和歌山市本脇	3020150	37	34° 15′ 27″	135° 06′ 10″	20110323	28.26	開発に伴う 遺跡確認
みょうおうじいせき 明王寺遺跡 (調査一覧99、市教委29)	わかやまけんわかやましみょうおうじ 和歌山県和歌山市明王寺	3020150	416	34° 12′ 38″	135° 15′ 27″	20110324・ 0325	58.20	開発に伴う 遺跡確認
おおだくろだいせき 太田・黒田遺跡 (調査一覧22、財団1)	わかやまけんわかやましくろだ 和歌山県和歌山市黒田	3020150	327	34° 13′ 48″	135° 11′ 43″	20100607～ 0611	20.00	開発に伴う 遺跡確認
おおだくろだいせき 太田・黒田遺跡 (調査一覧40、財団2)	わかやまけんわかやましおおだ 和歌山県和歌山市太田	3020150	327	34° 13′ 39″	135° 11′ 52″	2010722～ 0929	66.00	開発に伴う 発掘調査
たやいせき 田屋遺跡 (調査一覧59、財団3)	わかやまけんわかやましただ 和歌山県和歌山市田屋	3020150	93	34° 15′ 12″	135° 13′ 47″	20101018～ 1130	260.00	開発に伴う 遺跡確認

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
津秦遺跡 (調査一覧3、市教委①)	散布地		なし	土師器小片	
要 約	周辺に埋蔵文化財が展開している可能性は低いと想定される。				
西田井遺跡 (調査一覧5、市教委②)	集落跡	古墳時代 中世	ピット、溝	土師器、黒色土器、瓦器	
要 約	古墳時代中期と中世の遺構面を確認した。				
山口遺跡 (調査一覧7、市教委③)	集落跡		小ピット、小溝	土師器、瓦器	
要 約	対象地は耕作地として利用されていた可能性が想定される。				
川辺遺跡 (調査一覧10、市教委④)	集落跡	古墳時代～ 平安時代	ピット、溝、土坑	弥生土器、土師器、須恵器、 黒色土器、瓦器	
要 約	古墳時代初頭から平安時代にかけての遺構を検出した。				
太田・黒田遺跡 (調査一覧11、市教委⑤)	集落跡		なし	なし	
要 約	既存建物の基礎により遺構面は破壊されていたことが判明した。				
有功遺跡 (調査一覧16、市教委⑥)	集落跡	弥生時代 中世	ピット、落ち込み	弥生土器	
要 約	弥生時代の落ち込み、中世のピットを検出した。				
六十谷遺跡 (調査一覧25、市教委⑦)	散布地		なし	土師器	
要 約	氾濫原堆積を確認した。				
田屋遺跡 (調査一覧26、市教委⑧)	集落跡		なし	中世土師器	
要 約	対象地周辺は湿地状の地形が展開している状況を把握した。				
関戸遺跡 (調査一覧30、市教委⑨)	散布地	室町時代	なし	瓦質土器、軒丸瓦	
要 約	室町時代の遺物包含層を確認した。				
津秦Ⅱ遺跡 (調査一覧34、市教委⑩)	散布地	中世	なし	中世土師器	
要 約	希薄な包含層を確認した。対象地周辺は湿地状の地形が展開している状況を把握した。				
太田城水攻め堤跡 (調査一覧35、市教委⑪)	堤跡		なし	近世陶磁器、瓦	
要 約	水攻め堤に関連する遺構は確認できなかった。				
井辺遺跡 (調査一覧37、市教委⑫)	散布地	弥生時代～ 古墳時代	なし	土師器	
要 約	弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物包含層を確認した。				
岩橋遺跡 (調査一覧41、市教委⑬)	散布地		なし	土師器、中世土師器	
要 約	希薄な遺物包含層を確認した。				
大日山Ⅰ遺跡 (調査一覧43、市教委⑭)	集落跡	奈良時代	なし	土師器、須恵器	
要 約	奈良時代の遺物包含層を確認した。				
有功遺跡 (調査一覧48、市教委⑮)	集落跡	中世	ピット、土坑	弥生土器、土師器、須恵器、 瓦器	
要 約	中世の集落の縁辺部を確認した。				
宇田森遺跡 (調査一覧49、市教委⑯)	集落跡	平安時代	落ち込み	土師器、瓦器	
要 約	平安時代後期の遺物包含層を確認した。				
六十谷遺跡 (調査一覧50、市教委⑰)	散布地	弥生時代	ピット	弥生土器、土師器	
要 約	弥生時代のピットを確認した。				

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和歌山城跡 (調査一覧55、市教委⑱)	城館跡	近世	なし	国産陶磁器、焼締陶器	
要 約	18世紀の遺物がまとまって出土した。				
木ノ本Ⅱ遺跡 (調査一覧56、市教委⑲)	散布地		小ピット	中世土師器	
要 約	耕作に関連すると考えられる小ピットを検出した。				
山口遺跡 (調査一覧60、市教委㉔)	集落跡		なし	なし	
要 約	谷状地形を確認した。				
井辺遺跡 (調査一覧68、市教委㉑)	散布地	弥生時代～ 古墳時代	なし	弥生土器、土師器、中世土師器	
要 約	弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物包含層を確認した。				
太田・黒田遺跡 (調査一覧69、市教委㉒)	集落跡	弥生時代	自然流路	弥生土器・土師器・須恵器	
要 約	弥生時代前期～近世にわたる4面の遺構面を確認した。				
和歌山城跡 (調査一覧80、市教委㉓)	城館跡	近世	なし	土師器、焼締陶器、瓦	
要 約	明確な遺構面は把握できず、堀の中の可能性を想定した。				
上三毛遺跡 (調査一覧84、市教委㉕)	散布地		なし	土師器	
要 約	希薄な遺物包含層を確認した。				
井辺遺跡 (調査一覧91、市教委㉖)	散布地	古墳時代	竪穴建物、溝	土師器	
要 約	古墳時代初頭の竪穴建物を1棟検出した。				
津秦遺跡 (調査一覧93、市教委㉗)	散布地	古墳時代	溝	土師器、須恵器	
要 約	古墳時代中～後期の溝を検出した。				
有功遺跡 (調査一覧97、市教委㉙)	集落跡	近世	溝	土師器、須恵器、瓦器	
要 約	近世の耕作に関連する溝を検出した。				
磯脇遺跡 (調査一覧98、市教委㉚)	散布地	中世	なし	土師器、須恵器、瓦器	
要 約	中世の希薄な包含層を確認した。				
明王寺遺跡 (調査一覧99、市教委㉛)	散布地	中世	溝、自然流路	土師器、瓦器	
要 約	中世の可能性のある溝、鎌倉時代の埋物する自然流路を確認した。				
太田・黒田遺跡 (調査一覧22、財団①)	集落跡	古墳時代 奈良時代	溝	弥生土器、土師器、須恵器、 中世土師器、国産陶磁器、 瓦、土製品	
要 約	古墳時代前期の溝、後期の溝、奈良時代初頭の溝状遺構を検出した。				
太田・黒田遺跡 (調査一覧40、財団②)	集落跡	弥生時代～ 明治時代	竪穴建物、井戸、 土坑、ピット	弥生土器、土師器、須恵器、 黒色土器、瓦器、中世土師器、 中世須恵器、中世土師質土器、 中世瓦質土器、輸入陶磁器、 国産陶磁器、近世土師器、瓦、 土製品、石器、石製品、金属器	
要 約	弥生時代前期後葉から明治時代初頭にかけての遺構面を5面確認した。弥生時代前期後葉から中期中葉にかけての居住を示す遺構が高密度に分布し、当該地周辺が弥生時代の集落内部に位置することが判明した。				
田屋遺跡 (調査一覧59、財団③)	集落跡	弥生時代～ 古墳時代	ピット、土坑、自然流路	弥生土器、土師器、須恵器、 黒色土器、瓦器、中世土師器、 中世須恵器、国産陶磁器、瓦、石器	
要 約	自然流路の隣接地に隣接する調査区で居住域を示す遺構が展開している状況が判明した。				

平成24年3月15日

和歌山市内遺跡発掘調査概報

－平成22年度－

発行 和歌山市教育委員会
(和歌山市七番丁23)

印刷 株式会社ウイング

© 和歌山市教育委員会 2012